

平成6年6月16日・17日

教育研究会要録

生きる喜びを生み出す学習の創造(3年次)

——自分のよさを実感する表現活動の展開——

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校

本校研究のあゆみ

年度	年度
23 学習効果判定の理論と実際	52 ○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 ー操作を通した学習の展開ー
24 カリキュラムの構成と実際	53 ○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 ー交流でよりよい操作を身につける学習指導ー 秀巧社から出版「自由活動の時間」
25 (発表会なし)	54 ○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 ー教材の価値にせまらせる操作学習の評価ー
26 学習深化の指導	55 ○自己実現の喜びを生み出す学習指導 ー見直し活動を生かした操作学習の深化ー
27 学習深化の指導	56 ○自己実現の喜びを生み出す学習指導 ー自己を見直し、考えを深める指導のしくみー
28 学習深化をめざす指導	57 ○自己実現の喜びを生み出す学習指導 ー自ら見直し活動に取り組み、 自己を深める指導のしくみー 北大路書房から出版 「学ぶ喜びを生み出す授業」
29 学習指導における諸問題の再検討	58 ○自己実現の喜びを生み出す学習指導 ー個が生きる課題づくりー
30 学習指導における新課題の再検討	59 ○自己実現の喜びを生み出す学習内容の検討 ー学習実態の多様性に即応する学習指導ー
31 学習指導深化をめざす新課題の究明	60 ○自己実現の喜びを生み出す学習指導 ー子どもの個性が生きる指導ー
32 組織化をめざす学習指導法の究明	61 ○自己実現の喜びを生み出す学習指導 ー「学習の個性化」をめざす指導法の開発ー 明治図書から出版
33 同上	62 ○自己実現の喜びを生み出す学習指導 「学習の個性化」をめざす学習過程
34 学習指導の系統化	63 ○自己実現の喜びを生み出す学習指導 ー「学習の個性化」をめざす授業の改造ー 明治図書から出版 「『学習の個性化』をめざす授業の開発」 「感動体験を中核とした 生活科の授業づくり」
35 改訂指導要領による学習指導の諸問題	
36 考える子どもを育てる指導法の究明	
37 ○考える力をのばす学習指導法の考察 ー考えさせるために経験を どのように位置づけるかー	
38 ○考える力をのばす学習指導法の考察 ー考える力をのばす学習過程の構造化ー	
39 ○考える力をのばす学習指導法の考察 ー学習過程における「くらべ活動」の 検討とその指導ー	
40 ○考える力をのばす学習指導法の考察 ー学習の「かまえ」を育てる指導法の究明ー	
41 ○考える力をのばす学習指導法の考察 ー考える力をのばす学習過程の評価ー 明治図書から出版 「授業における思考訓練」	
42 ○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 ー教材の価値と指導内容の検討ー 明治図書から出版 「思考をのばす学習過程の評価」	
43 ○(発表会なし)	
44 ○現代化をめざす指導法の究明 ー教材の現代的価値と児童の実態と 反応に基づく指導内容の検討ー	
45 ○現代化をめざす指導法の究明 ー基本的内容にせまらせる学習の開発ー	
46 ○現代化をめざす指導法の究明 ーひとりひとりを生かす 合理的な学習指導のしくみー	
47 ○現代化をめざす指導法の究明 ー学習の連帯化をはかる指導のしくみー	
48 ○現代化をめざす指導法の究明 ー連帯性を育てる学習指導のしくみー	
49 ○現代化をめざす指導法の究明 ー連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる 学習指導のしくみー	
50 ○現代化をめざす指導法の究明 ー学びとる力を育てる学習指導ー	
51 ○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 ー操作を通した学習の構造化ー	
	平成元年 ○個が生きる授業の創造 ー自己理解の学習過程ー
	2 ○個が生きる授業の創造 ー考えを確かにする活動構成ー
	3 ○個が生きる授業の創造 ー考えを深める自己吟味活動を通してー 北大路書房から出版 「個が生きる授業の創造」
	4 ○生きる喜びを生み出す学習の創造 ー思い・願いをもって問いつづける活動づくりー
	5 ○生きる喜びを生み出す学習の創造 ー思いをあらわしていくよさを 実感する活動の展開ー
	6 ○生きる喜びを生み出す学習の創造 ー自分のよさを実感する表現活動の展開ー

ご あ い さ つ

福岡教育大学長 田 代 高 英

本学の七つの附属学校・園の一つであります附属福岡小学校が、このたび恒例の研究発表会を開催するにあたりまして、一言ごあいさつを申し上げます。

附属福岡小学校の研究主題は「生きる喜びを生み出す学習の創造」ということで、平成四年度から継続して研究を行ってきました。今年はこの研究の最終年にあたり、この研究主題のもとに、副主題を「自分のよさを実感する表現活動の展開」として、この一年間進めてまいりました研究成果の一部を発表いたします。

今回は、副主題からお分かりのように、子供が生きる喜びを生み出すために、とくに学習における表現活動に焦点をあてております。子供が自己の思いや考えを抱き、それを実現し、その結果を自ら見なおしていくという過程を繰り返し行うなかで、子供自らが自己のよさを実感し、それをもとにさらに成長するという構想に基づいた学習の具体的な取り組みが公開されることになっております。

今日の子供の実態をみますと、与えられた勉強はするものの、自ら学ぶ意欲が低下していたり、わが国のこれまでの教育が知識の伝達に重きを置きすぎたためか、自ら自分を表現する機会が少なくなっていると言っても過言ではありません。そのような子供の実態やそれを取り巻く状況は、子供が本来もっているはずの生きる喜びの源泉を小さくしているのです。子供が意欲的に活動することは子供本来の姿であり、そのように育てなくてはなりません。そして、自分の思いをいろいろな方法で表現し、それを友だちに、教師に、親に、家族の人に理解し、認めてもらうことはきわめて重要なことであり、それがつぎの活動への意欲を生み出します。これを繰り返すうちに、意欲旺盛で感性豊かな子供に成長すると確信しています。これは今日、喧伝されているいわゆる「新しい学力観」の具現化に他なりません。この意味において、これまで附属福岡小学校が継続して取り組んできた研究は、教育を本来の姿に戻すための研究といえます。

附属学校の大きな使命の一つは、大学と協力した研究です。このたび、附属福岡小学校は、平成六年度から三か年の期間で教育課程の研究開発を行う文部省研究開発学校の指定を受けましたが、大学をはじめ関係の機関や皆様の協力・支援を受けながらこれまでの研究を発展させ、示唆に富んだ研究開発の成果に到達し、公にできるものと期待しているところです。

このたびご来会くださいました皆様はもちろんのこと、関係の機関や皆様方におかれましても、本学の附属学校を引き続きお見守りくださり、ご指導をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

序　－　研究の副主題にそえて

1. はじめに－人間の本質としての表現

本学は、「生きる喜びを生み出す学習の創造」を研究主題にかかげ、その最終年度にあたるこの三年目は「自分のよさを実感する表現活動の展開」に焦点を合わせ、その実現をはかる学習指導について研究を進めてきた。そこで、副主題の中心概念である「表現」や、わが国の教育との関係について、言い尽すことはできないものの若干触れておく必要がある。

表現とは、自分の思い・願い・感情や考えを形成し、それを言語分野、音楽分野、図画工作分野、家庭・技術分野、体育・スポーツ分野などさまざまな分野における多様な方法をとおして、表出したり、相手に伝えたりすることである。

表現はこのように広く捉えるべきものであり、木村素衛はつぎのように述べている。「單に内的生命の身體に於ける直接の發動や或いは言表に限らず、また作り現はされたものとしての様々な制作物や所産に限らず、これらを含み入れて更に一層具體的包括的に、凡そ何ものかを作り現はすことに於てみづからの存在を具體的に維持して行くやうな生命のはたらきを、表現として理解してゐる。人間はみづからを形成的に表現しつつこのことを自覺してゐる存在である。」（『表現愛』、岩波書店、昭和14年、序　3ページ）。

そして、木村はこの表現活動を人間の特質であると高く位置付けているのである。すなわち、「人間を他の存在から區別する本質的な特質を、専らその知的であり理性を有つた存在であると言う點のみに認めないで、却てものを作り出すことに於て自己の内的生命を現はして行く存在であり、しかもこのことをみづから知って行ふところの存在であると言う點に於て認めると言うことは、人間の本質に對する一層具體的な把握の仕方であると云はなければならない。人間を政治的な動物であると考え、本来それが廣き意味に於てものを作る存在であると言うことの内に含まれてゐるのみならず、自覺的に自己の内的生命を作り現はして行くと言うことの内には、人間が知的であり理性を有つと云うことも當然含まれてゐなければならないからである。かう云ふ觀點から言ひ表はせば、人間の本質はそれの自覺的表現性にあると云はなければならないであらう。」（同上書、42ページ）と論じている。

この論は、人間の理性に基づき知識を求めていくというこれまで学校教育があまりにも重点を置きすぎてきた認識活動に対して、もう一つの重要な部分である表現活動に正当な光をあて、教育の場において考えるならばその教育的意義を明らかにしていると言うことができ、今日言う「新しい学力観」の提唱に他ならないのである。表現能力を身につけ高め、表現をとおして、自己を他人に理解してもらい、存在を認めてもらい、自分のよさを実感することは、生きる喜びを実感する大きな要素の一つであり、そのことがつぎの活動への意欲となるのである。今期待されている意欲旺盛で、感性豊かな子供に育てるために、教育に表現活動をより多く取り入れることは、人間が人間として存在するために、また教育の本来の姿を取り戻すために緊要なことである。

2. 表現活動が盛んな国の教育からの示唆

わが国の教育は、知識の伝達に重点を置き、獲得した知識の量を測定するのが特徴となっている。その測定の方法も、解答を選択肢から選ぶとか、正誤を解答させるものである。点数化が簡単であり、しかも客観的であるといういわば信仰のなかで普及し、ついには硬直化するにいたっている。小学校では、個々の児童の発表などを重視しているが、上級学校に進むと知識伝達、詰込みになってしまう。自ら学ぶ意欲も低下している。これは上級学校への入学試験に大きく影響されている。

わが国とは反対の国の例を紹介して考えてみたい。フランスの試験のほとんどは、論述式試験である。大学への進学資格となるバカロレア資格試験で、国語では長文から大意を引き出し、それを主題に論じる問題や論題に従って論述する試験が主である。たとえば、「小説における人物描写とは何か」

という問題である。試験時間は4時間であり、これまで学んできた知識や読んだ本の内容を駆使しながら、わが国の起承転結に似た論理展開で、主題提示、主題擁護、主題反論そして総合的結論という形式をとって論述する。学校では、このような形式に則り、名文と修辞の訓練を受けるのである。

筆記による表現だけでなく、口頭による表現がことのほか重視されている。資格や学位を取得するための試験には公開の口頭試験が課されるのであり、いろいろな質問に口頭で論理的に答えながら持論を擁護する。このように、論理的で修辞的な筆記および口頭による表現を要求する試験方法は、下級の学校で鍛えられたものに他ならず、フランス社会で認められている学力観でもある。

学校では、文学作品の分析的学習・研究、名文の記憶を行い、論理的な論述方法などを身につけ、自己をよりよく表現する訓練を受ける。討論も多く取り入れられ、論理的な表現で互いの論理を研く。この傾向は、あらゆる段階の学校でみられ、理工系のグランド・ゼコール（大学よりも地位の高い高等教育機関）でも、学生が修辞法を駆使した雄弁や名文の腕前をつけることに没頭している。理工系における非効率性が問題にされているものの、フランスが人文・社会科学の分野において名だたる知識人を多く輩出しているのは、このような博識で、論理的で、流暢かつ修辞的文学的な表現技法の巧みさのためであろう（詳細は、拙稿「フランスー大学と研究所の分離から統合へー」、有本章編『学問中心地の研究』、東信堂、平成6年、341-367ページを参照。）

フランスは、創造と表現の国と言っても過言ではない。以上のような言語表現だけではなく、芸術など種々の分野において表現活動が盛んである。しかし、この表現がすべての子供や成人において成功しているわけではない。努力にも拘らずそのとおりにならないのは常である。現在、フランスは移民労働者の子供だけでなく、一般的に機能的非識字児童・生徒や成人が増加しており、基礎・基本の徹底が強調されている。教育のあらゆる面において優れているという国はありえず、世界の国々はそれぞれ採長補短の関係にあるが、表現と教育という課題についてフランスの教育はわが国に大きな示唆を与えてくれる。

3. おわりに

本校は普通学級の他に特殊学級と帰国子女教育学級を併設しており、学校の研究の全体主題はもちろんのことそれぞれ独自の研究主題を設定して実践的研究を行っている。すなわち、特殊教育においては精神発達に遅滞のある児童に対して、「生活力の基礎を育てる指導方法の研究ー自発的・自主的に活動する授業を探るー」という研究主題を掲げている。また帰国子女教育においては、「一人一人の海外体験に根ざした帰国子女教育ー特性伸長を通してー」の研究主題のもとに、日常生活への適応を図りながらも、国際性豊かな日本人の育成を期して実践的研究を行っている。

上述のように「新しい学力観」に立った本校の研究が、その所期の目的をどれだけ達成できているかは、ご参観いただきたい。教育の過程は複雑であり、短期間において意図したとおりになることはそう多くないといわなければならない面がある。このたびささやかな研究成果の一端をご報告し、ご参加いただいた先生方の忌憚のないご感想・ご所感をお聞かせ下さり、ご指導・ご鞭撻をいただきたい。

附属学校は大学と協力した研究をその使命の一つにしている。このたび、平成6年度から3か年にわたり教育課程の研究開発を行う文部省研究開発学校の指定を受けたが、これまでの研究を基礎に、大学をはじめ関係諸機関や皆様方のご協力・支援を受けながら研究を進めていきたいと考えている。

これまで本附属小学校の研究に温かいご指導をいただいている大学の先生方、本校先輩の先生方およびそのほかの関係の先生方に対して心より感謝申し上げるとともに、今後とも相変わらぬご高教をお願い申し上げたい。

目 次

1	はじめに.....	1
2	日程と内容.....	5
	1 日 目.....	6
	2 日 目.....	8
3	公開授業及び全体の部	
	1 日 目	
	学習指導案（午前）.....	11
	学習指導案（午後）.....	37
	学習指導協議会.....	58
	全体会.....	60
	2 日 目	
	学習指導案（午前）.....	63
	学習指導案（午後）.....	87
	学習指導協議会.....	104
	全体会.....	106
	全体講義.....	108
4	研究紀要の部	
	研究紀要目次.....	112
	研究紀要.....	114
5	おわりに.....	251
6	研究同人.....	253

第一日目 日程

1	学 習 指 導	9 : 15～10 : 00
2	学習指導協議会	10 : 10～11 : 10
3	講 堂 入 場	11 : 10～11 : 20
4	全体会（教科等発表）	11 : 20～12 : 30
	○ あいさつ	
	○ 研究主題発表	
	○ 国語科発表	
5	昼 食	12 : 30～13 : 30
6	学 習 指 導	13 : 30～14 : 15
7	講堂入場・音楽クラブ発表	14 : 15～14 : 40
8	全体会（教科等発表）	14 : 50～16 : 10
	○ 特殊体育科発表	
	○ 帰国算数科発表	
	○ 社会科発表	
9	閉 会	16 : 10～16 : 20

第二日 日程

1	学 習 指 導	9 : 15～10 : 00
2	学習指導協議会	10 : 10～11 : 10
3	講 堂 入 場	11 : 10～11 : 20
4	全体会（教科等発表）	11 : 20～12 : 10
	○ あいさつ	
	○ 算数科発表	
	○ 特殊国語科発表	
5	昼 食	12 : 10～13 : 00
6	学 習 指 導	13 : 00～13 : 45
7	講堂入場・音楽クラブ発表	13 : 45～14 : 15
8	全体会（教科等発表）	14 : 15～16 : 30
	○ 特別活動発表	
	○ 音楽科発表	
	○ 全 体 講 演	
	演 題 「これからの小学校教育の方向」	
	講 師 宇都宮大学教授 奥井智久先生	
9	閉 会	16 : 30～16 : 40

日 程 と 内 容 (1日目)

◇ 学習指導 (9:15~10:00)

学 年 組	教 科 等 (指 導 者)	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	会 場
1 の 2	生 活 (後藤 正弘)	ふぞくどうぶつむらであそぼう	屋外音楽広場
2 の 1	国 語 (水上 栄一)	おもちゃのつくり方をおしえよう	3
3 の 1	学級活動 (中原 浩)	夢気球301ワンダーランドの旅	運動場 (5)
3 の 2	音 楽 (津本 修一)	おかあさんへおくる歌をつくろう	音 楽 室
4 の2・3	理 科 (今林 康治)	川をつくって流れのようすを調べよう	理 科 室
5 の 1	国 語 (伊藤 啓二)	地球のなぞを語ろう	9
5 の2・3	家 庭 (小嶋 悦子)	オリジナル野菜サラダとドレッシングをつくろう	家 庭 科 室
6 の 1	算 数 (重松 宏明)	資料を作って調べよう	11
6 の 2	体 育 (古賀 良和)	宇宙旅行物語を体で表そう (表現)	附中体育館
6 の 3	帰国社会 (柿添 展宏)	日本と外国の関係について考えよう	子供スタジオ
ふ じ	特殊体育 (谷口 慎二)	おにさんからにげよう (基本の運動)	北 運 動 場
う め	特殊国語 (落合 純哉)	たなばたごはんのパンフレットをつくろう	北 音 楽 室

◇ 学習指導協議会 (10:10~11:10)

教 科 等	司 会 者	指 導 助 言 者	大 学 教 官	会 場
生 活	奥 園 哲 夫	金 子 孝 信	寺 尾 慎 一	2
国 語	城 戸 俊 也	久 門 隆	大 西 道 雄	3
学級活動	田 淵 聡	大 嶋 正 紹	高 田 清	5
音 楽	樋 口 信 一	高 橋 秀 喜	岩 崎 洋 一	音 楽 室
理 科	井 倉 宏 輔	谷 友 雄	宮 脇 亮 介	理 科 室
国 語	古 川 千 年	松 永 登喜夫	前 田 真 証	9
家 庭	本 田 タカ子	日 野 彰 子	甲 斐 純 子	家 庭 科 室
算 数	塩 田 利 彦	川 口 浩	畦 森 宣 信	11
体 育	武 下 英 俊	大 橋 直 徳	相 部 保 美	附中体育館
帰国社会	吉 永 玄	山 田 耕 司	飯 田 史 也	子供スタジオ
特殊体育	三 浦 嘉 明	堤 正 則	木 舩 憲 幸	ふ じ
特殊国語	大 石 育 郎	江 藤 肇	山 下 勲	梅

あ い さ つ

学 長 田 代 高 英
 学校長 田 崎 徳 友

◇ 主題発表（１１：３５～１２：０５）

生きる喜びを生み出す学習の創造

—— 自分のよさを実感する表現活動の展開 ——

教 頭 谷 口 慎 二

◇ 教科等発表（１２：０５～１２：３０）

楽しく読み深める低学年説明文の指導

—— 準体験化活動を取り入れた学習を通して ——

国語科部 佐々木 保 善

◇ 学習指導（１３：３０～１４：１５）

学 年 組	教 科 等（指 導 者）	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	会 場
１ の １	道 徳（池田 隆）	おおきくなつてね、わたしのゆうがお	１
２ の ２	生 活（山下 浩徳）	生きものひろばをつくろう	附中北運動場
３ の １	算 数（秋穂 章）	まるい形で子供の国をつくろう（円と球）	５
４ の １	国 語（佐々木保善）	キョウリュウ博士になろう	７
５ の ２・３	音 楽（山本 麻美）	ミュージカル“龍の子太郎”をつくろう	音 楽 室
６ の １	理 科（安永 純二）	水よう液の性質を調べよう	理 科 室
６ の ２	社 会（芋生 修一）	文化サークルをつくろう（室町文化）	１１
ふ じ	特殊算数（落合 純哉）	ころころらんどをつくろう	北 音 楽 室
さ く ら	特殊国語（谷口 慎二）	なぞなぞえほんをつくろう	さ く ら
う め	生活単元（松本 良一）	たなばたかいのげきをしよう	梅

◇ 音楽発表

◇ 教科等発表（１４：５０～１６：１０）

ぼうけん遊びを通して運動の喜びを味わう基本の運動の指導

特殊教育
 体育科部

松 本 良 一

基礎・基本を楽しく身に付ける帰国子女算数科学学習指導
 ー多様な学習実態に対応できる包括的な題材構成を通してー

帰国子女教育
 算数科部

秋 穂 章

未来社会に生きる子供を育てる社会科学学習指導

—— 個のこだわりが生きる活動を通して ——

社会科部

芋 生 修 一

◇ あ い さ つ

副 校 長 楠 田 和 三

日 程 と 内 容 (2日目)

◇ 学習指導 (9:15~10:00)

学 年 組	教 科 等 (指 導 者)	単 元 ・ 題 材 ・ 主 題 名	授 業 会 場
1 の 1	生 活 (山下 浩徳)	小川をつくってあそぼう	附中北運動場
2 の 2	国 語 (佐々木保善)	チンパンジー物語をつくろう	4とプレイルーム
3 の 1	理 科 (安永 純二)	自分の体図かんを作ろう	理科室多目的室
3 の 2	体 育 (佐々木壮一朗)	チャレンジマットで遊ぼう (基本の運動)	附中体育館
4 の 3	帰国算数 (秋穂 章)	わたしの夢の町をつくろう (三角形四角形で夢の町の旗を作ろう)	子供スタジオ
5 の 1	社 会 (芋生 修一)	これからの運輸業を考えよう	9 (10・11・12)
5 の2・3	道 徳 (池田 隆)	自分にできる国際貢献を考えよう	5
6 の1・3	音 楽 (山本 麻美)	ミュージカル“走れメロス”をつくろう	音 楽 室
6 の 2	図画工作 (樺島 穰)	透けて光って浮いた形をつくろう (つくる)	工 作 室
ふ じ	特殊音楽 (林田 千枝)	どうぶつのもりであそぼう	北 音 楽 室
さ く ら う め	特殊体育 (松本 良一) (谷口 慎二)	にんじゃの国のぼうけん (基本の運動)	北 運 動 場

◇ 学習指導協議会 (10:10~11:10)

教 科 等	司 会 者	指 導 助 言 者	大 学 教 官	会 場
生 活	内 田 宗 隆	平 石 信 敏	中 村 重 太	北 工 作 室
国 語	池 上 龍 矢	橋 本 義 徳	大 西 道 雄	4
理 科	猿 渡 邦 彦	土 生 政 勝	田 中 浩 朗	理 科 室
体 育	脇 田 哲 郎	池 田 隆	相 部 保 美	附中体育館
帰国算数	坂 口 忠 司	濱 崎 常 喜	飯 田 慎 司	子供スタジオ
社 会	野 田 敏 孝	家宇治 正 幸	中 里 亜 夫	9
道 徳	稗 田 賢 次	長 野 勝 也	堺 正 之	5
音 楽	深 浦 一 子	丸 山 誠二郎	平 井 健 二	音 楽 室
図画工作	犬 伏 哲 也	田 中 和 隆	吉 井 宏	図 画 室
特殊音楽	岡 部 由 夏	江 藤 モモヨ	海 塚 敏 郎	ふ じ
特殊体育	坂 口 秀 孝	宮 地 祥 太	藤 金 倫 徳	さ く ら

あいさつ

学校長 田 崎 徳 友

◇ 教科等発表（11：25～12：10）

子供自らが数理を求め続ける算数科学習指導
——数学的表現活動の活性化を通して——

算数科部 重 松 宏 明

パンフレットづくりの活動を通して
——意欲的に書き進める国語科学習指導——

特殊教育
国語科部 落 合 純 哉

◇ 学習指導（13：00～13：45）

学 年 組	教 科 等（指 導 者）	単 元・題 材・主 題 名	授 業 会 場
1 の 2	国 語（水上 栄一）	げきをしよう「おむすびころりん」	2
2 の 1	音 楽（津本 修一）	リズムの国であそぼう	音 楽 室
3 の 2	社 会（柿添 展宏）	食品工場のひみつをさぐろう	5
4 の 1	算 数（重松 宏明）	面積を調べよう	7
4 の2・3	体 育（古賀 良和）	花火あそびを体で表そう	附中体育館
5 の 1	学級活動（中原 浩）	すもう大会をみんなの力でもり上げよう	9
6 の1・3	家 庭（小嶋 悦子）	おいしくごはんをたきましよう	家 庭 科 室
ふ じ さ く ら う め	合 同（落合 純哉） （松本 良一） 生活単元学習（林田 千枝）	こどもひろばをつくってあそぼう	北 運 動 場

◇ 音楽発表

◇ 教科等発表（14：15～15：00）

仲間とともに生きることのよさを味わう学級活動
——年間大主題構想にもとづく

「スターシップ401号の大航海」の活動を通して—— 特別活動部 中 原 浩

表現する喜びを味わう高学年音楽科学習指導
——ミュージカルづくりの活動を通して——

音楽科部 山 本 麻 美

◇ 全 体 講 演（15：00～16：30）

演 題 「これからの小学校教育の方向」

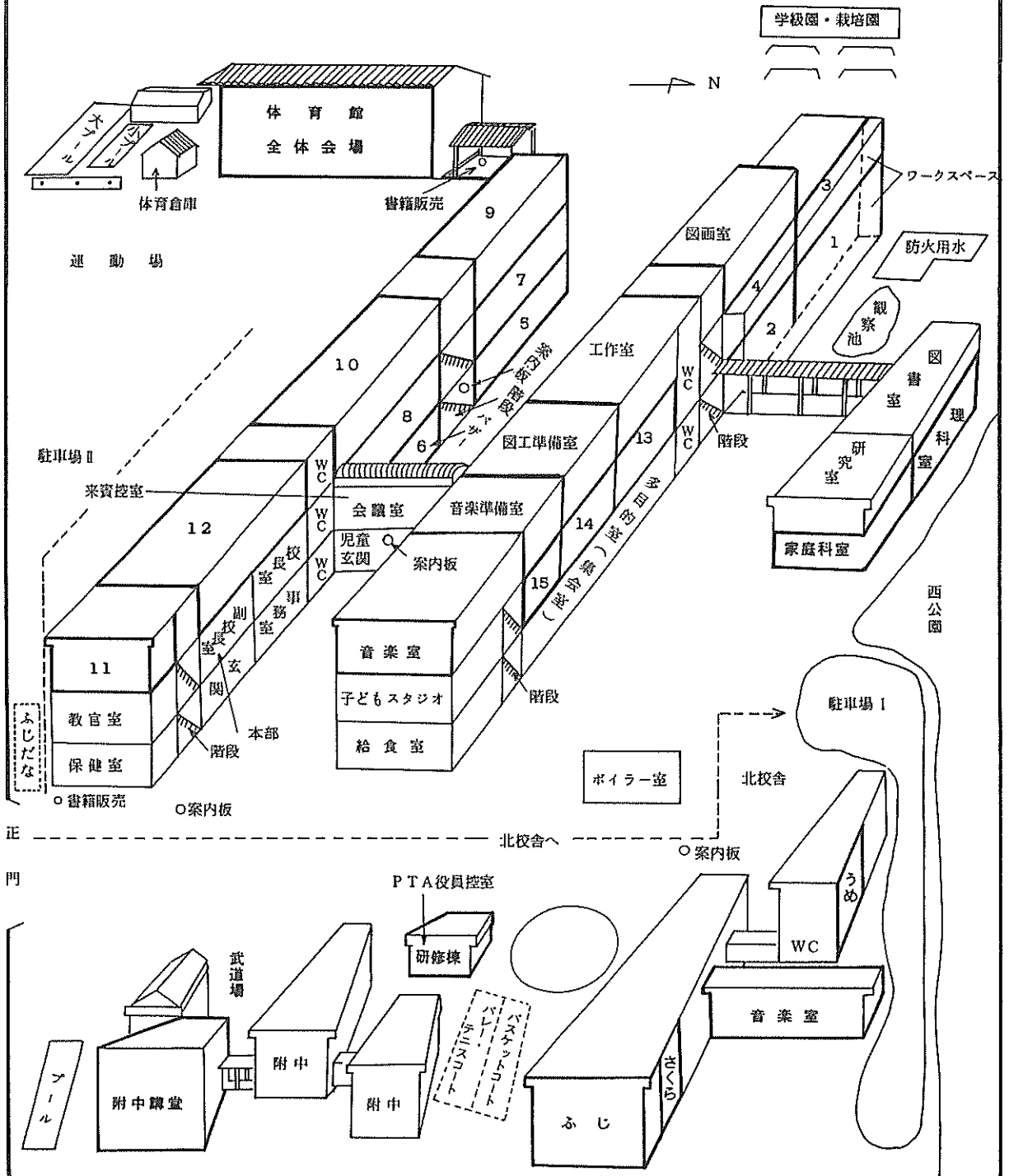
宇都宮大学教授 奥 井 智 久 先生

あいさつ

副 校 長 楠 田 和 三

研究会会場図

※ 下駄のまま お上がり下さい。



公開授業及び全体会の部

第一日目 午前の部

公開授業指導案

単 元 ふぞくどうぶつむらであそぼう

指 導 観

- 本単元のねらいは、うさぎ、モルモットなどの小動物の世話をしたり住まいや遊び場をつくり遊んだりする活動を通して、動物に親しみ命あるものとして大切にできるようにすることである。具体的な内容は、①動物たちにすすんで接し親しみをもつこと。②自分と同じように命をもち、大切にしなければならないことに気付くこと。③動物たちになりきりその接し方を考え、動物たちがよろこぶような場を構成することである。この学習を通して、①自然を大切にす態度。②自然に対して自分からかわわりを求めていく態度。③友達と協力しあって活動する力。などを育てることができる。さらに、生き物のために役立ったという有用感や成就感を味わうことができる。
- 本学級の子供たちは、学校探検での遊びの中で身近な小動物に関心をもち、その動きを観察したりえさをやって簡単な世話をしたりした経験をもっている。その中で、小動物に対して、もっと遊びたい、世話をしたいという強い願いをもちはじめている。しかし、動物なりに生きていることに気付き命あるものとして大切にしようとする態度はまだ育っていない。また、友達と共通の目的をもって協力しあったり目的を達成した時の成就感を得たりした経験は少ない。
- 本単元の指導にあたっては、動物が生きていることを実感し、動物を大切にできるようになった自分に気付くような遊びへと活動を高めていきたい。そのために、①動物といっしょになって遊びどうぶつむらづくりの計画を立てる。②どうぶつむらをつくりながら動物といっしょに遊ぶ。③どうぶつむらを改良しながらいっしょに遊ぶ。④どうぶつむらの完成式をする。などのような活動構成をする。また、動物へのやさしさや遊びの工夫に対して賞賛したり動物についての情報を調べたりできるようにする。さらに、なかよしカードに動物とのかかわりを表現させていく。

目 標

計 画 (約6時間)

- | | |
|---|---------------------------------------|
| 1. どうぶつむらの住まいや遊び場でいっしょに遊び、やさしく動物たちに接し大切にすることができる。 | 1. 動物と自由に遊びどうぶつむらづくりの計画を立てる。————— 1時間 |
| 2. 動物たちといっしょになって遊べるどうぶつむらを工夫してつくることことができる。 | 2. どうぶつむらをつくり遊ぶ。————— 4時間 |
| | (1)むらをつくりながら遊ぶ。(本時2/2)-- ② |
| | (2)むらを改良しながら遊ぶ。----- ② |
| | 3. どうぶつむらの完成式をする。————— 1時間 |

本時の目標

- 動物たちと遊び場でいっしょになって遊び、それらに親しみをもつことができる。
- 動物たちとの遊び方や遊びの場を工夫して遊ぶことができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちはどうぶつむらづくりの計画に従って、住まいや遊び場など動物たちといっしょになって生活できる場をつくりはじめています。そこで本時では、さらにそれらに工夫を加え動物たちと楽しめる場と遊びづくりの活動を中心にする。そのために、自分たちもうさぎなどになって楽しく活動していけるように動物といっしょに①住まいにわらをしいて休む。②パイプで住まいと住まいをつないで行き来する。③共同の水のみ場や遊び場をつくり水をのんだり遊んだりする。などの活動構成を組む。活動中の支援としては、大切に扱っている姿や生命への気付きに対して賞賛したり、活動のための材料を整備したりして多様な発想が生まれるようにしておく。終末では、動物といっしょになって遊んだ思いを発表させ、動物と親しく接することができた自分に気付かせていく。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時の学習をふりかえり、本時の活動について話し合う。 ○ 本時活動の見通し。 ・ おうちづくりをつづけるぞ。 ・ いっしょにおうちめぐりをしよう。 ・ みんなの水のみ場をつくろう。 *うさぎさんの耳をつけて雰囲気をつくり、共同の遊びに熱中できるようにする。また、活動中はBGMをながす。 めあて—— どうぶつむらを つくりながら いっしょに あそぼう	○ ほくもうさぎさんになっておうちをつくるぞ ○ おうちとおうちをつないでみよう ○ みんなで水をのんでみよう。
2. 動物になって住まいや遊び場をつくりながらいっしょに遊ぶ。 支援の方法  *遊びを工夫した理由をたずね賞賛する。 *住まいをつくって遊ぶグループには、ダンボールなどの材料を豊富に準備し自由に選択できるようにしておく。 *遊び場をつくりながら遊ぶグループには、材料のほかに図鑑や飼育の手引きを活用できるようにしておく。 *安全面に留意させる声かけをする。	○ うさぎさんのあとをついていってみよう ○ おうちにわらをたっぶりしようね ○ みんなの水のみ場がもっているね ○ このパイプでおうちをつないでみよう ○ 山のところを遊び場のまんなかにしよう
*前時までの活動のパネルや装飾を施して活動の雰囲気をつくる。 3. 本時学習をふりかえり、次時学習への見通しをもつ。 ○ 活動で生まれた思いの表出 ・ ほくの気持ちをわかってくれたかな。 ・ ずっといっしょにいたいな。 ○ 次時学習の見通し ・ はしがあったらたのしいだろうな。 	○ うさぎさんと水をのんだことがたのしかった ○ もっと遊び場をたのしくしたいな ○ ~さんがてつだってくれてうれしい

単 元 おもちゃのつくり方をおしえよう

指 導 観

- 本単元のねらいは、子供たち一人一人が自分の作ったおもちゃの製作過程にしたがって作り方の手順が読み手によく伝わるように書くことができるようにすることである。具体的には、①製作の順序に沿って説明する、②語と語や文と文との続き方に注意して文章を書く、③説明に必要な事柄を落とさずに書く、ということが中心的な内容となる。本単元は作るという作業が、そのまま書く活動に直結し「つくる順序について説明する」という書く必然性をもった場を生みだす。したがって、子供が具体的経験をもとにして意欲的に作文活動に取り組むことができる単元である。
- 本学級の子供たちは、これまでの対話による作文の学習や日記を書く活動を通して、書くことに慣れ、書くための事柄を見付けることができる。また、比喩や擬人化させた表現などは豊富に見られ優れた特徴を示している。しかし、つなぎ言葉を正しく使って文をつなぎ、したことや見たことを順序よく書き表すことに不十分な点が多く見られる。特に、「そして」を繰り返して用いて文のつながりが不自然になったり、事柄の順序配列がばらばらになったりしたものが多い。「だから」という順接や「でも、しかし」の逆接を使って文章をつないだ作文を書く子供は少ない。
- 本単元の指導にあたっては、学級で手作りおもちゃコンクールを開いた後に、それらのおもちゃの作り方をまとめた本を作るという場を設定する。次に、①ひとりごとの形で口頭作文する。②口頭で作文した文を大型カードに、つなぎのための文や言葉は小型のカードに書き表す。③前の文を何度も音読し、その後に続く言葉を再び口頭で作文するという手順を繰り返して作文する。更に読み手に読んでもらうことで分かりやすく文章を練り上げる。最後にその説明文をもとにおもちゃを友達同士で作りあったり、製本して図書室に置いたりして作文が活かされた喜びを味わわせる。

目 標

計 画 (約5時間)

- | | |
|---|--|
| (1) 自分の興味に応じて簡単な遊び道具を作り、その作り方を楽しく文章で説明することができる。 | (手作りおもちゃコンクールを開く) 課外 |
| (2) おもちゃ作りの手順や作業が読み手によく伝わるように事柄を説明する言葉、論を構成する言葉を子供自ら生み出して作文を書くことができる。 | 1. 本作りのめあてについて話し合う。――1時間
2. 教材文を読む。――1時間
3. 読み返ししながら作文を書く。一本時――1時間
4. 対話により作文を練り上げる。――2時間 |

本時の目標

(作文を製本して活用する)

課外

- 口頭作文→音読による確かめという手順で作り方の順序を正しく並べ、その間を「はじめに、つぎに」などの順序を表す言葉でつないで読み手によくわかる作文を書くことができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、おもちゃコンクールで披露したおもちゃの作り方を全校に紹介するために本をつくるめあてをつかんでいる。これを受けて本時では、口頭作文→音読による確かめという手順を踏みながら、順序を正しく並べ、その間をつなぎ言葉を自ら発見することをねらいとする。そのためにまず、図で示すだけでは良く伝わらないことから文で説明する大切さをつかませる。更に、口頭作文したことを教師が板書するとそれが文章になることから、口頭作文と書いたものを音読することによって確かめることの大切さを確認する。次に、子供自らが、口頭での作文→文での表現→音読しての確認という手順によって、具体的なおもちゃの作り方を大型のカードに、つなぎことばや文を小型のカードに書いて順序よく並べさせる。最後に、自分の書いたことを読み手である友達に実際に読んで作ってもらい分かり易かったところを話してもらうことによって、自分の良さを実感させる。

準備 作ったおもちゃ、作り方を描いた絵、カード、台紙、学習の流れ図、おもちゃの材料
学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 本時学習のめあてについて話し合う。 (1) これまでの学習について振り返る。 ○ 手作りおもちゃの作り方を説明した本をつくるため、それぞれのおもちゃの作り方を説明すること。 ○ 設計図だけでは他の友達に作り方が伝わらないこと。 ○ どうしたら作り方をみんなにより分かりやすく伝えることができるかということ。 ※ 設計図で作り方が読み手に伝わるかを確かめさせる。 (2) 口頭作文の良さ、作文を読み返す良さについて話し合う。 ○ 口頭で作文できればそれがそのまま、文にできること。 ○ 書いたものを読み返せば、もっと確かになるということ。 おもちゃの作り方を話したじゅんぱんに書いていこう。 ※ 子供が口頭で作文したことを教師が板書することで、口頭作文が、そのまま文章になっていくことをとらえさせる。 2. 音読しながら、書いたものを見直して文章を書く。 (1) 書き出しを口頭作文してカードに書いて音読で確かめる。 ○しゃべったことがそのまま作文になること。 まずはじめに 材料として紙コップ二つと、色紙、ビーズを準備します。 ※ 用意する材料をそのまま口頭で述べたあと文に書かせる。 (2) 音読しながら、カードをつなぐ。 ＜最初にカードに書かれた事柄＞ まずはじめに、材料として紙コップ二つと、色紙、ビーズを準備します。 口頭→「つぎに、紙コップの中にビーズをいれます。」 カードへの記入→ つぎに 紙コップの中にビーズをいれます。 音読による見直し 「そのあとに」「二番目に」「その中の」 ↓ まずはじめに 材料として紙コップ二つと、色紙、ビーズを準備します。つぎに 紙コップの中にビーズをいれます。 ※ カードに書いた一つの事柄を記述するごとに立ちどまって音読し、カードをつなぎながら書き進めさせていく。 ※ おもちゃを作る段階で描いた設計図も参考にさせる。 3. 書いた作文を読み手の一人である友達に読んでもらい作り方がわかってもらえるかをためす。 ○自分の力で説明文を書くことができたということ。 ※ 材料を用意してためしに読み手に作ってもらうようにさせる。	○ おもちゃの作り方を説明して一冊の本にすることがめあてだった。 ○ 設計図で説明できると思ったけれど、むずかしい。 ○ 文で説明を加えた方が分かり易いな。 ○ お話したことを書けば作文もけっこう簡単だな。 ○ 読み返すともっと確かになるな。 ○ よし、今日はこのめあてで勉強しよう。 ○ 最初は何をしたかな。 ○ しゃべったことを書けばそのまま作文になるぞ。 ○ どんな言葉でしたことをつないだらいいかな。 ○ この後にはどんなことをしたかな(絵を見よう)。 ○ このつなぎ方でいいかな読んで確かめてみよう。 ○ このつなぎ方が一番よくつながると思うな。 ○ 「つぎに」というつなぎ言葉がぴったりだ。 ○ 簡単に作文が書けたし、わかってもらえた。わかりにくいところはもっと詳しく説明しよう。

題材 夢気球301 ワンダーランドの旅（ぼくらの夢を乗せて気球を飛ばそう）

題材設定の理由

- 本学級では、学級を「夢気球301」に、子供たちの目標を目的地「ワンダーランド」に、目的地に到達するための活動の過程を「旅」にたとえて実践してきている。4月は学級目標や組織づくり、5月は集会活動や係活動を中心として所属意識を育てることに取り組んできた。6月は、「ものづくり」を中心とした活動を通して、所属意識を高めたい。夢気球301作りは、自分たちの力で「夢気球」を作ってみたいという子供の思いから出発したものであり、計画や制作の過程において、個の創造性と集団の凝集性を高めることができる。また、一人一人に学級目標の意識化を図り、学級集団で活動することの効力感と自分が学級に役立ったという有用感を高めることができる。
- 本学級の子供たちは、「夢気球301 ワンダーランドの旅」の活動のもと、自分たちで目標や活動を設定する経験を積み、それぞれが学級のかげがえのない一員であるという意識と協力し合える学級を作っていこうとする意欲が高まってきた。また毎日の航海日誌を書く活動を通して、自分の生活や友達のよさを見つめたり学級の問題に気づいたりすることができるようになってきつつある。話し合い活動においては、自分の意見に固執しがちで、友達の思いやそのよさを取り入れて考えを見直し高め合っていこうとするまでには至っていない。そこで、一人一人の思いや考えを生かすことができる創造的な活動に取り組み、友達とともに協同して活動する楽しさを味わわせていきたい。
- 本題材の指導にあたっては、もっとみんなと仲良くなり、楽しく協力して取り組める活動をしたいという願いのもとに、学級の和を強め所属意識を高める「ものづくり」の活動を行う。まず、今までの活動とそのねらい、思いを振り返らせ、学級のシンボルとして何を作るか決定する。そして、材料や手順などの計画を話し合い、制作活動を行う。次に、この夢気球をさらによくするための考えや完成を祝う会のもち方を話し合い、一人一人の発想や思いを表現させていく。そして、完成を祝う会を行い、協同で作り上げた喜びを味わわせていきたい。

ねらい

活動計画（約3時間）

- | | |
|--|------------------------|
| 1. 学級の目標やまとまりを表す夢気球301作りを通して、仲間と協力して作り上げる喜びを味わうことができる。 | 1. シンボル作りの計画を立てる。――1時間 |
| 2. 自分の仲間や学級への思いを夢気球301の制作活動を通して創造的に表現することができる。 | 2. 計画をもとに協力して制作する。（課外） |
| | 3. 打ち上げ式の計画を立てる。――1時間 |
| | 4. 計画に従って準備する。――（課外） |
| | 5. 打ち上げの式を行う。（本時）――1時間 |

本時活動のねらい

- 夢気球301の打ち上げ式を計画にしたがって実践し、協同で活動する楽しさや作り上げた喜びを味わうことができる。

本時活動の考え方

子供たちは、夢気球301の完成が間近になるにつれ、みんなの力を合わせて作り上げた夢気球を打ち上げたいという思いが強まりその計画を話し合ってきた。そこで本時では、完成を祝う打ち上げ式を実践することで、協同で作り上げた喜びや楽しさを味わわせていきたい。そのためにまず、プログラムにもとづいて一人一人が役割をもち分担して活動に取り組ませる。ここでは、活動目的を明らかにする助言や安全性に関する助言、感動を高める声かけなどの支援を行う。次に、航海日誌で今までの活動を振り返らせる。ここでは、今までの協力の姿を取り上げて賞賛するとともに、子供の感動を高め今後の夢気球301の活動への意欲を高める支援を行っていく。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 夢気球301を見て、本時活動のめあてについて話し合う。 ○ 完成した夢気球301の打ち上げに対する期待感の高まり めあて 夢気球301のかんせいをいろううち上げのしきを みんなの協力でせいこうさせよう。 2. 計画案のプログラムと役割分担をもとに、夢気球301の打ち上げ式を行う。 (1) プログラムにしたがい、打ち上げ式を協力して行う ○ プログラムをもとにした協力的な活動 【予想される計画案（プログラム）とその思い】 ① はじめのことば……………計画係 ・できあがった喜びとがんばるぞという気持ちをこめて ② みんなの歌「気球に乗ってどこまでも」…歌声係 ・元気がよく、ぼくたちの学級や気持ちにあっている ③ 風船とばし……………全員で ・みんなの夢や思いを乗せて ④ 夢気球打ち上げ式……………もつ係、空気を入れる係など ・一人一人が役割をもって、みんなの期待をこめて ⑤ ちかいのことば……………全員で ・この夢気球作りを通して学んだことと今後の誓いを ⑥ 先生のお話……………先生から ・今日のみんなの様子と今までの活動を見ての声かけ ⑦ おわりのことば……………計画係 ・今日の活動を振り返ってみんなの気持ちを代表して * 打ち上げにあたっては、空気の入れ方やつなぎ止めるつなのあつかい方などの安全性について注意し助言していく。 * 今までの活動の中から、自分の分担や役割を果たす姿、協力的な態度など具体的な子供の姿のよさを取り出し賞賛していく。 (2) 本時活動の感想を航海日誌に書き、話し合う。 ○ 今までの活動の振り返りと本時の喜び・感動の明確化 ・制作過程で生まれてきた協力する姿などのよさ ・本時の子供の動きと集中する姿などのよさ ・今後の活動への意欲の高まり * 制作の様子をビデオで視聴させ、自分たちで作った夢気球301への思いと活動中の思いを引き出し、今後への意欲へつながらるように助言していく。 3. 教師の話を聞き、自己評価を学級活動ノートに記入する。 ○ 自己評価と次時の活動の意欲の表現	○ みんなの協力で夢気球301ができてうれしい。 ○ この夢気球301の打ち上げを成功させるぞ。 ○ この301が空に浮かび上がった姿が目に見えよう。 ○ 自分の仕事をしっかりして成功させるぞ。 ○ 友達も一生懸命やっているな。 ○ 打ち上げが近づいてきたけれど、本当に浮くかどうか心配だな。 ○ 絶対に浮いてほしい。 ○ やった。浮いたぞ。大成功だ。 ○ この夢気球に誓ったことは絶対に守っていくよ。 ○ みんなが協力して作り上げたし、準備したから成功することができたんだ。 ○ みんながアイデアを出し合って協力して作っていったからわたしたちの夢気球ができたんだ。 ○ あの大きな夢気球が浮くどうか心配だったけど、ういた瞬間とってもうれしかった ○ 自分たちが気球を飛ばせるなんて無理かと思っていたが、みんなで力を合わせるとできるんだな。 ○ これからもみんなで楽しい活動を作っていこう。

題 材 おかあさんへおくる歌をつくろう

指 導 観

- 本題材のねらいは、「おかあさん」に対する思いをもとに、「おかあさん」を歌った楽曲を聴いたり、演奏したり、音楽をつくって表現したりするという総合的な音楽活動を通して、子供の個性を生かしながら旋律づくりに重点を置いた表現の能力を育てることである。具体的には、①おかあさんへの思いを音楽で意欲的に表そうとすること②歌詞の内容を理解して唱法や奏法を工夫して表現すること③歌ったり楽器を使ったりして、即興的に言葉のリズムを生かした旋律をつくって歌で表現することなどを内容としている。この題材を通して、子供たちは自分の思いを音楽で表現していく過程のなかで創造的な表現の喜びを味わい、音楽性を総合的に高めることができる。
- 本学級の子供たちは、これまで音を探して即興的に表現する活動を経験してきており、音そのものに対する感覚は育ってきている。一方、簡単なリズムや旋律づくりについては、リズム問答や、簡単なふしあそびをしてきている。リズム問答やふし模倣については大体の子ができるが、ふし問答では、自分なりの表現で応答できる子はまだ少ない。また、自分の思いを音楽で表すといった学習活動については初めてであるが、自分なりの音楽をつくってみたいという意欲はもっている。
- 本題材の指導にあたっては、子供の個性が音楽に反映されるようにしたい。そのために、つかむ段階では自分のおかあさんに対する思いを手紙文に書かせ、おかあさんにちなんだ楽曲を聴いたり演奏したりして、音楽的イメージをふくらませたい。つくる段階では、まず手紙文や鑑賞曲をもとに、短い歌詞をつくる。そして、歌唱曲をモデルに歌詞にこめられた思いや言葉のリズムと旋律の関係に気付かせ、歌ったり旋律楽器を使って歌詞に旋律をつけていく。あらかず段階では、つくった歌を発音や呼吸のしかたに気をつけて歌いながら、表現を練り上げていく。あじわう段階では、参観発表会を開き、教師の補助伴奏で作品の発表を行い、達成感・満足感を味わわせたい。また、題材を通してつくった音楽の楽譜や自己評価カードを個人別に「音楽アルバム」としてまとめている。子供自ら自分の音楽的成長に気付かせるとともに、音楽活動への意欲的な態度を育てたい。

目 標

計 画 (約5時間)

- | | |
|--|-----------------------------|
| 1. おかあさんへの思いを音楽で表現することにより、自分らしさを実感し、音楽活動に主体的に取り組むことができる。 | 1. おかあさんあての手紙文を書く —— 課外 |
| 2. おかあさんへの思いを、短い歌詞にして、簡単な旋律をつくって表現することができる。 | 2. 母に関係する歌を鑑賞し、歌う —— 1時間 |
| | 3. おかあさんへおくる歌づくり —— 2時間 |
| | (1)歌詞づくり ① |
| | (2)旋律づくり (本時) ① |
| | 4. つくった音楽の表現の練り上げ —— 1時間 |
| | 5. 参観発表会 1時間 |

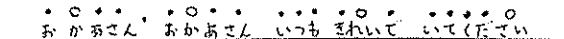
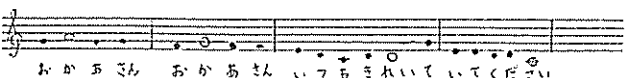
本時の目標

- 歌詞にこめられた気持ちや言葉のリズムを生かして旋律をつくることができる。

本時指導の考え方

前時までには、子供たちは、自分のおかあさんに対する思いをもとに歌詞づくりをしてきている。本時では、歌詞に合う旋律をつけて「おかあさんへおくる歌」をつくる。そこで、「おかあさん」で始まる2つの曲をモデルに旋律の感じのちがいや言葉のリズムと旋律の関係に気付かせたい。そして、つくってきた自分の言葉のリズムを図で描かせたり、気持ちをこめて音読させて表現意欲を高めたい。そして、ふしを口ずさんだり、自分が演奏できる旋律楽器を使って旋律づくりをさせていきたい。また、つくった旋律を記録できるように五線譜や音階譜を準備し、子供に自己選択させ記譜させるようにしたい。

学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時学習を想起し、本時のめあてをつかむ。 (1) 前時につくった歌詞を発表し合う。 ○ 自分のおかあさんへの思いの想起 (2) 本時のめあてをつかみ、音楽づくりの見通しをもつ。 ○ 歌詞の言葉のリズムと旋律とのつながりの把握 ※ 表現モデルについては、「おかあさん」の歌詞ではじまる2つの旋律のモデルを提示して比較させることにより、感じのちがいやリズムと旋律の関係に気付かせる。 【表現モデル例】  めあて 歌詞にこめられた気持ちや言葉のリズムを生かして、「おかあさんへおくる歌」のメロディーをつくろう。	○ みんなも、いろいろなおかあさんへの思いがあるんだな。 ○ 同じ「おかあさん」という言葉でも、やさしい感じや元気な感じなどいろいろなメロディーができるんだね。 ○ 「おかあさん」という言葉は、・○・○というリズムになっているんだな。 ○ 自分がつくった歌詞も言葉のリズムを生かして歌をつくってみたいな。
2. 「おかあさんへおくる歌」をつくる。 (1) 前時につくった自分の歌詞をリズム図で表す。 ○ 言葉のリズムの大まかな把握 ※ モデルの歌詞カードを提示して、言葉のリズムの記入例を示し、歌詞を音読させながらリズム図を書かせる。 【リズム図の記入例】  (2) 自分の歌詞のリズム図を参考に、旋律づくりをする。 ○ 言葉のリズムを生かした旋律づくり ※ 旋律がうまく浮かばない子には、出だしのモチーフの例を個別に提示したりして、援助を行う。 ○ 自分なりの記譜（五線譜／音階譜） ※ 記譜については、子供の実態に応じて、五線譜か音階譜を自己選択させるようにする。 【音楽アルバムの楽譜の例】 	○ 自分のつくった歌詞の言葉のリズムは、どうなっているのか調べてみよう。 ○ 言葉のリズムがわかってきた。 ○ ここの言葉は、おかあさんをお願いをするところだから、あまえる感じが出るように工夫してみよう。 ○ はじめの部分は、これでよし。忘れないように楽譜にかいておこう。 ○ 自分のおかあさんへ伝えたい気持ちが出るようになってきた。
3. 本時のまとめをし、次時への見通しを持つ ○ 「音楽アルバム」の自己評価カードの記入 ・ 歌のでき具合 ・ 満足度	満足度は5だ。

単 元 川をつくって、流れのようすを調べよう

指 導 観

- 本単元のねらいは、流れる水の働きによる土地の変化についての見方や考え方を深めるとともにその土地の変化のようすを意欲的に追究しようとする態度を育てることである。具体的には、①流れる水は「地面を削り、削ったものを運んで積もらせる」といった働きをし、土地を変化させていること、②流れる水の速さや水量によって、働く力が変わること、③流れる水の速さや水量は、降水量と関係していること、である。これらの学習を通して、流れる水の働きをとらえるばかりでなく長い年月に渡って土地は変化し続けてきたという見方や考え方を養っていききたい。
- 本学級の子供たちは、生活経験のなかで雨上がりの校庭に水の流れができていたり流れた跡ができていたりには気付いている。しかし、流れる水が地面や土地の様子を変化させていることや水の流れ方によって削れたり・運んだり・積もらせたりする働きが違ってくるといふことには気付いていない。また、校庭の水の流れと同じ様子が川の中にも存在しているというような見方や考え方は育っていない。
- 本単元の指導にあたっては、身近な自然との関わりから生まれてくる問いを大切にしながら、室見川モデルをつくり、流れる水の働きと土地の変化との関係について調べさせていきたい。そこで「つかむ」段階では、川の流れについて自分なりの問いを持たせるために、室見川を実際に調べさせる。次に、「調べる」段階では、流れる水の働きを確かめさせるために、室見川モデルをつくり流水実験を行わせる。さらに、「広げる」段階では、他の川でも、流れる水が土地を変化させていることを確かめさせるために、資料を使って調べさせる。

目 標

計 画 (約10時間)

- | | |
|---|--|
| 1. 室見川のモデルをつくって、流れる水の働きと地面の変化との関係について、意欲的に調べることができるようにする。 | 1. 室見川を観察し、学習計画を立てる。6時間
(1) ビデオや地図などから観察の視点を明らかにする。————— ① |
| 2. 降水量によって流れる水の速さが変わり、その速さによって土地の変化の様子が違うことを調べるができるようにする。 | (2) 室見川を実際に観察し、問いをもつ。— ⑤
2. 室見川モデルをつくり、流れる水の働きを調べる。—— (本時2/2) ——— 2時間 |
| | 3. 他の川について、資料などで調べる。2時間 |

本時の目標

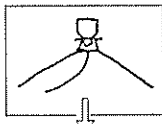
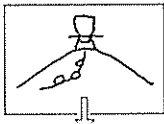
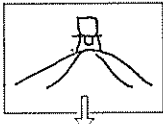
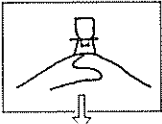
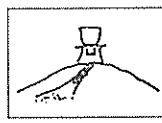
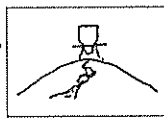
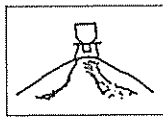
- 室見川モデルを使って、流れる水には、地面を削ったり、ものを運んで積もらせたりする働きがあることや、流れの速さによって土地が変化することを調べることができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、室見川の地図や写真・ビデオから観察の視点を明らかにして、直接室見川を観察し、そこから生まれた問いに対する実験方法を内容別にそれぞれ考えている。

そこで本時では、まず、実験ノートを見ながら、調べていく方法を確かめさせたい。次に、自分の問いを追究するための室見川モデルをつくらせたい。また、そのモデルを使った流水実験を通して、流れる水が地面を削ったり、土や砂を運んだり、積もらせたりする働きがあることや速さによってその働きが違ってくるとを観察させたい。さらに、実験結果と室見川の観察とを重ね合わせながら、流れる水の働きとその働きが土地を変化させていることをとらえさせていきたい。

学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. めあてを確認し、本時で調べていく観点を資料で確かめる。 (1) 本時のめあてを確認する。 ○ 川のようにさがちがう原因を調べること。 めあて どうして、川のようにさがちがうのか調べてみよう。 ※ 各自のめあてを確かめさせ、調べる観点を明らかにさせる。 (2) 自分の予想と実験方法を図やノートによって確かめる。 ○ 流れる水が土地を削ったり 土や石を運んで積もらせたり することについて ・ 石の大きさ ・ 川原のでき方   ○ 流す水の量や斜面の角度を 変えたりして、速さによる変 化の違いについて ・ 川はば ・ 川の深さ   ※ 子供がかいた絵図をもとに確かめさせる。 2. 追究する内容別に室見川モデルをつかって、流水実験をする。 ○ 流れる水の働きによる変化 ・ 土地の削られ方 ・ 小石や土の積もり方   ○ 水を流す量による変化 ・ 削れ方の違い ・ 深さの違い   ※ 室見川モデルをつくり、自分なりの方法で調べさせる。 ※ 室見川の地図や写真・観察記録など対比させる。 3. 試してみても分かったことや新たに発見したことを話し合う。 ○ 自分たちの考えと実験結果とを関係付けながら、川を流れる水の働きについてまとめること。 ※ 写真や資料などを使って説明してもよいことを知らせる。 ・ 川を流れる水が、けずったり、運んだり、積もらせたりして、川のように変えている。 ・ 流れる水が速くなると川のように大きく変わる。	○ 上流と下流のようすで 違っていたことを調べて みよう。 ○ 水が流れてくるところ の石の動きをよく見てお かないといけない。 ○ 流しているうちに溝が できてくるだろう。 ○ 雨の日に川が濁ってい るように、流れる水が茶 色に濁って来るだろう。 ○ 交代で観察したり、水 を流したりしよう。 ○ 水を流す量を変えてみ よう。 ○ 溝がどんどん深くなっ て谷みたいになっている。 ○ 水を流す方向を変えて みよう。 ○ どんどん削れて川幅が 広がっている。 ○ 流れてきた小石や土が たくさん溜まってきた。 ○ 写真と同じように流れ る水が土地を削ったり、 土や砂を運んで積もらせ ていた。 ○ 流れる水の量が多くな ると土地を大きく変えて しまう。

単元 地球のなぞを語ろう「大陸は動く」

指導観

- 本単元のねらいは、大陸移動の根拠や原動力について読み取ったことを図に表現することを通して、意欲的な読み進めと叙述に即した正確な読み取りができるようになることである。教材文からは、問題提起、問題の解決、まとめという文章構成で要旨をとらえることができる。また、細かな叙述に目を向けることで大陸が移動する様子や根拠を想像しながら正確に読み取ることができる。目的を持った説明文の読み進めは、意欲をもって、叙述を細かく分析的に読んでいく読みの力を培うとともに、説明文の読書意欲を高める上から価値がある。
- 本学級の子供たちは、説明文の段落に目を向け、重要な語句から段落毎の要点をまとめたり、中心になる段落をとらえたりすることはできる。また、段落相互のつながりを考え、例を述べた部分やまとめの部分など文章構成に工夫があることに気がつくことはできる。しかし、目的を持って説明文を読む経験が少なく、自分から文章の構成を理解して内容を読み取ろうとしたり、筆者の考えや伝えようとしていることの内容を細かな点にまで注意して読み取るまでには至っていない。そのため、目的を持って説明文にむかい、要旨を的確にとらえて内容を理解するまでには至っていない。
- 本単元の指導にあたっては、地球博物館を作る目的意識を持たせ、大陸移動の根拠や原動力を図に表すことによって教材文を読み取り、読み取ったことを表現する活動を展開していく。導入段階では、地球について資料をもとに調べ学習をし、博物館作りの意欲を喚起する。展開段階では大陸が移動した事実や大陸が動く原動力を図に表し、表現の違いを交流するなかで、文章の叙述に即した正確な読みへと高めていく。終末段階では、出来上がった解説図を教室に展示して博物館を開館する。他学年児童にも見にきてもらい、その中で発表会を開き、効力感や有用感を味わわせる。

目 標

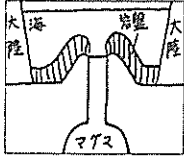
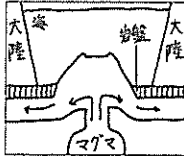
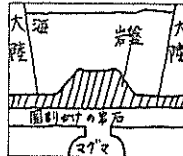
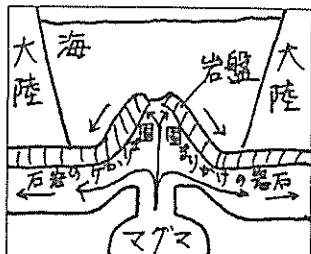
計 画 (約9時間)

- | | |
|--|-------------------------------|
| 1. 地球博物館を作る目的を持ち、表現する喜びを味わいながら、意欲的に説明文を読み進めることができる。 | 1. 地球について調べる。———— 1時間 |
| 2. 大陸移動の事実や原動力を図に表現し交流して付加・修正しながら、叙述に即して正確に移動の様子を読み取ることができる。 | 2. 地球博物館の計画を立てる。—— 1時間 |
| | 3. 大陸の謎を解説図や文に表す。—— 4時間 |
| | (1) 大陸が動いた事実について……………② |
| | (2) 原動力について……………本時(2/2)……………② |
| | 4. 博物館の展示物を完成する。—— 2時間 |
| 本時の目標 | 5. 地球のなぞ博物館を開館する。—— 1時間 |

- 大陸が動く原動力は、固まりかけの岩石が岩盤の下にもぐり込んで流れるときに、それに連れて動く岩盤の移動による力であることを、語句の関係に着目して、図に描きながら読み取る。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、大陸が移動した原動力について自分なりに読み進め、解説図に書き表している。本時では、代表児の解説図を見て、岩盤の場所やマグマの動きなど、曖昧な箇所を出し合わせ、読み取りの不確実な事項を取り出す。次に、構造の模型を操作しながらお互いの読み取りの違いを話し合い、語句を根拠にマグマの流れ、固まりかけの岩石への変化、岩盤の移動とそれに連れて動く大陸の移動といった事柄を関係づけて正確に読み取る。最後に、話し合ったことをもとに自分の表した解説図を見直して付加修正しながら、文章の叙述を細かく読み、より確かな内容理解にたった表現物へと高めていく。

活動と内容	表現のよさを実感する過程
1. 前時書いた解説図を見て、表現の違いに気づく。 ○ 自分の読み取りと他の人の読み取りとの比較 ※ 3枚の図の違いを見つけ、自分の読み取りとどこが違うのか考えさせ、教材文の叙述で確かめようとする意欲を持つ。  岩盤が海のなかにできている例  岩盤が大陸の下にできている例  固まりかけの岩石ということばが表れている例 めあて ことばを手がかりにして大陸が動くしくみを正しく図に表そう。 2. 教材文をもとに、正しく説明するために必要な語句や文章を探し、解説図を見直す。 (1) 自分の解説図を見ながら教材文を読み、違いの原因となる重要な語句や文を取り出す。 ○ 語句に着目した読み取り ・ マグマの流れる様子 ・ 岩盤ができる位置とでき方 ・ 固まりかけの岩石ができる位置 ・ 大陸が動くわけ ※ 図のあいまいさから、どのような語句を手がかりに読み進めたらよいか考えさせ、読み取りの観点を出させる。 (2) 観点に沿って、自分の読み取りを交流し合う。 ○ 話し合いによる読み深め <u>海底まで上がると冷え固まって→海底のすぐ下に岩盤の図</u> <u>もう少し深い所・完全には冷え固まらず→岩盤の下の変化</u> <u>まるで液体のように流れる・流れに乗って→岩盤が動くの</u> <u>は固まりかけの岩石の流れであることを図示</u> <u>岩盤に乗って運ばれ→岩盤が大陸の下に入り込んでいる図</u> ※ 構造の模型を操作し、視覚的に分かるように説明させる。 3. 話し合ったことをもとに4つの関係がうまく説明されるように解説図を付加・修正する。 ○ 話し合いによる叙述に即した読み取りへの付加・修正 ※ <u>原動力</u>に関する<u>マグマ</u>、<u>固まりかけの岩石</u>、<u>岩盤</u>、<u>大陸</u>の場所を図に表し、色をつけて区別させる。	表現のよさを実感する過程 ○ 自分の図と違うところがある。 ○ 教科書に書いてあることをもう一度見直そう ○ 自分の図や文をもっと正しいものにしたい。 ○ この言葉は図のなかに書かなかったけれど大切な言葉だな。 ○ 固まりかけの岩石という言葉を図のなかに位置づけないといけない。 ○ 語句と語句の関係が分かってきた。図に表せよう。 付加・修正された図 

題材 オリジナル野菜サラダとドレッシングをつくろう

指導観

- 本題材は、家庭の状況に合わせて、好みや健康、費用や時間などの観点からおいしい野菜サラダやドレッシングの調理ができるようになることである。主な学習内容は、①経済性や安全性など多様な観点から情報収集して意欲的に実習すること、②調理の目的にあった工夫や取扱いがわかり、目的にあった材料を選択できること、③野菜サラダやドレッシングに対する知識や利用のし方を見直すこと、である。
- 本学級の子供たちは、日常の食事の中で野菜サラダをよく食べ、好んでドレッシングを使っている。それらの中で食品にはいろいろな栄養素が含まれていることに気が付いている。しかし実際の食生活の中では、嗜好性を優先する傾向にあり栄養や家族の健康、経済などの観点から食品をとらえたり、選択したりする態度は十分でない。これは、自分の見方・考え方を見つめ直し、多様な観点から比較・検討し判断する経験がなかったことや食べ手や作り手だけでなく、売手や買い手など自分の立場をかえて見つめるという経験が十分でないからだと考える。
- 本題材の指導にあたっては、オリジナル野菜サラダやドレッシング作りを意欲的に追究する中で、自分の食品に対するとらえ方を見つめ直し自分の家庭生活にあった工夫や選択ができるようにしたい。そのために、教師の準備したサラダを試食させ、自分の作るサラダやドレッシングに対する思いをもたせる。さらに、より具体化していくために情報収集して追究させ、調理の基礎・基本をつかませていく。次に、よりよい実践に向けて、家庭でのドレッシング使用実態について実態表をもとに話し合わせ、自分が考えている使用理由を明らかにしていくための調べる場を設定して追究させていく。さらに、家庭での情報収集活動や立場をかえての活動をしくんで自分の選択を見直させ、それらをもとに調理実習させて生活に生かせる喜びを味わわせていきたい。

目 標

計 画（10時間）

- | | |
|---|--|
| 1. 野菜サラダやドレッシングを工夫してつくり
家庭生活に生かす喜びを味わうことができる。 | 1. 調理実習し課題をつかむ。—————5時間 |
| 2. 目的性や安全性、経済性等の観点から追究したり、作り手や食べ手、売手や買い手の立場から追究したりする中で野菜サラダやドレッシングに対する見方・考え方を高めることができる。 | 2. ドレッシングについて考える。————3時間
(1) ドレッシングに対するとらえ方を見つめ問をもつ(本時) ———①
(2) 情報収集したことをもとに、自分のドレッシングを考えつくる。——①
(3) 立場をかえて自分なりの工夫をする。—————① |

本時の目標

- 手作りドレッシングと市販のドレッシングの良さや問題点について目的性や安全性、経済性の観点から比べ、自分のとらえ方を見直すことができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、計画にそって野菜サラダとドレッシングをつくり、手作りのおいしさや楽しさを味わい家庭での実践に意欲をみせている。そこで本時では、家庭における手作りとし販のドレッシングの使用実態表を提示し、手作りがおいしいといっているのにほとんどの家庭では手作りされていない実態をとらえさせる。その中で市販のドレッシングを選択して使用している理由で最も多い味に視点をあて、味比べをしていく。その結果「味が絶対ではない。」から「他の観点はどうかもっと調べたい。」というめあてをもたせ、自分をもっと明らかにしたい観点を追究させていく。そして、調べた結果を交流する中で今までの自分の見方・考え方を見直させ課題をもたせていきたい。

準備 家庭でのドレッシングの使用実態表、市販を利用する理由の実態表、学習ノート
学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時につくったドレッシングをもとに話し合い、本時めあてをつかむ。 ○ 市販と手作りに対する自分のとらえ方とあいまいな点の把握 ・ 本家に市販の方が味がいいといえるのかということ ・ 作るのにどの位の時間がかかると面倒なのかということ ※ 実態表を提示し、学校で手作りしたにもかかわらずほとんどの家庭では市販のものが使われていることに気付かせ、その理由を話し合わせる。さらに、理由で一番多い味を取り上げ、市販と手作りの味見が出来る場を準備し、味比べではわからないことに気付かせ、もっとほかの観点も調べようという意欲をもたせる。 —めあて— 手作りドレッシングと市販のドレッシングをいろいろな観点から比べ、よさを明らかにしよう。	○ 市販の方が味がいいから家では使っている。 ----- 家庭での使用実態 ----- ○ 手作りドレッシング—2名 ○ 時には買うが手作りもする—1名 ○ 市販のドレッシング—42名 (作る時もあるが市販のドレッシングを使う方が多い11名を含む) ○ 市販のものを選ぶ理由(複数回答) ・市販の方がおいしい 24名 ・材料がいい 4名 ・手間がはぶける。便利 20名 ・安い 1名 等 ----- 45名中 ----- ○ 味では比べられない。本当に市販の方がいいのだろうか。
2. 自分のはっきりさせたいことや調べる方法について話し合い、調べた結果を交流する。 ○ 調べていく方法の見直し ※ 調べたいことが自由に調べられるように以下のコーナーを準備する。 <予想される内容> ・ 市販と手作りの材料 ・ 市販のねだんと手作りの費用 ・ 手作りにかかる時間 ※ 自分の考えの中で一番明らかにしたいことから調べさせる。 < S児の見直した結果の表現 > ○ 自分の価値の見直し ・ 思い ・ かかる時間 ・ 工夫 ・ 費用 ・ 味 ・ 材料 ※ 調べた結果を学習ノートに表現させる。 3 わかったことをもとに判断し < 市販 > < 手作 > これから学習について話し合う。 ○ 自分の家庭の実態に対する問い ・ どんな考えで市販のドレッシングを選んでいるのだろうか。 ※ 今日の学習を通して判断したことを話し合わせることで、これからの学習への意欲付けを図っていく。	○ 自分がおいしいと思っているドレッシングにはどんな材料がつかわれているのかな。 ○ 市販のには増粘剤とかいろいろな物が入っている。 ○ 手作りは、塩分が控え目で健康によさそうだ。 ○ 自分が思っていたほど時間はかからないことがわかった。手作りもいいな。 ○ 手作りは作る楽しさがある。 ○ 市販のを決めるのに味だけで判断していたけどいろいろな観点があるのがわかった。 ○ 手作りのよさも家族に伝えたい。

題材 資料を作って調べよう

指導観

○本題材は、目的に向かって資料の収集から判断・推測まで具体的な活動を行っていくことで、統計的な考察をしたり表現したりする能力や態度を養うことをねらいとしている。この過程で、①ア、目的に応じた資料の収集、イ、分類・整理、ウ、図表の作成、エ、表やグラフの読み、オ、判断・推測、といった統計的に処理をしていく力、②日常の事象から得られた資料を統計的に表現する力、③度数分布表や柱状グラフなどの統計的資料を、資料全体の分布の様子からその傾向や特徴を考察していく力を育てることができる。

○本学級の子供たちは、様々な形の統計的資料に対して、全体的な傾向や特徴を読みとることはできる。また、簡単な棒グラフや帯グラフ、円グラフなどの資料を作り型も身につけている。しかし、たくさん情報資料を分類・整理し表やグラフに表していこうとしたとき、どのような型の表やグラフに表していけばよいのか、また各区間をどのような度数でとっていけばよいのか、分かり易さという観点から表し方を自己決定することが十分でない。これは、子供たちが、目的をもって情報を収集し資料を作るといった経験が不足しているからだと考える。

○本題材の指導にあたっては、子供たちが出会った問題に対して、統計的手法をいかに使って解決に迫っていくか、資料の収集から判断・推測まで具体的な体験をもって味わっていくことが大切であると考え。導入では「人間の持っている量の感覚で一番鋭いものは何だろう。」という問いから子どもに興味・関心をかきたてていく。そして、まず子供たちの自分なりの発想やアイデアを駆使し資料を創らせ、交流によって比較・吟味することで自分の作った資料を見直させていく。数理の活用段階では、生活のなかに統計的処理をして考察すると興味あるものを探す活動を行わせていく。

目 標

計 画 (約10時間)

- 解決の目的に向かって、①自分なりに工夫して統計的資料を作成していく楽しさ、②資料の散らばりを調べるなど、統計的に考察したり表現したりしていく楽しさ、③身につけた統計的手法を活用していく楽しさを味わうことができる。
1. 私たちが持っている量感覚のなかで一番鋭いものについて調べる。—— 7時間
 (1) 人間の量感覚について話し合い、資料集めをする。————— ③
 (2) 量感覚のなかで一番鋭いものは何か説明できるわかりやすい資料を自分なりに作り、自分なりに読み取る。—— (本時1/2) ————— ②
 (3) 友達の資料と比べながら、自分の作った資料を見直し作り直す。————— ②

本時の目標

2. 統計的手法が生かせる場面を身のまわりから探し、生活情報新聞を作る。—— 3時間

○整理された一覧表を作り変えて、どの量の感覚が一番鋭いといえるか統計的にわかりやすいと思う資料を工夫して作ることができる。

本時指導の考え方

子供たちは前時まで、人間が持っている量感覚のなかで一番鋭いものは何か調べるための計画を立て、長さ、重さ、かさ、広さ、時間といった量について、6年1組の資料集めを行ってきた。つかむ段階では、それぞれの測定結果を名前と数値の表の形にして提示することによって、「このままでは、どの量感覚が一番鋭いか判断できない。」という意識を持たせる。見通す段階では、計画の立て方から資料作りの手順を示した板書、雑誌や新聞などから自分で収集してきた統計的資料を活用しながら、①どの量の測定結果を、②何人の測定結果を使って、③どんな形の資料にという観点から自己選択し、自分なりの資料作りの学習計画を立てさせる。調べる段階では、学習計画にもとづいて自分なりに工夫しながらわかりやすい資料作りをしていく。そして、作った資料については自分なりに工夫できている点、不十分な点を学習のノートに書かせ、作った資料の見直しをさせていく。

活 動 と 内 容 表現のよさを表せる過程

1. 量感覚調べの実測結果集計表を見て、どの量感覚が一番鋭いといえるか話し合い、本時学習のめあてをつかむ。 [6年1組の測定結果集計表の例]

○提示された集計表では、適切な判断や推測ができない不十分さの把握
※右表のような形で、長さ、重さ、かさ、広さ、時間の測定結果集計表を提示する。

		7時間	5時間	4時間	3時間	2時間	1時間	30分	15分	5分	3分	1分
	100cm	200cm	250cm	100cm	750ml	1000ml	1000g	3000g	1000cm	1700cm		
1	A君	89秒	146秒	250秒	39秒	600ml	930ml	960g	2840g	932cm	850cm	
2	B君	84秒	169秒	315秒	125秒	650ml	750ml	735g	3120g	11567cm	950cm	
3	C君	100秒	195秒	232秒	95秒	350ml	220ml	710g	2960g	1119cm	800cm	
4	D君	57秒	172秒	256秒	121秒	500ml	1010ml	1010g	3570g	1267cm	980cm	
5	E君	84秒	203秒	245秒	102秒	950ml	1420ml	1050g	3800g	847cm	830cm	
6	F君	70秒	150秒	310秒	105秒	1100ml	1080ml	880g	2880g	667cm	600cm	
7	G君	110秒	197秒	280秒	102秒	1400ml	840ml	990g	15020g	966cm	700cm	

めあて

どの量感覚が一番鋭いといえるか、それを説明できるわかりやすい資料を作ろう。

2. どのような資料を作っていくか、学習の計画をたてる。

○追究していくための方法的見通しを持つ。

※以下のような場の設定と支援を行い、子どもたちが自分なりの発想、方法で取り組めるようにしていく。

- ①雑誌や新聞などから自分で収集してきた統計表やグラフを参照させる
- ②自分の能力や興味・関心によって、資料作りの方法を3つの観点で自己選択できるようにし、計画をたてたら、学習ノートにどうしてそのように決定したのか、その理由を書かせる。

[考えの根拠を表現させる学習ノート]

選択の観点	予想される内容
7. どんな型の資料にするか。→棒グラフ型、表型、円グラフ型、帯グラフ型、平均、最高値・最低値など	
イ、どの量について資料を作る→長さ(100cm)と重さ(1000g)、長さ(300cm)とか。時間(100秒)など	
ウ、何人の測定結果を使うか。→40人全部を使う、男子20人女子20人を使うなど	

- ③板書で、計画の立て方から資料作りの手順まで示し援助をはかる。

3. 自分なりに資料作りをする。

○資料を観点をもって分類・整理し、表やグラフに表現

※方眼の入った学習ノートを与え、自由に表現させる。

(予想される資料の例)

[ピラミッド型の資料]

[度数分布表と棒グラフの資料]

○重さが一番感覚が鋭いんじゃない。

○長さじゃないの。だいたの人が目標値に近いし、大きくずれている人があまりいないよ。

○このままではどの感覚が鋭いか、はっきりとは判断できないよ。

○ア、ピラミッド型の資料を作っていると思う。

→どの部分が多いかすぐに見分けられるので比べやすいから

イ、40人全員の測定結果を使おうと思う。

→時間が分かるかもしれないけれどもできるだけ正確な資料を作りたいから。

ウ、時間と長さに絞って比べてみようと思う。

→私は時間が鋭いと思っているけれど、長さが鋭いと思っている友達が多いから。

単 元 宇宙旅行物語を体で表そう（表現運動）

指 導 観

- 本単元のねらいは、自分たちでつくった宇宙旅行の物語を、表したい感じをとらえ、動きに変化をつけて「はじめ・なか・おわり」のある表現をしたり、自分や友達表現のよさを見つけたりすることである。子供たちは、模擬体験したり映像で見た宇宙旅行のイメージを、動きに変化をつけ、リズムカルな動きでまとまりのある一つの作品につくりあげていく。この運動を通して、①動き作り、場作りの工夫をしながら運動に親しむ態度、②はじめ・なか・おわりの変化をつけて身体表現する力、③グループで協力して学習を進める態度などを身に付けることができる。
- 子供たちはこれまでに、鋭い感じ、対立・対応する感じの動きなどを表す学習はしてきている。しかし、自分たちが表したい筋に従い、みんなで楽しく作品をつくりあげていく楽しさはまだ十分味わえていない。そのため、グループで集団の動きを意識して動きをつくり、「はじめ」から「おわり」までの変化のあるリズムカルな動きをつくり出したりする力は、まだ十分に育っていない。
- 本単元の指導にあたっては、宇宙旅行の模擬体験の想起やテレビや映画による宇宙での映像の視聴体験を想起しながら自分たちの宇宙旅行物語を作る。そして、表したい筋に従って、集団での動きを考えながら変化のある動きをし、「はじめ・なか・おわり」のある作品にまとめるようにさせたい。そのため、つかむ段階では、宇宙旅行の模擬体験や映像を見た体験からイメージをもって物語を作り、自分なりの動きをつかむ。ふかめる段階では、動きの交流活動、場や用具の工夫などによる新しい運動の体験の積み重ねから、表したい筋にしたがって「はじめ・なか・おわり」での動きの変化に多様さがある作品をつくりあげる。あらわす段階では、互いの作品を発表し鑑賞し合う体験から、表現の違いやよさを見つけあい、効力感・有用感を味わわせたい。

目 標

計 画（約8時間）

- | | |
|---|---|
| 1. グループで協力して、計画的に学習の場や動きを工夫しながら作品をつくりあげ、発表会をすることができる。 | 1. 物語を作り、学習の見とおしをもつ。——2時間
(1) 模擬体験や映像想起から物語を作る。……①
(2) 学習の進め方を話し合う。……① |
| 2. 宇宙旅行の様子を想像し、表したい筋に従い、集団での動きに変化をつけながら、リズムカルな動きではじめ・なか・おわりのある作品をつくることことができる。 | 2. 場や動きを工夫し、作品をつくりあげる。——5時間
(1) 自分のイメージからの動きづくり。……①
(2) ペアでの動きの交流。……①
(3) グループでの動きの交流。……(本時2/3) …③ |
| 本時の目標 | 3. 出来上がった作品を互いに鑑賞する。——1時間 |

- 自分たちで表そうとする「宇宙旅行」の様子を、ペアの動きを出し合いながら、それぞれの表現のよさを取り入れ、集団での動きを工夫してつくっていくことができる。

本時指導の考え方

本時は、ペアでつくった動きをグループの中で出し合い、互いの動きのよさを取り入れながら集団での動きをつくっていく第2時で、特に自分たちが表したい部分の動きをつくっていく段階である。ここでは、はじめ・なか・おわりを考えて、表したい部分の特徴をとらえ、その様子がよく表れるようにしていく。そのため、グループでの動きの交流や場や用具の工夫による新しい運動の体験活動から集団での動きの工夫をさせる。このとき、動きの交流では「動きづくりボード」を参考に、場や用具の工夫では「動きのポイントカード」を参考にしながら、自分たちで動きづくりをさせていきたい。

準備 動きづくりボード、動きのポイントカード、宇宙映像のビデオ、カラーコーン、ゴム紐
学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時学習を想起し、本時学習のめあてと進め方をつかむ。 (1) 前時の学習を振り返り、本時学習のめあてを確かめる。 全体のため グループでの動きを工夫し「宇宙旅行物語」の様子を体で表そう。 動きをつく (2) 学習の進め方を確かめ、本時の学習の見通しをもつ。 ○ 学習計画表による自分たちのグループの学習活動の見通し ・ ペアの動きのよさの交流活動（ペアによる表現活動→交流活動→グループによる表現活動） ・ 動きづくりの場や用具の工夫（カラーコーンを活用した広さに着目した場やゴム紐を活用した高さに着目した場、速さに着目したタンブリンなど）※「動きのポイントカード」の※動きづくりポート、動きのポイントカードを活用させる。 ○ 学習計画表による自分たちの学習内容の見通し ・ 攻めてくる宇宙人→集団での直線的な鋭い動きで ・ 宇宙戦艦同士の戦い→2つの集団の動き方の違いを出して	○ 前の時間、A君達の動きを基にロケット発射の動きをつくったな。 ○ 僕たちは今日は、宇宙人が攻めてきた部分を、一人一人の移動の仕方に気をつけてつくりあげよう。 ○ 私たちは、宇宙戦艦同士の戦いを、お互いの戦艦の動き方を考えてつくっていこう。
2. グループでの動きをつくっていく。 <u>Aグループ活動例</u> ○ 「なか」の宇宙人が攻めてきた場面の動きづくり。 (1) ペアの動きをみんなで見る。 ○ 攻めてきた宇宙人に対して、逃げたり反撃したりする動き (2) 見つけたよい動きを一緒に踊る ○ 攻めてくる動き→素早く ○ 逃げる動き→柔らかに素早く (3) グループでの動きを工夫する。 ○ 宇宙人→一直線にそろって（カラーコーンの直線的な場で） ○ 探検隊→散らばってばらばら（広さと移動場所を考えたカラーコーンの場で） (4) 本時の部分を通して踊ってみる ○ 途切れないリズムカルな動き (5) 他のグループに見てもらい、できばえを確かめ、つくりあげる。 <u>Bグループ活動例</u> ○ 「なか」の宇宙戦艦同士の戦い (1) 2つの集団の動きを確かめる ※ 「動きづくりボード」の活用 ○ A集団→横広く左右に移動 ○ B集団→まっすぐとターン (2) グループで動きを工夫する。 ○ 左右の移動→そろった動き ○ ターン→素早く方向を変換 ※ つくりたい動きに応じ、「動きのポイントカード」を参考に場や用具の工夫をさせる。 (3) ビデオで撮影し振り返る。 ○ よさ→対応した動きの変化 ○ 不十分さ→集団の乱れ (4) もう一度踊ってみる。 ○ 集団での動きをそろえて (5) ビデオで撮影し振り返る。 (6) 発表に向け練習する。 3. 本時つくった動きをグループごとに互いに発表し合う。 ○ 本時部分の動きの説明と発表。（特に集団の動きについて発表） ※ 他のグループのよさを見つけ、互いに認め合うようにする。	○ A君たちの動きは、宇宙人と探検隊の動きの違いがよく分かるな。 ○ みんなで一緒に踊ってみよう。 ○ 今度はグループ全体での表し方を考えよう。 ○ 宇宙人はそろって突っ込む感じだぞ。探検隊はびっくりして散らばるように動こう。 ○ そろって動かないと、宇宙戦艦の動きにならないな。 ○ ビデオで自分たちの動きを観ると、よいところや不十分なところがよく分かるな。 ○ 今日は集団の動きに変化をつけたのがよかった

第6学年3組 帰国子女学級 社会科学習指導案 指導者 柿添展宏

単元 日本と外国の関係について考えよう（世界の中の日本）

指導観

- 本学級は、海外在住年数が4年から10年までの5名の子供で構成されており、海外在住国も多様である。そのため、外国の人々の生活の様子や日本とのかかわりについては、在住国の情報が豊富情報収集の方法が多様、あるいは自己の考えを表現することが得意、などの帰国子女の特性を生かして学習することができる。しかし、子供たちは自分と外国（人）とのよりよいかかわり方については気付いていない。
- 本単元のねらいは、外国の立場を理解し、外国と協調しながら生きていくことの大切さに気付かせることである。そこで、在住国の人々の衣食住の様子や在住国の人々と家族とのかかわりを取り上げる。このことは、海外在住体験をもとにして正しい国際理解を図るものであり、海外で生活し在住国の人々の生活の様子を見たり、日本の様子を外国から客観的に見たりした体験をもつ帰国子女の学習としてふさわしいものである。また、本単元の学習は、国際的視野に立って社会的現象を見る子供を育てる上からも意義深いものである。
- 本単元では、正しい国際理解ができるように日本や外国の立場に立った討議の場を設定する。そこで、まず家族と在住国とのかかわりについてアルバムをもとに話し合わせ、多くの人に在住国について知ってもらおうという提案をもとに、表現物製作の目的意識をもたせる。次に、在住国の生活の様子や家族とのかかわりについて取材させ、日本との共通点や相違点に気付かせる。その中で互いに相手を理解できにくいといった問題点があることに気付かせ、その解決策を判断させる。最後に、これまでの学習内容を表現物にまとめることにより、外国（人）とのよりよいかかわり方をまとめるようにする。そして、まとめを校内掲示するなどして、海外在住体験のよさを感じさせる。

目標 計画（約9時間）

- 他国と協調を図るためには正しい国際理解が必要であることを理解し、外国とのかかわり方について価値判断することができる。
- 1. 在住国とのかかわりについて話し合い、表現——2時間
物製作を目的として学習計画を立てる。
- 2. 在住国の人々の生活や家族とのかかわりを調べ、外国（人）とのかかわり方について話し合う。——5時間
(1) 学校生活・社会生活の様子----- ②
(2) 外国（人）とのかかわり方-----（本時3/3）----- ③
- 3. 外国（人）とのかかわり方についてまとめる。---2時間

本時の目標

- 外国の人と接するときは互いに文化や立場を理解しあい尊重することが大切であることがわかり、外国の人との接し方について値判断判断することができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、白尾さんがウガンダでボランティアとして活躍してきたことは理解している。本時は、ウガンダの人々を手助けしているにもかかわらず、人々から他人行儀な言葉や態度をとられる白尾さんの姿を取り上げ、外国の人と接するときは互いに理解し尊重しあうことが大切であることをつかまたい。そこで、まず他人行儀な態度をとられた白尾さんの話から本時のめあてをつかませる。次に、なぜ現地の人か他人行儀なのか考えを発表させ、本時は白尾さんや現地の人々の考えについて話し合っていく必要性に気づかせる。これを受けて、白尾さんの立場とウガンダの人の立場に立って白尾さんと現地の人々の考え方を話し合わせ、外国の人との付き合い方について考えさせる。最後は、白尾さん自身の話を聞き、白尾さんの生き方について自分なりに考えをまとめさせる。

準備 自分なりに調べた在住国とのつながりノート、白尾さんの話、現地の写真
学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1、前時学習を想起し、本時学習のめあてについて話し合う。 ○ ボランティアとして学校建設に携わった白尾さんの様子 ——白尾さんの行動—— ・ ボランティアとしての学校建設 ・ 学校経営へのアドバイス ・ 自立するための農業指導 ——ウガンダの人の態度—— ・ 他人行儀な言葉づかい ・ 校舎建設パーティーで遠まきに白尾さんを見ていた現地の人々 ※ 白尾さんの話をもとに、当初本当にはわかり合えなかった白尾さんとウガンダの人の態度のズレから学習のめあてをつかませる ——<めあて>—— 白尾さんは学校づくりにがんばったのに、なぜウガンダの人は白尾さんに他人行儀なのだろう。 2、白尾さんの生き方について話し合う。 ○ 白尾さんの立場とウガンダの人々の立場に立っての討議 [話し合いの観点] ——[白尾さんの立場]—— ・ ウガンダの人々が勉強できるように学校を建てた。なのに、どうしてわかってくれないんだ ・ アメリカの学校では、自分ではないといけなかった。何でもしてやるのはその人のためにならない。だから白尾さんも全部してやらないんだ。わかってもらいたいだろう。 ——[ウガンダの人の立場]—— ・ 学校をつくってもらったのはありがたい。でも、日本人はウガンダ人と違う。ウガンダの文化までは、わからないのではないか。 ・ 日本は豊かなのに、なぜもっとしてくれないのか。白尾さんの本当の心がわからない ※ 海外在住中の人種に対する自分の見方、現地の文化に対する考え方を写真などをもとに想起させ、現地の人との関係について考えさせる ※ 相手国の立場に立ちやすいという帰国子女の特性を生かし、途中で立場をかえて討議をさせる。 ※ 白尾さんに、授業に参加し生き方について話してもらい、相互理解・尊重の難しさ大切に気付かせる。 ——<話の内容>—— ・ 白尾さんの子供が現地の人と一緒にダンスを踊ったことにより現地の人と白尾さんの心の交流ができ、互いに理解し尊重できたこと。 3、他人行儀だったウガンダの人々のために努力した白尾さんの姿・人々を尊重した生き方について自分なりに価値づけさせる。 ※ 海外在住体験と白尾さんの生き方を結びつけさせ、似た体験を発表させることにより、白尾さんの体験を価値づけさせる。	○ 白尾さんの気持ちとウガンダの人の気持ちは違いがあったんだな。 ○ わかりあえるのは、むずかしいな。 ○ どうしてよそよそしくするのか。ウガンダの人は、どう思っていたのだろう。 ○ ウガンダの人には、自分なりの考えがあるし、白尾さんにも自分なりの考えがあるな。わかりあえるのは難しいな。 ○ それぞれの立場で考え方が違うな。白尾さんとウガンダの人の立場をかわってみると、立場によって考えが違えることがわかるな。 ○ ウガンダの人は、自分たちのことを本当にわかってほしかったんだな。相手の国の人を本当にわかるのは大変だな。 ○ お互いに尊重することが大切だったな。自分もそうしてきたんだ。

題 材 「おにさんからにげよう」 (基本の運動)

指 導 観

- 精神年齢2歳から4歳程度の子供たちで構成されている。逃げたり追いかけたりする遊びが好きである。また、おにやオオカミなどの出てくる繰り返しのあるお話が好きでもある。最近では、ボールを持って追いかけ合うといった遊びにも関心をもっている。走る実態は、コースを意識せず自分だけで逃げる子から相手が意識できコース通りに逃げたり追いかけたりできる子と幅が広い。
- 本題材のねらいは、①約束を守って、意欲的に場や友とかかわり運動を楽しむ態度を養う②逃げる追いかける役を理解を促進する③走る・跳ぶ・渡る・投げる、等の基本的な動きの経験、等である。このことは、身近な友達と仲良くでき、体を今までよりも自由に動かせる喜びが味わえる。このような全身で快の感情を味わう運動の積み重ねが、生活場面で運動する積極的な姿を引き出せる。
- 本題材の支援は、①子供たちの遊びの実態からくる良さが生きるお話を基本に活動を構成する、②動きの広げ方・役割の理解の仕方・友とのかかわり方、等をより個に即して運動に対する意欲を増す為に、ティームティーチングによる指導方法を取り入れる、③走るだけの単調な動きにとどまらないために、器械・器具やボール等を設置した変化のある総合的な場で構成する。

計 画 (約5時間) ※数字は単位時間数を表す。

	であう ①	た の し む ③			まとめる
活 動 と 場	1. 鬼の話を聞き、鬼や宝物に出会い自由に遊ぶ。 制約のない自由な場	2. 意欲的に「おにさんからにげる」をする。			① 3. 学習してきた場とお話をつないで学習をまとめる
内 容	・ 宝物や動きへの関心	(1) 宝物探し⇒鬼登場⇒逃げる・追いかける⇒家で宝物構成 制約のない自由な場	(2) 宝物探し⇒鬼登場⇒コースを選択して逃げる・ドリームボールを持って追いかけて投げる⇒家で宝物構成 (本 時) 一本道コース・ヘビコース・分かれ道コースの場	(3) 宝物探し⇒鬼登場⇒障害物を選択して逃げる・ドリームボールをもって追いかけて投げる⇒家で宝物構成 平均台や台を付加した障害物の場	総合的な場
		・ 役割理解 ・ 遊び方の理解	・ 相手意識の広がり・走り方(後ろ向き・方向変換)	・ 跳ぶ、渡る、投げるの多様な動き	・ 遊びへの満足感

目 標

1. 簡単な約束を守って、友だちと仲良く鬼さんから逃げようの遊びを楽しんでいる。
2. 逃げる・追いかけるの役割を選びながら活動する中で、友とのかかわりを増やしている。
3. 動きの模倣や声かけで、走る・跳ぶ・渡る・投げる、等の多様な動きを広げている。

本時の目標 (コースは、———, ~~~~~, ⊕ ⊖ ※Gはグループを表す。)

- コースを選んで逃げたりドリームボールをもって追いかけて投げている。

A G : 直線的な逃げ方や相手の動きについていく追いかけ方をして走っている。

B G : 後ろを振り向きながらの逃げ方やコースを意識した逃げ方や追いかけ方をして走っている。

C G : ストップしたり方向変換したりする逃げ方や追いかけ方をして走っている。

本時学習の支援 (※具体的な支援の内容は、個の活動を促す支援を参照)

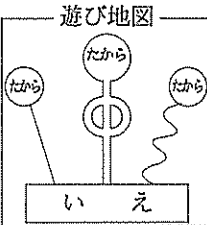
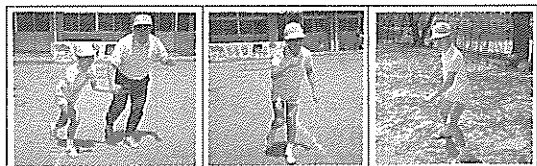
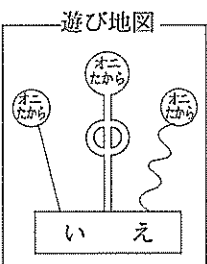
I. 遊びへの意欲を引き出す支援 鬼の隠れ家と自分の家に教師がつき、コースの選択、音楽に合わせたスタートへの支援などをする。

II. 動きを広げる支援 A G : コースが意識できにくいために、動き方がわからず戸惑っている児童には、コースへの誘導のための動作援助・声かけ・モデル演示、等を繰り返す。 B G : 逃げる楽しさを味わえていない児童には、走り方のモデル演示をする。 C G : すぐに捕まえてしまう児童には、追いかける人数の調節と方向変換のモデル演示をする。

III. 友とのかかわりを広げる支援 友を意識させる声かけをしたり教師と一緒に活動したりする。

準 備 お話ビデオ、鬼の家、構成遊びの家、宝物、遊び地図、等

学習指導の過程 (※は、ティームティーチングの留意点)

活 動 の 姿 と 内 容	個 の 活 動 を 促 す 支 援
1. 本時おにさんからにげようの遊びに出会う。 (1) 前時学習を想起する。 ○たくさん宝物をあつめたこと (2) 本時おにさんからにげようの遊びを知る。 遊び地図  ストーリー① おにさんのいえが、3つあります。いつ、おにさんが、でてくるかわかりません。はやく、いっぽんコース・へびコース・わかれみちコースをえらんで、じぶんのいえにはしってかえりましょう。そして、たからものパズルをつくろう。 ○一本・蛇・分かれ道コースを走ること めあて すきなコースをとって、たからものをあつめて、たからものパズルをつくろう。	I 遊びへの意欲を引き出す支援 ○前時ビデオ視聴(意欲的な活動の姿) ・鬼登場の音楽と役割を意識させる声かけ ・動きのよさに対する賞賛 ○ふじ組の子どもの写真つきのペーパーボードによる遊び地図の説明 ○鬼のお面提示 ○ストーリー I の提示 ○モデル演示(T1 動き方や鬼のスリルを味わわせる声かけ、T2 コースを自己選択しながらのモデル演示) ○試しの遊び(動作援助、コースへの誘導、約束を意識させる声かけ)
2. 鬼さんから逃げようの遊びをする。 (1) コースを通して宝物を集める。 AG BG CG  (2) 鬼から逃げる遊びをする。 遊び地図  ストーリー② いままで、おひるねをしていたおにさんがおきました。すると、たからものがへっていたので、かんかんにおこってしまいました。たからものをもっていったら、おんがくがながれて、ボールをもったおにがでてきます。つかまらないように、にげましょう。	II 動きを広げる支援 AG: 動作援助「手をつないで一緒に逃げる」 B CG: 「鬼さんが来るよ。気をつけてね。速く逃げてよ。わあお。わあお。」の声かけ ※T1. T2は、鬼の隠れ家と逃げ込む家に位置して声かけ、動作援助、誘導、モデル演示を個に応じて繰り返す。 II 動きを広げる支援 III 友とのかかわりを広げる支援 AG: 「こっちだよ、線をよく見て」といったコースを意識させる声かけ、コースの通り走るモデル演示、追いかける相手を意識させる声かけと投げるモデル演示 BG: 追いかける相手を意識させる声かけ、コースの曲がり方に応じた前傾姿勢と後ろを振り向きながら走るモデル演示 CG: ストップしたり方向変換せざるをえない場面の提示、二人以上追いかけるといった難しい課題の提示
3. 鬼さんから逃げようの遊びを振り返る。 ○たくさん宝物をあつめたこと ○逃げ方や追いかけ方がうまくなったこと	○動き方・宝物集め、等への賞賛と励まし ○次の遊びのためのお話ビデオ提示

題 材 「たなばたごはんのパンフレットをつくろう」(かきましよう)

指 導 観

- 本学級は、精神年齢2歳から7歳程度の子供たちで構成されている。これまでにお知らせノートづくりやパンフレットづくりに取り組み、「おもいもほり」におけるおもいほりなどのことを、相手意識を持ちながら書いて伝えることを積み重ねてきている。そのため、特に語彙力・文字力が高まり、印象に残ったことの中から自分の書きたいことを見つけることができるようになりつつある。
- 本題材のねらいは、①たなばたごはんづくりにおける楽しい調理の体験を相手に書いて伝えようとする態度、②自分の書きたいことをたくさん見つける力、③体験の順序を考えながら書く力、④文法力をも含めた書くための基礎的な力、などである。このことは、自分の書いたことが相手に伝わる喜びを味わえ、他との関わりを積極的にしていく上で意義深い。
- 本題材の支援は、①書きたいことをたくさんみつけさせたり、順序だてて書かせたりするために、ごはんをたき、具をまぜながら順を追って調理をしていく体験を書くことの素材に設定する、②書くことへの必要感を生み出すために、生活単元学習「たなばたかいをしよう」で母親に活用されるパンフレットづくりに取り組みさせる、③個に応じて書くことをみつけたり、内容の広がりをもたすために、動作化・音声化・文字化の関連を図った活動を構成する、等である。

計 画 (約3時間)

生活単元学習 「たなばたご はんをつくろ う」 ・順序だてら れる体感的な 活動をする。	1時間	1時間	<課外>	1時間(本時)	生活単元学習 「たなばたか いをしよう」 ・書いたこと が母親の役に 立った有用感 を味わう。
	活動と 内容 パンフレッ トづくりにつ いて話し合 う。 文字化への 意欲の喚起	①写真を選択す る。→動作した り話したりする →文字化する。 体験の文字化	パンフレッ トを母親に 見せ、さら に書いてほ しいことにつ いて返事を もらう	②文字化した表現を 読み返す。→動作し たり話したりする。 →書き広げる。 文字化した表現の 書き広げ	

目 標

- 調理の体験を母親に伝えることに興味・関心を持ち、意欲的にパンフレットづくりをしている。
- たなばたごはんづくりの体験について個に応じて文字表現し、さらに書き広げている。

本時学習の目標(※Gはグループを表す)

- たなばたごはんについて書いたことを、さらに書き広げている。

A G : 印象深い写真を選びながら、「こめ」などとたくさんなぞり書きをしている。

B G : 印象深い写真を選び、「ごはん。」などと話しながら、たくさん語句の視写をしている。

C G : 「ごはんをたきました。」などと2語文で話しながら、文の視写をしている。

D G : 「あらいました。」→「じゃぶじゃぶあらいました。」のように、自分なりの表現で語や文を付け加えたり、順序よく書いたりしている。

本時学習の支援(※具体的な支援の内容は個の活動を促す支援を参照)

- パンフレットづくりの意欲を引き出す支援：①体験の想起を促すビデオの提示、②想起した内容を文字化に生かす板書③動作化から想起を促す模擬体験の場④活動の見通しを促すモデル演示
- 表現をあたためる支援：書き広げの観点に気付かせる母親のことばかけ
- 文字表現を書き広げる支援：①A Gへの意味とことばの結び付きを意識させるなぞりカード、②B Gへの視覚により記憶をつなぐ語句カード、C Gへの文の構成を促す語句カード、D Gへの自分なりの表現を取り入れる板書、文章の再構成を促す短冊カード

学習指導の過程

活 動 の 姿 と 内 容	個 の 活 動 を 促 す 支 援												
1 パンフレットの書き広げについて話し合う。 (1) 母親の返事を聞き、準備の様子を見る。 ○ 前時学習の想起 めあて たなばたごはんをつくったことを、おかあさんにもっとたくさん知らせよう。 (2) 書き広げの仕方について聞く。 ① 写真カードを選択して書くことを見つける。 ② 模擬体験の場で動作したり話したりする。 ③ 語句カードを選択したり、短冊カードを並べたりする。 2 パンフレットの書き広げをする。 Aグループ Bグループ Cグループ Dグループ (1) 母親のことばかけを聞く。 ○ 書き広げの観点の把握 <table> <tr> <td>・意味とことばとの結びつき</td> <td>・意味と語句との結びつき</td> <td>・連用修飾語と述語との関係</td> <td>・自分なりの表現の取り入れ、文章構成</td> </tr> </table> (2) 書いたものを読み返し、動作化する。 ○ 表現の選材 ○ 表現のあたため付け加え (3) 動作化したことを話す。 <table> <tr> <td>体験を一語文で模倣する。</td> <td>体験を一語文で話す。</td> <td>体験を二語文で話す。</td> <td>体験を自由に話す。</td> </tr> <tr> <td>「こめ」</td> <td>「こめ」</td> <td>「こめをあらいました。」</td> <td>「こめをきれいなまでなんともあらいました。」</td> </tr> </table> (4) 個に応じて書き広げる。 3 書き広げたパンフレットを紹介する。 ○ 書き広げた文字表現の発表 ○ 生活単元学習で母親が活用することを知る。	・意味とことばとの結びつき	・意味と語句との結びつき	・連用修飾語と述語との関係	・自分なりの表現の取り入れ、文章構成	体験を一語文で模倣する。	体験を一語文で話す。	体験を二語文で話す。	体験を自由に話す。	「こめ」	「こめ」	「こめをあらいました。」	「こめをきれいなまでなんともあらいました。」	I パンフレットづくりの意欲を引き出す支援 ○ 体験想起のビデオ (たなばたごはんをつくっている様子) ○ 想起した内容の板書 ○ 模擬体験の場 ○ 母親の返事 (「こめをどのようにあらったのかな。」など、書き広げの観点に気付かせる。) ○ 教師や代表児によるモデル演示 II 表現をあたためる支援 ○ ランゲージカードによることばかけ A B G : 米の写真のみ 「写真は何かな。」 米の写真と語句「こめ」の結び付け C G : 「あらいました。」 「何をあらっているのかな。」 「こめをあらいました。」 D G : 「こめをあらいました。」 「一番難しかったのはどこかな。」 「きれいになるまでなんともあらいました。」 III 文字表現を書き広げる支援 A G : 意味の結び付きを意識させる写真カードを並べ、書き B G : 視覚により記憶をつなぐ語句カード、視写 C G : 文を構成する語句カードを視写 D G : 板書による自分なりの表現への気づき、自分なりの表現を取り入れ、文章の再構成を促す短冊カード ○ 書き広げに対する賞賛
・意味とことばとの結びつき	・意味と語句との結びつき	・連用修飾語と述語との関係	・自分なりの表現の取り入れ、文章構成										
体験を一語文で模倣する。	体験を一語文で話す。	体験を二語文で話す。	体験を自由に話す。										
「こめ」	「こめ」	「こめをあらいました。」	「こめをきれいなまでなんともあらいました。」										

—メ モ—

第一日目 午後の部

公開授業指導案

公開
授業
第一日目
午後の部

主題名 おおきくなってね、わたしのゆうがお【3－(2)】

主題設定の理由

- この主題は、1学期間を通す単元的な主題の構想「ゆうがおのはなを大きくさかせよう」のひとつである。主題の構想「ゆうがおのはなを大きくさかせよう」のベースとなっているのは、ゆうがお運動である。ゆうがお運動は、子供たちの健全育成と地域のふれあい、思い出のふるさとづくりを目指して取り組み、始められた運動である。昭和57年に始められた「ゆうがおの種子を送る活動」が現在では福岡県、佐賀県の県下全域、熊本県・長崎県の一部地域にまで広がり、「ゆうがおの種子リレー」となって続けられている。主題「ゆうがおの花を大きくそだてよう」には、次のような価値があると考えられる。ゆうがおをそだててをとおして、①植物の生命の尊重や自然愛護。②継続観察による科学の目の育成。③採種や発送による社会奉仕の精神の高揚。④親子が成長を確かめながら育てることによる親子の愛情の深化などをはかることができる。
- 本学級の子供たちは、「ゆうがおの花をさかせて、次の1年生にわたしたいという」ねがいをこめて、今年4月に播種した。そして、ゆうがおに名前をつけたり、水をやったりして育ててきている。播種当初は、鉢を頻繁にのぞきにいたり、朝夕の水やりを忘れずに行ったりして意欲的にかかわっている姿をよく見かけることができた。しかし、発芽後の最近では、ゆうがおにたいする興味や関心がやや薄れ世話も十分にできていないとはいえない。そこで、自己中心的な見方ながら、動植物の立場から推し量りができるようになってきつつあるこの期に、本主題をとりあげたい。そして、植物の生命が躍動する姿にふれ、自分たちと同じように成長している植物の立場にたって優しい心で接することの大切さをつかませたい。
- 1学期をとおす単元的な主題の指導にあたっては、ゆうがおの育成や継続観察をおこないながら、内容の【3－(2)】【4－(2)】【1－(4)】【4－(1)】などを設定し、学習をすすめたい。そのためには、ゆうがおの播種から採種までの活動を通して、植物に対する愛情、親子の関係の見直しと日ごろ世話になっているひとへの感謝の気持ち、種子の採種から発送という社会的なボランティア意識などを高める。このように、実践と関連させたり、ゆうがおと自分との身近な主題を設定していくことによって、より価値高い生き方をしていきたいという意欲を高めていきたい。

ねらい

計 画 (1時間)

- 世話をしてもらえないゆうがおの気持ちを推しはかかったあと、自分のゆうがおにはたらきかける体験的活動によって植物に優しい心で接し、よりよい生き方ができる。

本時指導の考え方

本時では、自作の資料「ゆうがおとじゅんじ」をもとに、水をもらえないゆうがおの悲しい気持ちを推しはかかったあと、一人一人のゆうがおの世話をするという体験的活動を位置づけることによって、植物に優しい心で接し、ともに生きていこうとすることの大切さを感じとらせたい。そのために、きづく段階では、資料をもとに世話をしてもらえないゆうがおの状況を明らかにして、悲しい気持ちやいかりの気持ちを動作化によって深める。次に、ふかめる段階では、自分が育てているゆうがおのようすをもとに、必要な世話をし、かかわってもらったゆうがおのうれしい気持ちやかかわるよろこびを味わう。いかす段階では、やさしい心で接していくことのすばらしさをつかませて、自分なりの生き方をつかませる。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1 これまでの生活をふりかえり、本時のめあてについて話し合う。 (1) 4月からゆうがおを育ててきて、うれしかったことや世話をするよろこびについて話し合う。 ○ 成長するよろこびの話し合い。 ・ 発芽の時 ・ 毎日のお世話のしかたなど * 播種から最近までのゆうがおの成長やかかわりのようすの資料をもとに話し合いをする。 (2) めあてについて話し合う。 ○ めあての把握 2 資料をもとに、植物に対して優しい心で接することの大切さについて話し合う。 (1) 世話をしてもらえないゆうがおの状況を明らかにする。 ○ 場の状況の把握。 ・ りょうたに水がほしいと言っているゆうがお ・ 世話をしてもらえず、悲しいゆうがお ○ 動作化によるゆうがおの気持ちの深め。 ・ せりふづくり ・ 表情づくり ・ 身ぶりづくり * ゆうがおが、じゅんじにお願いしていることをもとに動作化させ、世話をしてもらえない悲しさやいかりの気持ちなどを表現させる。 (2) 十分に世話ができていない自分のゆうがおのようすをもとに必要な世話をする。 ○ 自分のゆうがおに必要な世話の気づき ・ 雑草ぬきや水かけ ・ 肥料やことばかけ (3) 世話をしてもらったゆうがおの気持ちについて話し合う。 ○ ゆうがおのうれしい気持ちの表現	○ めがでて来たときはとってもうれしかったよ。 ○ もっと大きく育てるにはどんな心が大切なのかな。 ○ 水がもらえないで、ゆうがおさん悲しそう。 ○ こんなに頼んでいるのにどうして気づいてくれないの。 ○ 私のゆうがおはどうか水も肥料もほしだいろうなごめんね。いっぱいあげるからね。 ○ よかった。世話をしたらありがとうって言っているような気がしたよ。 ○ きっとこんな顔をしてよろこんでいるよ。お世話するって、本当に気持ちがいね。
* 世話をしてもらったあとのよろこびの気持ちを、表情図にかかせる。	
3 自分のこれからのゆうがおの世話について話し合う。 ○ やさしい気持ちで育てて、大きな花をさかせたいこと。	○ これからもやさしい気持ちでお世話するよ。

単 元 生きもののひろばをつくろう

指 導 観

- 本単元のねらいは、工夫して水の中の生き物の世話をし、水の中の生き物も自分たちと同じように生きて成長していることに気づくとともに、これから大切に育てていくことができるようにすることである。具体的には、①生き物に興味を持って、観察したり大切に育てて行こうとしたりすること、②工夫していえを作ったりえさをやったりして、生き物の世話ができるようにすること、③生き物も自分たちと同じように生命を持っていることや自分で世話ができたことに気づくこと、がおもな学習内容である。この学習を通して、①生き物や自分の活動を観察する力、②生き物との遊び方や世話の仕方を診断する力、③遊び方や世話の仕方を工夫して楽しく改善する力、などを育てることができる。また、自分の力で生き物を育てている実効感を味わうことができる。
- 本学級の子供たちは、これまでにウサギやニワトリにえさをやったり遊んだりして、小動物も自分たちと同じように生命を持っていることに気づいている。しかし、昆虫などの小さな生き物に対しては、自分の一方的な思いでおもちゃのように取り扱ったりする様子が見られる。さらに、小さな生き物も変化し、成長していることまでは気づいていない。そこで、小さな生き物も生命があるという実感を持って世話をしたり、生き物の生活の様子や成長にふれさせたりする必要がある。
- 本単元の指導にあたっては、野外で水の中の生き物を探し、工夫して世話をすることを通して、生き物の形態や生命、成長の様子などに気づかせたり、育てて行く意欲を持たせたりしたい。そのためにまず、池や小川でザリガニやオタマジャクシを探す。ここでは、生き物を探すことを通してそれらの動きや住む場所に気付かせる。次に、飼いたい生き物を附属小学校の小川に放して遊んだり、住む場所を作ったりえさを与えたりさせる。そのため、生き物を探した場所の写真や図鑑を準備する。ここでは、生き物の特徴や生命に気づかせたり、これから生き物を育てていく意欲を持たせたい。最後に、継続的に生き物を育て、成長の様子に気づかせ、生き物図鑑にまとめさせる。

目 標

計 画 (約9時間)

- | | | |
|---|--------------------------------|------|
| 1. 水の中の生き物を探したり育てたりして
生き物への親しみをもち、大切にすること。 | 1. 池や小川に行き、水の中の生き物を探す | 3 時間 |
| 2. 工夫していえを作ったり、えさをやったりして上手に世話をし、生き物の生命や成長の様子に気づく。 | 2. 生き物と遊んだり、おうちや遊びばを作る (本時2/2) | 2 時間 |
| | 3. 生き物を育て、生き物図鑑にまとめる | 4 時間 |

本時の目標

- 水の中の生き物の特徴に応じて、工夫していえを作ったり、えさをやったりして、生き物の世話をすることができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、生き物と遊んで、その形態や動きなどの特徴に気づいたり、生き物にも自分たちと同じように生命があることに気づいている。しかし、まだ生き物の特徴や命を尊重した遊び方や世話の仕方まではなっていない。そこで本時では、生き物に応じたおうちを作ったりえさをやったりして、工夫して世話ができるようにしたい。そのためにまず、前時計画したことを発表させ、本時の活動の見通しを持たせたい。そして、野外で採集したことを思い出させながら工夫して、おうちを作ったりえさを与えさせたりしたい。ここでは生き物がいた場所の様子を掲示する。最後に、活動して気づいたことやできたおうちを紹介して交流し、次時の活動の計画を立てさせる。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程						
1. 前時の学習をふりかえり、本時のめあてについて話し合う。 ○ 本時したいこと ・ 用意した植木鉢で、ザリガニのお家を作りたい。 ・ オタマジャクシに、家から持って来た野菜をやりたい。 ・ メダカだけでなく金魚も住める場所にしたい。 ※ 家から準備してきた道具を紹介したり、使うまねをさせながら、本時活動することを発表させる。 めあて おうちをつかって、いきものとなかよくあそぼう 2. 自分やグループの計画に従って遊ぶ。 <table style="width: 100%;"> <tr> <td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ○ ザリガニやカニ ・ 底に砂を敷いたり隠れる場所を作る。 ・ ソーセージなどのえさを与える。 </td><td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ○ オタマジャクシ ・ 池を作って、まわりに石や草を置く。 ・ クローバーや野菜えさとしてやる。 </td><td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ○ メダカや金魚 ・ 深めに池を掘り水草などを入れる。 ・ ミジンコや飯粒などを与える。 </td></tr> </table>	○ ザリガニやカニ ・ 底に砂を敷いたり隠れる場所を作る。 ・ ソーセージなどのえさを与える。	○ オタマジャクシ ・ 池を作って、まわりに石や草を置く。 ・ クローバーや野菜えさとしてやる。	○ メダカや金魚 ・ 深めに池を掘り水草などを入れる。 ・ ミジンコや飯粒などを与える。	○ 生き物の家を作りたい ○ えさもやりたいな。 ○ 生き物が喜ぶように作 ○ ザリガニは僕の作った家に入ってくれるかな。 ○ オタマジャクシは何を食べるのかな。 ○ 水草も入れようかな。			
○ ザリガニやカニ ・ 底に砂を敷いたり隠れる場所を作る。 ・ ソーセージなどのえさを与える。	○ オタマジャクシ ・ 池を作って、まわりに石や草を置く。 ・ クローバーや野菜えさとしてやる。	○ メダカや金魚 ・ 深めに池を掘り水草などを入れる。 ・ ミジンコや飯粒などを与える。					
※ 自分の工夫点や発見をひみつやじまんのカードに書かせる。 ※ 子どもが貼ったお知らせ板のカードを見て、賞賛する 3. 気付きを交流し、次にしたいことを計画する。 (1) 気付いたことを発表したり、友達の世話の様子を見たりする。 <table style="width: 100%;"> <tr> <td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ○ 生き物と遊んで気付いたことの表現。 ・ ザリガニはおうちにすぐ隠れる。 </td><td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ・ オタマジャクシは底のほうにいる。 </td><td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ・ メダカはご飯も食べる。 </td></tr> </table> ※ 友達が気づいたことや遊び方を見に行かせる。 (2) 次時の計画を立てる。 <table style="width: 100%;"> <tr> <td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ・ ザリガニが遊べる広場を作りたい。 </td><td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ・ オタマジャクシの足が生えたか見たい </td><td style="vertical-align: top; width: 33%;"> ・ メダカは卵を産んでいるか見たい </td></tr> </table>	○ 生き物と遊んで気付いたことの表現。 ・ ザリガニはおうちにすぐ隠れる。	・ オタマジャクシは底のほうにいる。	・ メダカはご飯も食べる。	・ ザリガニが遊べる広場を作りたい。	・ オタマジャクシの足が生えたか見たい	・ メダカは卵を産んでいるか見たい	○ 生き物が喜んでくれるようないえができた。 ○ 私の与えたえさを喜んで食べてくれた。 ○ 世話をした生き物が大きくなったか見たい。
○ 生き物と遊んで気付いたことの表現。 ・ ザリガニはおうちにすぐ隠れる。	・ オタマジャクシは底のほうにいる。	・ メダカはご飯も食べる。					
・ ザリガニが遊べる広場を作りたい。	・ オタマジャクシの足が生えたか見たい	・ メダカは卵を産んでいるか見たい					

題 材 まるい形で子供の国をつくろう（円と球）

指 導 観

○ 本題材の主なねらいは、円と球の形の物やおもちゃづくりを通して、円と球の特徴をとらえ、円と球の見方・考え方を深めることである。具体的には、①円の意味を理解し、半径と直径の関係をとらえる、②コンパスの機能を理解して、円を作図したり、長さを移したりする、③円と関係づけて球の中心や半径などをとらえること、などの内容がある。これによって、図形に対して興味・関心を持たせるとともに、構成している要素や性質に着目していこうとする図形の見方を育てることができる。

○ 本学級の子供たちは、辺や頂点や直角に着目して三角形や四角形の特徴をとらえることができる。また、三角形や四角形を自由に作図することもできる。円についても調査の結果、円という用語は全員が知っており、円がコンパスでかけることを知っている子も90%いる。円はきちんとしたまるという感覚的なとらえ方で、形を構成する要素で円をみる見方は十分ではない。また球についてはボール遊びなどで身近に接しており転がりやすいという特徴はとらえているが、どこからみても円にみえるとか切り口がいつも円になっているなど、円との関連で球をみる見方は十分とはいえない。

○ 本題材の指導にあたっては、第1時では共通しているものを見付けるクイズで身の回りの品物やおもちゃにはまるい形がたくさんあることに気付かせ、まるい形を使った子供の国づくりの提案で、円の形の物やおもちゃを作って遊ぼうという思い・願いを持たせる。第2時から4時では子供の国におく遊び物の形を観察させて共通点に気付かせ、中心から端までの長さがどれも同じまるい形を作図させる。第5時から10時では子供の国のなかの物を素材に円の性質や球について追究させていく。最後にできあがった子供の国であそび、有用感を味わわせる。

目 標

計 画（約11時間）

1. 円や球を構成する活動を通して、円を自由にかいたり円や球を作ったりできるよさを味わうことができる。

2. 円は中心から端までの長さがどれも同じまるい形、球もま二つに切った切り口の円の中心や半径が球の中心や半径であることがわかり、構成要素に着目して、円や球を構成できる。

本時の目標

○ 円や円の要素で球をとらえる見方を使って、球のかざり物をつくることができる。

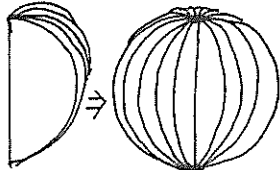
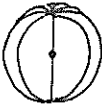
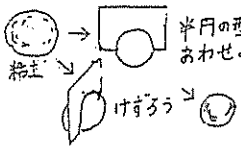
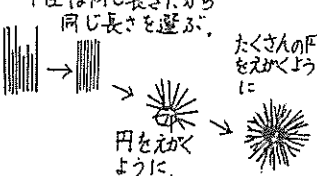
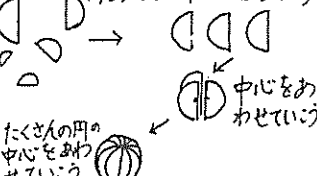
本時指導の考え方

前時までに子供たちは、球の切り口の観察を通して、切り口がいつも円になることや切り口の一番大きな円の中心や半径がその球の中心や半径になっていることを学んでいる。そこで本時は、円と関係づけて球をみていく見方を深めることをねらいとする。であう段階では、例示した球のかざり物の作り方から球の性質がどのように使われているかを観察させ、球の性質に目を向ければ球を構成できるのではないかという見通しを持たせる。そして、自分が作ってみようと思う球のかざり物の設計図をかかせる。つくる・深める段階では、自分の見通しに基づいて、表したい球の性質に応じた材料を選び、球のかざり物を作る。まとめる段階では着目した球の性質からどう構成したかを交流させ、円の要素に着目しながら球をとらえる見方を深めさせる。

1. 子供の国作りの計画（まるい形の類別）	1 時間
2. 子供の国をつくる。	9 時間
(1) 子供の国におく遊び物をつくる。	③
(2) おもちゃのこまを調べる	③
(3) ボールのような形を調べる。	②
(4) 工夫して球をつくる。	……（本時）…… ①
3. つくった子供の国で遊ぶ。	課外

準備 球を構成する材料（粘土、半円形の画用紙、スチロール球、爪楊枝など）

学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 子供の国に置く球のかざり物を作る活動について話し合い、本時のめあてをつかむ。 (1) 前時までの球の学習内容を球の性質を重点に想起する。 ○ 前時までの球の学習内容 ・ 切り口がいつも円になること。球の大円に球の中心と半径があること。切り口は無限にあるが最大の円の中心は1点のみであること。 (2) 例示した球のかざり物の作り方について話し合い、めあてをつかむ。 ○ 球の性質に目を向ければ球を構成できるのではないかという見通しを持つこと。 ※ 例示した球のかざり物を観察させ、球の性質をどのように使って作られているかを発表させる。 ※ 自分が作ってみようと思う球のかざり物の設計図をかかせる — めあて — 球の性質を使って球の形のかざり物を工夫して作ってみよう。	○ どうやって球のかざり物を作ろうかな。 < 例示した球のかざり物 >  ○ 円を組み合わせているから、切り口の面がいつも円という性質を使っているな。 (球のかざり物の設計図の例) ----- [球の性質] 切り口がいつも円 [見通し] [イメージスケッチ] 同じ大きさの円を、中心をそろえて作る 
2. 子供の国に置く球のかざり物を作り、球の性質をどのように使って作ったか話し合う。 (1) 表したい球の性質に応じた材料を選び、球を作る。 ○ 切り口の面が円であるとか中心が1個しかないはずだからといった円の性質を使い、予想した球の形を作ること。 ※ 大きさや形の違うものを材料に混ぜて、選択をさせる。	< 予想される活動例 > -----  ①どこから見ても円に見えるはずだから、いろいろな方向から円に見えるように形を整えよう。  ②球には円がたくさんあるから半径もたくさんあるように作る。  ③中心が1個しかないはず一点に集めてみよう。
(2) どんな球の性質を使おうとしたかという観点で交流をする。 3. 本時学習をまとめる。 ○ 球には円があって、半径がたくさんあるので半径をたくさん作ったから球ができた。 ○ 球には切り口は無限にあるけれど最大の円の中心は1点だけだから円の中心を1点に集めたら、球ができた。 ○ 切り口がいつも円になるから、円を重ねたら球ができた。	○ 球は円とはこんなに関係があったのか。 ○ 球の性質をいろいろ使って球が作れたぞ。 ○ もっといろいろな球が作れそうだ。

単 元 キョウリュウ博士になろう（キョウリュウをさぐる）

指 導 観

- 本単元の主なねらいは、キョウリュウの姿を探るためには「骨の化石」「化石が出てきた場所」「骨組みが似ている現存する動物」を手がかりとし、それらの手がかりをうまく組み合わせることで、その大切さを読み取ることができるようにすることである。文章は、はじめに問題提起があり、その問題について三つのまとまりで説明し、最後にまとめるという基礎的な段落構成になっている。
- 本題材は、キョウリュウという興味を引く内容であり、キョウリュウ博士になって読み取ったことを発表しようという活動目的を設定することにより、意欲的に読み深めさせ発展的な読書欲を高めることができる。また、段落相互の関係をどのように押さえるかを学ばせるのに意義がある。
- 本学級の子供たちは、これまでに、尾括型や両総括型の説明文に出会って文章の要点を読み取るという学習はしてきた。しかしそれらは、問題提示→解決→結論という単線型の文章構成としてのものが主である。だから、ある問題についての解決方法は多様に有り、しかもそれらを工夫して組み合わせることで解決していくという見方は十分に身に付いていない。
- 本単元の指導にあたっては、キョウリュウ博士になってみんなの前でキョウリュウについて研究したことを発表するという活動目的をもたせて意欲的に読み取らせたい。そのために、導入では、キョウリュウについて知っていることを出し合い、キョウリュウについてもっと知りたいという思いをもたせたい。展開では、キョウリュウの骨の模型を組み立てさせたり、想像したキョウリュウの絵を描かせたりして内容を詳しく読み取らせていく。それを研究ノートに書かせていきたい。終末では、他のキョウリュウについて調べさせる。そして、キョウリュウ学会を開いて発表させ、キョウリュウについて詳しくなった成就感、みんながうなづいてくれたという効力感を味わわせたい。

目 標

計 画（約9時間）

- | | |
|---|--|
| 1. キョウリュウの姿をさぐるのには、3方法の組み合わせによることを、段落相互の関係を考えながら読み取ることができるようにする。 | 1. キョウリュウについて知っていることを、話し合う。————— 1時間 |
| 2. キョウリュウについて読み取ったことを意欲的に研究ノートに書いたり他のキョウリュウについて調べたりすることができるようにする。 | 2. 題材文を読み学習のめあてをつかむ。1時間 |
| | 3. キョウリュウの姿を探り、研究ノートに書く。—— 本時（2/4）—— 4時間 |
| | 4. 他のキョウリュウについて調べ、キョウリュウ学会で発表する。—— 3時間 |

本時の目標

- キョウリュウの大きさやかっこうが分かるには、一頭分のほねの化石がまとまって（つながった形で）発見されなければならないことを読み取ることができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、キョウリュウをさぐる手がかりは大きく三つあることを把握している。本時は、キョウリュウをさぐる第一の手がかりについて読み取る時間である。そこで、導入では、あるキョウリュウのほねの化石の一つを提示して、そのほねからどんなキョウリュウだったのか推定させる。すると子供たちは、推定することは無理であることに気付き、いったいどんなことがそろえばよいのかという本時のめあてを意識すると考える。展開では、一頭分のほねの化石をまとめて（かたまりにして）与え、組み立てさせる。子供たちは、まとまってとは、つながりがある形になっていなければならないことを実感的に理解すると考える。終末では、研究ノートの付加・修正をさせる。

- 45 -

題材 ミュージカル「龍の子太郎」をつくろう

指導 観

- 本題材のねらいはミュージカルに用いる歌をつくり、歌い、演じる活動をとおして、曲の構成を考えて旋律をつくり、気持ちがよく表れるように歌い方を工夫することができるようにすることである。具体的な内容としては旋律を反復・変化させること、表情のちがう旋律を組み合わせること、強弱・速度・唱法を工夫して歌うことである。ミュージカル「龍の子太郎」（松谷みよこ原作）は、世間知らずでなまけものだった太郎が母を探す旅の途中で様々な体験をし、成長していくストーリーで構成される。したがって、太郎と同年代の子供たちにとって太郎が成長する姿は共感と感動を呼び、表現への意欲をもたせることができる。また、反省と決意という心情を表現主題としてもたせることができるので、表情のちがう旋律を組み合わせる方法を学ぶことができる。このことは、子供たちの個性的な表現をひき出すことができるので創造性を培うという意味で価値がある。
- 本学級の子供たちは、合唱したり、合奏したりすることが好きであり、無理のない声で歌うことはできる。合唱の際に副次的旋律の音を正しくとって歌おうとすることができる。歌唱表現の際には、音楽的諸要素を変化させて歌うことができるが、曲の構成を考えて速度・強弱を変化させてあらわすことは、まだ十分でない。旋律をつくることに関しては、言葉の抑揚や意味を考えてつくるを考えてつくることはできるが、構成を考えての旋律づくりはまだ経験がない。
- 本題材の指導にあたっては、子供たちが意欲をもって心情を音楽にあらわしていくことができるようにしたい。そのために、せりふの言い方・動きの工夫を通して心情を深くつかまえて旋律をつくり、曲の構成や動きのもつ速度・強弱変化から歌い方を工夫させるようにする。まず、つかむ段階では「龍の子太郎」を試みに演じてみるにより表現主題をつかませる。あらわす段階では、⑥場面の歌をつくり旋律をつくる方法を学ぶ活動1、その方法を応用して選択した場面の歌をつくり演じる活動2を行う。その際には、①せりふの言い方の工夫②歌づくり③動き・歌い方の工夫という順序で歌い演じさせる。あじわう段階では、低学年への発表会を行い、喜びを味わわせる。

目 標

計 画(約10時間)

- | | |
|---|--|
| 1. ミュージカル「龍の子太郎」に用いる歌をつくり表現する楽しさを味わうことができる。 | 1. ストーリーを知り、ためしに演じる。――1時間 |
| 2. 旋律の反復・表情のちがう旋律の組み合わせを用いて歌をつくり、速度・強弱・唱法を工夫して歌うことができる。 | 2. 歌をつくり、歌い、演じる。――8時間
(1) 第6場面の歌をつくり、歌い、演じる。――④
(2) 選択した場面の歌をつくり、歌い、演じる。
----- 本時2/4④ |

本時の目標

3. 発表会をする。――1時間

- 選択した場面の気持ちやようすがよくあらわれたものとなるように、第6場面で学んだ強弱・速度・唱法という観点を用いて歌い方や動きを工夫しあらわすことができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは第6場面で学んだ歌をつくる方法を用いて、選択した場面の歌をつくっている。本時では、もっと気持ちやようすがよくあらわれるように歌い方や動きを工夫しあらわすことができるようにしたい。そのために、つかむ段階では第6場面であらわした表現主題と選択した場面の表現主題のちがいを話し合わせ明確にさせる。さらに、第6場面で歌い方や動きの工夫をどのようにしたか話し合わせ、強弱・速度・唱法という観点を確認して表現への見通しをもたせる。あらわす段階では、チェックカードで強弱・速度・唱法についてどのようにするか明確にした上で歌い方や動きを工夫させる。味わう段階では、代表班の表現を鑑賞し、つくりあげた喜びを味わわせる。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時学習を想起し、本時学習のめあてを話し合う。 (1) 第6場面と選択した場面の相違点と共通点を話し合う。 ○ 表現主題が異なっていること。 ・太郎の反省・決意する気持ちのみでなく、雪女や黒鬼村人の気持ちやようすをあらわす歌であること。 ○ 表現する方法は同じであること。 ・速度・強弱・唱法について工夫していくと、気持ちをよくあらわした表現となること。 ※ 第6場面と選択した場面を比較することにより、表現主題は異なるが、それをよくあらわすための歌い方の工夫の観点は同じであることに気づかせる。	○ 第6場面は太郎の反省と決意の気持ちをあらわしていたけれど、今度は人々が収穫を願う歌をつくるんだったな。 ○ 気持ちをよくあらわすには、強弱や速度、唱法について工夫するとよかったな。
気持ちやようすがもっとあらわれるように、第6場面で学んだ方法をつかって、 歌い方や動きを工夫してあらわそう。	
2. 自分たちのめあてにそって表現を工夫しつくりあげる。 (1) チェックカードをもとに工夫点について話し合う。 ○ 表現の見通しをもつこと。 ※ チェックカードの速度・強弱・唱法という工夫の観点をもとに、表現をどのようにしたらよいか見通しをもたせる。 (2) 自分たちのめあてにそって表現を見直しつくりあげる。 ○ 強弱を変化させること 表現の工夫例 ・みんなでねがおうよのところをだんだん強くすると、願っているようすがわかる。 ・みんなでねがおうよのところを、大きく動いて強調しよう。 ○ 速度を変化させること ・「大きなみのりの日がくることを」をだんだんゆっくりすると、実りを願っている気持ちがよくわかるな。 ○ 唱法を工夫すること ・全体的になめらかに歌うと人々が切実に願っている気持ちがわかるな。 ※ 表現をつくりあげる際に歌い方や動きの参考とできるように、既製のミュージカルビデオを鑑賞できるような場を設定しておく。 あることがわかるな。	○ みんなでねがうというところを強くしたり、その前をゆったり少し弱く歌うと、気持ちがよくあらわれるのではないかな 
3. 代表班の表現を鑑賞し、話し合う。 ○ つくりあげた喜びを味わうこと。 ※ 代表班の表現をみて、つくりあげた喜びを味わわせる。	○ ビデオをみると、速度の変化のさせかたも様々 ○ 今度は協力班に表現をみてもらって本当に感動を伝えられるものとしよう。

単 元 水溶液の性質を調べよう

指 導 観

- 本単元のねらいは、水溶液の持つ働きと水溶液の性質や質的な変化との関係を自分なりに意味付けできるようにすることである。具体的には、指示薬を用いて水溶液を酸性・アルカリ性・中性に類別することができること、水溶液には気体が溶けているものがあること、性質の違う水溶液を混ぜ合わせると別のものができること、水溶液の中には金属を変化させるものがあること、などである。これらの学習を通して、水溶液に溶けている目に見えないものの質的な変化についての見方や考え方を養い、日常生活にみられる水溶液を見直していく態度を育てることができる。
- 本学級の子供たちは、食塩や砂糖、ホウ酸等の固体を水に溶かしたときの物の質や量の保存については調べてきている。また、いろいろな水溶液の働きによって生活の中での用途が使い分けられていることには気付いている。しかし、その働きが水溶液に溶けている物やその性質の違いによって起こることは意識しておらず、自分から進んで生活の中での自然事象の働きを支えるきまりを見いだそうとする態度は十分には育っていない。
- 本単元の指導にあたっては、生活の中でのいろいろな水溶液の性質やその変化の様子を確かめ自分なりに意味付けができるようにさせたい。そのために、「つかむ」段階では、生活場面で使われているいろいろな水溶液の働きを調べ、「容器から取り出したときの水溶液を見分けるにはどうすればよいか」という問いをもたせたい。次に「調べる」段階では、水溶液の性質、水溶液に溶けている物、水溶液が物を溶かす性質、水溶液を混ぜたときに起こる物の質的な変化を自分なりの方法や順序で調べさせ、自分なりに水溶液の見分け方ができるようにしたい。「広げる」段階では、いろいろな水溶液を見分けていくことで、学習したことを自分なりに適用できるようにさせたい。

目 標

計 画 (約10時間)

- | | |
|---|--|
| 1. いろいろな水溶液の持つ働きを調べる活動を通して、自分が学習したことの効力感や有用感を味わうことができる。 | 1. 生活の中での水溶液の働きを調べる 2時間
(1) 水溶液の働きを確かめる—————①
(2) 水溶液の液性や成分を確かめる—————① |
| 2. いろいろな水溶液の性質や他の水溶液と混ぜたり金属と触れたりした時の質的な変化について調べることができる。 | 2. 水溶液の性質を調べる—————6時間
(1) 水溶液の性質について…(本時3/4)…④
(2) 混ぜ合わせたときの性質について…② |
| | 3. いろいろな水溶液を見分ける———— 2時間 |

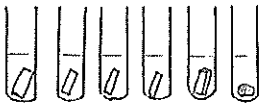
本時の目標

- 水溶液の液性、水溶液に溶けている物、水溶液の成分の性質などを調べながら、いろいろな水溶液の見分け方を自分なりの方法で確かめていくことができる。

本時学習の考え方

前時までに子供たちは、身の回りにある水溶液の見分け方について自分なりの方法で調べている。そして、まだよく見分けられないことから他の方法も必要なことに気づき、友達のを参考にしながらかける計画をたてている。そこで、本時は計画に従って水溶液の性質を調べさせ、より確かな見分け方ができるようにしたい。そのために、まず、実験ノートで自分が調べていく方法を確認させ、めあてをはっきりとさせる。次に、自分なりの実験方法で実験を行わせ、その結果をノートに記録させることで、自分なりの水溶液の見分け方のいいところをまとめさせたい。最後に結果の交流を行うことによりいろいろな方法を用いるとより確かに水溶液が見分けられることに気付かせたい。

準備 前時に書いた実験計画書、液性を調べる指示薬、子供が考えた実験器具
学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 本時の自分のめあてや調べる方法を実験ノートで確かめる。 ○ 前時に調べて交流したことをもとに、さらに水溶液の性質について調べていくこと ・ いろいろな水溶液の液性について ・ 水溶液に溶けている物について ・ 水溶液に溶けている物の働きについて ※ 自分の実験ノートや同じことを調べている友達の実験ノートなどで確かめさせる。 めあて いろいろな水溶液を見分けるために水溶液の性質をもっとくわしく調べよう。 2. 自分の計画にしたがって、水溶液の性質を調べる。 ○ いろいろな水溶液の液性について ・ リトマス試験紙を使って調べる。 ・ B T B 溶液を使って調べる。 →水溶液には酸性、アルカリ性、中性のいずれかに分かれる ※ リトマス紙やB T B 溶液の調べ方については、資料を掲示し参考にさせる。 ○ 水溶液に溶けている物について ・ 水溶液を蒸発させて溶けている物を取り出す。 (例)  →溶けている物が出てくる物と出てこない物があること ※ 水を蒸発させて溶けている物が取り出せる物と取り出せない物があることに着目させる。 ○ 水溶液に溶けている物の働きについて ・ 塩酸や水酸化ナトリウム水溶液でいろいろな物を溶かす (例)  →水溶液によって、溶ける物が違うこと。 ※ 溶かすと危険な物がないように事前に確認しておく。 3. 調べた結果をもとに、水溶液の見分け方について話し合う。 ○ 調べた結果と水溶液の性質の関係について ・ 水溶液は酸性、アルカリ性、中性に分けるとよい。 ・ 溶けている物が固体か気体かを確かめるとよい。 ・ 水溶液に溶けている成分の性質を確かめるとよい。 →方法を組み合わせるとより確かに見分けることができる。	○ 前の時間の見分け方だけでは、はっきりと見分けられないな。 ○ もっと別の見分け方で調べてみよう。 ○ 酸性、アルカリ性であるけど、リトマス試験紙やB T B 溶液を使うとはっきり分かるかな。 ○ 溶けている物が何か分かれば水溶液を見分けることができるはずだ。 ○ 水溶液なのに溶けている物が出てこないのは、気体が溶けているからだろう。 ○ 塩酸も水酸化ナトリウム水溶液も、どちらも物を溶かすけど、物によっては溶けたり溶けなかったりするぞ。 ○ 前の時間に調べたことや友達が調べたことを合わせると、水溶液がずいぶん見分けられるようになったぞ

単 元 文化サークルをつくろう（室町文化）

指 導 観

- 本単元のねらいは、室町時代の代表的な文化が派生・普及した原因を調べることを通して、我が国の歴史や伝統を大切にすることを高めることである。ここでは、将軍の後継者争いから戦乱が起き、人人は大飢饉、火災、伝染病など生と死とが隣り合わせた荒廃の日々を送っていたこと、その中であって、今日にまでも受け継がれている文化が発生したことを追究させる。室町時代の文化がつくり出されていく背景を子供たちに追究させることは、当時の人々の生き方をこれからの自分の生き方に生かしていこうとする上で意義がある。
- 本学級の子供たちは、茶の湯、生け花、連歌、書画などに接したことがあり、自分の身近な人の中で実際に行っている人もいる。そのため、それらの文化を身近に感じ、興味・関心を抱いている子供も多い。しかし、それらの文化が室町時代に派生し、今日までも受け継がれていることには気付いていない。
- 本単元の指導にあったっては、当時の文化に接し、それらの文化が派生・普及した時代背景や人々の願いを明らかにしていくために、文化サークルづくりの活動を展開する。まず、室町文化を探究する計画を立てるために、室町文化の体験と時代の様子を概括する。そのことで、文化が戦乱の世に生まれたことに驚きをもたせる。次に、戦乱と掛け離れている能楽を取り上げ、それが生まれた背景を意欲的に追究するために、能楽についての自分のこだわりを設定し、そのこだわりに意味付けさせる。そして、自分のこだわりをよりよくするために、自分のこだわりを提案説明する交流場面を設定し、戦乱の世に生きた人々の願いを明らかにしていく。さらに、他の文化事象の背景も追究させ、その共通性を調べさせる。最後に、学習の中で培った文化の精神を他の人々に広げるために、文化サークルを開催し、効力感や有能感を味わわせる。

目 標

計 画（約7時間）

- | | |
|--|--|
| 1. 室町時代の文化を調べを通して、その文化がもつよさに触れるとともに、我が国の歴史や伝統を大切にすることを高める。 | 1. 室町文化を体験し、課題を設定する。—2時間 |
| 2. 室町時代に起こった文化を体験し、その文化が派生した原因を意味付けることで、戦乱の世に生きた人々の願いを考えることができる。 | 2. 能楽の普及の原因を明らかにする。—3時間
(1) 原因を調べ、意味付けする。————— ②
(2) 意味付けした原因を吟味する。(本時)— ① |
| | 3. 他の文化を追究し、文化サークルを開催する。—————2時間 |

本時の目標

○宗教、戦乱の世、民衆の力といった面から能楽が普及した原因を提案説明し、情報カードによって交流していくことで、心の荒廃を乗り越えるために能楽文化が普及したことを考えることができる。

本時指導の考え方

子供たちは、能楽が室町時代に広まった原因について、自分の体験や時代背景をもとに意味付けをしている。そこで本時は、自分なりに意味付けした原因を紹介し、能楽文化に根差す精神や当時の人々の生き方を明らかにすることがねらいである。そこでまず、自分が意味付けしたきた能楽の精神を紹介する。そして、体験したことや時代背景から獲た意味付けの仕方をよりよくする吟味活動を設定する。ここでは、情報カードによる意見の交換を行う交流の場を設定する。そのことで、戦乱の世に生きた人々の願いや文化を生み出した精神を明らかにして生きたい。最後には、明らかになった原因が他の文化にも存在するのかを考えさせ、次時の活動の内容と方法を明らかにしていきたい。

活 動 と 内 容	自分らしさを実感する過程			
1. 本時学習のめあてを確認する。 ○ 能楽が広まった原因を話し合うというめあての把握 —くめあて— 自分の考えを紹介し、この時代に能楽が広まった原因を明らかにしよう 2. 各班の能楽が広まった原因の意味付けを吟味する。 (1) 能楽が広まった原因を班毎に提案説明する。 ○ 能楽が広まった原因とその根拠 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><tr><td style="width: 33%; vertical-align: top;"> ・ 禅宗の教養や教え 質素な中に美しさを 求める考えがある。 禅宗の教養がもては やされていた時代であ り、自分の体験と兼ね 合わせて意味付ける。 </td><td style="width: 33%; vertical-align: top;"> ・ 戦乱の世から 室町時代が、不安定 な時代であり、常に戦 いが行われていたとい う事実から、意味付け ている。安定した生活 が送れるようにしてい きたい。 </td><td style="width: 33%; vertical-align: top;"> ・ 民衆の力が高まっ たから。 戦乱の世の中であり、 自分たちで自分たちを 守ることが必要である。 民衆が力を合わせる 中で広まっていった。 </td></tr></table> ※ 興味や関心がある班の発表に対しては、質問や意見を行わせるとともに、情報カードを提案説明した班に渡すことで、交流の活性化を図る。また、交流後に自分の体験との共通性を意識させておく。 (2) 能楽が広まった原因について吟味する。 ○ 原因のとらえ方や根拠の吟味と意見交換 ・ 友達の考え方を取り入れた自分の意味付けの強化。 ・ 友達の考えを取り入れた自分の考えの付加・修正。 ※ 情報カードをもとに、自分の考えのよさや不十分さを明らかにしながら、自分の考えを吟味していく。 ※ 情報カードを書いた相手に、直接考えを聞くことで、自分の考えに取り入れる内容を取捨していく。 3. 能楽の発生した原因を再度意味付けする。 ○ 友達の考えを取り入れた原因の意味付け ・ 苦しい時代であったにもかかわらず、素晴らしい文化が発生したのは、当時の人々が心の支えを求めていたからだ。それは、禅宗の教えや生と死が隣り合った時代の様子にも通じる。 ・ 戦乱の世ということは、生と死が隣り合った時代ということである。安定した生活は、心の休まることでもある。 ○ 能楽が派生・普及した原因と他の文化の原因との比較 ・ 他の文化も同じではないか。 ・ 他の文化についても調べてみたい。	・ 禅宗の教養や教え 質素な中に美しさを 求める考えがある。 禅宗の教養がもては やされていた時代であ り、自分の体験と兼ね 合わせて意味付ける。	・ 戦乱の世から 室町時代が、不安定 な時代であり、常に戦 いが行われていたとい う事実から、意味付け ている。安定した生活 が送れるようにしてい きたい。	・ 民衆の力が高まっ たから。 戦乱の世の中であり、 自分たちで自分たちを 守ることが必要である。 民衆が力を合わせる 中で広まっていった。	○ どうして能楽が広まったのだろうか。 ○ 友達とは、どんな考えをしているのだろうか。 ○ 禅宗の教えとは、どんな考え方をするのだろうか。 ○ 戦乱の世の中であるからこそ、死を覚悟していなければならない。そうすると、生と死が隣り合った時代の考え方と同じである。 ○ 禅宗の考え方は、質素の中にも美しさを求めることなので、見掛けだけでは分からない心の問題を当時の人々が求めていたと考える。 ○ 友達の情報カードだけでははっきりしないので、直接カードを書いた友達に聞いてみよう。 ○ 他の文化も能楽が派生・普及した原因と同じだろうか。もっと調べてみよう。
・ 禅宗の教養や教え 質素な中に美しさを 求める考えがある。 禅宗の教養がもては やされていた時代であ り、自分の体験と兼ね 合わせて意味付ける。	・ 戦乱の世から 室町時代が、不安定 な時代であり、常に戦 いが行われていたとい う事実から、意味付け ている。安定した生活 が送れるようにしてい きたい。	・ 民衆の力が高まっ たから。 戦乱の世の中であり、 自分たちで自分たちを 守ることが必要である。 民衆が力を合わせる 中で広まっていった。		

題 材 「ころころらんど」をつくろう (10までの数)

指 導 観

- 本題材は、精神年齢3歳から6歳程度の子供たちで構成されている。給食の配膳など日常生活における係の仕事や、砂場でおかしをたくさん作ったり、積み木をいくつも並べたりする遊びを通して数を意識してきている。また、「積み木を○個持ってきて。」などの問いかけに応え、5までの集合数であれば必要な数を数えて持ってくる姿がみられるようになってきている。
- 本題材のねらいは、①ボールがどんどころころるような「ころころらんど」を作ろうとする意欲を持ちながら、繰り返し積み木を取り出したり、はしに積み木をはめ込んでボールをころがしてみたりするなど、楽しく数を操作しようとする態度、②10までの積み木(数対象)を、数字や半具体物をもとに「いち、に」などと言いながら数えること、③10個までの積み木が必要なはしをつくるために、既にはめ込んである積み木を数え、「あと○個足りないな。」などと言いながら、必要な残りの積み木を取り出すことなどである。このことは楽しい具体的な操作を通し、量感を伴いながら数概念を獲得させていく上で意義深い。
- 本題材の支援は、①活動への興味や関心を高めながら、必然的に数の操作に取り組ませるために、いくつかのはしで構成された傾斜のあるコースの上を、ボールがうまく転がるように積み木を並べてはしを作っていくという、「ころころらんど」づくりの活動を設定する、②具体物を取り出す操作を繰り返させるために、個に応じて数対象と数詞、数字を合わせたり、数を構成させたりできる活動を構成する、等である。

計 画 (約5時間)

	1時間	3時間 (本時3 / 3)			1時間
活 動	ころころらんどづくりについて話し合う。	(1) ボールの通り道に5までの積み木を使うはしがあるころころらんどをつくる。	(2) ボールの通り道に7までの積み木を使うはしがあるころころらんどをつくる。	(3) ボールの通り道に10までの積み木を使うはしがあるころころらんどをつくる。	ころころらんどで楽しく遊ぶ。
内 容	・遊び方の見通しと個に応じた操作の理解	A G : 数対象と数詞や数字の結び付き B C G : 数の構成の理解を促すカード			・ころころらんどを作りあげた有用感

目 標

- 自分から操作を繰り返し意欲的に「ころころらんど」づくりをすることができる。
- 数字や数詞と数対象を結び付けたり、数を構成したりして、はしを作るのに必要な数の積み木を取り出すことができる。

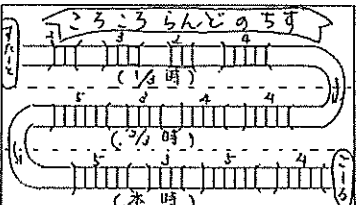
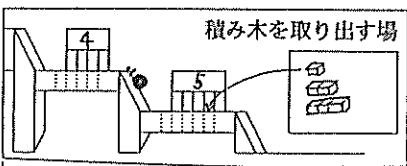
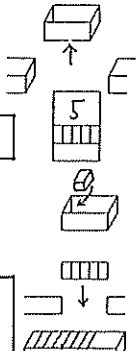
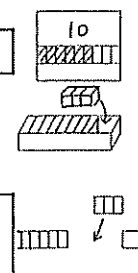
本時学習の目標 (※Gはグループを表す)

- ころころらんどのはしを作るために、自分で意欲的に積み木を数えて取りだしている。
- A G : 5までの積み木を、半具体物や数字をもとに「いち、に」と言いながら取りだしている。
- B G : 10までの積み木を、半具体物や数字をもとに「いち、に」と言いながら取りだしている。
- C G : 「いくつ足りないかな。」と言いながら積み木を取り出し、10までの数を構成している。

本時学習の支援 (※具体的な支援の内容は個の活動を促す支援を参照)

- I. 「ころころらんど」づくりの意欲を引き出す支援 : ①活動の仕方をとらえることのできる前時のころころらんどの提示・教師のモデル演示②活動への動機を高める「ころころらんど」の場・地図
- II. 積み木を取り出す操作を促す支援 : ①A G・B Gへの数対象と数詞や数字の結び付きを促す場、数字・半具体物カードの提示、②C Gへの数の構成の理解を促す場、数字・半具体物カードの提示

学習指導の過程

活 動 の 姿 と 内 容	個 の 活 動 を 促 す 支 援
1 「ころころらんど」をつくって遊んだことを想起し、めあてを話し合う。 (1) 積み木を数えながらはしを作り、ボールをころがして遊んだことを想起し話し合う。 ○ 前時学習の想起 めあて ボールがどんだんころがるように、ころころらんどをつくってあそぼう。 (2) 「ころころらんど」づくりの仕方を聞く。 ○ 手順と方法の把握 ①ボールが通らない部分のはしを取りだす。 ②数字カードなどをみて、必要な数の積み木を考え、積み木を取り出し、はしをつくる。 ③ボールをころがして遊び、地図にまとめる。 2 「ころころらんど」をつくる。 Aグループ Bグループ Cグループ (1) はしをつくるのに必要な積み木の数を数える。 ○ 必要な積み木の数の予想 数字を見て、「ご。」と言ひ、半具体物を数える。  数字を見て、「じゅう。」と言ひ、半具体物を数える。  はめてある積み木の数を数え、残りを半具体物をもとに数える。  (2) 積み木を取り出し、はしを作る。 ○ 自分の考えの確かめ 「いち、に、」と言ひながら数  「いち、に、」と言ひながら数  半具体物に合  (3) ボールをころがして遊び、 ○ 自分の考えの見直し 地図に半具体物カードを位置付ける。 3 できあがった「ころころらんど」を紹介する。 ○ 出来上がった「ころころらんど」の地図の紹介 ○ 友達の間と比べながらの遊び	I 「ころころらんど」づくりの意欲を引き出す支援 ○ 前時のころころらんどの紹介 ○ 教師のモデル演示 ○ 「ころころらんど」の地図  ○ 「ころころらんど」の場  II 積み木を取り出す支援 A B G : 積み木のない部分のはしを取り出す。 数字・半具体物カード ↓ 積み木を取り出す場 ↓ 半具体物カードの地図への位置付け  C G : 積み木の不足したはしを取り出す。 数字・半具体物カード ↓ 積み木を取り出す場 ↓ 半具体物カードの地図への位置付け  ○ 一人一人のころころらんどへの賞賛

題材 なぞなぞえほんをつくろう (よみましょう)

指導観

- 精神年齢2歳から4歳程度の子供たちで構成されている。理解できる語彙が少しずつ増えてきたことから、「もの」あて遊びに関心をよせてきている。また、平仮名にも興味をもちはじめ、絵本を図書室から借りてきては、さかんに読み聞かせようとする姿も見え始めてきている。生活語彙の実態は、音声と名詞は結びつくが、物の用途や特徴と名詞はなかなか結びつかないことが多い。
- 本題材のねらいは、①身かな動物や乗り物の特徴に関心をもち、意欲的に読もうとする態度、②個に応じて書かれた事柄を読み取り、写真・絵で表された名詞と結びつけること、③できあがったなぞなぞ絵本を、母親に意欲的に説明すること、などを養うことである。このことは、日常生活の中で、絵本を読もうとする態度を引き出し、読書活動を活性化の上で意義深い。
- 本題材の支援は、①子供たちが関心を寄せているあてっこ遊びの良さがいきるなぞなぞ遊びで活動を構成する、②なぞなぞを解く為に、三語文による意味理解とシルエットカード・二語文による意味理解と絵カード・動作模倣による意味理解と写真カードを個に応じて準備する、③場面の様子や名詞の音節数で動物や乗り物の特徴がわかる絵本を置き、事柄カードと名詞を位置づける。

計画(約4時間)※数字は単位時間数を表す。

	であう ①	つ くる ②	まとめる ③
活	1. シルエットスクリーンで動物や乗り物に出合い動作化した音声を化する。	2. 意欲的になぞなぞ絵本づくりをする。 (本時)	3. できあがったなぞなぞ絵本をお母さんに発表する。
動		(1) 動物のテレビを見る→事柄カードを選ぶ→名詞と結び→絵本に位置づける→友達になぞなぞを発表する。	(2) 乗り物のテレビを見る→事柄カードを選ぶ→名詞と結び→絵本に位置づける→友達になぞなぞを発表する。
内容	・絵本づくりへの関心	・動物の形態(首・鼻・口)や鳴き声と名詞の結びつけ	・乗り物の用途(空・海・道)や音と名詞の結びつけ

目 標

1. 身近な動物や乗り物あてに関心をもち、楽しくなぞなぞ絵本づくりをしている。
 2. 動物の形態や鳴き声・乗り物の用途や音が書いてある事柄カードを読み語彙を確かめている。
- 本時の目標(※Gはグループを表す。)

- ぞう・きりん・さる・うさぎなどの動物について書いた事柄カードを意欲的に読み、なぞなぞを解き、絵本に位置づけようとしている。

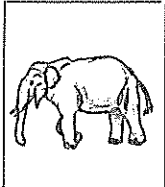
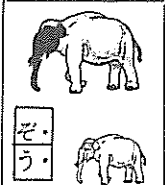
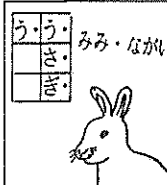
A G : 動物の形態で特徴ある部分の写真やランゲージカードから流れる鳴き声から動物を探している

B G : 「はな・ながい」という二語文と絵カードで表した事柄カードを読んで動物を探している。

C G : 「くびがながい」という三語文とシルエットカードで表した事柄カードで動物を探している。

本時学習の支援(※具体的な支援の内容は、個の活動を促す支援を参照)

- I. なぞなぞ絵本づくりの動機を高める支援 なぞなぞ絵本づくりを楽しみにしている母親の声・本時出てくる動物のビデオ・シルエットスクリーンによる動物の投影。
- II. 個に応じたなぞなぞ絵本づくりへの支援 A G : 発音が不明瞭で文字読みが難しいために意味理解がスムーズでない児童には、鼻に視点を当てた写真とランゲージカードによる鳴き声の提示や動きの特徴を表す動作模倣による支援。 B G : 文字読みがある程度できてきた児童には、「みみ・ながい」という二語文と耳に視点を当てた絵による支援。 つまづいた場合は、動物の動きや鳴き声をモデル提示する支援。 C G : 文読みがある程度できてきた児童には、「くちがおおきい」という三語文と口に視点を当てたシルエットカード(裏には絵カードが貼っている)による支援。

活 動 の 姿 と 内 容	個 の 活 動 を 促 す 支 援
1. 本時なぞなぞ絵本づくりについて話し合う。 (1) 前時学習を想起する。 ○シルエットスクリーンに出てきた、動物や乗り物の当てっこをしたこと (2) 本時なぞなぞ絵本づくりについて知る。 ○なぞなぞ絵本づくりの手順と方法 ①事柄カードを選んで読む。②名詞や絵カードを取る。③事柄カード・名詞・絵カードを絵本に貼る。 めあて なぞなぞどうぶつえほんを、つくろう	I なぞなぞ絵本づくりの動機を高める支援 ○「一緒になぞなぞ絵本で遊ぼうね。」となげかけている母親の声のたより ○動物園で遊んでいる動物のビデオ ○シルエットスクリーンに投影された動物の形態（大きな鼻・大きな耳・長い首等） ○個に応じて試しの活動をする。 A G : 教師と一緒に B G : 教師の言語援助で C G : できるだけ一人で 
2. 楽しくなぞなぞ絵本をつくる。 (1) 事柄カードを選んで読む。 A G  B G みみ・ながい  C G くび・が・ながい 	II なぞなぞ絵本づくりへの支援 ○動物のイメージ化 A G : 動物の特徴的な形態の一部を拡大した写真とランゲージカードから流れる鳴き声さらには、動きの特徴を表す動作模倣により動物のイメージ化 B G : 「て・ながい」という二語文と動物の特徴的な形態の一部を拡大した絵、つまづいた場合は、教師の動物の鳴き声「ワンワンニャーオ」等を伴った動物の動きのモデル演示により動物のイメージ化 C G : 「つのがおおきい」という三語文と動物の特徴的な形態の一部を拡大したシルエットカード（裏には、絵カードを貼付）による動物のイメージ化
(2) 事柄カードに合う名詞や絵カードを選ぶ。  う・ さ・ ぎ・ き・ り・ ん・	○絵本への位置づけ A G : 絵本に書かれた語句・音節数 動物の特徴的な形態の一部分を切り抜いた写真 B G : 絵本に書かれた語頭の文字、音節数 C G : 語の推測、音節数
(3) 事柄カード・名詞・絵カードを絵本に貼る  う・う・ さ・ ぎ・  く・ き・ り・ ん・  ※(1)～(3)の活動に繰り返し取り組ませる。 3. できあがったなぞなぞ絵本を友達に発表する ○できあがったなぞなぞ絵本の紹介と、事柄カードと名詞や絵カードとの答えの見直し ※事柄カードを読ませ、名詞や絵カードとの答えを確かめさせる。	○絵本づくりへの賞賛と励まし ○発表の仕方に対する賞賛と励まし ○次のなぞなぞ絵本づくり（乗り物編）に対する意欲づけ

単元 たなばたかいの劇をしよう「天の川の大ぼうけん」

指導観

- 精神年齢3歳から5歳程度で構成されている。これまでの学校生活の経験の中で行事への見通しをもち、ある程度、継続的で目的的な活動もできつつある。また、高学年として、自分たちが中心となって行事を運営しようという意識をもっている。さらに、人前で自発的に色々な表現をすることが好きである。言葉に関しては、視覚が優位な子供、聴覚が優位な子供がいる。
- 本単元のねらいは、自分なりの表現を生かして、友達と協力しながら劇作りができるようにすることである。具体的には、①目的意識をもって、友達と意欲的に劇作りに取り組むこと、②せりふや動きを工夫した自分なりの表現で自分の役を演じること、③文字を読んだり音声言語を聞いたりしてその意味を理解すること、である。このことは、①自発的な活動を自主的な活動へと高める、②生活へのめあてや見通しがもてる、③友達と協力する経験ができるなど、表現力、集団参加の力、意志交換の力といった生活力の基礎を培う上でも意義深いと考える。
- 本単元の支援は、①子供たちが目的意識をもって表現しようという意欲をもてる場を設定する、②子供が自分のよさを生かせるような、配役や学習方法などを自由に自己選択できる場を設定する、③変化と繰り返しのある、子供が興味をもって演じることができるストーリーの提示、である。

単元計画（約14時間）

七夕会について話し合う。 (1時間)	案内状を作る。(1時間)			
	1時間	2時間	3時間(本時2/3:下線部分)	1時間
劇を作る。(7時間)	活動と内容	1. お話に出会い劇作りについて話し合う。 ○大きな声で発声すること	2. 台詞の練習をする。 ○大きな声で発声すること	3. 友達と協力して劇作りをする。 (1) お話の流れにそって大まかな動きを作る。 (2) 台詞をもとに各場面(動き)を自分なりに工夫する。 (3) 工夫した動きを生かして全体を通して演じる。 ○友達とのかかわり ○台詞と動きを結びつけること
	衣装を作る。(2時間)			4. 七夕会で劇の発表をする。 ○学習の成果の発表による効力感・有用感
七夕ごはんを作る。(3時間)	支援	・ストーリーのビデオ提示 ・発声のテープ録音	・台詞を読む、台詞を聞くを選択できる場・動きのモデル・映像による動き方のふりかえり・友達のビデオ	・発表の場の設定

目 標

1. 友達と協力して演じる楽しさや、劇を作りあげる楽しさを味わう。
2. 劇の流れにそって動いたり、台詞を言ったりして、自分なりに役を演じる。

本時の目標（※Gはグループを表す。）

- 台詞を読んだり聞いたりして、自分の役の動きを工夫して表現しようとする。

A G：台詞を聞きモデル演示を見て、身振りや動き方を工夫する。

B G：台詞を聞いて、友達とかかわりながら身振りや動き方を工夫する。

C G：台詞を読んで、友達とかかわりながら身振りや動き方を工夫する。

本時学習の支援（※ 具体的な支援の内容は、個の活動を促す支援を参照）

- I. 劇作りへの意欲を引き出す支援：①藤見学会会のビデオ、②七夕会の劇を楽しみにしているという友達のビデオ
- II. 表現を工夫するための支援：①台詞を読む・聞くが選べる場、②自分の好きな役を友達とかかわりながら演じられる場、③個に応じた動きのモデル演示や声かけ、④表現のよさに気付かせる声かけ（賞賛による快の感情の強化、「～したら、みんなによく分かるね。」という表現への意味付け）
- III. 友達とのかかわりを広げるための支援：①個に応じた友達とのかかわり方を広げる声かけ、②ビデオによる表現のふりかえり

活動の姿と内容	個の活動を促す支援						
1. 本時めあてについて話し合う。 (1) 藤見学芸会のビデオを視聴する。 ○ 劇作りへの意欲の喚起 (2) 友達の応援のビデオを視聴し、本時がんばることを話し合う。 ○ がんばることが分かること めあて みんなで ちからをあわせて たのしく げきをしよう。 (3) 教師のモデル演説を見て、学習の手順と方法を知る。 ○ 前時との練習の場の違いが分かること ①役を選ぶ→②グループごとに分かれて劇作りをする→③グループごとに発表する 2. 劇作りをする。 (1) グループに分かれて劇作りをする。 ○ 台詞と動きを結びつけた表現 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 50%;">王子様グループ</th><th style="width: 50%;">お姫様グループ</th></tr> <tr> <td style="text-align: center;">A G</td><td style="text-align: center;">B G</td></tr> <tr> <td>台詞を聞いた り教師のモデル 演説を見た りして動きを 作る。</td><td>台詞を聞いて 友達とかかわ りながら動き を作る。</td></tr> </table> ※ 子供が演じたい役を自由に選ばせ、グループ分けを行う。 (2) グループごとに発表し、もう一度劇作りをする。 ○ 友達と協力して表現すること ※ 随時表現を取り出し、個に応じた支援を行う。 3. 本時作り上げた劇を行い、学習のまとめをする。 ○ 劇への達成感・成就感を味わうこと ○ 次時学習への意欲	王子様グループ	お姫様グループ	A G	B G	台詞を聞いた り教師のモデル 演説を見た りして動きを 作る。	台詞を聞いて 友達とかかわ りながら動き を作る。	I. 劇作りへの意欲を引き出す支援 ○ ビデオ視聴による目的意識の明確化 ○ 身振りの仕方や動き方の観点が含まれた友達からの応援のビデオ 劇作りの場の図 ○ 身振りの仕方や動き方の観点を含んだ教師のモデル演説 II. 表現を工夫するための支援 ○ 2グループに分かれての劇作りの場 ○ 各グループごとの個に応じた支援 A G : 台詞の読み聞かせ、動きのモデル演説、動作援助 B G : 台詞を聞く場の設定 ・ランゲージマスター C G : 台詞を読む場の設定 ・拡大台本 ○ 個に応じた動きのモデル演説 ○ 表現のよさに気付かせるための声かけ ・賞賛 ・「～したから、みんなによく分かるね」という表現への意味付け III. 友達とのかかわりを広げるための支援 ○ お互いが演じるのを見合い賞賛できる場 ○ 友達とのかかわり方を広げる声かけ ・賞賛 ・「～したから～だね。」というかわり方への意味付け ○ ビデオによる表現の振り返り ○ 次時への意欲を高める声かけ
王子様グループ	お姫様グループ						
A G	B G						
台詞を聞いた り教師のモデル 演説を見た りして動きを 作る。	台詞を聞いて 友達とかかわ りながら動き を作る。						

○ 学習指導協議会（１日目）メモ No.1

○ 学習指導協議会（１日目）メモ No.2

全 体 会（1日目）

○ あいさつ

学 長 田 代 高 英
学校長 田 崎 徳 友

○ 主題発表

「生きる喜びを生み出す学習の創造」

——— 自分のよさを実感する表現活動の展開 ———

教頭 谷 口 慎 二

○ 教科等発表

- 楽しく読み深める低学年説明文の指導
ー 準体験化活動を取り入れた学習を通して ー

国語科部 佐々木 保 善

- ぼうけん遊びを通して運動の喜びを味わう基本の運動の指導

特殊教育体育科部 松 本 良 一

●基礎・基本を楽しく身に付ける帰国子女算数科学習指導

― 多様な学習実態に対応できる包括的な題材構成を通して ―

帰国子女教育算数科部 秋 穂 章

●未来社会に生きる子供を育てる社会科学習指導

― 個のこだわりが生きる活動を通して ―

社会科部 芋 生 修 一

○ あいさつ

副校長 楠 田 和 三

第二日目 午前の部

公開授業指導案

公開授業
第二日目 午前の部

単 元 小川をつくってあそぼう

指 導 観

- 本単元のねらいは、土や砂、水などで遊び、夏の身近な自然に親しむとともに、みんなで楽しい遊びを工夫することができるようにすることである。具体的には、①土や砂、水などに興味を持って遊ぶこと、②遊びの場や遊び方を工夫して楽しい遊びにすること、③土や砂、水の様子や自分の興味や能力に気付くこと、がおもな学習内容である。この学習を通して、①遊びや自分の活動を観察する力、②遊びの場や遊び方を診断する力、③遊びを工夫して楽しく改善する力、などを育てることができる。また、遊びを自ら作り上げた喜びや喜びを味わうことができる。
- 本学級の子供たちはこれまでに校庭や西公園で遊び、身近な自然との触れ合いを深めつつある。その中で草花や葉を使って飾りを作ったり笛を作ったりして遊ぶ姿が見られた。しかし、土や砂、水で泥んこになりながら遊んだ経験は少ない。さらにこれまでの遊び方を見ると、個人での遊びが主で、友達と協力し合って遊びを工夫することはできていない。また遊びを工夫しながら発展させて、自分が楽しい遊びを作り上げたという喜びを味わうまでは至っていない。
- 本単元の指導にあたっては、土や砂、水などを生かして遊ぶ中で、遊んで気付いたことをもとに遊びを改善させたり新しい発想を持たせたりして、工夫しながらより楽しい遊びを作り上げさせたい。そのために、まず土や砂の中を水が流れる場に出会わせて、自分がしたい遊びを決めさせる。ここでは、土や砂に着目した山やダム作り、水の流れる場に注目した川作りなどの遊びが予想される。次に、自分の決めた遊びで満足するまで遊ばせたい。ここでは気付きのカードを使って気付きを拾い上げたり、終末段階に遊びを紹介させ合って次時への新しい発想を持たせたりする。最後に、気付いたことを生かして遊びを改良したり、他のグループと交じり合って遊んだりさせる。この中で楽しい遊びを作り上げた自分に気づかせるとともに、楽しい遊びができた喜びを持たせたい。

目 標

計 画 (約7時間)

- | | |
|---|--|
| 1. 土や砂、水などを使って、友達と協力し合
って遊び、夏の身近な自然を楽しむことが
できる。 | 1. 水が流れる砂場と出会い、した
い遊びを決める ————— 1 時間 |
| 2. 土や砂、水などを生かして、工夫して楽し
く遊ぶことができる。 | 2. 山やダム作り、川作りなど自分
の決めた遊びで遊ぶ: — (本時2/2) — 2 時間 |
| | 3. 遊びを改良したり、他の遊びと
交じり合って遊んだりする ————— 4 時間 |

本時の目標

1. 前時の計画に基づいて、遊び場や遊び方を工夫して繰り返し楽しく遊ぶ。
2. 遊んで気づいたことを生かして、楽しく遊びを作りかえる発想を持つことができる。

本時指導の考え方

前時までには子供たちは、土や砂で山や川を作って遊んでいる。しかしまだ単純に土や砂、水に触れることに夢中で、水の流れや土や砂の性質に応じて遊んだり、約束ごとを工夫して遊んだりするまでにはなっていない。そこで本時では、土や砂、水の性質に気付いたり、気づいたことを生かして遊びの計画を立てたりすることをねらっている。そのためにまず、ノートに計画した遊びを発表させ、本時の遊びの見通しを持たせる。そして、自分の計画した遊びで精一杯遊ばせる。この遊びの中で見つけたひみつやじまんを気付きのカードに書かせ、お知らせコーナーに貼らせる。ここで気付きを拾い上げるとともに適時に賞賛をする。最後にノートに気付いたことを書かせ、気付きを紹介した後、友達遊びを体験し、自分が気づいたことや友達遊び方から次時の遊びの計画を立てさせる。

学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時の学習をふりかえり、本時のめあてについて話し合う。 ○ 本時したい遊び - 山やダムを作って遊びたい。 - 川を作って水を流したい。 - 水に舟を浮かべて遊びたい。そのため、カップをもってきたよ。 ※ 道具を紹介したり、使うまねをさせながら発表させる。 めあて けいかくした たのしい川あそびをしよう。 2. 自分やグループの計画に従って遊ぶ。 ○ 山やダム作り遊び - 土で堤防を作り、水をせき止める。 - 土や砂で山や団子を作る。 ○ 川作り遊び - 地面に溝を掘って水を流す。 - 曲がった川や真っすぐな川を作る。 ○ 浮かべる遊び - 笹舟を浮かべる。 - プリンなどのカップを浮かべる。	○大きなダムを作りたい。 ○ほくだけの川を作ろう。 ○よく浮かぶ船を作ろう。 ○土と砂の、どちらでダムを作ったらいかな。 ○低く掘った方が水が流れて来やすいのかな。 ○笹舟はどう作るのかな。
※ 自分の工夫点や発見をひみつやじまんのカードに書かせる。 ※ 子どもが貼ったお知らせ板のカードを見て、賞賛する。 3. 気付きや遊び方を交流し、次にしたいことを計画する。 (1) 気付いたことを発表したり、友達の遊びを体験したりする。 ○ 遊んで気付いたことの表現 - 砂で作った山はすぐ壊れる。 - ダムができたよ。 - 水は深く掘った方に流れてくる。 - 砂は水がしみこむ。 - 発砲スチロールの舟がよく浮く。 - 笹舟が作れたよ。 ※ 友達が気づいたことや遊び方を見に行かせる。 (2) 次時の計画を立てる。 - トンネルを作って水を流そう。 - 山に水を引こう。 - 木や箱で、川に橋や建物を作ろう。 - 湖や池を作ろう。 - 川のレース場を作って、舟の競争をさせたい。	○ 土のダムは砂より頑丈なことがわかったぞ。 ○ 水を引いて自分だけの川を作ったぞ。 ○ 今度は船の競争がしたいな。

単 元 チンパンジー物語をつくろう（「ことば」をおぼえたチンパンジー）

指 導 観

○ 本単元のねらいは、チンパンジーが図形文字をつかってことばを覚えていく経過を時間の順序や事柄の順序を追って読み進めていく中で、チンパンジーの知能、11種類の色を区別するようになったことに対して驚きをおぼえるとともに、ことば学習の過程について読み取っていくことである。

文章は、語りかけてくるような書きぶりになっていて、チンパンジーがことばを覚えていくことに対する筆者の感動が伝わってくる。したがって、筆者やチンパンジーのかかわりを想像させながら楽しく読み深めることができる。その中で、ことばの意味を広げたり深めたりする力が育つ。

○ 本学級の子供たちは、読書意欲は高まっている。しかし、興味のあるところ以外は、適当に読みとばしたり説明されている事柄の順序とそれぞれのつながりをとらえていなかったりして読み取りはけっして十分とは言えない。また、言葉の上の読み取りにとどまっていたり、自分の知識や経験とを結びつけて想像し、内容を実感をもって分かるという経験は少ない。

○ 本単元の指導にあたっては、導入では図形文字ゲームという記号体験をさせ、ことばを覚えるということは難しいのだということを分らせて本題材文と出会わせる。次に、チンパンジーがどのようにことばを覚えていったかということを物語風に書いて知らせようという活動目的を提案する。展開では、説明されている内容を既知の知識や経験とを結びつけて想像する準体験化活動をし、自分で納得したことを物語風に書いていく。終末では、作りあげた物語文を発表して、読み取ってきたことを表現できた達成感、成就感を味わわせていきたい。

目 標

計 画（約12時間）

- | | |
|--|---|
| 1. 自分の知識や経験と結びつけて内容を想像し
て読み深め、意欲的にチンパンジー物語に書く
ことができる。 | 1. 図形文字ゲームをする。—————1時間
2. 題材文に出会い、チンパンジー物語を
作るという活動目的と方法をつかむ。—1時間 |
| 2. 年齢や時間の経過を表す叙述やどんな手順で
ことばを教えられたのかという順序をおさえて
ことば学習の過程を読み取るができる。 | 3. チンパンジーのことば獲得の経過を読
み取り、物語として書く。—（本時4/8）—8時間
4. できあがった物語文を紹介する。——2時間 |

本時の目標

○ 物と図形文字とを一致させるという方法をくり返してチンパンジーに物の名前を教えたことを、筆者とチンパンジーとのやりとりを準体験化しながら実感的に読み取ることができる。

本時指導の考え方

子供たちは、前時までチンパンジー物語を作りながら、本時学習場面に関しては「教える」「おぼえる」について、ことば上の意味はとらえている。しかし、いったい教えるやおぼえるというのはこの場面において、どのようにすることなのかということについては実感をもって分かっていない。そこで、本時は、図形文字をつかって筆者がチンパンジーにどのようにして物の名前を教えていったかを読み深める。そのために、導入では、前時作っておいた自分の物語文を出させて比べることにより、書いていることは違っているが、教えるやおぼえるについてはやっぱりそのまま使っていることに気付かせる。展開では筆者とチンパンジーとのやりとりを観察させたり準体験化させたりして自分の知識や経験と結びつけながら想像させる。そのことによって、子供たちに、教えるとおぼえるの意味を実感をもって分からせることができる。終末では、物語ノートを付加・修正したりしてまとめる。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時作った物語を出し合い、本時のめあてについて話し合う。 (1) 前時作った物語文を出し合う。 まつざわさんは、チンパンジーに コップは <u>ふ</u>であらわし、手ぶろ は <u>○</u>と教えます。チンパンジーは コップを とおぼえます。 まつざわさんは、チンパンジ ーに手ぶろとコップというも のの名前を教えます。チンパン ジーは、それをおぼえます。 まつざわさんは、チンパンジ ーが図形文字をつかって、いつ もあそんでいるものの名前を教 えます。それで、おぼえます。 ○ <u>教えるを教える、おぼえるをおぼえる</u>としか使っていない ※ 読んでいて、教えるときの様子が分かるだろうかと問う。 (2) 本時のめあてについて話し合う。 ○ その場の様子を想像してやってみるとよく分かることへの 気づき。 めあて まつざわさんとチンパンジーのようすをそうぞうして、どの ようにしてものの名前を教えたのかはっきりさせよう。 2. チンパンジーに、図形文字を教える方法や様子を追究する。 (1) チンパンジーがことばをおぼえるまでの、筆者とチンパンジ ーとの関わりを観察したり準体験化したりする。 ○ 内容の具体的な想像。 ・ どのようにまつざわさんは、動いたのか。どんな語しかけをしたのか。チンパンジーは、どんなふうに動いたのか。 ※ 4人組を形成する。そのうち2人にチンパンジーと筆者と の関わりを準体験化させる。その時、他の2人にはそれを観 察させる。次に、準体験化する側と観察する側とを交代させる。 ※ 下記のことに注意して準体験化するように指示する。 ① チンパンジーは、まつざわさんが話している言葉を理解していないこと。② 記号の意味を理解していないこと。 (2) 観察したり準体験化したりして、分かったことを出し合う。 ○ 「教える」「おぼえる」の実感的な意味理解 期待する子どもの反応 教えるということは、記号と物とをいっしょに出して、何回も何回も見せることです。 おぼえるということは、いくつかの記号の中から、出された物にあう記号をさがして見せることだと思います。 じっさいやってみて、まつざわさんは、本当にねしんに教えているなあと思います。また、よく工夫して教えている なあと思います。チンパンジーもすぐねばり強いなあと思いました。 ※ 観察したときと準体験化したときとを比べて発表させる。 3. 自分の物語ノートを見直し、本時学習についての感想を書く。 ○ 自分の物語ノートへの付加・修正と学習のふりかえり。	○ みんなの物語は、それ それ違うよ。 ○ 教えるはやっぱり教え る、おぼえるはやっぱり おぼえるとしか書かれて いないぞ。 ○ いったすどうすること だろうか。 ○ 実際にやっていると、 まつざわさんやチンパン ジーがしたことが詳しく 想像できるようだね。 ○ 2人がやっているのを 見ていると、どんな様子 だったのか、まつざわさ んがチンパンジーにどん な話かけをしたのかに分 かったよ。 ○ 実際にやってみると、 まつざわさんの教えるとき の気持ちが分かるよ。 ○ 「教える」「おぼえ る」ということは、チン パンジーがどのようにし たのか実際に自分でやっ てみるとよく分かるよ。 教えるということは、ず いぶん大変なことだな。 ○ こんな勉強の仕方は、 おもしろいな。まつざわ さんもチンパンジーもす ごいな。

単 元 自分の体図かんを作ろう

指 導 観

- 本単元のねらいは、人の体のつくりを調べることを通して、感覚器官や運動器官の働きをとらえること、また、興味・関心をもって人の体の仕組みを調べる能力を育てることである。具体的には、①人の体には、目、耳、皮膚などがあり、それらには決まった働きがあること、②人が体を動かすことができるのは、骨や筋肉の働きによること、が主な内容である。これらの学習を通して、自分の体を構造的・機能的にとらえる見方や考え方を育てるばかりでなく、人の体のつくりの巧みさや不思議さを実感させることができ、自分の体を大切にすることを育てることができる。
- 本学級の子供たちは、目や耳の働きについて、物を見たり音を聞いたりすることができることを、あたりまえのこととしてとらえている。また、皮膚については体をおおって内部を守るものとして、骨や筋肉は体を動かすものとしてとらえている。しかし、これらの感覚器官や運動器官のつくりを詳しく観察したり、その働きを意識しながら確かめた経験はほとんどない。したがって、自分達の体を、構造的・機能的にとらえる見方や考え方、人の体はいろいろな器官が総合的に働いて生活体験を行っているという見方や考え方などは十分育っていないと言える。
- 本単元の指導にあたっては、生活体験を見直したり他の動物と比較したりする中で、自分の体の器官がどのように働いているのかを自分なりに意味付けできるようにさせたい。そのために、「つかむ」段階では、各器官の働きを制限して生活体験を行うことにより、追究の観点をつかませたい。次に、「調べる」段階では、自分なりの方法・順序で条件を整えて実験を行うことにより、それぞれの器官の仕組みをとらえさせたい。「広げる」段階では、体の器官の働きの共通性や差異性を調べていくことにより、体の各器官にはそれぞれの役割があり、それぞれ補い合いながら生活しやすいように働いていることに気付かせたい。

目 標

計 画（約13時間）

- | | |
|--|--|
| 1. 人の体のしくみや働きを調べることを通して自分の体を大切にすることや生物を愛護する態度を育てる。 | 1. 生活体験での体の働きを確かめる — 2時間 |
| 2. 感覚器官や運動器官について、自由に使えるときと使えない時を比較しながらその仕組みや働きを調べることができるようにする。 | 2. 色々な体の部分の働きを調べる — 8時間
(1) 調べる計画を立て、調べる — ④
(2) 調べたことの発表会をする — ②
(3) もっと調べたいことを調べる — ② |
| | 3. 色々な体の部分の働きの |

本時の目標

関係を調べる —————（本時2/3）— 3時間

- 体の各部分はそれぞれに独自の働きを持ち、お互いに補いあって生活しやすいように働いていることを調べることができるようにする。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、生活していくために体のいろいろな部分が働いていることをとらえ、その中で同じような働きをしている部分があることに気付いている。そこで、本時は自分なりに同じ働きをしているととらえた各部分の役割を調べるために、自分なりに書いた実験ノートの方法で条件を整えながら各部分の働きを比較実験していかせたい。この時、結果が思うようにでないときは教師が実験カードで提示した方法でも試させたい。その結果を実験ノートの書き込み話し合う中で、体の各部分にはそれぞれに独自の働きがあることをとらえることができるようにしたい。

学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. めあてを確認し、本時調る観点を実験ノートで確かめる。 (1) 本時のめあてを話し合う。 ○ 体の中で同じ働きをしている器官の関係を調べていくこと ※ 自分の体図鑑を見直し、同じ働きをした部分があったことを想起させる。 めあて 同じ働きをしている体の部分でも、それぞれ違った役目があるのか調べよう。 (2) 自分の問いをもとに、調べる観点を実験ノートで確かめる。 ○ 同じ働きをしている体の部分について調べていくこと ・人や物がある場所がわかること→目、耳 ・どんな物かわかること→目、耳、皮膚 ・温度がわかること→目、耳、皮膚 ・物の様子がわかること→目、皮膚 ※ 調べる手順として、まず自分で調べたいことについて自分が考えた方法で調べていくこと。そして、早く終わったり、結果がよくわからなかったりしたときは教師が提示した実験カードを参考に調べていけばよいことを知らせる。 2. 体のつくりや働きについて調べる。 ○ 同じ働きの中でのそれぞれの部分の役目について <予想される子供の実験方法> ・人や物がある場所がわかること →耳だけや目だけで音がでる物の場所を探す。 ・どんな物かわかること →音を聞くだけや触っただけで物を当てる。 ・温度がわかること →見ただけや触っただけで水、お湯を当てる。 ・物の様子がわかること →見ただけや触っただけで紙などの表面の様子を当てる。 ※ 実験方法は、子供が考えた方法でさせていくが、考えつかない子供や自分の方法で調べた子供については、実験カードを参考にしながら調べさせる。 3. 今日の学習でわかったことをカードに書き発表する。 ○ 体のいろいろな働きでのそれぞれの役目について 人の体は、体の各部分がお互いに助け合って生活しやすいように働いている。	○ 目も耳も人や物がある場所がわかるよ。 ○ 目も耳も皮膚もどんな物か確かめることができるよ ○ 目も耳も皮膚も温度を確かめることができるよ。 ○ 目も皮膚も物の様子がわかるよ。 ○ 目は見えるところにあるとすぐにわかるけど、隠れたところにある時は耳で音を聞いた方が分かりやすい ○ 見えない所にある物でも音や皮膚の感覚でわかる。 ○ 皮膚でさわった方がよくわかるけど、熱いのは危ないな。 ○ 見たり触ったりしただけではわからないようすがあるな。 ○ いろいろな体の部分の役割が働いて、私たちは生活できているんだな。

単 元 チャレンジマットで遊ぼう（基本の運動）

指 導 観

- 本単元のねらいは、マットや他の器械・器具との組合わせを通して高さや幅や器械・器具の特性を生かした場づくりの工夫、姿勢や速さなどの動きづくりの工夫が楽しくできるようにすることである。この運動を通して、①多様な動きや連続した動きへの見通しをもつこと、②自分に合った動きを創作・表現すること、③自ら場や動きを高めることなどができる。このことは、子供自らが主体的に環境に働きかけ、動きをつくる上で価値がある。
- 本学級の子供たちは、マットや他の器械・器具を使って場を構成しいろいろな方向や形態でころがる動きを体験してきている。しかし、自分たちで動きの見通しをもち、動きや運動環境を構成していく主体的な活動をする喜びを味わっていない。そのため、自分たちで姿勢の変化や動きの連続化、身体の操作の仕方によっていろいろな動きをつくり出そうとする態度はまだ育っていない。
- 本単元の指導にあたっては、日常生活では経験できない場の構成を工夫させ、意欲的に動きづくりをする活動に挑戦させたい。そのため、まず子供たちにマットを中心とした器械・器具を使って多様な動きに挑戦させることでチャレンジマットをつくっていろいろな動きに挑戦していこうという目的意識をもたせ、場づくりや動きづくりの学習の見通しをもたせる。そして、場づくりをしながら、自己評価や相互評価により動きを見直したり、友達の様子をとり入れたりしながら多様な動きに挑戦させていきたい。最後に、自分たちが考えた場で、友達に自慢できる動きを発表させ、できた喜びや協力した喜びなどの効力感・有用感を味わわせたい。

目 標

計 画（約7時間）

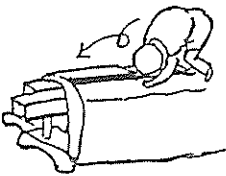
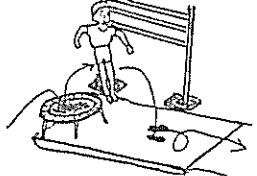
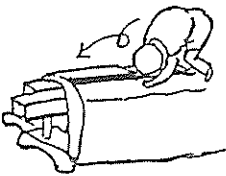
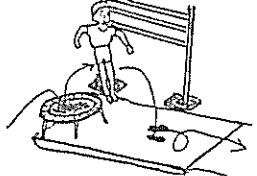
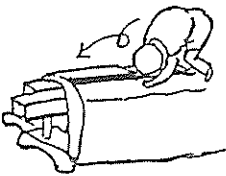
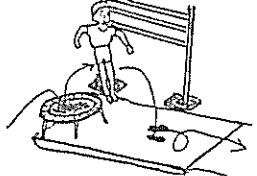
- | | |
|--|--|
| 1. マットなどを使った場や動きづくりに興味・関心をもち、意欲的に学習ができる。 | 1. マットや器械・器具との組合わせの場に出会い、見通しをもつ。（場づくり、動きづくり）—1時間 |
| 2. マットや他の器械・器具との組合わせを工夫して、自分ができる回り方や自分が考えた回り方で組み合わせたり、くり返したりしてマット遊びができる。 | 2. 場づくりや動きづくりをしながら、チャレンジマットで遊ぶ。—————5時間
(1) 場づくりを中心に……………②
(2) 動きづくりを中心に（本時2／3）……③ |
| 本時の目標 | 3. 発表会場を設定し、まとめる。—————1時間 |

- マットや他の器械・器具を使って自分たちがつくったチャレンジマットで動きを組み合わせたりくり返したりして、楽しくマット遊びができるようにする。

本時指導の考え方

子供たちは前時までに、マットと他の器械・器具を使って高さや幅などの条件を付加した組合わせの場で回ったり、走ったり、跳んだり、跳び越したりなどの動きでマット遊びをしている。本時ではさらに、マットと他の器械・器具とで構成した場に主体的にかかわっていきながら動きを高めていく活動を取り入れさせたい。そのため、まず初めにこれまで体験してきた動きを明らかにさせ、VTR視聴をもとにめあてを確認させる。そして、動きの追究過程の中でそれぞれの場でのVTR視聴により自分の動きを見直し、姿勢の変化や動きの回数・大きさ・高さ・速さ（合理性・表現性からの見直しの観点）に着目させ、自慢できる動きへ高まるように動きをより工夫させたい。また、自慢できる動きへ高めるために、ペアグループの見直し活動もとり入れていきたい。最後に、自慢できる動きを発表する場を設け、一人一人に効力感・有用感を味わわせたい。

準 備 跳び箱、マット、踏み切り板、三角パッド、スキップジョガー、場や動きの構成図、評価表、VTR など
学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程						
1. 前時までにつくりあげた動きでマット遊びを行い、本時学習のめあてを確認する。 (1) 前時でつくりあげた動きを想起し、本時マット遊びを行う。 ○ 本時挑戦する動きの確認 (2) VTRを視聴して話し合い、めあてを確認する。 ○ よい動きの確認と工夫点の明確化(合理性・表現性) 例 A 児 平均台を選択した子供 B 児 スキップジョガーを選択した子供 ・ まっすぐ回る。(姿勢の変化) ・ 高く跳ぶ。(高さ・大きさ) ・ 2回続けて回る。(回数) ・ 跳んで、すばやく前ころがりをする。(速さ) ※ チャレンジマットノートとVTRにより、動きの課題を明確にさせ、学習の見通しをもたせる。 めあて もっとくふうした動きでマット遊びをしよう。 2. マットと他の器械・器具を使って動きの創作活動をする。 (1) 動きの工夫をする。(合理性・表現性からの追究) ○ 動きの工夫点の付加 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="text-align: center;">マットと平均台</th><th style="text-align: center;">マットとスキップジョガー</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="vertical-align: top;"> ・ 落ちないようにひじをしめる。(姿勢の変化) ・ 体を丸める。(姿勢の変化) ・ 回数を増やす。(回数) ・ 速く回る。(速さ) </td><td style="vertical-align: top;"> ・ 手を使ってバランスを保つ。(姿勢の変化) ・ スキップジョガーの中央に足をつけて跳ぶ。(姿勢の変化) ・ 高く跳ぶ。(高さ・大きさ) ・ すばやく跳ぶ。(速さ) </td></tr> <tr> <td style="text-align: center;">  </td><td style="text-align: center;">  </td></tr> </tbody> </table> ※ VTR視聴やハンドマーク、フットマーク、ラインテープなどにより、工夫する観点に気づかせ、動きの見通しをさせる。 (2) ペアグループによる見直しをする。 ○ 合理性・表現性を意識した動きの見直し ※ チャレンジマットノートによる見直しをさせる。 3. 自慢できる動きを発表する。 ○ よい動きの発見と確認 ※ 互いのよさを認め合いながら発表させる。	マットと平均台	マットとスキップジョガー	・ 落ちないようにひじをしめる。(姿勢の変化) ・ 体を丸める。(姿勢の変化) ・ 回数を増やす。(回数) ・ 速く回る。(速さ)	・ 手を使ってバランスを保つ。(姿勢の変化) ・ スキップジョガーの中央に足をつけて跳ぶ。(姿勢の変化) ・ 高く跳ぶ。(高さ・大きさ) ・ すばやく跳ぶ。(速さ)			○ マットと踏み切り板、マットと平均台を使って前ころがりや後ころがりをしたぞ。 ○ まっすぐ回りたいたい。 ○ 続けて回りたいたい。 ○ VTRを見て動いたら体を丸めたり、わきをとじたりして回るとよいことがわかったぞ。 ○ ラインテープにそっていくとまっすぐ回れるようになったぞ。 ○ 友達から見てもらってもできたぞ。 ○ 今日もチャレンジマットでたくさん遊べたな。
マットと平均台	マットとスキップジョガー						
・ 落ちないようにひじをしめる。(姿勢の変化) ・ 体を丸める。(姿勢の変化) ・ 回数を増やす。(回数) ・ 速く回る。(速さ)	・ 手を使ってバランスを保つ。(姿勢の変化) ・ スキップジョガーの中央に足をつけて跳ぶ。(姿勢の変化) ・ 高く跳ぶ。(高さ・大きさ) ・ すばやく跳ぶ。(速さ)						
							

題材 「わたしの夢の町をつくろう」(1学年から4学年までの図形学習の内容を包括した題材)

小 題 材 三角形や四角形で夢の町の旗をつくろう。

指 導 観

○ 本学級の構成は5人であるが図形学習の実態は次のようになっている。S児およびO児は第3学年までの内容をほぼ学習、K児H児T児は在住国ではほとんど系統的に図形学習をしておらず、図形の構成要素(辺・角)に着目して図形の特徴をとらえたり、作図したりすることがまだ十分ではないそこで、この小題材では平行四辺形の学習内容にいたるまでの過程の違いによってS児・O児を『平行四辺形』、K児H児T児を『二等辺三角形』という2つの学習グループに分ける。

○ この小題材は、「夢の町づくり」という大きな目的の中で、三角形や四角形で夢の町の旗をつくる活動を通して二等辺三角形や平行四辺形などの基本的な図形の特徴をとらえたり、見方・考え方を深めたりすることが主なねらいである。具体的には、①辺の長さに着目して二等辺三角形や正三角形のをとらえたり、作図したりする、②辺の位置関係(垂直・平行)に着目して平行四辺形や台形をとらえたり、作図したりする、③角の意味や相等、大小関係をとらえたりすること、などの内容がある。これによって、図形に対して興味・関心を持たせるとともに、構成している要素や性質に着目していこうとする図形の見方を育てることができる。

○ 本題材の指導では、旗づくりという同じ目的を持ち、意欲的に旗を作図等する中で、実態に応じて辺や辺の平行に着目して二等辺三角形や平行四辺形の特徴をとらえさせていきたい。そのために、題材を次の3段階で構成する。であう段階では前小題材で製作した国旗を提示し、夢の町にも旗をつくろうと提案し、国旗から形を取出させ、仲間分けをさせる。つくる・深める段階では旗を色棒で構成させたり、作図させたり、三角形や四角形で模様づくりをさせたりして二等辺三角形等の性質を調べさせる。また学んだことを遊びの中で活用する活動を仕組み、構成要素に着目する見方を楽しく深めさせる。生かす段階では図形の基本的事項などをガイドブック的にノートにまとめさせる。

包括題材構成と計画(約8時間)

[S児・O児]	[K児]	[O児・S児]
三角形、四角形の定義	二等辺三角形正三角形の定義	垂直、平行の定義
頂点、辺の意味と用語	二等辺三角形正三角形の作図	平行四辺形の定義
三角形、四角形の作図	角の定義、性質	平行四辺形の作図
	コンパスの使い方	同位角の意味と性質

1. 国旗に使われている形や模様を集め、仲間分けをする。(三角形、四角形、円) — 1時間

2. 夢の町の旗を製作する。 — 6時間

(1) いろいろな三角形や四角形を構成し、類別する。(二等辺三角形や平行四辺形の定義) — ①

(2) 二等辺三角形や平行四辺形で旗の外形や模様を作図する。(作図) — ②

(3) 二等辺三角形や平行四辺形にできる角を調べる。(形の性質) — ②

(4) 図形カードを組み合わせて旗の外形をつくる。(形あそび) — (本時) — ①

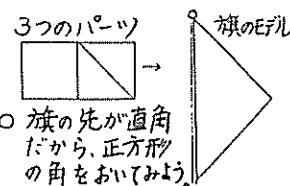
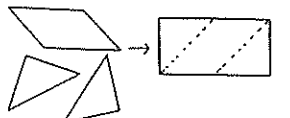
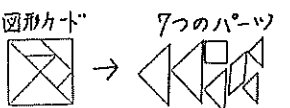
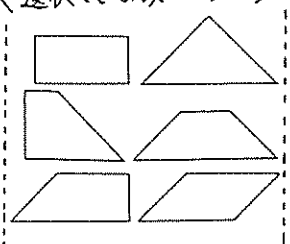
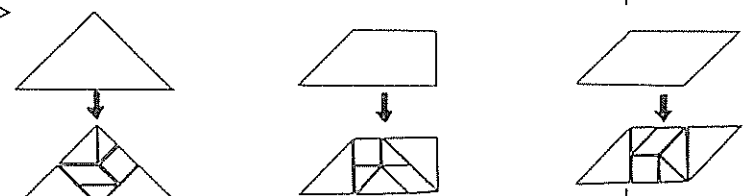
3. 算数トピックノートづくりをする。(基礎的・基本的事項の定着) — 1時間

目 標

○ 二等辺三角形や正三角形、平行四辺形や台形を構成している要素(頂点・辺・角)や位置関係(平行)に着目して特徴をとらえ、旗として作図したり構成したりできる。

本時目標 ○ 作りたい町の旗と同じ形を辺の長さや角の大きさ、辺の位置関係に着目して、図形カードを組み合わせてつくることができる。

本時指導の考え方 前時までには子供達は、二等辺三角形や平行四辺形等の基本図形について意味や性質を学んでいる。そこで本時は、辺の長さや角の大きさ、辺の位置関係に着目して目指す形に作り上げることをねらいとする。本学級では未学習の部分がかかなりあって、通常の計画で指導を行っていたのでは時間的に間に合わないという帰国子女学習の特性を考え、教えるべきところは教えて時間短縮を図る。しかし、学んだことを遊びの活動の中で活用させることで、構成要素に着目して図形の特徴をとらえる見方を楽しく身につけさせたい。そのことが図形の見方を深めることにつながると考える。

活動と内容	表現のよさを実感する過程
1. 夢の町の旗を作る活動について話し合い, 本時のめあてをつかむ。 (1) 図形カードを組み合わせて, 試しの活動をする。 ○ パーツを組み合わせたいろいろな形に変形できることに興味をもたせ, 長さ等の要素に着目して操作する方法を見通させること。 ※ 最初はわかりやすいように3つのパーツで三角形や長方形を作り, どこに注意して置いたのか発表させる。 (2) めあてをつかむ。 ○ 作りたい町の旗の形を図形カード(7つのパーツ)で構成すること。 めあて 図形カードを組み合わせて, 作りたい形の旗を完成させよう。	3つのパーツ  旗のモデル ○ 旗の先が直角だから, 正方形の角をおいてみよう。  ○ 辺の長さや角の大きさ, 位置でみていけばいいのだな。 図形カード 7つのパーツ 
2. 作りたい町の旗の形を図形カードで構成し, 構成の観点を交流する。 (1) 作りたい形の旗を図形カードを組み合わせてつくる。 ○ 辺の長さや角の大きさ, 辺の位置関係に着目して, モデルになっている旗と同じ形をつくること。 ※ なぜこのパーツをこの場所に置こうと考えたのかをプリントに書かせ, プリントの見通しにそって図形カードを置かせる。 ※ 見通しがもてないときは, ヒントカードを参考にさせる。 ※ 作りたい旗の形を選択できるようにしておく。	○ もっとむずかしくなるぞ。 <選択できる旗のモデル> 
<活動例>  ・ 大きな三角形の辺を2つあわせ, 長さやモデルの三角形の底辺になっている。 ・ 左はしの角が大きな三角形の角だから, 左におく。 ・ 平行四辺形の置き場がむずかしい。 ・ 大きな三角形の一番長い辺が平行四辺形の1辺と同じだ。 ・ 正方形と三角形2つでできている。	
(2) 作った方法と結果を発表し, 話し合う。 3. 図形カードを組合せて形を作るときに調べたことや工夫したことをまとめる。 ○ 図形カードを組合せて, 直角二等辺三角形や平行四辺形や台形などを作ることができたこと。 ○ 同じ辺の長さをさがしたり, 辺の長さが2倍になっていないか調べたり角の大きさ, 辺の位置関係に着目して調べた。	○ 直角二等辺三角形や平行四辺形はいろいろな形からできているのだな。 ○ 図形カードを組合せても, いろいろな形を作りたいな。

単 元 これからの運輸業を考えよう

指 導 観

- 本単元のねらいは、国民生活を支えている自動車（バス）輸送の問題点を明らかにし、今後のバス輸送のあり方を考え、バス会社や行政に提案していくことである。具体的には、運行ダイヤの工夫や国民生活とのかかわり、交通渋滞解消のための解決策の選定である。このように、バス輸送の工夫や努力といった現状を踏まえ、今後の在り方を考えさせることは、よりよい社会生活を実現するために必要な意志決定力を育成するとともに、社会をつくる喜びを味わわせることができる。
- 本学級の子供たちは、通学や買い物において、交通機関を利用している。そのため、交通機関の必要性を感じたり、その交通機関が利用しやすいようになって欲しいと願っている。しかし、よりよい生活のために交通機関の問題点を自分の力で解決していこうという意識には高まっていない。
- 本単元の指導にあったっては、バス輸送の現状を踏まえ、今後の在り方を考えさせるために、未来志向型の課題とその課題に対するこだわりが生きる活動を設定する。そこでまず、自分の生活とのかかわりで、バス運行の仕組みを追究させる。その中でバス運行の問題点に出会わせ、その問題点解消の追究課題を設定させる。そして、その解決策Ⅰとして渋滞緩和や路線の拡大などの『こだわり』を設定させる。次に、解決策Ⅰをよりよくするために、自分の『こだわり』やその筋道を提案する一情報を交換し、よさを評価するといった場を設定する。最後に『こだわり』を再度解決策Ⅱとして表現させ、バス会社や福岡市に提案することで、自分の考えが社会に役立つ喜びを味わわせる。

目 標

計 画（約10時間）

- | | |
|---|--|
| 1. バス運行の問題点を解決するために、自分のこだわりを設定し、提案・検討してよりよい解決策に高めて社会に提案していくことで、社会をつくる楽しさを味わうことができる。 | 1. 交通機関の営業所や市役所などを見学し、交通の現状や問題点を明らかにする。――3時間 |
| 2. バス運行の仕組みや努力・工夫の姿をもとにこれからの輸送のあり方を判断し、国民生活や産業とのかかわりを考えることができる。 | 2. 自分たちの解決策を検討する。――5時間
(1) こだわりを解決策Ⅰに表現する。-----①
(2) 班で話し合い、提案資料をつくる。-----②
(3) 班毎に提案し情報交換する。(1/2本時)-②
3. 自分たちの解決策を社会に提案する。2時間 |

本時の目標

- バス運行における解決策の発表や情報カードによる交流を通して、渋滞の緩和や路線の拡大といったこだわりの筋道のよさや不十分さをとらえ、よりよい解決策にしていけることができる。

本時指導の考え方

子供たちは、こだわり別に班をつくって調査や資料収集を行い、解決策Ⅰを表現している。そこで本時は、他の解決策Ⅰと交流し、自他のこだわりのよさを認め、よりよい解決策Ⅱにしていけることがねらいである。そこでまず、自分の解決策Ⅰに対する意見を交流するといった学習のめあてと、交流の仕方について話し合わせる。次に、多様な子供のこだわりやその筋道に出会わせ、互いの解決策Ⅰのよさを認め合いながら、よりよい解決策Ⅱにする対策を明らかにさせる。そのために、次のような2つの場を設定する。①自分の興味や関心がある班の発表を選択して聞くことができる場。②発表を聞いた後は、その班へ自分の考えを情報カードに書いて渡す場。最後に、友達からもらった情報カードの内容を吟味し、こだわりのよさを実感するとともに、取り入れられる内容やさらに追究が必要な内容を明らかにし、自分たちの解決策Ⅰをよりよくする意欲をもたせたい。

学習指導の過程

活 動 と 内 容	自分らしさを実感する過程															
1. 本時学習のめあてについて話し合う。 ○ 自分たちの解決策を見直していくことの把握 ＜めあて＞ 他の班の考えを聞き、今後のバス輸送についての解決策を見直そう。	○ どんな解決策を考えているのだろう。 ○ 自分たちの考えとの違いや同じところは何かな。															
2. 班毎の発表を聞いたり、自分たちの解決策を提案したりする。 (1) 自分たちが考えた解決策のよさを班毎に発表する。 <table style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td>○交通渋滞の緩和</td><td>○利用しやすいバスの開発</td><td>○路線の拡大</td></tr> <tr> <td>↓</td><td>↓</td><td>↓</td></tr> <tr> <td>優先道路の確保</td><td>快適な移動空間</td><td>関係機関へ啓蒙</td></tr> <tr> <td>↓</td><td>↓</td><td>↓</td></tr> <tr> <td>乗り入れ車の制限</td><td>利用者の増加</td><td>利用者の増加</td></tr> </table> (2) 各班の発表を聞き、自分の意見を情報カードに記入していく。 ○ 他の班のこだわりは何か（主張する解決策） ○ 自分が納得した点（よさの発見） ○ 自分の考えと違った点 ※ 子供の興味や関心に応じた班の発表を聞くことができるように、各班の構成人数を2つに分け、内容選択の場を準備しておく。 ※ 各教室を交通渋滞の緩和、バスの新開発、路線の拡大などの発表の場にし、内容選択を容易にさせる。 ※ 発表する側と聞く側を途中で交替させ、子供の多様な活動を保障する。 ※ 班毎の発表を聞いた後には、その班へ自分の意見を情報カードに記入して渡すことで、交流後に自分の解決策のあり方のよさや不十分さを見直す観点にさせる。	○交通渋滞の緩和	○利用しやすいバスの開発	○路線の拡大	↓	↓	↓	優先道路の確保	快適な移動空間	関係機関へ啓蒙	↓	↓	↓	乗り入れ車の制限	利用者の増加	利用者の増加	○ 交通渋滞をなくすためには、どんなことを行うことが大切かな。自分たちでできることは何かな。みんなに考えてもらうことは何かな。 ○ 交通渋滞をなくすには、自家用車の数を減らすことが大切である。 ○ バス優先道路があるのに皆が守っていないということが多く、この問題を解決する必要がある。そうすると、バスの利用が増えて、交通渋滞も少なくなる。
○交通渋滞の緩和	○利用しやすいバスの開発	○路線の拡大														
↓	↓	↓														
優先道路の確保	快適な移動空間	関係機関へ啓蒙														
↓	↓	↓														
乗り入れ車の制限	利用者の増加	利用者の増加														
3. 各班の発表や友達の意見を参考に、よりよい解決策にするために、自分たちの解決策を見直す。 (1) 情報カードや他の班の発表の感想をもとに、自他の考えのよさや不十分さをとり出す。 ○ 考えのよさや不十分さの表現 ・ 自家用車の乗り入れを制限するために、どうするのか。 ・ 自家用車を乗り入れている人々に啓蒙することが必要。 ※ 情報カードに朱線を入れて、考えのよさや不十分さを意識させる。 (2) 自分たちの考えた解決策をよりよいものにするためには、どんな点を改善したり付加したりするのか話し合う。 ○ 解決策への付加・修正 ・ 他の関係機関と連絡を取る。・ 啓蒙活動が必要である。	＜情報カード＞ ○自分が納得した点 ○自分の考えと違った点 ○班のこだわりは何か ○ 自分たちの考えのよいは、どこだろうか。足りない点はどこだろうか。 ○ たくさんの意見をもらったので、参考になった。 ○ 自分たちの考えの中に啓蒙活動を取り入れよう。															

主題名 自分にできる国際貢献を考えよう【4－(8)】

主題設定の理由

- この内容項目は、正しい国際理解と温かい人類愛をもって世界の平和を願う態度を養おうとすることがねらいとなる。現在では、国家間の関係が緊密になってきている。政治、経済だけでなく、芸術などの文化的交流もさかんである。このように、人類は協調して生きていかなければならない状況にある。つまり、異文化の相互理解だけでなく、人間を人間として愛する人類愛が重視される必要がある。特に、世界各国の政情不安の実態を知ったとき、過酷な状況におかれている人々に対する無償の愛は大切にされなければならない。そして、相手の立場をおしはかり、喜びや悲しみ、苦しみや悩みを感じ、よりよい生き方や、解決のためのよりよい行為をしようとする必要がある。
- 本学級の子どもたちは、社会科学習等で、世界の国々との結びつきが緊密となり、外国と相互に支えあっていることが、国民生活が成り立っていること。各国、各民族には独自の習慣や文化があることなどにも気がついている。しかし、外国の出来事については関心はあるが、身近なものとしてはうけとめてはいない。特に、生存にかかわる食糧援助を必要としている国のことや、医療による援助を求めている国について明確に知っている子供は少ないようだ。また、日本が世界の国々へ援助している内容をたずねると金銭とこたえている。つまり、子どもたちにとって援助は、経済的援助ととらえがちで、背景にある人類愛や人間としてのかわいあいの意識も高いとはいえない。
- 本主題の指導にあたっては、国境を超えて人々のために貢献しようすることの大切さをつかませたい。そのために、他領域と関連させて道徳の時間を位置づけて指導をおこないたい。そこで、まず道徳の時間第1時では、VTRをもとに、募金についての考え方を明らかにする。次に、ゆとりの時間に、援助を必要としている国や人々の生活のようす、援助の内容などを学習する。さらに、道徳の時間第2時では、援助を求めている人の願いや訴えを追究する。それをもとに、これまでの自分の援助についての見方や考え方を直し、世界の人々の幸福のために役立とうとすることの大切さを追究する。また、実践化として自分にできる援助行動を計画し、価値実現をはかる。

主題を通すねらい

計 画（2時間）[他に関連するゆとりの時間4時間、学級活動1時間]

- 外国の人々や文化を大切にし、世界の人々と助け合っていこうとすることができる。
- 1 街頭募金のVTR資料をもとに、自分の援助活動にたいする考えを明らかにする。――1時間
- 2 援助を待つ人々の願いをもとに、自分の生き方について話し合う。――（本時）――1時間

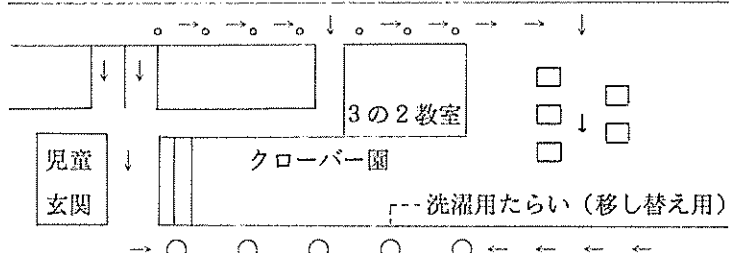
本時のねらい

- 世界の人々にとって、水は切実な問題であることがわかり、水で困っている人の苦勞をVTR視聴や体験的活動をもとにおしはかることによって、よりよい生き方ができる。

本時指導の考え方

本時では、援助を待つ人々の立場にたって考える体験的活動を位置づけ、人々がおかれている状況を切実に感じとらせたい。そのために、きづく段階では、水の問題に苦しんでいる人々のことをVTRの視聴をもとにしてつかませる。次に、ふかめる段階では、援助を待つ人達の水の確保の苦勞や、援助活動の大切さを実感として味わわせるために、模擬体験の活動をおこなう。また、ささやかな金額でも、協力すれば、幼い子どもの命をすくうことができるという実感を味わわせたい。いかなる段階でも、世界の人々に対する援助の大切さや人々の幸福のために希望をもって役立とうとすることのすばらしさをつかませて、自分なりの今後の生き方をまとめる。

準備 道徳ノート、VTR資料、効果音、水はこびのための容器など
学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1 これまでの学習をふりかえり、本時の学習について話し合う。 (1) 援助を求める国の人々の多くは、水不足の問題に悩まされていることを知り、水を確保するための苦勞について話し合う。 ○ 発展途上国が、かかえている問題の把握。 ・ 水資源の確保 ・ 保健衛生面での充実など * VTR資料「水と命」(国連広報センター)を視聴させる。 2 危険で、不衛生な水を飲料しなければならない人、水の確保に苦しんでいる人々のねがいについて話し合う。 (1) 水運びのくろうについて考える。 ○ 水運びの模擬体験。 ・ バケツの水をこぼさずに運ぶ。・ 一回でより多く運ぶ <模擬体験の場>  ○ 水を運ぶ人々の苦勞についての話し合い。 ・ 家族のために一滴でも無駄にせず、毎日運ぶ苦勞 (2) 十分に水の確保ができなかったり、不衛生な水をのんで病気になったりしている人の願いについて話し合う。 ○ 人々の訴え ・ ポンプや井戸の設置 ・ 医薬品の確保 (3) 人々の願いや訴えに応えるための経費について話し合う。 ○ 援助の品目と資金 3 自分のこれまでの援助活動についての考え方について話し合う。 (1) これまでの自分の考え方についてふりかえり、今後の生き方について話し合う。 ○ 自分にできる援助活動 * 円グラフの操作や付箋紙により、見方、考え方の高まり、感じ方の深まりを道徳ノートにまとめさせる。 (2) 厳しい自然条件のなかでも明るく生きようとしている子供たちや募金活動で支援している人々の姿をVTRで見る。	○ 水の問題でこんなに多くの人々がこまっているんだな。 ○ 水はこびはたいへんだろいうな。 ○ 水はこびがどれだけ大変かやってみよう。 ○ 家族のために、こんな思いをして運んでいるんだな ○ 人々はこんな願いをもっていることがわかったよ。 ○ 一人のいのちを救うのにこれくらいの金額ですむことを知ってよかったな。 ○ こんな考えをとりいれていきたいなあ。 ○ こんな子どもたちに応援したいな。

題材 ミュージカル“走れメロス”をつくろう

指導観

- 本題材のねらいは、ミュージカルに用いる歌をつくり、歌い、演じる活動を通して、曲の山を考えて旋律をつくり、気持ちがよく表れるように歌い方を工夫することができるようにすることである。具体的な内容としては、強調したい心情やようすが目立つように旋律を反復・変化・組み合わせること、強弱・速度・唱法を工夫して歌うことである。ミュージカル“走れメロス”（太宰治原作）は、友との約束を果たすため、生命をかけて走り続ける主人公メロスの姿を描く物語である。自分の弱さに挑戦しながら走り続けるメロスの姿は子供たちの感動を呼ぶ。したがって、表現への意欲を高め、個性的な表現をひき出すことができるので創造性を培うという意味で価値がある。
- 本学級の子供たちは、合唱したり合奏したりすることが好きであり、無理のない声で歌うことはできる。5年生の時に、ミュージカルに用いる歌づくりを経験してきており、心情を歌にあらわすために、旋律を反復・変化させたり、表情のちがう旋律を組み合わせたりすることはできる。しかし、曲の山を意識して旋律を反復・変化させたり、組み合わせたりすることについてはまだ経験がない。さらに、曲の山を意識して歌い方を変化させることはまだ不十分である。
- 本題材の指導にあたっては、子供たちが感情をゆさぶられながら表現へのエネルギーを爆発させて心情を音楽にあらわすことができるようにしたい。そのために、せりふの言い方・動きの工夫を通して心情を深くつかませて旋律をつくり、曲の構成や動きのもつ速度・強弱変化から歌い方を工夫させるようにする。まず、つかむ段階では“走れメロス”を試しに演じてみることにより表現主題をつかませる。あらわす段階では、まず、⑦場面の歌をつくり演じて旋律をつくる方法を学ばせる。さらに、その方法を応用して、選択した場面の歌をつくり演じる活動を行う。その際には、①せりふの言い方の工夫②歌づくり③動き・歌い方の工夫④相互評価による練り上げという順序で歌い演じさせる。あじわう段階では、低学年への発表会を行い、つくりあげた喜びを味わわせる。

目 標

計 画（約10時間）

- | | |
|--|-------------------------------|
| 1. ミュージカル“走れメロス”に用いる歌をつくり、表現する楽しさを味わうことができる。 | 1. ストーリーを知り、試しに演じる。—— 1時間 |
| 2. 曲の山を意識して旋律を反復・変化させたり組み合わせることで歌をつくり、速度・強弱・唱法を工夫して歌うことができる。 | 2. 歌をつくり、歌い、演じる。—— 8時間 |
| | (1) 第7場面の歌をつくり、歌い、演じる。本時3/4 ④ |
| | (2) 選択した場面の歌をつくり、歌い、演じる。 ④ |
| | 3. 発表会をする。—— 1時間 |

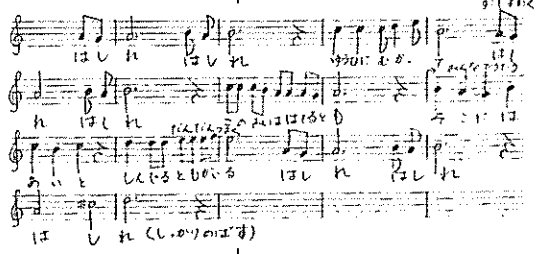
本時の目標

- 困難に打ち克ち、走り続けようとするメロスの気持ちがよくあらわれたものとなるように、強弱・速度・唱法という観点に気づき、その観点で自分たちの表現を見直して曲の山を強調した歌い方へとつくりあげることができる。

本時指導の考え方

前時までに、困難に打ち克ち走り続ける強いメロスの気持ちがあらわれるように、自分なりに動きや歌い方を工夫してきている。本時では、走り続けようとする強い気持ちを強く訴えられるように、速度・強弱・唱法の歌い方を見直してつくりあげることができるようにしたい。そのために、つかむ段階では、代表班の表現を鑑賞してよいところ、不十分なところを話し合った上で既製のミュージカルビデオを観せ、速度・強弱・唱法という見直しの観点をつかませる。あらわす段階では、走り続けようとする気持ちを強く訴えることができるように動き・歌い方を見直させ、つくりあげさせる。あじわう段階では、代表班の表現を発表させ、つくりあげた充実感を味わわせる。

準 備 既製のミュージカルのビデオ チェックカード
学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時学習を想起し、本時学習のめあてを話し合う。 (1) 第7場面のメロスの気持ちを話し合う。 ○ 表現主題の明確化 ・困難に打ち克ち走り続ける強い気持ち。 (2) 代表班の表現と既製のミュージカルビデオを鑑賞して話し合う。 ○ 見直しの観点の明確化 ・強弱・速度・唱法 ※ 代表班の表現と既製のビデオの良いところを鑑賞して話し合わせ、見直しへの意欲と観点をつかませる。	○ 身体はボロボロだけど、信じてくれている友がいるから、走り続けようとする強い気持ちだったな。 ○ もっと気持ちがよく伝わるように、工夫をしたいな ○ 強弱や速度を変化させた歌い方にすると、気持ちが伝わるんだな。
めあて 走り続ける気持ちを強く訴えられるように歌い方や動きを見直してつくりあげよう。	
2. 動きや歌い方を見直して表現をつくりあげる。 (1) 各班ごとに本時見直したいところを話し合う。 ○ 見直しの観点の明確化。 ※ チェックカードを用いて見直しの観点に沿ってビデオをみせることにより、見直しへの見通しを持たせる。 (2) 自分たちの見直しの観点に沿って、表現を見直しつくりあげる。 ○ 速度を変化させること。 ・決意の部分が目立つように、ゆっくり歌おう。 ○ 強弱を変化させること。 ・走ろうと決意しているところが目立つように、苦しみを歌っているところを弱く、決意の部分を強く歌おう。 ○ 唱法を変化させること。 ・走ろうと決意しているところは、はずんで歌おう。	○ 僕たちの歌は、もっと強弱をつけたほうが気持ちがあらわれるな。 ○ もっと気持ちの盛り上がりがわかるように、大きく動いた方がいいな。 ○ 走ろうと決意している気持ちが強く訴えられるようにステップを踏もう。 ○ 苦しみを歌っているところは、弱く沈んで歌うと感じが出るな。
※ ビデオカメラで自分たちの表現を撮影し、気持ちがよくあらわれた動きとなっているか見直させる。 動きの速度・強弱変化から歌い方を見直させる。 ※ 既製のミュージカルのビデオを自由に見られる場を設定し、動きの大きさ・歌い方を見直すヒントにさせる。	表現の工夫例  ○ 強弱をつけたから、気持ちがよくあらわれるようにたったぞ。 ○ 協力班に早く発表したいなあ。
3. つくりあげた表現を観て、話し合う。 ○ つくりあげた喜びを味わうこと。 ※ 代表班の表現をみて、つくりあげた喜びを味わわせる	

題材 透けて光って浮いた形をつくろう(つくる)

指導観

- 本題材のねらいは、児童玄関や廊下などの空間を楽しく飾るために、透明感や光沢性のある人工材料の操作を通して発想し、空間へのつるし方を考えてつくることである。主な学習内容は、
- ①身近な環境の美しさや楽しさを考えて、材料の特徴を生かしてつくる喜びを味わおうとすること
 - ②材料の操作を通して発想したり、つくりたいものが環境にふさわしいものになるように構想を立ててつくこと
 - ③表現の意図に応じて材料や用具を選び、技法を総合的に生かすこと
 - ④自分のつくりだした形を身近な環境に生かし、自分の表現のよさを実感することなどである。
- 本学級の子供たちは、特別教室や廊下などの壁面を飾る作品をつくってきており、校舎内を楽しく飾ることに対する意欲は高い。また、透明感や光沢性のある人工材料に対する関心も高く、材料収集を意欲的に行うよさがある。しかし、材料の特徴を効果的に生かして積極的に操作したり、空間への生かし方を美しさや丈夫さの点から考えてつくる経験はまだない。また、自分の思いに応じて材料や用具の可能性を総合的に考えて形を空間へ生かしていく技能は不十分である。自分の表現のよさを他の学年の子供たちから共感を受けたりすることは未経験である。
- 本題材の指導にあたっては、まず、校舎内の空間を飾る場所について取材しながら思いをもたせ、透明材料や飾る場所の条件について知らせる。次に、透明材料を多様に分解する活動をもとに組み合わせ方とつるし方のヒント資料を提示し、空間への試行的な環境設定を行いながら飾る場所に合ったつくりたい形を決めさせる。さらに、試行でできた形を生かしながら丈夫につくる計画を立てさせる。最後に、形を児童玄関や廊下などの空間につるして完成させ、表現する喜びを味わわせたい。

目標

計画(約8時間)

- | | |
|---|--|
| 1. 児童玄関や廊下の空間を楽しく飾るために、環境実感と材料の操作から発想してつくる喜びを味わうことができる。 | 1. 空間を飾る造形物について話し合う。1時間 |
| 2. 自分の思いに応じて、材料や用具の可能性や環境の条件を総合的に考えて空間へつるす形をつくることができる。 | 2. 環境と材料の操作から発想し、構想を立ててつくる。——(本時2/3)—— 3時間 |
| | 3. 形の環境空間へのつるし方を考えながらつる。—— 2時間 |
| | 4. 形を校舎内につるして鑑賞する。—— 2時間 |

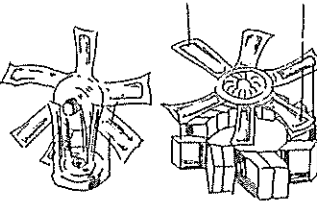
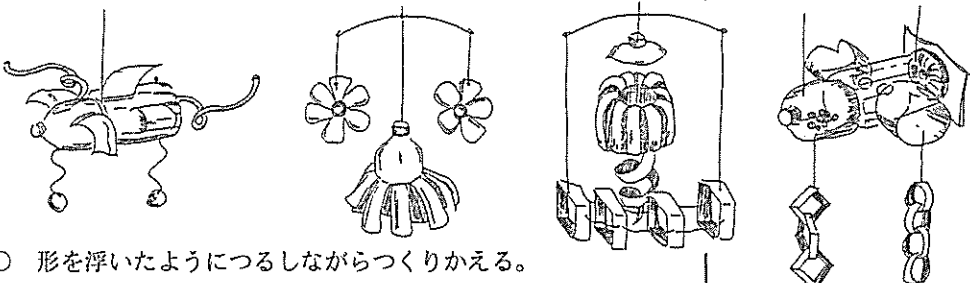
本時の目標

- 飾りたい場所のことや透明材料の特徴を考えながら組み合わせたり、空間へ浮いたようにつるしたりしてつくりたい形を決め、表現の喜びを味わうことができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、校舎内のどの場所にもどんな形をつるして飾るかという思いをもって透明材料を多様に分解している。そこで、本時では、透明材料を分解した形を組み合わせたり、空間へつるしたりしながらつくる形を決めることができるようにする。まず、透明材料を分解した形をもとに友達相互で交流させ、分解方法や組み合わせ方についての友達の見方を取り入れるようにさせる。

分解した形の組み合わせ方やつるし方について見方がさらに広がるようにヒント資料をもとに考えさせ、活動の方向性を提案する。形を組み合わせたり、浮いたようにつるしたりして試しながらつくれるように教室の空間にロープを張る試行的な環境設定を行う。さらに、つるしながら組み合わせた形に思い付いた題名を決めさせ、次時への見通しをもたせていきたい。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時学習を振り返り、本時学習について話し合う。 (1) 透明材料を多様に分解した形をもとに友達相互で交流する。 ○ 飾る場所と材料の切り方、曲げ方などについての自分の思い ○ 形の組み合わせ方の楽しさや美しさについての友達の見方 (2) 本時の学習活動の方向性について話し合う。 ※ ヒント資料をもとに分解した形の組み合わせ方や空間で浮くようなつるし方について考えさせ、見方が変わること気付かせる。 ○ 飾る場所に合った形の組み合わせ方を考える。 ・ 上下に組む、横につける、中に差し込む ○ 空間に浮くような形のつるし方を考える。 ・ 縦横の方向、上下の糸のつながり方、空間でのバランス 透明材料を分解した形を組み合わせたり、つるしたりしてつくりたい形を決めよう。	○ 飾る場所に合った楽しい形にできるかな。 ○ 友達の見方を取り入れて形を組み合わせよう。  ○ いろいろ組み合わせ方やつるし方を考えて試してみよう。
2. 分解した形を組み合わせたり、つるしたりして試しながらつくる。 ○ 飾る場所 ・ 児童玄関 ・ プレイルーム ・ 工作室前廊下 ⇒ ○ 形を組み合わせる ・ 上下に組む ・ 横につける ・ 中に差し込む ⇒ ○ 形を浮いたようにつるす ・ 形の空間での方向 ・ 形と形の上下のつながり方 ・ 形の重さとのバランス  ○ 形を浮いたようにつるしながらつくりかえる。 ・ 空間での方向感やバランス ・ 下から見上げたときの形の見え方 ・ 浮いたように回る針金や糸のつながり方 ※ 自分の形を積極的に空間へつるして試すことができるように、教室の空間へロープを張る試行的な環境設定を行ったり、付加材料を提供し、個別的に技能の補助を行う。 3. 本時学習をまとめ、次時学習について話し合う。 ○ つるしながら組み合わせた形に思い付いた題名を決める。 ○ 次時は、丈夫につくるための計画を立て付加材料の準備をする。	○ 透けて光った楽しい形からだんだん題名が確かになってきた。 ○ 飾りたい場所に合った自分だけのきれいな浮いた形になってきた。 ○ 次は丈夫に形をつないだり、もっと他の材料を加えてつくろう。

題 材 どうぶつのもりでおどろう

指 導 観

- 精神年齢2歳から4歳程度で構成されている。子供たちは、①身近な動物に興味を持ち、特徴的な動きや鳴き声をまねて表現するのが好む、②はっきりとしたリズムの曲が流れる中で歩いたり、走ったり打楽器を鳴らしたりしてリズムに合うのが楽しいと感じ始める、③歌うことや楽器を鳴らすことと身体を動かして表現することが一体となる、などのよさがある。
- 本題材のねらいは、①楽曲に興味・関心を示し、友と一緒に楽しく表現しようとする態度、②さるやうさが動物の森で楽しく踊っている楽曲の場面や動きを思い描いて、自分なりの表現をさせ、楽曲の拍やリズムを感じとらせていくこと、である。このことは、音楽に合わせて自由に身体を動かして表現するよさを生かし、生活の中で音楽を楽しもうとする意欲や態度を育てる点からも意義深い。
- 本題材の支援は、①子どもたちの興味・関心を持ち、動きが多様に引き出せるような身近な動物の登場する楽曲を選定する。②楽曲の場面や動きを思い描きながら、拍やリズムを感じ取らせる場の設定。③楽曲の場面や動きをとらえ、拍やリズムを感じとり、身体全体を動かして自分なりに表現させる「歌いながら、楽器を鳴らしながら、友と一緒に踊ったりする」ダンス遊びの活動を構成する。

計 画 (約4時間)

	1時間	1時間(本時)	1時間	1時間
楽曲の場面	さるやうさが動物の森で自由に踊っている	さるがダンス遊びをしている。うさがダンス遊びをしている 歌って踊る場面 ⇒ 楽器を鳴らしながら踊る場面 ⇒ 歌ったり、楽器を鳴らしたりして踊る場面 <ダンス遊び>	さるやうさが動物の森で自由に踊っている	さるやうさが動物の森で自由に踊っている
活動と内容	1. 動物の森で自由に踊る。楽曲や場に出会うこと。	2. さるやうさが一緒に動物の森で踊る。 ①手具を持って歌って踊る。 ②手作り楽器を鳴らしながら踊る。 ③楽曲の場面や動きをつかむこと。	3. 友と一緒に踊る。 ④楽曲の場面や動きをつかみ、拍やリズムを感じ取ること。	3. 発表・表現し合う。自由に表現し、広げること。

目 標

1. 友と一緒に動物の森の広場で楽しく踊る。
2. さるやうさが楽しく踊っている場面や動きを思い描いて、ダンス遊びをしていく中で、拍やリズムを感じながら身体全体を動かして自分なりの表現をする。

本時の目標 (※Gはグループを表す。)

- さると一緒に、動物の森の広場でダンス遊びをしていく中で、拍やリズムを感じながら自分なりの表現をする。

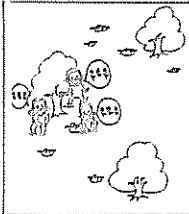
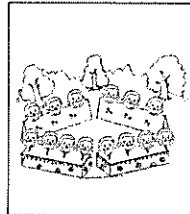
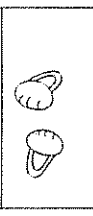
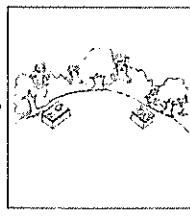
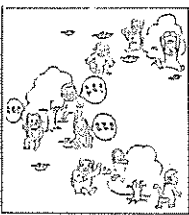
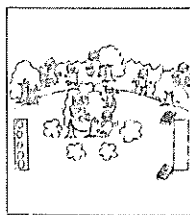
A G : 「キャキャキャ」などの擬態語や擬声語の歌詞や拍の部分を感じながら身体全体を動かして表現する。

B G : 「おしりをポン」などの特徴的な歌詞や拍の流れを感じながら身体全体を動かして表現する。

C G : 簡単な歌詞や ♪♪♪ のリズムを感じながら身体全体を動かして表現する。

本時学習の支援

- I、表現する意欲を高める支援：身近な動物の鳴き声や擬態語が多く含まれる歌詞、簡単なリズムの楽曲。動物の森でさるが楽しく踊っている楽曲の場面や動きを描いた絵譜の提示。
- II、楽曲の場面や動きをつかませ、自分なりの表現を生み出す支援：「歌う」「楽器を鳴らす」「友と一緒に踊る」の楽曲の場面を描いたパネルシアター。「歌う」「楽器を鳴らす」「友と一緒に踊る」場（楽曲の場面に合う歌った姿の手具、場面や動きにあった手作りマラカス、様々な動きや表現をしている表現絵など）、拍やリズム、様々に踊っている場面を思い描かせるリズムベースを工夫した楽曲。

活動の姿と内容	個の活動を促す支援																		
1. 本時のめあてを話し合う。 (1) 前時学習のビデオを見る。 ○ 前時学習の想起 (2) 本時のめあてを知る。 ○ さると一緒に動物の森で踊ること。 ーめあてー さるといっしょにどうぶつのもりで おどろう	I、表現する意欲を高める支援 ・ 前時ビデオ視聴（意欲的な活動の姿） ・ 絵譜の提示 ・ 拍やリズムの明快な音色による伴奏の楽曲 II、場面や動き、拍やリズムをとらえて自分なりの表現を生み出させる支援 ※楽曲の場面や動きをパネルシアターを提示してつかませ、同じ「歌う」「楽器を鳴らす」「友と一緒に踊る」場を設定して自由に表現させる。 (パネルシアター) (歌う場) (手具) ⇒ A G 「キャキャキャ」などを強調したモデル演示 B G 「おしりをポン」などを強調したモデル演示 C G 場に目を向けさせる声かけ (パネルシアター) (楽器を鳴らす場) (手作り楽器) ⇒ A G ♪♪♪と手作りマラカスを振るモデル演示 B C G 表現絵の動きに目を向けさせる声かけ のリズムを強調したモデル演示 (パネルシアター) (友と一緒に踊る場) ⇒ ・ サンバのリズムベースの楽曲 A G 友の表現に目を向けさせる声かけモデル演示 B G 表現絵の動きに目を向けさせる声かけ C G 場面や動き広げる声かけ リズム補助 ・ 一人一人の表現の取り上げ ・ 賞賛や励まし																		
2. さると一緒に動物の森で踊ろう。 (1) 手具を持って歌って踊る。 ○ 楽曲の場面や動きをとらえての身体表現 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><thead><tr><th style="width: 33%;">A G</th><th style="width: 33%;">B G</th><th style="width: 33%;">C G</th></tr></thead><tbody><tr><td>「キャキャキャ」を歌いながら手具を上下に振る。</td><td>「キャキャキャ」「おしりをポン」歌いながら手具を前後上下に振る。</td><td>簡単な歌詞を歌いながら手具を特徴的な動きに合わせて動かす。</td></tr></tbody></table> (2) 手作りマラカスを鳴らして踊る。 ○ 楽曲の拍やリズムをとらえての身体表現 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><thead><tr><th style="width: 33%;">A G</th><th style="width: 33%;">B G</th><th style="width: 33%;">C G</th></tr></thead><tbody><tr><td>拍の流れの部分をとりえて手作りマラカスを上下に振る。</td><td>拍の流れをとらえたり、表現絵の動きをとらえて交互に上下左右に振る。</td><td>♪♪♪とリズムや歌詞に合わせて、場面や動きをとらえて振る</td></tr></tbody></table> (3) 友と一緒に踊る。 ○ 楽曲の場面や動きを想い描いて、拍やリズムをとらえての身体表現。 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"><thead><tr><th style="width: 33%;">A G</th><th style="width: 33%;">B G</th><th style="width: 33%;">C G</th></tr></thead><tbody><tr><td>手具や手作り楽器を選択して友の表現をまねてフレーズを感じ取って踊る。</td><td>表現絵の動きをとらえ手具や手作り楽器を自由に選択しながら♪♪♪のリズムをとらえながら踊る。</td><td>楽曲のリズムを感じ取って自分なりに♪♪♪のリズムをとらえて体全体を動かして踊る。</td></tr></tbody></table>	A G	B G	C G	「キャキャキャ」を歌いながら手具を上下に振る。	「キャキャキャ」「おしりをポン」歌いながら手具を前後上下に振る。	簡単な歌詞を歌いながら手具を特徴的な動きに合わせて動かす。	A G	B G	C G	拍の流れの部分をとりえて手作りマラカスを上下に振る。	拍の流れをとらえたり、表現絵の動きをとらえて交互に上下左右に振る。	♪♪♪とリズムや歌詞に合わせて、場面や動きをとらえて振る	A G	B G	C G	手具や手作り楽器を選択して友の表現をまねてフレーズを感じ取って踊る。	表現絵の動きをとらえ手具や手作り楽器を自由に選択しながら♪♪♪のリズムをとらえながら踊る。	楽曲のリズムを感じ取って自分なりに♪♪♪のリズムをとらえて体全体を動かして踊る。	
A G	B G	C G																	
「キャキャキャ」を歌いながら手具を上下に振る。	「キャキャキャ」「おしりをポン」歌いながら手具を前後上下に振る。	簡単な歌詞を歌いながら手具を特徴的な動きに合わせて動かす。																	
A G	B G	C G																	
拍の流れの部分をとりえて手作りマラカスを上下に振る。	拍の流れをとらえたり、表現絵の動きをとらえて交互に上下左右に振る。	♪♪♪とリズムや歌詞に合わせて、場面や動きをとらえて振る																	
A G	B G	C G																	
手具や手作り楽器を選択して友の表現をまねてフレーズを感じ取って踊る。	表現絵の動きをとらえ手具や手作り楽器を自由に選択しながら♪♪♪のリズムをとらえながら踊る。	楽曲のリズムを感じ取って自分なりに♪♪♪のリズムをとらえて体全体を動かして踊る。																	
3. 本時の活動を振り返る。 (1) 本時、動物の森でさると一緒に踊ったことを一人一人発表する。 ○ 表現を振り返り、発表すること。																			

題 材 にんじゃの国のぼうけん（基本の運動）

指 導 観

- さくら組・梅組の子供たちは、精神年齢3歳から5歳程度の3年生3名、5年生5名、6年生3名で構成されている。ストーリー性のある活動に、目的意識をもって意欲的に取り組める。体を動かして活動することを好み、特にボールに対する興味・関心が強い。日常生活の中で、友達を意識して追いかける・逃げる遊びをする姿が見られる。
- 本題材のねらいは、友達と楽しく追いかけて遊ぶ中で多様な運動経験をさせることである。具体的には、①自分の動きのよさに気づき、繰り返し運動に取り組もうとする意欲的な態度を育てる、②友達と楽しく運動できるように簡単なきまりを理解させる、③走る・投げる・渡る・跳ぶなどの、多様な動きを繰り返し経験させる、ことである。このことは、運動経験の蓄積により日常の運動生活を活発にするとともに、生涯に渡って運動に親しむ態度の基礎を培うと考える。
- 本題材の支援は、①子供の運動しようという意欲が連続・発展するような変化のあるストーリーと運動の場を設定する、②個の運動の仕方に応じることのできる、選択できるコースを設定する、③友達とのかかわりから運動の楽しさが味わえるような簡単なきまりを設定する、④チーム・ティーチングによる、より個に即した支援が行えるような指導形態をとる、である。

計 画（約8時間）

	1 時間	2 時間	2 時間(本時2/2)	2 時間	1 時間
ス ト ー リ	宝物を探しにお城へ来たみんな そこでは、忍者がぼうけんの邪 魔をしようと待っていました。	①お城の広場で忍者がかくれていま した。⇒②今度は、後から忍者が 追いかけてきました。	①前には橋があります。後からは 忍者が追いかけてきます。⇒②今度 は忍者が水の中で待ち伏せています	①橋のないお城がありました。⇒ ②後から忍者が追いかけてきます 走って逃げ逃さなければなりません	広場や橋やお城を渡って 宝物を取りにいくぼうけん をしました。
活 動 と 内 容	1. ぼうけん遊 びと出会う。 ○ストーリーと場、動きとの出 会い	2. 役割を交代しながら、楽しくぼうけん遊びをする。 ○走る動き・投げ る動きを中心に動 きをひろげること	○渡る・よける動 きを中心に動きを ひろげること	○走る・跳ぶ動き を中心に動きをひ ろげること	3. ぼうけん をまとめる。 ○できるようになった動き を生かしてのぼうけん

目 標

1. 動きを工夫したり動きのよさに気付いたりしながら、楽しくぼうけん遊びをする。
2. 楽しく運動するためのきまりを守って、走る・投げるなどの多様な動きを繰り返し経験する。

本時の目標（※Gはグループを表す。）

- 追う時・逃げる時のきまりを守りながら、多様な渡る動きを楽しく繰り返し経験する。

A G：横歩きやすり足、交互足などの渡る動きをする。

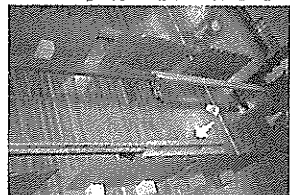
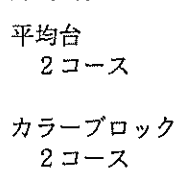
B G：横歩きやすり足、交互足、しゃがむなどの渡る動きを連続してする。

C G：交互足やしゃがむ、よつばい、回って方向を変えるなどの渡る動きを連続してする。

本時学習の支援（※ 具体的な支援の内容は、個の活動を促す支援を参照）

- I. 運動意欲を引き出すための支援：①運動内容ときまりを視覚的にとらえることができるビデオの提示、②2人の教師による追う役・逃げる役のモデル演示
- II. 動きをひろげるための支援：①A Gへの渡る動きをつくるための動作援助、②B Gへの渡る動きをひろげるモデル演示、③C Gへの渡りながらよける動きをひろげるモデル演示
- III. 動きのよさに気付かせるための支援：①動きへの賞賛による快の感情の強化、②「～したから～できたんだね」という動きへの意味付けの声かけ

準 備 忍者のお面、ボール、平均台、ブロック、宝物、ストーリーのビデオ、など
学習指導の過程（※はチーム・ティーチングの留意点）

活 動 の 姿 と 内 容	個 の 活 動 を 促 す 支 援
1. 本時めあてについて話し合う。 (1) できる動きで前時ぼうけん遊びを行う。 ○ 前時学習の想起 (2) 本時ストーリーをビデオで視聴し、がんばることを話し合う。 —— ストーリー —— 前の時間は、忍者橋を後ろから追いかけてくる忍者から逃げるぼうけんをした。今回は、水の中で忍者が待ち伏せをしている忍者の投げる手裏剣をよけて橋を渡り、宝物を取りにいくことができるだろうか。 —— めあて —— にんじゃばしを わたって たからものを とりにいこう。 2. 楽しく忍者橋のぼうけん遊びをする。 (1) 教師のモデル演示を見て動きをためす。 ○ できる動きでぼうけんをすること A G  B G  C G  ※ 2人の教師が、追う役・逃げる役に分かれてモデル演示を行う。 (2) 役割やコースを自由を選んで動きをひろげる。 ○ 多様な渡る動きにひろげること A G  B G  C G  ※ 2人の教師が4つのコースを分担し、子供が自己選択するコースに応じて個に応じた支援を行う。 3. ぼうけんをふりかえる。 (1) 宝物の数や動きの発表をする。 (2) 次時ストーリー予告ビデオを視聴する。	I. 運動意欲を引き出すための支援 ○ 体験による前時学習の想起 ○ 自分の写真のペープサートが登場するストーリーのビデオの提示 —— 多様な渡る動きを引き出す場 ——  平均台 2 コース  カラーブロック 2 コース ○ 2人の教師によるモデル演示 ・逃げる役は4本の橋を自由に選んで渡る ・ボールに当たらないように渡る。 ・追う役は決められた範囲から出ないようにボールを投げる。 II. 動きをひろげるための支援 A G：平均台に登ろうとするが登れない、渡ろうとするが先に進めない（高いところのスリルを楽しむ動きのよさ）→片手補助・両手補助 B G：できる動きで渡る（体を動かす楽しさを知っているよさ）→モデル演示で、できそうな動き（横歩き・すり足・交互足・しゃがむなど）の動きを見せる C G：自分で工夫した動きで渡る（より難しい動きができることの楽しさを知っているよさ・攻守のおもしろさを知っているよさ）→子供の動きを教師がまねる・モデル演示による、より工夫するとよいところのアドバイス III. 動きのよさに気付かせるための支援 A G：動きの表出→賞賛 B・C G：「こんな渡り方をしたから、早く渡れたんだね。」「しゃがんでよけたから、ボールに当たらなかったんだね。」という動きへの意味付け ○ 一人一人への賞賛、励まし ○ 次時への期待を高めるストーリーの提示

—メ—to—

第二日目 午後の部
公開授業指導案

単 元 げきをしよう「おむすび ころりん」

指 導 観

- 本単元のねらいは、場面の様子を豊かに想像しながら楽しく音読したり動作化したりすることである。題材「おむすび ころりん」の文章は七五調のリズムにのった民話独特の軽妙な語り口により、人物の動きを中心とした場面の様子やお話しの順序を楽しくとらえられるようになっている。本単元の学習過程で、①音読によりリズムにのった語り口のおもしろさを楽しむ力、②場面ごとに変化する様子に気を付けて、話の順序をとらえる力、③文章を動作や音読で表現しながら場面の様子を想像する力、を育てることができる。また、学習の発展として他の民話への新たな読書活動の広がりも考えられる。このことは進んで物語を読もうとする態度を育てる上からも意義深い。
- 本学級の子どもたちは、これまでの学習を通して、ひらがなを読んだり書いたりできるようになり、簡単な読物を読もうとすることができるようになっている。しかし、人物の動きを意識して読み、場面の様子の変化を順序良く読み取るまでにはいたっていない。これは、子どもたちが登場人物になりきって読むという経験をしたことがないからだと考える。表現の観点から見ると、読み取ったことを生かして動作化したり音読したりして表現する学習はまだ経験していない。
- 本単元の指導にあたっては、「おむすび ころりん」のリズムにのった音読に合わせて動作化の活動をさせることによって、場面の様子を楽しく想像できるようにしたい。そのために、まず全文を音読した後で、学芸会の劇のビデオを視聴させ、音読に合わせて動作化をしてみようというめあてをつかませる。次に、言葉に立ち返りながら一人一人に動きづくりをさせる。そして、動作・表情→音読→動作・表情のサイクルを繰り返しながら動きを練り上げさせる。最後につくり上げた音読と動きを元に劇のグループ分けをした後、発表会をさせ達成感、成就感を味わわせる。

目 標

計 画 (約9時間)

- | | |
|---|--|
| (1) 動きや音読で場面の様子や人物の気持ちを楽しく表現しながら物語世界にひたる喜びを味わうことができる。 | 1. 全文を読み、めあてをつかむ。―― 1時間
2. 動作や気持ちを考えて表現する。―― 6時間
・ おむすびをころがすまで。----- ② |
| (2) 言葉に着目して場面の様子や人物の気持ちを想像し、音読や動きで表現することができる。 | ・ 穴におむすびが落ちてから。---- (本時) --- ①
・ ねずみと出会い幸せになるまで。----- ③ |
| | 3. 班を分けて劇の発表会をする。―― 2時間 |

本時の目標

- ねずみの歌のおにぎりをもって喜ぶ明るく楽しい調子や、その歌を聞いてうきうきしてくるおじいさんの様子を言葉に着目しながら音読や動作化で表現することができる。

本時指導の考え方

子どもたちは、畑を耕す様子やおむすびを落としたときのおじいさんの様子を想像して表現している。本時はこれをうけて、ねずみ達の歌やその歌を聞いたおじいさんの楽しそうな様子を音読や動作で表現できることをねらいとする。そのためにまず、本時場面の動きを言葉に立ち返りながら一人一人につくらせる。次に、歌を聞くときの様子がなかなか表現しにくいことから「おむすびころりん」の歌が聞こえてきたときの様子をとらえようとする意識を持たせる。次に、歌を歌うねずみの立場に立たせその気持ちの想像から歌の持つ明るさ楽しさに気づかせる。そして、その歌を聞いたおじいさんのにこにこした表情や、進んでおむすびをころがす様子をとらえさせる。最後にあわせて動作化をさせ、表現の良さを味わわせる。

学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程								
1. 前時つくった動作を出し合い、めあてについて話し合う。 (1) それぞれが工夫した動きを発表し合う。 ○ はたけをたがやして おむすびころがって (腰をさする動作) (おどろいた表情) 動作化の工夫 ※ 様子がよくわかることを認めさせる。 (2) 本時学習の場面を音読し、めあてについて話し合う。 ○ あなから歌が聞こえてくる場面。 めあて おむすびがあなにおちてからのようすをげきにしよう。 ※ 一斉に音読させ、学習場面を確認させる。 2. おじいさんとねずみの立場に立ちながら音読と動きをつくる。 (1) 本文の言葉に着目しながら自分でおじいさんの動きをつくる。 <table border="1" style="margin: 10px auto; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th style="padding: 5px;">言 葉</th><th style="padding: 5px;">動 き</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="padding: 5px;">まっくらで</td><td style="padding: 5px;">手を目の上にあててのぞくようにする。</td></tr> <tr> <td style="padding: 5px;">おもしろい</td><td style="padding: 5px;">うれしそうな顔をして体を右と左にゆする。</td></tr> <tr> <td style="padding: 5px;">線を引く</td><td style="padding: 5px;">絵図で表現する。</td></tr> </tbody> </table> ○ 歌の部分の動きはつくりにくいということ。 ※ 言葉→動きの順でおじいさんの動作をノートに書かせる。 (2) ねずみの立場に立って歌の部分の音読する。 ○ 第一番目の歌 (喜びにあふれた歌) こんな大きなおにぎりをもらってうれしいなあ。 ○ 第二番目の歌 (さらに大きな喜び) 大きなおにぎりを二つももらったもっともっとうれしいなあ。 ※ ねずみにとっての大きさをもつおにぎりの模型を提示することでねずみの喜びの大きさを実感的にとらえさせる。 ※ ねずみの気持ちを吹き出しに書かせる。 3. 音読に合わせてまとめの動作化を行う。 ○ ねずみの喜びがあふれるような歌が聞こえてくること。 ↓ それを聞いたおじいさんは自然にうれしくなってくる。 ※ 音読に合わせて動作化を行わせることにより、喜びにあふれた歌の場面では自然に体が動いてくることを実感させる。	言 葉	動 き	まっくらで	手を目の上にあててのぞくようにする。	おもしろい	うれしそうな顔をして体を右と左にゆする。	線を引く	絵図で表現する。	○ みんながいろんな工夫をしているなあ。 ○ 良いところがたくさんあるんだな。 ○ 今日はおにぎりがあなに落ちてからを勉強しよう。 ○ どの言葉からどんな動きやどんな気持ちがわかるかな。 ○ 歌が聞こえてくるところは何をしたか書いてないから動作化が難しいなあ。 ○ おじいさんが聞いた歌はどんな歌だったのだろう。 ○ こんな大きなおにぎりをもらったのだねずみはうれしかっただろうなあ。 ○ しかも、ねずみは二つももらったんだな。 ○ このうれしさが表れるように音読をしてみよう。 ○ こんな楽しそうな歌を聞いたならおじいさんはきっと踊りだしたくなるんだろな。
言 葉	動 き								
まっくらで	手を目の上にあててのぞくようにする。								
おもしろい	うれしそうな顔をして体を右と左にゆする。								
線を引く	絵図で表現する。								

題 材 リズムの国であそぼう

指 導 観

- 本題材のねらいは、リズムまねあそび、リズム問答あそびなどの遊戯的な活動を通して、リズムに対する感覚を育てるとともに、簡単なリズムを即興的につくって表現する楽しさを味わわせることである。具体的には、リズムフレーズを感じ取ること、簡単なリズムを聴いてそのリズムを模倣すること、拍の流れにのって簡単なリズムを即興的につくること、つくったリズムを楽曲のなかに入れて表現することが内容である。このような様々なリズムあそびの活動を通して、子供たちは楽しみながらリズムを聴き取り、表現していくなかで音や音楽に対する鋭い直感力を身につけていくことができる。このことは、音楽をつくらせて表現するための基礎的な力となり、子供の創造的な表現力を育てるうえで意義があると考えられる。
- 本学級の子供たちは、これまで「音のカルタあそびをしよう」で、音色のちがいに着目した音あて遊びを経験してきている。このなかで子供たちは、音そのもののおもしろさやひとつの楽器や音の素材から何種類もの音が出せることなどに気が付いてきている。旋律に関する即興的な表現については、野菜や果物の名前を使った言葉あそびの経験をしてきている。また、リズムに関する即興的な表現については、カスタネット、タンブリンなどの打楽器を用いて、歌唱曲に合わせてリズム伴奏をするなどの経験をしてきているが、即興的にリズムをつくるといった活動はしてきていない。
- 本題材の指導にあたっては、子供の主体的な活動を誘発するため遊戯的要素を取り入れた活動を仕組んでいきたい。つかむ段階では、「リズムの国の歌」Ⅰに出会い、リズムまねあそびを行い、リズムには様々なパターンがあることをとらえさせ、リズムを打つ楽しさを味わわせる。つくる段階では、リズム問答あそびを行う。ここでは、あいさつ言葉による問答を歌詞に加えた「リズムの国の歌」Ⅱに出会い、その言葉に合ったリズムを即興的につくる。そして、自分がつくったリズムを「リズムの国の歌」のなかに入れて歌わせたい。あじわう段階では、2人組でのリズム問答発表会を行い、自分たちがつくったリズムが活かされる効力感を味わわせるようにしたい。

目 標

計 画 (約3時間)

- | | |
|--|---|
| 1. リズムあそびを通して、リズムを中心とした即興的な表現の楽しさを味わうことができる。 | 1. 「リズムの国の歌」Ⅰに出会い、リズムまねあそびをする。————— 1時間 |
| 2. リズムフレーズを感じ取り、拍の流れにのって簡単なリズムをつくらせて表現できる。 | 2. 「リズムの国の歌」Ⅱに、リズム問答を入れたあそびをする。(本時) ——— 1時間 |
| 3. リズム問答発表会をする。 | ————— 1時間 |

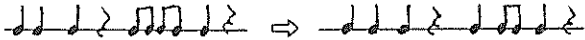
本時の目標

- あいさつなどの言葉をもとに即興的に言葉に合うリズムをつくり、拍の流れにのって身体をつかって表現できる。

本時指導の考え方

前時までに、子供たちはリズムまねあそびのなかで、様々なリズムパターンのリズム打ちをしてきている。本時では、子供たちが経験してきたリズムパターンを組み合わせた、変化させたりしながら、あいさつ言葉をもとに即興的にリズムをつくらせて表現させるようにする。そこで、二人組であいさつ言葉を中心とした会話文をつくり、その会話にしたがって手打ちやひざ打ちなど体をつかったリズム問答をしていくようにする。そして、「リズムの国の歌」Ⅱにあいさつ言葉によるリズム問答を入れていくようにし、拍の流れにのってリズムの表現ができるようにしたい。ここでは、この表現パターンを繰り返しながら、色々なリズムパターンによるリズム問答を経験させるようにしたい。

学習指導の過程

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。 (1) 「リズムの国の歌」を歌い、リズムまねあそびをしたことを想起する。 ○ 様々なリズムパターン  (2) あいさつ言葉を加えた「リズムの国の歌」Ⅱの歌詞について話し合い、リズム問答への活動の見通しをもつ。 ○ 言葉のちがいによるリズムの変化 ※ あいさつ言葉の部分をリズム打ちをさせる「ためしの活動」を行い、あいさつ言葉や人の名前によってリズムが変化してくることに気付かせる。 めあて ことばにあったリズムをつくって、おはなしあそびをしよう。 2. リズム問答あそびをする。 (1) リズム問答をする。 ○ あいさつことばをもとにしたリズム問答 【リズム問答の基本形と表現例】 〔A 児〕 〔B 児〕 「おはよう ○○さん」 「おはよう ○○さん」  ※ リズム打ちは、モデルを示し、二人組で手打ちをしたり、足踏みやひざ打ちなど体を自由につかって表現させる。 (2) 「リズムの国の歌」Ⅱにリズム問答を入れて表現する。 ○ 「リズムの国の歌」Ⅱの拍にのったリズム問答 【「リズムの国の歌」Ⅱにリズム問答を入れた表現例】 〔二 人 組 で〕 リズムのくには リズムのくには } 歌 リズム リズムでおはなし いたします。 } 唱 打ち 〔A 児〕 〔B 児〕 「さようなら○○さん」 「さようなら○○さん」  ※ 会話文は、ひとつずつカードに記入させ、それぞれのリズムパターンをつくらせるようにする。 3. 本時をふりかえり、まとめをする。 ○ 「音楽アルバム」の自己評価カードの記入 ・ リズム問答あそびの感想 ・ 満足度	○ リズムまねあそびで、いろんなリズムを打ったね。 ○ じょうずにリズムのまねができていたね。 ○ こんどは、まねだけじゃないんだね。 ○ あいさつことばをつかって、リズムを打つんだね。 ○ あいさつことばや人の名前がちがうと、リズムがかわってくるね。 ○ さあ、どんなリズムを打とうかな。 ○ 「おはよう○○さん」は、こんなリズムが合うみたいだね。 ○ 「○○さん」は、名前がちがうからリズムもちがってくるね。 ○ こんどは、「リズムの国の歌」に入れてやってみるとおもしろそうだ。 ○ こんどは、ほかのあいさつことばでやってみよう。 ○ いろいろなあいさつことばで、お話できたぞ。リズムもたくさんつくることができた。 ○ 今日のお話あそびは、たのしかった。 満足度は、5 だ。

単 元 食品工場のひみつをさがろう（私達の市のつくり出すもの）

指 導 観

- 本単元では、博多の特産物である明太子をとり上げ、売り上げ高の向上の面から味付けの工夫、販売の努力などの生産活動の特色があることをとらえさせるとともに、他地域とのかかわりに気付かせるものである。具体的には、ふくや明太子をとり上げ、秘伝の味付けをしたり、直売方式にしたりする生産活動の特色を追究させる。この学習では、見学・調査といった取材活動に意欲的に取り組み、生産活動の特色を価値づける社会的判断力を育てることができる。
- 本学級の子供たちは、ほとんどの子供が明太子を食べた経験をもっているが、それらの工場が身近にあることや、生産工程、そこで働く人々の努力、あるいは原料や製品の販売といった面で広く国内各地と結びつきがあることなどには気付いていない。また、学び方の実態として、社会事象を目的をもって見学したり、原因と結果の観点で事実を解釈を加えたりした経験は少ない。したがって、自分なりの価値判断を行っていく学習活動の経験は十分ではない。
- 本単元では、ふくや明太子の取材を通して、「明太子がたくさん売れるようになったひみつを調べよう」という追究課題を設定する。そこで、福岡市の工場で作られている品物のうち特産物であるふくや明太子を取り上げ、その売上高が多いこと・伸びていることが表れたグラフをもとに課題をつかませる。そして、取材活動を通して、原料や生産工程や販売などについて追究させる。これを受けて、たくさん売れるようになったひみつを判断させ、その根拠を交流することによって工場生産の特色を価値づけさせる。最後に、今後の生産活動について考えるとともに、他の食品工場の生産活動について調べさせ、福岡市の食品工場の生産活動の特色をとらえさせる。

目 標

計 画（約9時間）

- | | |
|--|--|
| 1. 見学・調査などの体験的活動により明太子工場の生産活動に関心を持ち、意欲的に調べることができる。 | 1. 明太子の取材を通して、追究課題をとらえる。2時間 |
| 2. 味、販売の仕方などを工夫し、他地域と結びついている明太子工場の生産活動の特色を価値づけることができる。 | 2. 工場生産の特色について調べる。----- 5時間
(1)明太子工場を見学する。----- 課外
(2)見学のまとめをし、課題に対する考えをもつ。---- ③
(3)売上高の伸びについて話し合う。-(本時) ----- ①
(4)福岡市に工場が集まっているわけを話し合う。---- ① |
| 本時の目標 | 3. 他の食品工場生産について調べる。----- 2時間 |

- ふくや明太子では、新鮮でおいしい明太子をつくったり工夫して販売したりすることにより売上高がのびてきたことを、見学をもとにした各自の考えの交流により自分なりに価値づけることができるようにする。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、明太子の売上高が伸びてきているひみつを、見学を通して自分なりの考えとして持っている。本時は、考えを「比べる・つくりかえる」活動に添って交流し、明太子の売上高が伸びてきたわけを自分なりに価値づけさせようとするものである。そこで、「比べる」活動では、自分の考えた売上高の伸びを「おいしさ・販売」の工夫といったひみつ（観点）ごとに発表させ、考えの違いを明らかにさせる。その際、考えの根拠を自分のつくった資料や見学のまとめにより明確にさせる。次に、「つくりかえる」活動では、交流によって捉えたことを自分の考えに付加したり、最初の考えを修正したりして考えを強化させる。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程						
1. 本時学習のめあてを確かめる。 ○ ふくや明太子工場の売上高がのびてきたわけ。 — めあて — ふくや明太子の売上高がのびてきたひみつについて、友達と考えるくらべよう。 2. 売上高がのびてきたわけを発表する。 (1)自分たちの調べた売上高向上のひみつを発表する。 <table border="1" data-bbox="141 537 883 1020"> <thead> <tr> <th data-bbox="141 537 628 575">「おいしさの工夫」派</th><th data-bbox="635 537 883 575">「販売の工夫」派</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="141 575 628 614"> 「原料のよさ」 「味付け・安全性」 </td><td data-bbox="635 575 883 614"></td></tr> <tr> <td data-bbox="141 614 628 1020"> ①原料を選ぶ ・スケトウダラのうち、上物を使っているので、よい明太子ができる。 ②原料の確保 ・たらこがいつでも手に入るようにしている。冷凍トラックや船の活用。 </td><td data-bbox="635 614 883 1020"> ①直販店の設置 ・新鮮な明太子を直接に食べてもらえる。 ・郊外に広がっているから、多くの人に食べてもらえる。 ②高速道路や飛行機の活用 ・新鮮なまま食べてもらえる。 </td></tr> </tbody> </table> ※ 売上高が伸びたひみつに順序をつけさせ、その根拠を交流させる。ひみつは、必ずしも一つだけに限定するのでなく、2つ以上あっても認めるようにする。 ※ グループ毎の発表を聞いた後には、そのグループへ自分の意見を「よさの発見カード」に表し手渡すことで、他のグループの考えづくりに役立つようにする。 (2) めあてに対する自分の考えを見直す。 ○ 友達の発表内容のうち自分の考えに取り入れられる点 (例) ・ おいしい明太子であるための味付けの工夫が売上高が伸びたわけだと思ったが、販売の工夫も大切なことがわかった。 ○ 自分の考えを修正する点 (例) ・ 売上高が伸びてきたのは、よい味付けがあったからだと思っていたが、これだけではいけないことがわかった。 3. 売上高が向上したひみつを、自分なりの考えとして価値付ける。 (例) ぼくは、やっぱり味付けの工夫をしているからだと思う。人々が好む味付けをすれば、たくさんの人が買ってくれると思う。 ※ 原料の確保図や生産工程図や工場の配置図をもとに、売上高が伸びたわけを再度考えさせ、工場の生産活動の特色を価値づけさせる。	「おいしさの工夫」派	「販売の工夫」派	「原料のよさ」 「味付け・安全性」		①原料を選ぶ ・スケトウダラのうち、上物を使っているので、よい明太子ができる。 ②原料の確保 ・たらこがいつでも手に入るようにしている。冷凍トラックや船の活用。	①直販店の設置 ・新鮮な明太子を直接に食べてもらえる。 ・郊外に広がっているから、多くの人に食べてもらえる。 ②高速道路や飛行機の活用 ・新鮮なまま食べてもらえる。	○ 友達は、どう考えているかな。 ○ やっぱり最後は、販売の工夫が大切じゃないかな。でも、友達が言っている味付けの工夫も大切だし、どう考えたらいかな。 ○ A君の意見は、ぼくと似ている。やっぱり販売の工夫が大切だ。高速道路の活用はとてもよい理由だ。 〈よさの発見カード〉 ・ 友達の発表のよい点 ・ もっとよくするために工夫する点 〈考えの見直しカード〉 ・ 取り入れたい考え ・ 見直した自分の考え ○ やっぱりもっとも大切なことは原料だ。でも、味付けや販売の工夫もあると思う。これも、取り入れて考えをまとめよう。 ○ 明太子づくりのひみつを見つけたからよかった。考えは正しかったな。
「おいしさの工夫」派	「販売の工夫」派						
「原料のよさ」 「味付け・安全性」							
①原料を選ぶ ・スケトウダラのうち、上物を使っているので、よい明太子ができる。 ②原料の確保 ・たらこがいつでも手に入るようにしている。冷凍トラックや船の活用。	①直販店の設置 ・新鮮な明太子を直接に食べてもらえる。 ・郊外に広がっているから、多くの人に食べてもらえる。 ②高速道路や飛行機の活用 ・新鮮なまま食べてもらえる。						

題材 面積を調べよう

指導 観

○本題材は、広さを測定することの意味、さらに正方形や長方形の面積の求め方について理解できることを主なねらいとしている。具体的には、①広さを測定することによって数値化することができる。②面積の単位がわかり、正方形や長方形、及びその複合図形の面積を求めることができる。この過程を通して①広さを同種の量を単位とし、その何倍かによって数値化していく測定の考え、②分割、合併の操作をしたり、位置を変えたりしても広さは変わらないという保存の考えを育てることができる。○本学級の子供たちは、長さやかさの学習において、直接比較からはじまり、ひもなどを用いた間接比較、カードなど任意単位を使って数値化して比較するなど、測定の基本的な態度は経験してきている。しかし、広さも長さやかさと同じように、ある単位量のいくつ分ととらえ比べられるということや、普遍的に量をとらえられることのよさを感じている子供は少ない。また必要な条件を自分で測定し比べるといった積極的な測定態度があまり見られない。

○本題材の指導にあたっては、題材はじめに大きさや形が様々違う正方形、長方形、複合図形を多数準備し、より広いと思う形から順にじゃんけんで取る鳥取りゲームを行う。そして「誰が一番広く島を取っているか調べよう。」という題材を通しての目的意識を持たせ、正方形、長方形、複合図形と順にその面積を明らかにしていく。また自分なりの解決の仕方を引き出すために、教師が求める図形を与えるのではなく、子供たちが鳥取りゲームでとっている形の中から自分で求めやすいと思う形を選択させ調べさせる。その時、求積に必要な辺の長さは自分で測定させる。そして学習ノートや交流によって自分の調べ方について見直す場を設定し、面積の求め方を納得しながらとらえさせていく。

目 標

計 画 (約9時間)

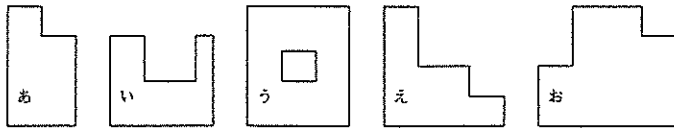
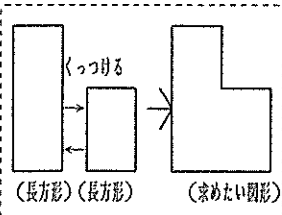
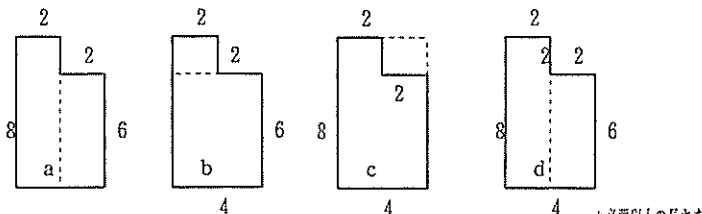
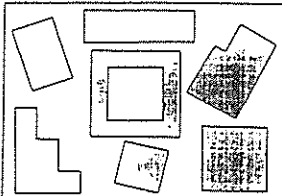
- | | |
|---|--|
| 1. 長方形や正方形の求積公式を活用する
よさや、広さを数値化することによって
比べられる楽しさを味わうことができる。 | 1. 鳥取りゲームをして面積を調べる。————— 5時間
(1) 鳥取りゲームをして面積を調べる計画をたてる。————— ①
(2) 長方形、正方形の面積をしらべる。————— ③
(3) 複合図形の面積を調べる。————— (本時) ————— ① |
| 2. 面積の意味や単位がわかり、正方形や
長方形、またそれらを複合した図形の面
積を求めることができる。 | 2. 土地とりゲームで大きな面積の広さ比べをする。————— 3時間
3. 面積の学習をまとめる。————— 1時間 |

本時目標

○複合図形を正方形や長方形に分割したり補充したりし、正方形や長方形の求積公式を活用して、様々な形の複合図形の面積を調べることができる。

本時指導の考え方

前時までに子供たちは、カードを使った鳥取りゲームを行い、取った正方形や長方形の面積は調べている。本時は、まだ求めることができていない複合図形の島の面積を正方形や長方形の求積公式を活用して求めることができるようになることをねらいとしている。まず、求め方の見通しを話し合わせる。見通しの持てない子供に対しては、前時までに求積してきた正方形や長方形を組み合わせて、本時求積する形を作る活動などをさせ、複合図形は正方形や長方形の合成とみることができるということに気付かせる。調べる段階では、補助線を引いたり、カードを切ったりする分解、補充の仕方を工夫し求積させる。ねりあげる段階では、いろいろな求積の方法を発表させ交流させることで、自分の解き方について吟味させていく。そして、どの複合図形の解き方も正方形や長方形の求積方法に帰着していけばよいことに気付かせていく。

活動と内容	表現のよさを実感する過程
1. 複合図形の求め方について見通しを話し合う。 ○複合図形のなかに長方形や正方形を作れば調べられることを見通す。 (例)  ※求積の見通しを持たない子供に対しては、前時までに求積してきている正方形や長方形を合成させ、複合図形を作らせてみる。  ※求積の見通しとどの形から調べるかを簡単に学習ノートに表現させる。 工夫しながら簡単な面積の求め方を調べよう。 2. 複合図形の面積を工夫して調べる。 (1) 自分の計画に従って、自分なりに工夫して面積を調べる。 ○複合図形を長方形や正方形に分解、補充すること ○長方形、正方形の求積公式を活用しての複合図形の求積  (分解) (分解) (補充) (分解) 求めている解き方 ※どの形をどういう順番で調べていくかは、自由に自己決定させる。 ※必要な辺の長さは自分で測定させる。 (2) 調べた結果について話し合う。 ○多様な求積方法の表現 ※1つの形について、様々な調べ方があることを出させるとともにどの調べ方が簡単か、また必要以上に辺の長さを調べていないかなど吟味、交流させる。 3. 本時学習をまとめ、自分のとった島の面積を調べる。 (1) 本時学習をまとめる。 ○複合図形の求積方法の一般化 形の中に長方形や正方形を作りだせば、今日の形も面積を調べることができる。 (2) 自分がとった形の面積の総計を求め、みんなで比べる。	[S児の島取りゲームのノート]  ○あは長方形見たいな形だ ○あは長方形の端が欠けているみたいだ。 ○あは長方形2つに分けて長方形の求積公式を使えば調べられそう。 ○ぼくは、あと①と②の形を取りっているけど、あは簡単そうで、②は難しそうだから、あ→①→②の順で調べよう。 ○長方形の面積だから、縦と横の長さがわかればよいので、全部辺の長さを測らなくてもいいみたい ○私は2つの長方形に分けて、$8 \times 2 = 16$, $2 \times 6 = 12$, $16 + 12 = 28$ それで、28 cm^2 になりました。 ○ぼくは、長方形の端が欠けていると考えて、$4 \times 8 = 32$, $2 \times 2 = 4$, $32 - 4 = 28$ それで、28 cm^2 になりました。 ○どの形も長方形や正方形をその形の中に見抜けることができれば、求積公式を使って求められる。

単元 花火遊びを体で表そう（表現運動）

指導観

- 本単元のねらいは、花火のあがる様子を動きに変化をつけてリズムカルに表現したり、自分や友達の表現のよさを見つけたりすることである。子供たちは、自分たちで遊んだ花火があがる様子の特徴をとらえながら、はじめ・なか・おわりのある一つの作品をつくりあげていく。この運動を通して、①動き作り場作りの工夫をしながら運動に親しむ態度、②激しい感じ、にぎやかに弾む感じなどの特徴をとらえ身体表現する力、③協力して学習を進める態度などを身に付けることができる。
- 本学級の子供たちは、いろいろな物の動きの特徴を観察して、柔らかい感じの動きや硬い感じの動きを表現することは体験している。しかし、自分たちで動きや場の工夫をしたり、一つの作品をつくりあげる楽しさは十分味わっていない。そのため、自分たちで場を作り変えたり、新しい動きをつくりあげていくなど、運動に主体的に関わろうとする態度はまだ十分に育っていない。
- 本単元の指導にあたっては、西公園で花火遊びをした体験をもとに、花火のあがる様子的特徴をとらえ、変化のあるリズムカルな動きやその動きをつくり出す場を自分たちで工夫しながら、グループで一つの作品をつくりあげていかせたい。そのため、つかむ段階では、自分たちであげたい花火を用意し、花火をあげる活動を体験し自分なりのイメージや動きをつかむ。ふかめる段階では、個人→ペア→グループで、動きの変化を多様にしなが表現→交流→表現を繰り返し、作品をつくりあげていかせる。また、ビデオ等で花火遊びの体験を随時想起させる。あらかず段階では、互いの作品を鑑賞し合いながら、表現の違いやよさを見つけあい、効力感・有用感を味わわせたい。

目 標

計 画（約8時間）

- | | |
|--|---|
| 1. グループで協力して学習の場や動きを工夫し、楽しみながら意欲的に身体表現して作品をつくりあげることができる。 | 1. 花火遊びをし、学習の見通しをもつ。―― 2時間
(1) 花火遊びをし、イメージと動きをつかむ。---①
(2) 学習の進め方を話し合う。-----① |
| 2. 花火があがる特徴をとらえ、激しい感じやにぎやかに弾む感じを変化のあるリズムカルな動きで表し、はじめ・なか・おわりのある作品をつくりあげることができる。 | 2. 動きや場を工夫し、作品をつくりあげる。――5時間
(1) 自分のイメージからの動きづくり。-----①
(2) ペアでの動きの交流。-----①
(3) グループでの動きの交流。-----（本時2/3）---③ |
| 本時の目標 | 3. 出来上がった作品を互いに鑑賞する。―― 1時間 |

- 激しい感じやにぎやかに弾む感じの動きを中心に、グループのメンバーと、一人一人や集団の動きを工夫しながら、「花火があがってきていく様子」を身体表現することができる。

本時指導の考え方

前時に子供たちは、ペアでの動きをグループで出し合い、互いのよさを取り入れながら、大まかな全体を通した動きをつくってきた。そこで本時は、特に「なか」の花火の盛り上がりの部分の集団での動きを工夫してつくり、はじめ・なか・おわりを通した変化のある動きづくりへとつながるようにしたい。そこで始めに、激しい感じや弾む感じの花火のビデオを基に、自分たちのグループでの動きを振り返らせ、もっと工夫した動きづくりへの意欲をもたせたい。グループでの活動については、自分たちで自主的にできるように、①花火の体験活動のビデオ、②ビデオ撮影による振り返りの場、③集団の動きの工夫ができる「動きづくりボード」④工夫した動きの参考になる「動きのポイントカード」、⑤場の工夫ができる用具などを準備しておき、動きづくりをさせていきたい。

活 動 と 内 容	表現のよさを実感する過程
1. 前時学習を想起し、本時学習のめあてと進め方をつかむ。 (1) ビデオと自分たちの動きを比較し本時学習のめあてを確かめる。 ○ ぱちぱちと激しくとび散る火花→とび散る感じが出てない ○ パーンと爆発する感じ→急に動いてないから感じが出てない めあて 花火のはげしい、はずむ感じの動きをグループで表そう。 (2) 学習の進め方を確かめ、本時の学習の見通しをもつ。 ○ 本時学習の活動の場と内容の確認（自主的活動の場や用具） ・ 花火遊びを振り返る場（ビデオ・テープとTVモニター） ・ ビデオによる動きの振り返りの場（ビデオ・TVモニター） ・ 「動きづくりボード」による集団の動きの工夫や確認の場 ・ 「動きのポイントカード」による動き方の参考例 ・ 動きの工夫の場が作れる用具（カラーコーン・ゴム紐など） 2. グループでの動きをつくっていく。 <u>Aグループ活動例</u> ○ ドラゴン花火の火花が激しくあがっている部分の動きづくり (1) グループでのめあてと学習の進め方を確かめる。 ○ 激しく火花があがっていく様子を個人の動き方を工夫して ※ 「動きづくりボード」の活用 (2) みんなで踊り問題点を見つける ○ 火花のあがる大きさが不足 ○ 一人一人の動き方がばらばら (3) グループでの動きを工夫する。 ○ 火花のあがる大きさ→ゴム紐を張った場で高く伸びるように ○ 一人一人の動き方→最初はそろって、だんだんと多方向へ (4) つくった動きを通して踊る。 ○ リズミカルに動きを続けて (5) 他のグループに見てもらい、できばえを確かめる。 <u>Bグループ活動例</u> ○ 回転花火の火花がとび散っている部分の動きづくり (1) 前時つくった動きで踊る。 ○ 火花のとび散り方が小さい ○ 回転している感じがしない (2) ビデオで花火を振り返る。 ○ 火花は遠くまで跳んでいる ○ 回転は同方向にそろってる (3) 動き方を工夫する。 ○ 火花のとび散り方→カラーコーンを広く置いて、大きく広がるようにする ○ 回転の感じ→そろって同方向に広がっていくようにする (4) ビデオで撮影し振り返る。 ※ 不十分だけでなく、よさも見つけるようにする。 (5) 全体を通して踊り、発表できるようにする。 3. 本時つくった動きをグループごとに互いに発表し合う。 ○ はげしい感じやはずむ感じの動きの工夫の説明と発表 ※ 他のグループのよさ見つけ、互いに認め合うようにする。	○ 前の時間は、ペアの動きを出し合って、全体を通してつくってみたな。 ○ 今日は、1番盛り上がる部分をつくるんだな。 ○ 僕たちは今日は、ゴム紐を張った場で、高さの動きの工夫をしよう。 ○ 私たちは、カラーコーンを使って、広がりにはげしい動きをつくっていきたいわ。 ○ ドラゴンの火花のあがり方が物足りないな。 ○ 回転花火の回っている感じがしないわ。 ○ ゴム紐にとどくように伸び上がって動くと、火花のあがる感じが出てきたぞ。 ○ カラーコーンを広げて置いて、そこまで広がるようにしたらとび散る感じが表せたわ。 ○ ビデオで振り返ると、自分たちの動きがよくわかるな。 ○ さあ、発表できるようにつくりあげよう。 ○ どのグループも、よく感じが表れているな。

題 材 すもう大会をみんなの力でもり上げよう

題材設定の理由

- 本題材のねらいは、6月27日の相撲大会にむけた取り組みの中で、自分の思いや願いが応援という活動に生かされ学級に役立ったという有用感と連帯感を味わわせ、学級としての創造性と凝集性を高めるものである。本題材は、相撲大会を間近にひかえ、楽しくみんなを力づける応援をしたい、5の1のまとまりのよさをみせたいという思いから生まれたものである。題材の選定にあたっては、「相撲大会の優勝を目指して、頑張るぞという気持ちになるようにしよう」「みんなが協力でき、そのまとまりをあらわせるような活動をしよう」という点で話し合われ、『相撲大会で、5の1のまとまりと元気のよさを表せる応援の方法を考えよう』という話し合いのめあてを設定している。
- 本学級の子供たちは、係の活動や仲良し集会を友達と力を合わせて行っている。その中で、根拠をもって友達に訴えること、友達の考えのよさを取り入れて学級での取り組みを決めることができるようになってきている。また、異性への関心が芽生え、男女によるグループの固定化や活動内容の違いが表れてきている。そこで、学級としてのまとまりを意識し、男女が協力し合う創造的な活動に取り組んでいく。このことは、協同の目的に向かって、一人一人が役割を分担し、計画的組織的に活動する力を育てるとともに、学級への所属意識や学級の凝集性を高める上で意義深い。
- 本題材の指導にあたっては、まず、昨年度の相撲大会の応援のビデオを視聴し、みんなを力づける応援、5の1のまとまりを見せる応援をしたいという思いを抱かせる。次に、どんな応援をしたいか、今までの経験や他のスポーツの応援の様子などの情報を収集させ、自分なりの考えを持たせておく。そして、その考えを交流し、5の1のまとまりがみられるものか、応援にふさわしいものか、自分たちの力で期日内（時間内）にできるものかという観点で吟味させて決定し、具体化させていく。さらに、計画にしたがい準備し、相撲大会当日に実践し、有用感や連帯感を高めていく。

ねらい

活動計画（約3時間）

- | | |
|--|---------------------------|
| 1. 相撲大会の応援の方法を決定し、協同で準備することを通して、仲間と協力して活動する喜びを味わうことができる。 | 1. 議題を設定し、情報を収集する。――課外 |
| 2. 友達や学級への思いを表現・交流し、創造的な応援をつくり上げていくことができる。 | 2. 応援の目的を確かめ、考えを作る。――1時間 |
| | 3. 応援の方法を交流し決定する。（本時）-1時間 |
| | 4. 係の計画を交流し、具体化する。――1時間 |
| | 5. 計画をもとに準備する。――（総合活動） |
| | 6. 相撲大会で実践する。――（学校行事） |

本時活動のねらい

- 相撲大会の応援方法について、まとまりが表せるか、元気づけられるものか、期日内にできるものかという観点で話し合い、決定することができる。

本時活動の考え方

子供たちは、応援の方法について今までの相撲大会の経験や他のスポーツの応援に対する情報収集活動を行い、自分なりの考えをつくらせている。そこで本時では、計画係からの提案をもとに話し合いのめあてと進め方をつかむ。次に、自分の考えと友達の考えを比べながら、交流していく。このとき、自分の集めた情報や準備した資料をもとに交流させるようにし、応援の内容を具体的にイメージ化できるようにする。そして、まとまりが表せるか、応援にふさわしく元気づけられるものか、期日内に自分たちでできるものかという観点からノートで見直させ、観点ごとに再交流し、集団決定する。最後に、今後の活動の見通しをもたせ、一人一人の活動意欲を促していきたい。

小 題 材 おいしくごはんを炊きましょう (計画的な食事作りをしよう)

指 導 観 の特質や炊くことによる米の量の変化、

- 本小題材は、おいしくごはんを炊くために、自分なりに必要な情報を収集したり、実習をしたりして炊飯に対する見方や態度を高めていくことをねらいとしている。具体的内容としては、①米の種類によって炊き方の工夫をするということ、②自分の選択した米の炊き方の工夫(洗ひ方、水の割合、時間、加熱の仕方、蒸らし方)や米からご飯への変化の過程がわかること、③米の栄養の特質や炊くことによる米の量の変化がわかることである。これらの学習を通して、家庭生活の状況に合わせて合理的に判断し、実践しようとする態度を育てることができる。
- 本学級の子供たちは、キャンプでの飯盒炊飯の経験から、米に水を加えて炊くことによりご飯になることは気付いている。また、国産米不足の中で自分の家庭でどのような種類の米が使われているか関心は寄せている。しかし、それぞれの家庭では自動炊飯器が使われている為、どのような過程を通じてご飯に変化するのか炊飯のしくみについては理解していない。また、米の種類に合わせて炊き方の工夫をすることによりおいしく炊けることに気付いている子供は少ない。
- 本小題材の指導にあたっては、「おいしくご飯がたけるようになりたい」という願いのもとに自分の課題を追究し炊飯のしくみやおいしい炊き方の工夫がわかるようにしていきたい。そのために、ご飯の食味をさせていろいろな種類の米のあることや自分のイメージするおいしいご飯を描かせる。次に、持ち寄せた米を観察したり、今までの炊飯の経験から知っていることや失敗したことを交流したりして不十分なこと(栄養、特徴、米とごはんの違い、炊き方や工夫など)に気付かせ調べたい課題をつかませていく。さらに、文献調べや家庭等での情報集めを自分なりの計画にそって調べる情報収集活動1とそれを実験によって確かめたり、交流による比較をしたりするための情報収集活動2を設定する。その際自分なりの方法で追究し、炊飯のしくみに気付くという点から透明容器を使って一人2回実験させ、自分の課題をさらに追究できるようにしていく。そして、それぞれの家庭の米にあった生かし方を工夫させ、生活に生かせる効力感や有用感を味わわせていきたい。

目 標

計 画 (約4時間)

- おいしく炊く炊き方を追究するなかで、米の栄養や洗ひ方、浸水時間、炊き方の工夫、炊飯のしくみがわかり、家庭生活へ実践していくという態度を育てることができる。
1. 家庭使用米に視点をあてて課題をつかみ、情報収集活動1をする。 1時間(課外含む)
2. ご飯の炊き方を追究し、情報収集活動2をする 3時間
- (1) 米の特徴と浸水時間調べをする。① (2) 米の炊き方の実験実習をする。(本時) ①
- (3) 家庭生活での生かし方の実習をする。-- ①

本時目標

- 自分が選択した米で炊き方を試したり、米からご飯への変化を観察したりして炊飯のしくみがわかる。

本時指導の考え方

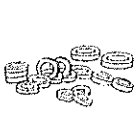
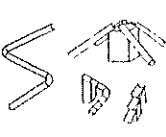
前時までに、情報収集したことを交流し、それらをもとに自分の米の洗ひ方や適当な浸水時間を調べ、ごはんを炊く準備が自分なりにできている。そこで本時はそれらをもとに炊飯前の米から炊飯後のごはんまでの変化を観察して炊き方を追究し、自分の家庭生活にあった生かし方を考えていくことをねらいとしている。まず、準備した米を自分が計画した炊き方にそって実験実習する。その際、観察しやすい透明容器で一人分の米を炊ける場を設定し、炊飯のしくみに気付くようにする。また、色やにおいなどの変化や火加減、蒸らし方などを自分の計画から見直させたり、グループで交流させたりして自分の課題をとらえやすくしていく。さらに、課題解決のための実験を再度設定し、おいしく炊く方法をつかませていきたい。

単 元 こどものひろばをつくってあそぼう

指 導 観

- 精神年齢2歳から7歳程度で構成されている。子供は、固定遊具で全身を動かして遊んだり、何かに見立てて積み木を並べたり、積んだりして遊ぶのが好きである。また、一人で遊んだり、友と共同で遊んだりしている。活動に取り組む姿を見てみると、活動への見通しが持ちにくく断片的にとらえている子から、見通しを持って自分なりに工夫して取り組み始めている子などと様々である。
- 本題材のねらいは、身近にある素材を並べたり、つなげたり、組み合わせたりして子供の広場を作って自由に遊ぶ中で、自分なりの見通しを持って活動し、みんなと一緒に遊ぶ楽しさを味わわせるものである。子供たちは、タイヤや箱、雨樋などの色や形、大きさや重さ、質感、弾力性などの違う様々な素材に触れ、並べたり、つなげたり、さらに組み合わせたりしながら子供の広場を作っていく。そして作った広場で自由に跳んだり、くぐったりして全身的な遊びから、ボールをころがしての操作的な遊びをする。また、友の動きをまねたり、誘い合ったりして協調して遊んだりする。このことは、ものや人にかかわる力を育て、自分なりに活動を連続させていくことができる。
- 本題材の支援は、①子供自ら並べたり、つなげたりして変化させられ、子供自らの全身的な運動や操作的な動きを引き出すために身近な素材（タイヤ、箱、雨樋）を取り上げる、②ものや人に多様にかかわったり、自分なりの見通しをもって活動させるために、一つ一つの素材に十分かわらせ後、自由に選ばせて工夫してかわるよう活動を構成する、③友と協調して活動できる場の設定と個に応じた支援・援助である。

計 画（約6時間）

	1時間	1時間	1時間	1時間	1時間	1時間
活動と内容	1、子供の広場と出会う。 ○素材場と出会うこと。	2、子供の広場を作って遊ぶ。 (1) タイヤ広場を作って遊ぶ。 ○並べたり、重ねたりして、跳んだりくぐったりした遊び	(2) 箱広場を作って遊ぶ。 ○積んだり、つなげたりして、登ったりくぐったりした遊び。	(3) 雨樋広場を作って遊ぶ。 ○つなげたり、斜面にしたりして、ボールを転がした遊び。	(4) 好きな広場を作って遊ぶ。 ○組み合わせで、工夫した遊び。	3、子供の広場で自由に遊ぶ。 ○楽しく遊んだこと。
場						

目 標

- 身近な素材を使って、並べたり、積んだり、つないだりして子供の広場を作ったり、友と一緒に楽しく遊ぶことができる。
 - ・色や形、大きさ、質感などの違う素材を並べ方や組み合わせを工夫して遊ぶことができる。
 - ・作った広場で、くぐったり、ボールをころがしたりして多様にかかわって遊ぶことができる。
 - ・友と一緒に広場を作ったり、誘ったりして協調し合って、楽しく遊ぶことができる。

本時の目標（※Gはグループを示す）

- 自分の好きな広場を選んで、様々な形や大きさのタイヤや箱、雨樋を並べたり、つなげたり、積んだり、組み合わせたりして、工夫して広場を作り、友と一緒に楽しく遊ぶことができる。
 - A G：教師と一緒にタイヤや箱、雨樋を並べたり、つなげたりして友と一緒に遊ぶことができる。
 - B G：手順絵を見てタイヤ、箱、雨樋の並べ方を工夫して、友の動きをまねて遊ぶことができる。
 - C G：自分なりにタイヤ、箱、雨樋の組み合わせ方を工夫して、友を誘い合って遊ぶことができる。

Ⅰ、活動への動機を高める支援：タイヤ、箱、雨樋広場を体験させ、前時学習を想起させること。
Ⅱ、活動の手順や方法を見とらせる支援：活動の手順を示した絵、素材（一部つなぐなどして作り方を連想させるもの）の提示、T、Tにおけるモデル演示
Ⅲ、友と協調して活動させる支援：見合わせる場の工夫、個に応じた支援。

活動の姿と内容	個の活動を促す支援												
1. 本時のめあてを話し合う。 (1) 前時までに作った広場で遊ぶ。 ○ タイヤ、箱、雨樋を使って子供広場を作り、楽しく遊んだこと。 (2) 本時のめあてを知る。 ○ 活動の手順と方法を知ること。 めあて じぶんのすきなひろばをつくってあそぼう	I、活動への動機を高める支援 ・体験による前時学習の想起 II、活動の手順や方法を見とらせる支援 ・活動の手順を示した絵 ・素材（多種のタイヤ、ひも、波形プラスチック板、筒形ダンボール、穴あきダンボール板、積み木）他の提示 ・T、Tによる各場でのモデル演示 III、友と協調して活動させる支援 ・見合わせる場の工夫 A G：手を添えるなどの動作補助 B G：手順絵に目を向けさせる声かけ C G：場をイメージさせる声かけ												
2. 子供の広場で遊ぼう。 (1) 好きな広場で素材を選んで広場を作る。 ○ 楽しい遊び場を作るために、身近な素材をつなぎたり、積んだり、つるしたり高さをつけたり、ふさいだり、あなを開けたりすること。 <table border="1"> <thead> <tr> <th><タイヤ広場></th><th><箱広場></th><th><雨樋広場></th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>タイヤを山のようにつまみあげたり、並べたりひもでつるしたりする。</td><td>箱を様々な方向につないだり、箱に穴を開けたり、ふさいだりする。</td><td>雨樋の先に缶を置いたり、板にダンボールで柵をつけたりする。</td></tr> </tbody> </table> (2) 作った広場で遊ぶ。 ○ 作った広場に多様にかかわったり、友と一緒に楽しく遊ぶために、くぐったり跳んだり、ボールをころがしたり、渡ったりすること。 <table border="1"> <thead> <tr> <th><タイヤ広場></th><th><箱広場></th><th><雨樋広場></th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>友と一緒に上ったり、くぐったり、渡ったり跳んだりする。</td><td>友と誘いかけあったり修正したりして迷路をくぐる。</td><td>順番を守ったり、協力し合ったりボールを転がす。</td></tr> </tbody> </table>	<タイヤ広場>	<箱広場>	<雨樋広場>	タイヤを山のようにつまみあげたり、並べたりひもでつるしたりする。	箱を様々な方向につないだり、箱に穴を開けたり、ふさいだりする。	雨樋の先に缶を置いたり、板にダンボールで柵をつけたりする。	<タイヤ広場>	<箱広場>	<雨樋広場>	友と一緒に上ったり、くぐったり、渡ったり跳んだりする。	友と誘いかけあったり修正したりして迷路をくぐる。	順番を守ったり、協力し合ったりボールを転がす。	
<タイヤ広場>	<箱広場>	<雨樋広場>											
タイヤを山のようにつまみあげたり、並べたりひもでつるしたりする。	箱を様々な方向につないだり、箱に穴を開けたり、ふさいだりする。	雨樋の先に缶を置いたり、板にダンボールで柵をつけたりする。											
<タイヤ広場>	<箱広場>	<雨樋広場>											
友と一緒に上ったり、くぐったり、渡ったり跳んだりする。	友と誘いかけあったり修正したりして迷路をくぐる。	順番を守ったり、協力し合ったりボールを転がす。											
3. 本時の活動を振り返り、発表する。 ○ 表現を振り返り、発表すること。	A G：活動への誘いかけ B G：友の動きに着目させる声かけ C G：賞賛や励まし												

○ 学習指導協議会（2日目）メモ No.1

○ 学習指導協議会（2日目）メモ No.2

全 体 会（2日目）

○ あいさつ

学校長 田 崎 徳 友

○ 教科等発表

- 子ども自らが数理を求め続ける算数科学習指導

—— 数学的表現活動の活性化を通して ——

算数科部 重 松 宏 明

- パンフレットづくりの活動を通して
意欲的に書き進める国語科学習指導

特殊教育国語科部 落 合 純 哉

- 仲間とともに生きることのよさを味わう学級活動

—— 年間大主題構想に基づく

「スターシップ401号の大航海」の活動を通して ——

特別活動部 中 原 浩

- 表現する喜びを味わう高学年音楽科学習指導

—— ミュージカルづくりの活動を通して ——

音楽科部 山 本 麻 美

○ 全体講演

「これからの小学校教育の方向」

宇都宮大学教授 奥 井 智 久 先 生

— ヌ モ —

— メ モ —

○ あいさつ

副校長 楠 田 和 三

研 究 紀 要 の 部

生きる喜びを生み出す学習の創造(3年次)

—— 自分のよさを実感する表現活動の展開 ——

研究紀要目次

生きる喜びを生み出す学習の創造

—— 自分のよさを実感する表現活動の展開 ——

教頭 田 中 和 隆…114

楽しく自己の読みを高める物語文の学習

—— 自己の読みのよさを実感する目的的表現活動の展開（中学年） ——

国語科部 古 川 千 年…121

子供自らが言葉（表現）を生み出す低学年作文指導

—— 目的意識を明確にした場の構成を通して ——

国語科部 水 上 栄 一…127

楽しく読み深める低学年説明文の指導

—— 準体験化活動を取り入れた学習を通して ——

国語科部 佐々木 保 善…133

未来社会に生きる子供を育てる社会科学習指導

—— 個のこだわりが生きる活動を通して ——

社会科部 芋 生 修 一…139

子供自らが数理を求め続ける算数科学習指導

—— 数学的表現活動の活性化を通して ——

算数科部 重 松 宏 明…145

自然事象の意味づけをする子供を育てる理科学習指導

—— 生活体験を見直す活動を通して ——

理科部 安 永 純 二…151

自然とのかかわりを深める理科学習指導

—— 調べ方のねりあげ活動を通して ——

理科部 猿 渡 邦 彦…157

対象や自分への気づきを深める生活科学習指導

—— 子供自ら遊びを作り出す活動を通して ——

生活科部 山 下 浩 徳…163

表現する喜びを味わう高学年音楽科学習指導

—— ミュージカルづくりの活動を通して ——

音楽科部 山 本 麻 美…169

創造的に音楽を表現する喜びを味わう中学年音楽科学習指導

—— 総合的な音楽活動による題材構成を通して ——

音楽科部 津 本 修 一…175

えがく喜びを深める図画工作科学習

—— イメージ走査による再発想を取り入れた学習の展開 ——

図画工作科部 田 中 和 隆…181

消費生活に生きて働く力を育てる家庭科学習指導

—— 多様な見方・考え方にふれる体験的活動を通して ——

家庭科部 小 嶋 悦 子…187

子供自ら運動の楽しさを追求する体育科学習指導

—— 体験活動を生かした身体表現の創造を通して ——

体育科部 古 賀 良 和…193

実践へたかめる体験的活動を通して自己の生き方をつくりだす道徳学習指導

道徳部 池 田 隆…199

仲間とともに生きることのよさを味わう学級活動

—— 年間大主題構想にもとづく「スターシップ401号の大航海」の活動を通して ——

特別活動部 中 原 浩…205

一人一人の海外体験に根ざした帰国子女教育

—— 特性伸長指導を通して ——

帰国子女教育部 吉 永 玄…211

国際的視野を育てる帰国子女社会科学習指導

—— 海外在住体験を生かす活動を通して ——

帰国子女教育社会科部 柿 添 展 宏…213

基礎・基本をたのしく身に付ける帰国子女算数科学習指導

—— 多様な学習実態に対応できる包括的な題材構成を通して ——

帰国子女教育算数科部 秋 穂 章…219

自ら科学的な見方や考え方をつくる帰国子女理科学習指導

—— リサーチ・ワークの活動を通して ——

帰国子女教育理科部 吉 永 玄…225

生活力の基礎を育てる指導方法の研究

—— 自発的・自主的に活動する学習を促す（1次年） ——

特殊教育部 谷 口 慎 二…231

パンフレットづくりを通して意欲的に書き進める国語科学習指導

特殊教育国語科部 落 合 純 哉…233

ぼうけん遊びを通して運動の喜びを味わう基本の運動の指導

特殊教育体育科部 松 本 良 一…239

ダンス遊びの活動を通して生き生きと表現する音楽学習指導

特殊教育音楽科部 林 田 千 枝…245

研究主題

生きる喜びを生み出す学習の創造

——自分のよさを実感する表現活動の展開——

教頭 田中和隆

1. はじめに

子供の学習を、自分なりの思いから問いをつくって解決していく活動と、その状況や結果についてふり返っていく活動との連続による表現活動を展開すれば、子供は自分の身についていく力を実感するとともに、集団の中で生きていく自分自身への自信を感得することができる。

2. 主題設定の理由

(1) 新しい教育を創造する

教育の現代的な課題は、人間らしい調和のとれた成長・発達が妨げられがちな社会的状況のなかで、学校教育をどのように改善していったらよいか、主体的に対応策を探ることである。

教育を取り巻く社会的状況として、対人関係の基礎を学んだり基本的行動様式の素地を育んだりする家庭や地域の教育機能が低下してきていることがあげられる。また、知識や技能の習得を指向するあまり知育・徳育・体育のバランスのとれた教育がなされていないことや、あわただしい生活のリズムの中で、じっくりと自分自身を振り返って評価したり反省したりする機会が少なくなっていることも大きな問題である。人間らしい成長・発達をうながすためには、生きる意欲を旺盛にする教育や生き方の教育に重点をおくことが重要である。そこで私たちは、初等教育にあっては、豊かな感情・よき感情の教育が大切であり、子供一人一人に生きる喜び（達成感や成就感、効力感や有用感）を味わわせることが重要であると考えた。

これまでの教育では、子どもに受動的な学習態度を育てがちであった。態度面では静かに座って静かに話を聞くことだけを要求したり、内容面では一定の速さで理解したり表現したり操作したり、同じように記憶したりすることを要求したりしてきた。このことが、子供たちを学習に対して本当に主体的にできなかった原因ではないかと考える。この反省にたつて、個性（一人ひとりのよさ＝実態）に基づいて、それを伸ばしていくような指導が必要であり、また、全身で意欲的に関わられるような学習活動（表現活動）に組み換えていく必要があると考える。また、教師の関わり方としては、教師主導型の教え込みや引き上げをねらうものではなく、子どもの見方・考え方や表し方を優先し、自分で伸びていく子どもを支援するようなかたちに改善していかなければならない。教師の支援は、意欲をもって伸びようとする子どもの姿があるとき、あるいは意欲をもって伸びようとするが一定の抵抗があつてつまづいているとき発動される教師の指導である。

具体的な学習指導の展開にあたっては、学習成果を高めるために競争の原理を用いることがあった。学習の速さ、学習結果の正確さ、学習量の多さなどについて各個人間で比較し、競争をうながすような指導をすることがあった。そのような指導では、勝者は満足感を得るが、少なくとも半分の敗者は焦燥感や挫折感を抱く。その結果、学習への意欲を減退していくことがあった。このような反省に立ち、子ども自身の自己評価活動によって、一人ひとりが自分の学習状況について把握したり、充足感や効力感等の喜びを味わえるように指導法を改善していく必要性を感じる。

新しい学力観は、学習に対する関心・意欲・態度を育てることを重視している。それは、生涯に

わたって学びつづける国民の育成（生涯教育）をめざすところからの方針である。ところで、関心・意欲・態度はそれだけで独立して高めていけるものではない。獲得すべき力や学習内容がまずあって、それらとの出会いの場や追究の過程をとおして育てられていくべきものである。そのためには、子供一人一人を自己決定の場・主体的判断の場に立たせるような学習問題が採り上げられなければならない。そして、自己決定や判断の行為及びその結果が子供自身に深く自覚されていなければならない。その意味で、学習過程全体をとおして自己表現の活動が構成されていくことが望ましいと考える。自己教育力の伸長は、自己評価力を身につけることによって図ることができる。自己評価とは自分を振り返ったり制御したり方向づけたりしていく心の働きである。しかも、単に他者との比較によって相対的に自己の位置を知ることにとどまらず、自分のよさについての内なる実感に伴って進められるべき心的な作用である。自分の考えや行動を振り返っていく思考は、同時に将来に向けてどのように自分が変容していけばよいか方向性を探る思考でもある。その意味では、自己評価は内発的動機をつくっていく心的な作用であるともいえる。

以上のことから、新しい教育がめざす子供像を次のようにえがく。

- 心豊かに自分を生きる人間性をもった子供
- 社会の変化に主体的に対応できる能力・資質をもった子供
- 個性を発揮しながら豊かに自己実現していく子供

(2) 本校の研究のあゆみから——「生きる喜びを生み出す学習の創造」の第3年次である——

①第一年次の副主題 思い・願いをもって問いつづける活動づくり

平成3年度は、子供の生活に根ざした問いをつくりだし追究させることによって、一人一人が意欲的に学習活動に取り組む姿を引き出すことができた。残された課題としては、基礎的基本的な内容の習得をどの段階でどのように図ればよいかという学習過程の構成の仕方を明らかにすることであった。

②第二年次の副主題 思いをあらわしていくよさを実感する活動の展開

平成4年度は、体験的活動などによって生活に根ざした思いを抱かせ、子供たちの主体的で意欲的な追究活動を引き出すことができた。また、基礎的基本的事項の習得を図るプランとしては、課題追究に入る前に必要となる事項をまとめて身につけておくタイプと、課題追究の過程で必要に応じて身につけさせていくタイプとの二つを設定し、教科や単元・題材の特質に応じて使い分けていくようにした。その結果、学習の節目や課題を解決した終末においては効力感や有用感を味わわせることができた。

③第三年次の副主題 自分のよさを実感する表現活動の展開

平成5年度は、「よさ」を一人一人の子供がこれまでに培ってきた基礎的基本的な能力・資質の総体であると考え、その「よさ」を実感させるためのしぐみを教科や単元・題材にそくして明らかにすることが研究の目標である。そのため、学習過程を子供自身の表現活動の連続過程として設定し、その表現を振り返ったり新たな表現内容や方法を考えたりすることによって「よさ」が実感できるのではないかという仮説を立てた。具体的には、振り返り方や方針の立て方を各教科の特性に即してつくりだすことが課題となる。この課題の解明をとおして、子供自らが一層主体的に思いを実現していく喜びを味わえる学習指導をつくりだしたい。

3. 主題の意味

(1) 生きる喜びを生み出す学習

生きる喜びを、思いを自己実現していく過程や自己実現できた時に味わう快の感情であるにとらえる。これは、問題解決を成し遂げたという達成感・成就感にとどまらず、身についた力を自ら肯定的に評価する効力感・有用感としてあらわれる。それらは、子供が次なる学習や生活に飛躍しようとする意欲を生みだす。そして、この快の感情こそ思考や意志を深化・発展させていく際に重要な働きをする。その重要性をシュタイナーは次のように述べている。

「感情の働きがはずかっているなければ判断も意識されない。判断の客観的な内容は感情の営みの外に確固として実在する。しかし判断が正しいという確信は主観的な魂のうちに生じる。つまり、感情の働きがなければならぬ。行為が正しいと告げるのはだんじて外界ではない。事柄に関する判断は、私たちの内に閃く。しかし、なおかつ私たちとはかわりはない。正しい判断にはすなわち精神がともにあずかる。心の力で判断することが大切である。」

（『感覚を育てる 判断力を育てる——教師と父母のためのシュタイナー教育——』

ウィリ・エブリ著 鈴木一博訳 晩成書房 1991 東京）

快の感情はさらなる快の感情を求めるという前提に立つことが、子供を肯定的にとらえ、教育の可能性を想定する上で大切であると考ええる。このことから、感情としての「喜び」を味わうということは、それ自体が目的であると同時に、次なる学習に向かう意欲を生み出す契機となるという考えに立つことができる。したがって、生きる喜びを生み出す研究実践は、新しい学力観で中心に据えられている「意欲・態度」を育てていくための研究であるという主張を加えていく。これまでは、主として、学習の初めに抱かせる「思い」が意欲であり、それを単元・題材の終末まで持続させたり発展させたりしていくという考えに立っていた。それに対して、授業の初めから終わりまでが、次の学習に向かう意欲を育てていくという考えに立つことになる。

「生きる喜び」を生み出す「効力感・有用感」を次のようにとらえ、具体的には以下に述べる場面であらわれてくる。

「効力感」……学習によって自分が力をつけた（つけつつある）存在であることを実感すること

「有用感」……身につけた力で周りの人や環境に働きかけることができる存在であることを実感すること

① それぞれの子供が単元の初めにもった思いを実現していく過程で、自分のよさを発揮でき自分自身に価値を見いだした時。

- | | | | | |
|---|---------------------|-------|------------|-------|
| ア | 解決のための行為ができた | ————— | 技能が身につく喜び | （効力感） |
| イ | 分からないことが分かった | ————— | 知識が身につく喜び | （効力感） |
| ウ | 新しい知識を使って分かった | ————— | 理解が深まる喜び | （効力感） |
| エ | 分からないことを自分で考えた | ————— | 思考を巡らす喜び | （効力感） |
| オ | 自分の考えで判断できた | ————— | 対象を判断できる喜び | （効力感） |
| カ | 自分の考えを主張できた | ————— | 友と交流する喜び | （有用感） |
| キ | 自分が役立つ存在であることを実感できた | ————— | 対象に働きかける喜び | （有用感） |

② それぞれの子供が単元の初めにもった思いを実現したことで、やり遂げることができた自分自身に対して自分なりに満足することができた時。

- | | | | | |
|---|----------------------|-------|------------|-------|
| ア | 自分自身の力でやり遂げることができた | ————— | 思いを実現した喜び | （効力感） |
| イ | 自分が周りの人や環境に役立つことができた | ————— | 環境に働きかける喜び | （有用感） |

※ 上記の内容をそれぞれの学年で子供が自分のことばで語ることができれば、生きる喜びを生み出している姿と判断する。

(2) 自分のよさを実感する表現活動の展開

① 自分のよさとは

一人一人の子供がもつこれまでに身に付けてきた資質や能力の総体及びその傾向性である。
具体的には次のようなものが考えられる。

○感じ方	○思いの内容	○見方や考え方	○表現方法	○知識の量と内容
------	--------	---------	-------	----------

子供は上のようなこれまでに自分が身に付けてきたことと、解決すべき状況との差を見いだしたとき、向上心・探求心をいだく。この差を意識することによって感情が揺さぶられ学習の動機となる。

② 自分のよさを実感する表現活動とは

一人一人の子供が、自分のよさを発揮しながら「思い」を解決したり実現したりしていく中で、自分自身に身につけることができた（できつつある）力を自分自身へ価値づけていく行為のすべてのことである。この過程において、自分なりの思いを実現したいと思うことが何らかの形となって表れるため、自分の考えを形成したり、友達と相互に交流したりする中でさらによりよいものへ高めていこうとする自己評価の機能もあわせもつことになる。

ア. 自分のよさを実感する表現活動の成立要件

a. 自分なりに表現の目的をもつこと

- ・ 表したい「思い」を抱いていること
- ・ 表したい「主題や意図」を抱いていること
- ・ 表したい「見方や考え方」を抱いていること

b. 目的に向かって自分なりに解決したり、実現したりしていること

- ・ 自分なりに解決したり実現したりする方法を考えていること
- ・ 自分なりに解決したり実現したりしていく内容や配列を考えていること
- ・ 他の人に自分のよさをとらえてもらえるように考えていること

c. 解決したり、実現したりしたことについて自己評価を行っていること

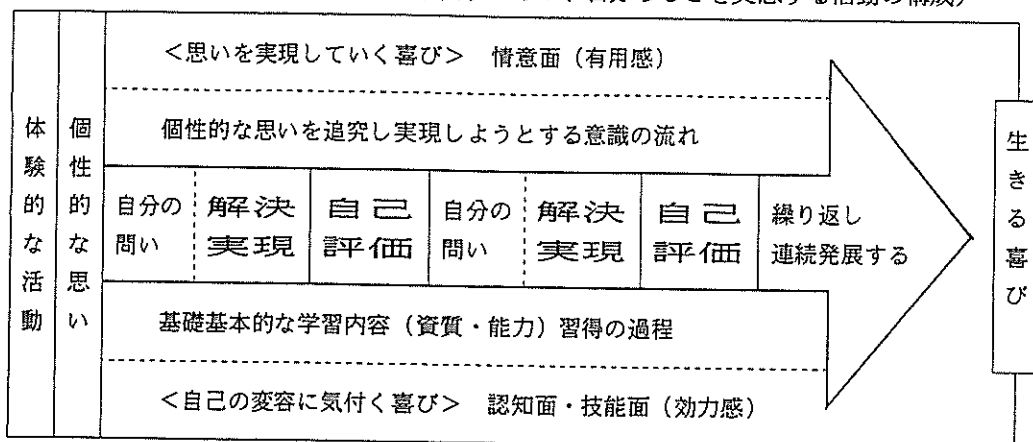
- ・ 自分自身が解決したり実現したりしたことを自分自身に価値づけていること
- ・ 目的に向かって、さらに解決したり実現したりする方法や内容や配列を考えていること

イ. 表現活動を行っている子供の姿

- a. 自分の思いを実現するために、粘り強く最後まで追究している子供
- b. 自分なりの見方や考え方、感じ方、行い方を確かにもっている子供
- c. 自分なりの見方や考え方、感じ方、行い方を他の人に分かるように出していく子供
- d. 友達の見方や考え方、感じ方、行い方を認め、受け入れながらも自分の見方や考え方、感じ方、行い方を高めていく子供

4. 学習指導の構想

(1) 基本的な学習過程（生きる喜びを生み出すための、自分らしさを実感する活動の構成）



(2) 学習過程及び学習指導を構成する際の基本的条件

条件の第1点目は、体験活動をととして「個性的な」「思い」を抱かせること。「思い」は対象への心情と働きかけたいという意欲である。

条件の第2点目は、思いから「問い」を抱かせること。「問い」は大きな問いとそれを解決するための小さな問いの集合である。その配列のしかた（問いを解決する順序）についての計画をもたせること。すなわち、何を学習（追究）するかという目的意識と、どのように学習を進めていくかということについての見通しをもたせて学習を進めていくことが大切である。

条件の第3点目は、自己の学習状況について振り返り、価値付けたり新たな解決策を考えたりする自己評価を行わせること。

①「思い」を育み、実現させる指導であること

ア、内発的動機によって、追究しつづける切実な自己目標をもった学習活動であること
イ、交流をととして自分の学習状況を価値付けていく学習活動であること

②「自分のよさ」を表現していく個性的な表現活動を保障する指導であること

ア、課題性をもった追究活動であること —— 生活から生まれる問題意識を抱かせる
イ、選択性をもった追究活動であること —— 問題意識にそって、主体的に追究させる
ウ、活動性をもった追究活動であること —— 自己評価可能な表現活動をさせる
エ、価値性をもった追究活動であること —— 生活に生きて働く力を育て、感じ取らせる

③「自分のよさ」を感じとらせるしくみをもった指導であること

ア、学習過程全体をととして感じとらせる。
イ、診断（フィードバック）と対策（フィードフォワード）によって感じとらせる。
ウ、自分自身に対して感じとらせる。
エ、自分の属する集団に対して感じとらせる。

※ 自己評価の機能

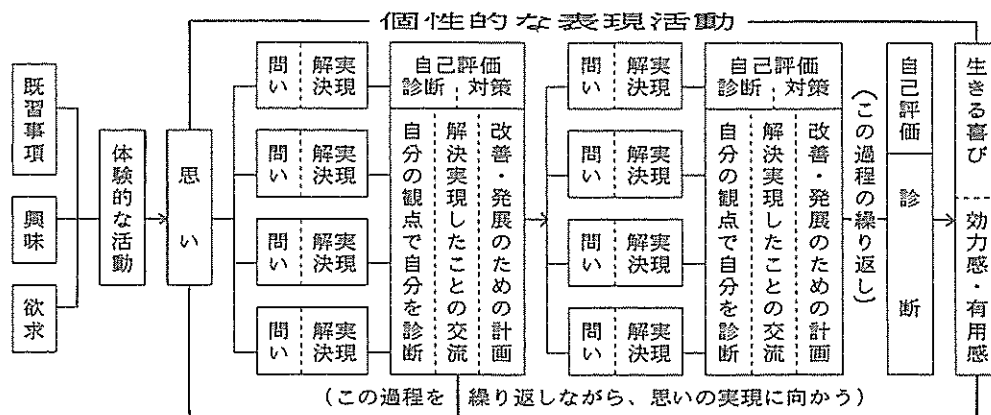
ア、〈 診 断 的 機 能 〉

- ・ 自分の思いはどのように実現されつつあるかふり返る。
- ・ 自分のよさ＝自分（達）の能力・資質がいかなるものであるかふり返る。
- ・ 自分のよさはいかに変容しつつあるかふり返る。
- ・ 自己の学習行為にたいして心情面から価値づける。

イ、〈 対 策 的 機 能 〉

- ・ 自分はどのように在りたいのか、方向目標を描く。
- ・ 自分は何ができるようになりたいのか、到達目標を描く。
- ・ 自分はどのようにしてできるようになりたいのか、方法を描く。

※ 自己評価の機能を生かしたしくみ



※ 想定される、実感する活動

自己評価活動		対 策 活 動
診断活動（交流活動）		
1. 思いの実現状況を実感する ・ 知ることができたこと ・ 考えたこと ・ 決めることができたこと ・ つくることができたこと ・ かき表すことができたこと など	○ 教師が提示する資料 やモデルとの交流 ○ 友の考えとの交流 ○ 自然事象との交流 ○ 社会事象との交流 ○ 家族の考えとの交流 ○ 文献や報道との交流	1. 自分なりの解決結果 を見通す。 ※ 個人目標の設定
2. 不十分さを実感する ・ 分からないこと ・ できないこと など	※ 結果を交流し合う ※ 違う原因を考える	2. 自分なりの解決方法 を考える。

(3) 学習指導の前提条件

① テーマ推進を支える、各教科等でのとりくみ

- ア 教材開発 ・ 単元構成の工夫や題材の開発
・ 新しい素材や資料の発見
- イ 指導計画の作成や学習形態の工夫
- ウ 評価・評定の方法についての工夫
- エ 学習環境の整備

② 日常の学習指導の充実

- ア 教科部会の機能を生かした指導
 - 授業に用いる資料の有効活用
 - 指導法についての研修会
- イ 一人一人に目を向けた指導
 - 個別指導の充実
 - 叱らないでよさを見つけて伸ばす指導
 - 教師との一体感を感じさせる対応

③ 楽しい学校環境づくり

- ア 機能的であること
- イ 整理整頓されていること
- ウ 温かい雰囲気をもつこと
- エ 一人一人がかかわれる環境
一人一人の顔が見える環境である
こと

④ 子どもづくり

- ア 行動のマナーの徹底指導
- イ 好ましい言葉づかいの指導
- ウ 子供同志の人間関係の把握と
調整によって情緒の安定を図る
- エ 学習訓練（学び方）の徹底
- オ 自主的・自治的活動の活性化

5. 研究の成果と今後の課題

(1) 各教科等での実践をとおしての成果

学習内容との出会いの段階で体験的活動を仕組んだことは、次のような効果があった。

第一点目は、子供の多様な興味や関心を引き出せるということである。例えば、社会科で自動車産業の学習の導入として自家用車（廃車）の観察や解体作業を仕組むと、自動車の構造や機能に気付き、組み立ての過程や工場で働く人の努力についての追究意欲が喚起される。また、使う人（消費者）の気持ちや要求についての追究意欲も喚起される。さらに、自動車産業の将来についての子供らしい夢や願いが生まれるのである。

第二点目は、個別的な思いや興味・関心に基付いて個別的な課題を設定したり追究したりしようとする意欲を生みだせるということである。前述の自動車産業の学習でいうと、生産者に目を向けて「どのようにしたらもっと良く売れるようになるか考えたい」という思いで、工程や販路、サービスについて調べていく子供がいるし、一方消費者に目を向けて「こんな車が安い値段で買えるようにするにはどうしたらいいか」という課題で生産の方法や購入方法を考えていく子供もいた。理科の学習では、個人的な課題意識に基付いて、実験・観察の方法や場を決定し、結論を自分なりの言葉で説明しようとする意欲的な姿が見られた。即ち、学習問題と追究方法の個性化が図れるのである。

各教科等の中心的な内容である思考力・判断力・表現力を身につけていく活動を、表現活動として設定したことによって、学習の目的と方法が子供一人一人にはっきりと意識され、意欲的な活動の姿を生み出すことができた。また、いつも自分の学習状況を自分で把握できるようになるので、自己評価がし易くなった。

自己評価が子供の必然的な活動として学習過程に位置づくことによって、自分のよさ即ち学習の仕方や身についた力を自覚できるようになった。例えば、図画工作科の絵で表す学習において、自分がかいた絵の中に入って遊ぶという自己評価の活動を仕組んだ。このことによって、一人ひとりの子供たちに、作品に描かれた世界の中でのイメージ走査をうながし、自分の作品の楽しさや不十分さを個別的にしかも自然に感得させることができた。そのことが次時への表現意欲を喚起していくのである。算数科では、身の周りの事象についての数学的表現活動を進めようとする動機づくりとしての交流・吟味活動を自己評価活動として設定した。その結果、生活的課題の解決意欲と数理の追究意欲とを止揚することができていった。

以上のことから、望ましい自己評価の活動の条件として、子供に意識的な必然性をもって受け入れられる活動であるということである。留意すべきことは、教師の側から指示される自己評価と異なることである。教師に指示されて行う自己評価では、子どもは教師の意に沿う結果しか導こうとはしない。それでは自分のよさを感得したり自分を高めていこうとする内発的動機を生みだすものとはならないということである。内発的な動機に基づいた活動であるときにはじめて自己表現や自己実現の喜びは深く味わえるのである。

具体的な成果と問題点については、各教科等の研究紀要を参照されたい。

(2) 今後の課題

これまでの研究では、子供一人一人の思いが生きるように柔軟な学習指導過程をつくり、学習の個性化を図ろうとしてきた。そのことについては一定の成果を収めてきたといえるが、それによって生じてくる学習進度の大きな個人差をどう解決すべきかという課題が生まれてきた。このことから今後は、多様な子供の実態に即して、教育課程全体を見直すこと即ち新しい時代に対応できる教育課程を創造することが課題となる。

楽しく自己の読みを高める物語文の学習

——自己の読みのよさを実感する目的的表现活動の展開（中学年）——

国語科部 古川 千年

1. はじめに

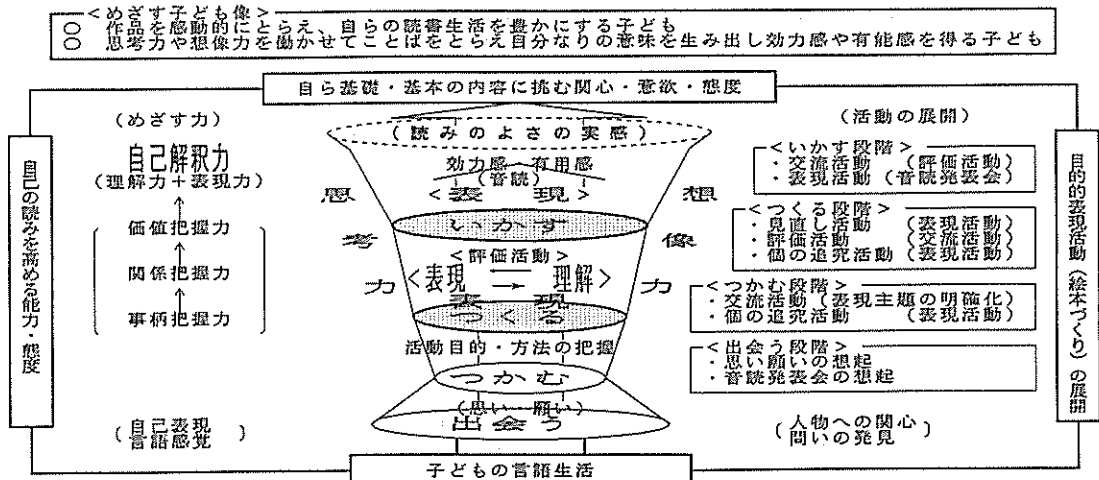
物語世界の形成過程に、表現目的を明確にした「目的的表现活動（絵本づくり）」を軸として、自己の読みの「表現→交流（評価活動）→表現」の一連の活動を展開していけば、子ども自ら意欲的に基礎・基本的内容に取り組み、自己の読みのよさを実感することができる。

2. 主題の意味と重要性

「自己の読み」とは、読み手の内面に生じる疑問や共感・反発・期待等を通して作品と対話しながらその子固有の物の見方・考え方・感じ方、価値判断等に裏付けられ、個性的な表現として外面化していく物語世界のことである。そこで、「自己の読みのよさ」とは、イメージ形成過程で、読み手の興味・関心・願い等に根ざした問いを発見し解決していく過程に生まれる見方・考え方・感じ方のことである。すなわち、自己の読みのよさを実感する過程は、作品を読んで生じる感動を原動力としながら、ことばとことばとを関係づけ自己の読み（考え）をあらわすこと、他者の考えに出会い自分とは異なる考え方を知ること、さらに自分の読みを見直し読みとった感動を強化したり新たな感動を生み出したりすることである。その過程において、語や文を知覚し関係づけながら意味を見出していくための思考力や想像力（①事柄把握力・②関係把握力）、③鑑賞力、④表現力が育ってくる。特に中学年の読みにおいては、人物によりそったり離れたりしながら行動を共体験し、人物の見方・考え方に共感したり批判したりする自己解釈力（②+③+④）の育成に培う。

「目的的表现活動」とは、自己の読みを表現する再構成活動であり、「表現物をつくり、他者に発表（表現）する」という、「表現」そのものが目的となる子どもにとって楽しい活動のことである。また、その目的的表现活動の展開とは、場面や人物に対して自分なりに意味づけた内容や価値判断を「表現」し、評価活動（交流）を通して自己の読みを個性化（強化）していく一連の活動のことである。この活動の展開においては、①子どもの興味・関心にそって、他者への表現という目的達成の過程において基礎・基本的内容に自ら働きかける姿が出てくる。また、②子どもの意欲を中核とし、他者に向かって自己の読みを明らかにしていく表現・理解の往復運動を繰り返しながら関係把握力を高め、作品への感動を深めていくことができる。さらに、③表現活動そのものが読みの楽しさや自由性を保証し、読みの個性化を促すことになる。

<目的的表现活動を通した読みの構想>



3. 学習指導上の問題点

- (1) 子どもたちの思い・願いを成就し、考えのよさ（見方・感じ方・考え方、価値判断等）を自分自身で実感する学習過程には成り得てなかった。そのため、活動構成が物語を読む喜びにつながらなかった。
- (2) 読みにおける再構成活動が子どもの目的的な表現活動の展開として機能せず、教師主導の読解学習におちいりがちであった。そのため、子どもの個性的な読みが保障されていなかった。

4. 問題点説明の方途

- (1) 子どもにとって魅力的で、相手意識を明確にした「目的表現活動」（再構成活動）が連続・展開していく活動単元を年間指導計画に数単元設定し、継続的に実践していく。

〔であう段階〕———・教材と出会い、思い・願いをもつ活動

〔つかむ段階〕———・活動の目的・方法をつかむ活動

〔つくる段階〕———・目的的に読みを再構成する活動（目的表現活動）

〔いかす段階〕———・他者に向かって発表し、有能感を味わう活動（発表会等）

※ 目的表現活動……表現目的・内容・方法の一体化した子どもにとって魅力的な活動を教材文（物語文）の特質に応じて設定する。（絵本づくり、紙芝居づくり、絵巻物づくり等）

- 〈目的表現活動の内容条件〉
- ・人物の気持ちが表現できる（絵やことば、動作等で）
 - ・場面の様子が表現できる（状況をあらわす語句や文で）
 - ・筋の展開が絵図（さし絵）の順序で表現できる

- 〈目的表現活動の方法条件〉
- ・他者への表現目的をもち、個性的な追究活動としての場がある
 - ・自己の読みとしてのまとまった表現物ができ、視覚化できる
 - ・表現物をつくる過程で、自由性、選択性を保障する

○ 絵本づくりの場合

〈絵本の構成要素・内容〉 ※ さし絵を有効に活用する

①表紙 ②紹介文 ③〔(a)絵図＋ふきだし＋(b)状況を表す語句等〕×X枚 ④解説文 ⑤裏表紙

- ・言ったことふきだし … 叙述されている会話を述べて書く（事柄的な読み）
- ・気持ちふきだし … 叙述されていないことを想像して書く（関係的な読み）
- ・紹介文…絵本を読む前の他者に知らせるあら筋と内容（400～600字程度）
- ・解説文…絵本を読んだ後の他者に伝える内容（200字程度）

- (2) 他者の捉え方と比較しながら自己の表現を豊かにしていく評価活動を位置づけた学習過程を設定し、目的表現物（絵本、紙芝居、絵巻物、脚本等）を作る場と時間の保障をする。
- (3) 基本的な指導のしくみ（絵本づくりを通して音読発表会を目的とした展開例）

○ 基本的指導のしくみ

	であう・つかむ	つくる	いかす
活動と内容	● 読むことに対する思い・願いの想起。 1. 教材と出会い、感想を出し合う。 (1) 全文を読み、感想を書く。 (2) 心にのこった場面の明確化 ・ 中心人物に手紙を書く。 ・ 中心人物に伝えたいこと 2. 全文を読み、学習の方法を知る。 (1) 全文を読み、大体をとらえる。 ・ あら筋、構成、全体的なイメージ ・ 学習したいこと 等 (2) 活動の目的・方法を知る。 ・ 「絵本づくり」と音読発表会の目的 ・ 一番伝えたい箇所からつくること（共通場面の設定） (3) 繰り返し音読の練習をする。 個人→グループ群読	3. 「絵本づくり」（目的表現活動）をする。 (1) 中心場面から共通につくる。 ＜一単位時間の学習の流れ＞（約60分） ① 場面の確認 ② 絵本づくり ・ 絵図にあらわすために読む ・ 絵図にあらわしながら読む ・ 絵図にあらわして読み返す ③ 絵図の交流と見直し ※モデル作品 ④ 叙述を根拠とした話し合い ⑤ 表現の見直し（付加・修正） ・ もっとよりよくしよう ⑥ 絵図の完成と音読の発表 (2) 好きな場面から「絵本づくり」をする。 ○ 絵本づくり ○ グループ群読の練習 ＜ 自己評価活動（自己評価活動）の展開例 ＞ ○ 表現一評価（交流）→表現活動の場の設定 ○ 交流における共通点・相違点の整理とゆきぶり発問 ○ 個性的活動への賞賛とことばかけ	4. 絵本を完成し、音読発表会の練習をする。 ※自分の考えが深まったことを自覚化させる。 (1) 2年生を招待し音読発表会をする。 ※ 効力感・有能感 (2) 学習してよかったこと、もっとよくしたいことを書き、学習をまとめる。 「楽しかった。」 「もう少し気持ちを込めて音読できるようにになりたい。」 「読みとったことをもっとよく分かるように伝えたい。」 「もう一回やってみよう！」
支援	○ 読むことに対する思い・願いの想起 ○ 作品の大体をつかむ読みの場 ○ 実感把握と共通の学習場面の設定	○ 表現一評価（交流）→表現活動の場の設定 ○ 交流における共通点・相違点の整理とゆきぶり発問 ○ 個性的活動への賞賛とことばかけ	○ 賞賛と支援 ○ 読みの変容の自覚化の場

5. 指導の実際と考察

(1) 単元 絵本をつくって2年生の前で音読発表会をしよう「ちいちゃんのかげおくり」

(2) 単元の意義

作品は、家族とやった「かげおくり」とちいちゃん一人でやった「かげおくり」の二つの様子を対比的に描写し、戦争という背景の中で人物の思い、とりわけ、ちいちゃんの家族への思いや平和への願いが表現されている。さし絵も多く場面設定も明確で、場面の様子と関連させ人物の心情を豊かに想像する力を育てるとともに、個性的な読みを生み出す上で適切な教材である。

(3) 目標

○ 音読発表会（グループ群読）を目的にし、絵本づくりの活動を通して自分の読みを友達と比べてたり重ねたりしながら進んでちいちゃんの気持ちや様子を読み深めることができる。

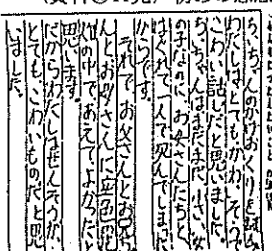
○ 場面の情景やちいちゃんの気持ちを考えながら、グループで協力しあって音読で表現することができる。

(4) 計画（約16時間）

段階	活動と内容	子どもの姿
で あ う	●「モチモチの木」の音読発表会の想起。 ※ 朗読テープ（野村胡堂）聞き、思い・願いを想起させる。 1. 作品に出会い、全文を読む。——約3時間 (1) 題名読みをし、通読して、初発の感想を発表する。 ○ 初発の印象をはっきり自覚すること。 ○ 「かげおくり」という行為に着目できること。 (2) 通読（音読）を繰り返し、自分なりの人物像をもつ。 ○ 自分なりの考えをもつこと。 ・ あら筋・作品の構成・ちいちゃん的心情について (3) 関心の集まった場所について感想を発表しあい、学習したいことについて話し合う。 ○ ちいちゃん的心情を読みとり、2年生に伝えること。	・ 音読で勉強したな。 ・ 音読発表会をしたいな ・ どんなお話だろう。 ・ かわいそうな話だ。 ・ 一人でかげおくりするようになったのはどうしてかはっきりさせたい。 ・ かげおくりをひとりでしたときどんな気持ちかはっきりさせたい。
つ か む	2. 絵本をつくって音読発表会をするという表現目的を知り、活動の内容と方法を見通す。——2時間 ○ 学習の方法について知り、見通しをもつことができる。 ・ 発表会はグループで行うことの確認。 ・ グループでの音読の練習と工夫。※読解（記述・相互評価） ※ 絵本の全体像を知り、中心場面（共通課題）からつくりあとは自由に作っていくことをはっきりつかむ。 （①絵図…絵＋ふき出し＋状況をあらわす語句、②音読ノート）	・ 面白そうだ。 ・ 学習の仕方をはっきりつかんだ。 ・ ちいちゃん気持ちがわかるようにしたい ・ 自分の目標をはっきりしたぞ。
つ く る	3. 絵本づくりを通して読む。——約9時間 (1) みんなでかげおくりしている場面の絵本をつくる。…① (2) ひとりぼっちでかげおくりをする場面の絵本をつくり、音読のしかたを工夫する。……③ <基本的な学習の流れ（一単位時間約60分）> ① 絵本にする場面を確認する。（自己目標把握） ② 自分なりに絵本・音読記号に表現する。（自己表現） ③ グループで音読の練習をする。（相互評価） ④ 絵図を発表し話し合う。（自己評価） ⑤ 自分の表現を見直す。（自己表現） ⑥ 付加・修正する。（自己表現） ⑦ グループ群読をし、音読のしかたを見直す。（相互評価） (3) 残りの部分の絵本をつくり、音読練習をする。……⑤ ① 残りの絵本をつくり。（自己表現） ② 音読発表会の練習をする。（相互評価）	・ 楽しい様子が分かるようにつくろう。 ・ ちいちゃんは何を考えているのかな。 ・ 自分でできたぞ。 ・ 友だちはどう思っているかな。 ・ よくできたぞ。 ・ グループで協力して、練習をしよう。 ・ もっと工夫しよう。
し、 か ず	4. 2年生を読んで音読発表会をする。—（課外）—2時間 (1) 発表のリハーサルをし、音読発表会の計画を立てる。（記述・相互評価） (2) 2年生を招待し、音読発表会をする。（記述・相互評価）	・ 2年生がよるこんでくれた。 ・ またつくってみたい。

(5) 子どもの反応と考察

①【であう段階】…「ちいちゃんのかげおくり」に出会い、「読んでみたい」「読み深めたい」といった思いをもつ。(1/16～3/16時)
 まず、学習した「モチモチの木」の朗読テープを聞いたり自分たちの音読発表会のビデオを見たりして、音読で読み深めた学習経験を思い出させ、もっとじょうずに音読できるようになりたいという思いをもたせた。そして、教師の精一杯の範読を聞かせ、学習したいことについて話し合わせるとともに、初めの感想を書かせた。また、この段階で、子どもたちには通読(音読)をくりかえさせるとともに絵等を活用しながら、「かげおくり」に着目させ、戦争をはさんでの、「家族みんなでのかげおくり」「兄とふたりでのかげおくり」「ひとりぼっちのかげおくり」といった場面の構成をとらえさせた。そして、「楽しいかげおくり」から、「悲しいかげおくり」への変化について話し合わせた。このことを通して、初めの感想にもあるように、子どもたちの関心は、ひとりぼっちのかげおくりの場面に集中し、ちいちゃんの気持ちや様子を深め、伝える方法を工夫して2年生に伝えたいという意識をもつことができた。



②【つかむ段階】…表現目的を明確にし、活動の内容と方法をつかむ。(4/16～5/16時)

この段階では、2年生に読みとったことを伝える目的を明確にして、グループごとに役割を決めて、気持ちを込めて音読する箇所を決めさせ、音読の練習をさせた。子どもたちは、ひとりでかげおくりをする場面を特に伝えたいという意識を持っている。そこで、「絵本をつくって2年生の前で音読発表会をしよう」と活動目的を教師の方から提案し、次のように活動・手順を示した。Ⅰ「絵本のさし絵」を黒板に22枚提示し、順序をはっきりする。Ⅱ写真①(絵本づくりの説明)それぞれのさし絵について、さし絵の様子がわかる言葉を教科書の文章から書きぬく。Ⅲ人物が話していることや思っていることは何か考えさせ、「言ったことふきだし」「気持ちふきだし」を書く。Ⅳ2年生を教室に招待し、絵本を見せながら音読発表会をする。(資料②)家族そろってかげおくり(6/16時)



T. このようにしたら、絵本ができそうだね。(さし絵のコピーを製本したものを提示)

みんなこんな絵本を作りたいですか。(子どもたちは意欲を示している)

T. これをつくって、2年生に見せて、音読発表会しようか。

③【つくる段階】…絵本作りを通して読む。(6/16～15/16時)

6/16時では、資料②のように、初めのかげおくりは楽しいかげおくりというとらえ方をし、叙述に即して「言ったことふきだし」に書くことができる。そこで、「心の中は、本当に楽しいのだろうか」とゆさぶりをかけると、先祖の墓参りの帰り道であることや、お父さんが出征する前日の日であることに着目しながら、お父さんや母さんの悲しい気持ちが「記念写真」に込められることに気づいた。その結果、資料②のさし絵にみられるように、父親の心の中を「気持ちふきだし」として、文脈にそって、個性的な読みを付加することができている。このことを通して、中心場面の活動の構えをもつことができ、絵本づくりの活動内容・方法をはっきりとつかみ、次時活動への意欲化を図ることができた。

——中心場面(ひとりぼっちのかげおくり)の絵本づくり——

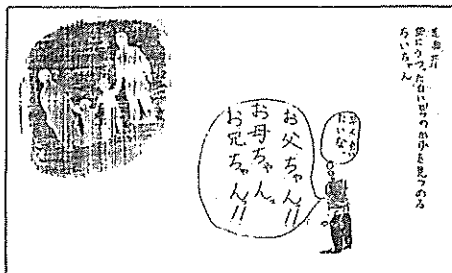


[illegible]

分析と考察 資料③（A児）のように、子どもは、ちいちゃ

〈資料④B児〉初めの絵本（7/16時）

〈資料⑤B児〉読みの変容（9/16時）



〈資料⑥M児〉 自分の絵本の紹介文

ちいちゃんのかげおくり

[illegible]

- 126 -

子供自らが言葉（表現）を生み出す低学年作文指導

——目的意識を明確にした場の構成を通して——

国語科部 水 上 栄 一

1. はじめに

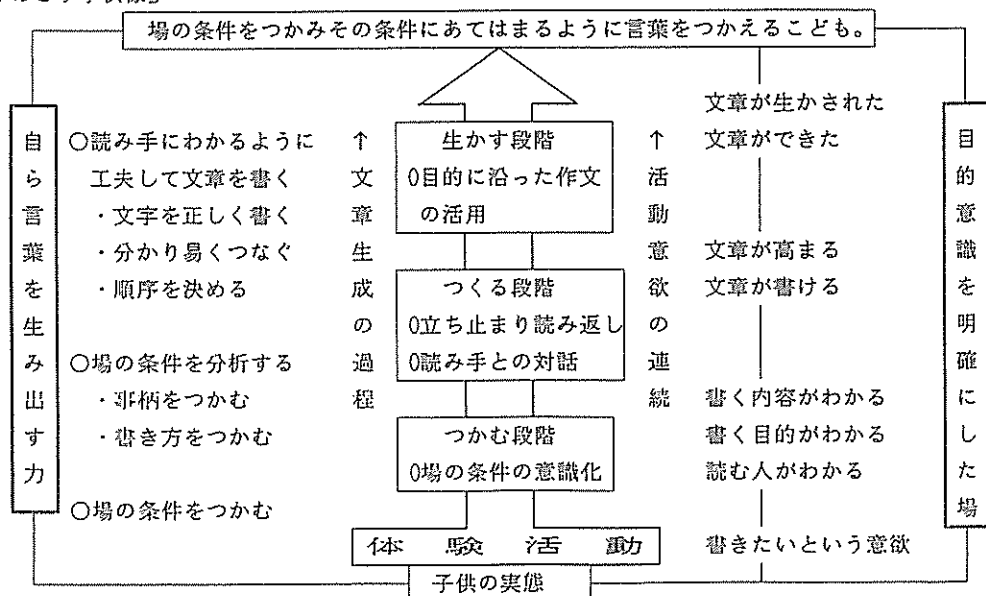
低学年の作文指導において、読み手、書く目的、書くべき内容が必然的に限定される文章表現の場を設定し、文を読み返ししながら取材・構想・叙述を一体として書き進める指導過程を仕組みば、順序を示したり細部を詳しく説明したりする言葉を子供自らが確かに生み出して行くことができる。

2. 主題の意味と重要性

子供自らが言葉を生み出すとは、文章表現の場の条件を認識することにより、子供自らが条件にあてはまるように言葉を創り出すことである。低学年では、順序を示したり細部を詳しく説明したりする言葉を、教師の指示や初めから決められた型にあてはめて書くのではなく、場の条件を満たすようにつかえることが「子供自らが言葉を生み出す」ことであると考え。自らが言葉を生み出す姿は次のような姿として表れる。①何を読み手に伝える文章を書くのかという場の条件をつかむ。②場の条件を満たすためには、だれに、何と何を、どのように書くかをとらえる。③読み手に伝えたいことがより良く伝わるように工夫して書こうとする。低学年では、この過程で順序を決める力、言葉をつなぐ力、正しく文字を書く力等を身につけていく。第2学年という発達段階においては、活動の意欲が連続しないため取材・構想・叙述を区別しながら活動していくことは難しい。そのため、取材力、構想力、叙述力とそれぞれを分けて身につけさせるのではなく、文章生成の過程にそってそれらを総合的に身につけさせることがふさわしいと考える。

目的意識を明確にした場の構成とは、読み手、書く目的、書くべき内容、という条件を明確にして書き手にそのことを意識化させるとともにそれらの条件の中に学習のねらいを達成できる要素を含ませておくことである。つまり、順序に気をつけて書く力を付ける目的があるときは、順序を表す必要のある場を設定し、様子を表す力を身につけさせたいときは情景を描写しなければならない場を設定することである。このことは、人から教えられて書くのではなく、自分の力でできることを実感する姿を生み出すことにつながり、本校テーマからも意義深いと考える。

「めざす子供像」



3. 学習指導上の問題点

子供の意欲、書く意識とは関係なく、常に取材・構想・叙述・推敲・処理の過程に沿った指導を押し付ける傾向があった。そのため、取材したことを文章として構想していくための型を教える指導はなされていたが、これまでの学習を生かしてその型を自ら作り出す学習は行われていなかった。

4. 問題点解明の方途

作文を文章生成の過程としてとらえ、その過程に次に述べるような、つかむ、つくる、生かすという三つの段階を設定する。

(1) つかむ段階・・・場の条件の意識化

〈活動〉 伝えたい、書きたいという表現の意欲をわきたたせるような体験的活動

書く目的や読み手を決定するための話し合い活動

〈方法〉 伝えたい、書きたいという表現の意欲をわきたたせるような体験の条件整備

順序・細部など書く事柄が明確で、伝達の目的と読み手がはっきりした書く場の設定

(2) つくる段階・・・目的にそった文章表現

〈活動Ⅰ〉 書く事柄を決め、構想を練り上げることも含みこんだ叙述活動

〈方法〉 ①順序を表す必然性を持つ場

手立て（口頭作文・絵図化による順序の整理、内容と接続語のカードによる色分け）

②読み手に伝えたいという意欲をもたせる場

手立て（微音読による読み返し、カード操作）

〈活動Ⅱ〉 対話活動により文章を練り上げる活動

〈方法〉 ①書いたものを読み手に読んでもらう

②読み手からの問いかけを受けての文章の練り上げ

(3) 生かす段階・・・完成した作文を活用する活動

〈活動〉 できた作文を書いた目的にそって読み手に読んでもらい活用してもらう。

〈方法〉 発表会コンクールなどの作文を活用する場。

〈基本的な指導のしくみ〉

	つかむ段階	つくる段階	生かす段階
活動と内容	伝えたい、書きたいという表現の意欲をわきたたせるような体験的活動。 ○この体験を伝えたい。 書く目的や読み手を決定するための話し合い活動 ○誰に伝えるか。 ○何を伝えるか。 ○なぜ伝えるか。	Ⅰ 書く事柄を決め、構想を練り上げることも含みこんだ叙述活動。 ○書くことはこれで良いか。 ○順序はこれで良いか。 ○事柄をつないでいく言葉はこれで良いか。 ○口頭作文とのずれはないか。 Ⅱ 対話活動により文章を練り上げる活動。 ○読み手はどのような内容を必要としているのか。	できた作文を目的にそって読み手に読んでもらう。活用してもらう。 ○作文が書けた喜び。 ○書いた作文が役に立った喜び。
手立て	○他へ伝えたいと思うような体験の条件整備。 ○伝える内容・目的が必然的に決まるような題材の設定	○絵図化による順序の確認。 ○口頭作文による構想立て。 ○微音読による読み返し。 ○カード操作による文章の修正。 ○読み手に実際に読んでもらう。	○発表会 ○コンクール ○その他作文を活用するための場の設定。

5. 指導の実際と考察

(1)単 元 おもちゃの作り方を説明しよう ―――第2学年・作文―――

(2)単元の価値

本単元は、偶然の出来事を思い出しながら書く生活文に比べて次のような価値がある。

- ① 楽しくつくって遊んだという経験と、おもちゃコンクールというめあてが文章表現をするときのエネルギーとなる。② 順序にしたがって書くということがすでに決まっている安心感がある。③目の前に工作した作品があり、作文をしている途中でも、何度でも手にとって見ることができる。④作り方を説明するため、2学年の内容である順序を書く必然性が生まれる。⑤書き手の主観で、勝手に省略することは許されず、必要な事柄についての正確な表現が要求される。⑥実用的な文章を書く力が身につく、日常生活の中でその力を容易に生かすことができる。つまり、工作で何かを作るという作業が、そのまま書く活動に直結していく、ここにこの単元の最大の特色があるといえる。

(3)目 標

①自分の興味に応じて簡単な遊び道具を作り、その作り方や手順、また、そのときの様子が読み手に良く伝わるようにことばの使い方が考えられた作文を楽しく書くことができるようにする。

②「作り方・遊び方・楽しさ」を友達に説明するという目的を明確にすることにより、説明するために必要な言葉や論を構成するために必要な言葉が子供たちが自ら見出していけるようにする。

(4)計画（約8時間）

ね ら い	活 動 と 内 容	時 間
<つかむ段階> めあての把握 書く事柄の把握 読み手の把握	(課外、動くおもちゃを作って遊ぶ。作った順序を絵に描いておく) 1. 動くおもちゃを作った体験をもとにして、作文を書くめあてについて話し合う。 ○ おもちゃの作り方や遊び方について書く。 ※ つくったおもちゃを展示し合うコンクールを開き、自分のおもちゃをくわしく説明するための文を書く意欲を持たせる。	1 時間
	2. 本文を読み書く事柄の順序をおおまかに構想する。 ※ 本文をもとに順序を描いた絵図とおもちゃの実物を振り返る。	1 時間
	3. 作品を前にしながら、実際に作文を書く。 (1) おもちゃのつくりかたについて説明する文を書く。 ○ どの順序でつくったか、どのつなぎ言葉をつかうと良いかつながりよく文をどう変えたら良いか。 ※ 口頭で作文させ書くたびに書いた文を微音読しながら文と口頭作文の一致やずれを確かめさせながら文をつながせる。	2 時間
<つくる段階> 漠然とした思いの文章化	(2) おもちゃの遊び方と楽しさについて説明する文を書く。 ○ どうやって遊ぶのか、遊んだらどう楽しいか。	
対話活動による文章の練り上げ	4. 読み手との対話を行うことにより文章を練り上げる。 ○ 順序は分かり易いか、言葉の間違いはないか、大切なことが抜けていないか ※ 友達の問いかけに答えながら文章を練り上げさせる。	1 時間
<生かす段階> つくった作文の活用	5. カードをもとに作文を清書する。	1 時間
	6. 作文をもとにした動くおもちゃの発表会をする。 (課外) 気に入ったおもちゃを友達の作文をもとにつくる。	1 時間
	7. ことばの学習をする。	1 時間

(5)子供の反応と考察

① 第1次 つかむ段階の活動

この段階のねらいは、おもちゃの作り方を説明するという目的を一人一人が持つことにある。そのために、実際におもちゃづくりをさせた段階でそれぞれのおもちゃを展示して、紹介させた。そのときの子供たちの間で次のようなやりとりがなされていた。

C1. C2君のおもちゃ面白そう、これで遊んでもいい？

C2. いいよ、でもこわさないようにしてね。

T. C1さんもそのおもちゃをつくってみたらC2君のおもちゃをこわす心配がないね。

子供たちは自分用に設計図と称した作り方を絵に描いたものを持っている。しかし、これはあくまで自分だけでわかるものであり、これだけでは作り方を伝えることにならなかった。

上記のようなやり取りが行われる状況をきっかけにして、すぐに本文「ぶんぶんごま」に出会わせた。その結果、子供たちは作り方を文に書けばよく分かってもらえることをとらえた。

考察 説明文を書く必然性を持たせるためにはまず、体験を通すことが必要である。子供の側から「友達のおもちゃをつくってみたい」という発言が引き出せたこともその体験があったからであると考え。更に、作ったという経験と展示、そして本文を読むという活動の間に時間を置かず一連の活動として設定することも文章化の意識を高める上で大切である。

② 第2次 つくる段階Ⅰの活動

この段階で実際に説明文を書き、それをより分かり易く練り上げていく。ここでねらいたいことは本文の型にはめて文章を書くのではなく、「作り方」という順序を内容としてもつ題材を書くことで子供自らが「まず、つぎに、そして」などの言葉を用いながら、自分で説明の型を作り上げていくことである。そのために、子供一人一人が持っている設計図をもとに各段階の作り方をカードに書き出していった。こうして書いたカードを自分で考えた言葉でつなぎながら読んで確かめ、更につないでは確かめるという活動の繰り返しを行った。



写真1 カードを貼りながら読んで確かめる

この声に出して読みながら書くという活動により次のように様々な言葉の選択がなされた。

I 児の例（つなぎ言葉を生み出した）

「まずこれだ」といって「まず」というつなぎ言葉のカードと材料のカードを貼る。「つぎに、つぎに・・・」と口でとなえながら「よし、これだ」と言って「つぎに」というつなぎ言葉のカードと作り方のカードを貼っていった、全部書き終わって再び読み返し「なんか『そして』が多くて おかしいな」とつぶやいて「そして」のつなぎ言葉を「最後に」という言葉に貼りかえた。

H 児の例（正しい順序に気がついた）

「それから」「さらに」というつなぎ言葉で説明しながら読み返していると「これはまだ早い」とつぶやいてカードの入れ換えを行った。

U 児の例（助詞の使い方の不自然さに気がついた）

「もう一つのわゴムのはしに、ガムテープのはしっこに、もう一つのダンボールのはしに、わゴムのはしをくっつけます。」という文を微音読しながら読み返して首をひねり「もう一つのわゴムのはしにガムテープをはって、ダンボールにわゴムをくっつけます。」と書き変えた。

この活動を通してM児は資料1のような基本となる説明の構成を作り上げた。

この問いかけに答えるかたちでカードを書き換え作文にしたものが下の資料3である。

資料3 書き上げたM児の作文

はじぬに、ざいりゅうとどうぐをよいにい
ます。
ざいりゅうは、ごみぶくろ、糸、ねんえ
です。
どうぐは、はさみ、セロテープです。
つきに、ごみぶくろをつぎのようにな
す。角形には、ひきでネリとります。
そのあと、糸を30センチくらい、
8本、はさみで切ります。
その糸を、角形に縫った、

角のところに、セロテープを1cmぐらい縫
て、よこにして、はさみます。
く、つけたいとを、中ばにあつめていとの
はし、を、セロテープでめめます。
といかに、中ばにあつめて糸をとめたセロ
テープが、見えるまで、玉よりうゑと、スミ
めのねんえにとびきます。
これでペラシートは、できあがりです。
いよいよペラシートをあそびます。
あそびかたは、まずねんえと、ごみぶくろ
をも、ていたねんえと、ごみぶくろを、高く
あげます。
すると、フッフツと、ゆ、くりおちてきて
ます。
あそぶと、ゆ、くりおちてくるので、自かん
ちがペラシートについているようにおも
へ、な、て、たのしくなりま

④ 生かす段階

わかれは、おれも、もうくたのき。作や
いて、思ひ出しなからふくと、きいにて、や
ど文か、つはりなした、おれを、みやあさ
さん、よん、作、てまじ、ました、やし
さん、じうすに、作、てく、あさした、うれ
さ、たふ、で、も、ち、こ、みやあささん、
わからない、こつがあつたのを、おれを、
におたすぬの、聞、ついで、く、また、に、そ
して、おれを見て、作、あさの、あし、した
てしたら、みやあささん、わが、てく、れき
した、さ、うの、じ、う、い、て、も、た、の、し
か、た、ぞう、

全体考察

をつなぎ、したことや見たことを順序良く書き表すことに不十分さがあった。しかし、本単元終了後には子供が教えられるのではなく自ら順序を表す言葉を用いながら説明のための文章を自分なりに作り出すことができた。これは、次のようなことが効果的だったからだと考える。

③ 書いたものを読み手に活用してもらいよくわからなかったところを問いかけてもらうことが自分では気がつかなかった不十分さに気づかせ、文章をより良くする上で効果的だった。

中学年、高学年の子供たちにとって説明するための文章を書くために身につけさせる内容の解明とその内容を子供が自然に身につけていくための題材の開発。

自らの力で読み手に伝えたいことが良く伝わる文章を生み出す子供をめざして。

大西道雄著『作文の基礎力を完成させる短作文指導』明治図書1991年

準体験化活動を取り入れた学習を通して

- 133 -

3. 学習指導上の問題点

(1) これまでも、絵本づくりの活動、新聞づくりの活動というように活動目的をもたせて読み進めるといった単元的な展開を図ってきた。しかし、次のような問題点がある。①単元全体の目的意識と単位時間の読み取りの目的意識とが連携していない。②絵本づくりや新聞づくりなどの絵本や新聞の中に表現されていくものは題材文の文章が転記されるということが多い。これは、書かれていることの大体や順序を読み取るという読解のねらいが強く出た指導がなされていることが原因だと考える。

(2) 子供たちが自分の生活経験や生活と結びつけて、表現されている内容を自分なりに納得し実感的に分かる楽しさを味わうことが少なかった。

4. 問題点説明の方途

(1) 子どもの関心・意欲を大事にした準体験化活動を取り入れた学習過程を「つかむ」「ふかめる」「ひろげる」の3段階で構成し、単元全体の活動目的と単位時間の読み取りの目的意識とが連続するように工夫する。

「つかむ段階」……活動目的（表現を目的とする。）をもつ活動。

この活動では、まず、題材文に出会う前にその題材文に関する体験活動を仕組む。

- ・題材文に関する体験活動の条件
 - 日常生活の再発見になるもの。
 - 子供たちが、日常よく興味をもっているもの。
 - みんなが参加でき、ゲーム性をもつもの。
 - 題材文の叙述の一部を再現するもの。など。

次に初発の感想について話し合い準体験化による再構成活動を提案する。

「ふかめる段階」……自分の読み取りを深め、実感的に把握する活動。

この活動では、次のような順序で再構成活動をする。

- ・準体験化活動
 - ①読み取っていく場面を音読と視写によって事柄把握をする。
 - ②既知の知識や経験と結びつけて類推したり類比したりして表現する内容をつくる。
 - ③文章表現をする。

「ひろげる段階」……活動目的を達成できた喜びを味わう活動。

この活動では、表現物の発表会や他のクラスの人に読んでもらって感想を聞いたりする。

(2) 表現されている内容を自分なりに納得し実感的にわかる楽しさを味わわせるために、書かれていることを確かめたり試してみたりする場合やつくった表現物の発表・展示の場を工夫する。

(3)基本的な指導の仕組み

過程	つかむ	ふかめる	ひろげる
	課題把握	課題追究	課題解決
主な活動と内容	1. 題材文に関する体験活動をしたり知っていることを話し合ったりする。 ○ 活動意欲の喚起。 2. 題材文と出会い、心に残ったことを書く。 ○ 何を読み取っていくかの把握と活動目的（準体験化活動による再構成活動）の明確化。	1. 読み取っていく場面を音読し視写する。 ○ 書かれている事柄の把握。 2. 既知の知識や経験と結びつけて準体験化活動をする。 ○ 言葉の意味の実感的把握。 ○ 読み取りの自己評価。 3. 再構成して書く。 ○ 文意の深まり広がり。	1. 読み取ってきたことの成果をみんなに知らせる。 ○ 活動目的の達成。 ○ 成就感・有用感。 2. 活動後の感想を書く。 ○ 学習のまとめ。
手立て	・ 体験活動の設定。 ・ 題名読み、初発の感想。 ・ 活動目的の提案。	・ 再構成活動をしていく手順の説明。 ・ 表現していく留意点の説明。 ・ 準体験化活動していく場の工夫。	・ 活動目標達成の場づくり。 ○ 表現物の発表会 ○ 展示会

5. 指導の実際と考察

(1) 単元 チンパンジー物語をつくろう(「ことば」をおぼえたチンパンジー) 2年生

(2) 題材の意義

文章は、チンパンジーが図形文字をつかってことばを覚えていく経過を時間の順序や事柄の順序を追って読み進めていく中で、チンパンジーの知能、十一種類の色を区別するようになったことに対して驚きを感じるとともに、人間の場合と比べて考えさせることができる。語りかけてくるような書きぶりになっていて、チンパンジーがことばを覚えていくことに対する筆者の感動が伝わってくる。したがって、準体験化による再構成をしながら内容を楽しみ深く読み深めていくことができる。

(3) 目標

- 書いてある内容を準体験化し、納得しことを意欲的にチンパンジー物語に書くことができる。
- どんなことが書かれてあるのか、視写したり話したりすることができる。
- 年齢や時間の経過を表すことばを押さえてたり、どんな手順でことばを覚えていったのかという順序などを考えながら読むことができる。
- 文章中における主語・述語の関係、指示語や接続語の役割に気付くことができる。

(4) 計画(約14時間)

時	活動と内容	時	子どもの姿
つかむ	1. 図形文字と物とを組み合わせたムゲームを体験したり、チンパンジーについて知っていることを話し合う。 ○ チンパンジーについて知りたいという思いを抱くこと。 思い チンパンジーのことについてもっと、知りたい。 2. 題材文に出会い、活動目的について話し合う。 (1) 題名を読み、通読して、初発の感想を発表する。 チンパンジーが、ことばをおぼえた経過が書かれていることのおさえ。 ○ 始めの印象をもつこと。 (2) 活動目的(「チンパンジー物語」を作っていくこと)について話し合う。 ○ 学習方法について知り、単元の見通しをもつこと。 ① 時間の経過を表すことばに着目して、大まかな粗筋を書く。 ② 一つ一つの場面に書いてあることと自分が知っていることや生活と結びつけて想像し、物語に作る内容を作る。 ③ 物語風に書いていく。 活動目的 どのようにしてチンパンジーがことばをおぼえるのかを読み取って「チンパンジー物語」を書こう。	1 1 1	・ 図形文字ゲームは、楽しいな。 ・ 合わせるの、案外難しいよ。 ・ チンパンジーは、頭がいいと聞いていたけれどどれくらいすごいのかな。 ・ チンパンジーのことを知りたいなあ。 ・ すごいなあ。よく覚えるね。 ・ 自分でも、チンパンジーが文字を覚えていった様子を詳しく物語に書きたいなあ。 ・ 物語をつくっていく順序が分かったぞ。
ふかめる	3. チンパンジーが、ことばをおぼえる経過を読み取って、チンパンジー物語をつくっていく。 (1) 時間の経過を表す言葉に着目して、物語ノートに大まかな粗筋を書く。 (2) 図形文字をつかったわけと図形文字を覚えていく様子を読み取ってチンパンジー物語に書く。 ① 図形文字を作る。 ② 図形文字をつかって、チンパンジーが、文字を覚えていく様子を読み取って、物語に書く。 (2) チンパンジーのアイが、図形文字をつかったものの名前を表すことができるようになったことを読み取り、チンパンジー物語に書く。 (3) アイが図形文字をつかって色の名前を表せることを読み取って、物語に書く。 (4) アイが、自分から進んでことばを使うことができるようになったことについて読み取り物語に書く。 (5) アイがことばを覚えて、使うことができるようになったことについて読み取り物語に書く。 (6) アイが学習したことをまとめ筆者の願いを読み取って、物語に書く。	1 2 1 1 1 1 1	・ 年齢に気を付けて読んでいくと、大体の語の筋が分かるよ。 ・ 図形文字をつくるのは楽しいなあ。 ・ 教えるというところは、記号と物とが合うようにいうことだなあ。 ・ 覚えるということは何回しても同じように合わせることができるということだなあ。 ・ 色の名前も覚えるなんてすごいな。 ・ チンパンジーが、自分から「ことば」を使うなんてすごいな。 ・ 気持ちが表せたらうれしいのにね。
ひろげる	4. 物語を完成し、みんなに発表をする。 5. 「チンパンジー物語」をつくってきた感想を書く。	2 1	・ 物語を完成することができたのうれしいなあ。みんなにわかってもらってうれしい。

※ チンパンジー物語という「物語」とは、作者が見たり聞いたりしたことや想像したことを土台にして、ある人物や事件について筋道を立てて書いた散文の文学作品という意味ではない。子どもにとっては、お話をつくるという目的的な活動であるが、あくまでも、自分の知識や経験と結びつけて内容を想像し、自分なりに納得したことを表現していくことをねらいとする活動である。

① [つかむ段階] …どのようにしてチンパンジーが言葉を覚えていくかということを読み取って、物語をつくっていくという活動目的をもつ。(1/14～3/14時)

まず、9種類の図形文字とそれに対応させる物の絵を準備し図形文字ゲームをした。図形文字ゲームとは、はじめに物の絵を見せてそれと対応して図形文字を見せる。図形文字が何を表しているかを示しておくのである。つぎに、今度は、図形文字だけを見せてそれに合う物の絵をさがす。正しく対応づけられるかどうかを競うというものである。また、図形文字だけを見せてそれに対応する物の絵をさがさせるということもした。

(写真①) 子供たちは、図形文字と物とを合わせようと夢中になっていた。ゲーム終了の後、どれだけ図形文字と物とを正確に合わせることができたか答え合わせをしていた。正解のときには、歓声が上がった。(資料①、写真②)

このようなゲームをした後に、チンパンジーについて知っていることを話した。「チンパンジーもそれ(図形文字と物とを対応させること)ができるんだよ。」と言うと驚きの声をあげていた。そして、チンパンジーについて知っていることは「木に登る。」「物を取る。」「枝をつかってアリをとる。」「人間に少し似ている。」などの発言があった。実態調査で、チンパンジーについて知っていることを書かせたときチンパンジーは賢いと書いていた友だちがいたことを紹介したら、「もっとチンパンジーについて調べてみたい。」という発言が聞かれた。そこで、題材文の題名読み通読をし、初発の感想を発表した。

子供たちは、チンパンジーが本
当にことばを覚えることへの驚き
やどうしてそんなにチンパンジー
が覚えらるのか不思議だという
感想をもった。(資料②) そこで
「どのようにしてチンパンジーが
ことばを覚えていったか、チンパ
ンジー物語をつくって紹介してい
こう。」という活動目的を提案し
た。

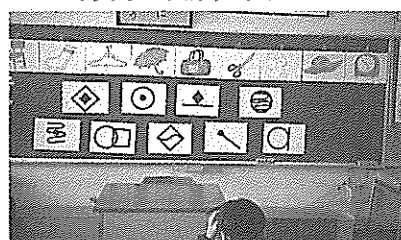
<物語を作っていくときの手順>

①時間を表すことばに目をつけて大まかな筋を書く。②書いてあることが実際にどうすることかをやってみて想像する。③確かめたことや分かったことを物語風を書く。※ 物語にしていくなかに考えておくこと。=○「」会話をに入れてみる。○様子や動きを書いてみる。○気持ちを書いてみる。

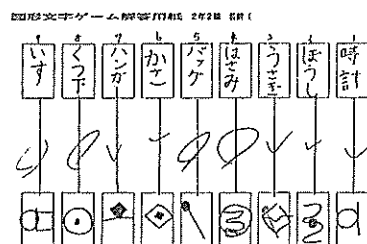
子供たちは、もともとお話作りが好きであり、物語を作っていくということに意欲を示した。

分析と考察 自分が実際に図形文字ゲームをする中で、図形文字と物とを対応させることは簡単なことではないことを身をもって知った子供たちに、実は、チンパンジーもそれができるということを話していくことによってもっと知りたいという思いをもたせることができた。初発の感想の中には、自分

写真① 図形文字ゲーム



資料① ゲーム解答用紙



写真② 正解して喜ぶ子ども



資料② 体験後に題材と出合って書いた初発の感想



の妹を引き合いに出してチンパンジーのすごさに驚いている。それは、題材文に関する体験活動（記号体験）を仕組むことによって、物と記号との間には直接的な関係はない、約束ごととして覚えるしかないのだという言葉学習の原点になる体験をして、言葉を覚えることの難しさや物と記号を関係づけて理解することが難しいということが分かったからである。だから、子供たちの目的意識は、どのようにしたら言葉を覚えるのか、チンパンジーはどのようにして言葉を覚えていったのだろうかという本質的な方向へ向けられたのだと考える。さらにこのことは、題材文の予備知識をもたせたことにもなっている。

②「ふかめる段階」…書かれていることをやってみて、*ワッ*がことばを覚える経過を読み取り物語をつくっていく。(8/14時間)

本時読み進める場面は、筆者が実際に図形文字をつかって、チンパンジーがいつも遊んでいる物の名前を教えるという場面（光村図書P54L3～P55L1）である。ここでは、筆者が教えるのに対してチンパンジーが覚えるのであるが、内容を読み深めるためには教えるとおぼえるという言葉の意味を実感的にとらえることが大切である。つまり、教えるということは、まず、教えたい物を見せてそれに合う図形文字を対応して見せることを何回もくり返すということである。おぼえるということは、物を筆者が見せたとき、チンパンジーが正しく図形文字と対応させることができたことである。このとき、物の名前をおぼえたと判断できるということである。そして、順序をおさえて自分なりに表現できたとき、はじめて実感的に分かる力が育っているということができる。

そこで、まず、本時読み進める場面を音読し、「……こと」という文末で何が書かれているか視写した。次に、子供たちはどのようにして物の名前を覚えていったかということ、前時で作っておいた図形文字と物のカードをつかって、チンパンジー役と筆者の役になってその様子を想像しながら楽しくやっていった。例えば、子供たちはアイと筆者とのかかわりをやっていく時何回も何回も自分が作った図形文字と物のカードを同時に見せて、一生懸命にアイに教えているしぐさをしていた。また、アイになったつもりで一生懸命に目を見開いて覚えようとしているしぐさをしていた。そして、どのようにしてアイが物の名前を覚えていったのかを物語風に作っていった。

分析と考察 子供たちは、資料③のように一文一文をそのまま視写するのではなく、「……こと」という条件が加わっているために本文を要約した形で書いている。これは、教科書に書かれていることそのままに書き写すということだけでなく、大事なことを落とさずにまとめるという思考が働いている結果だと考える。このようにどんなことが書かれているかをとらえることができています。しかし、この段階は、まだ事柄把握の段階である。

次に、資料④の子供たちが作った物語文をから次のようなことが言える。それから、まず、つぎに、そして、さいごとと教えていった経過と覚えていった経過を順序をあらわすことばをつかって表現し

資料③ 視写した文

チンパンジー物語用紙

(1) この図形文字をつかって、チンパンジーにいつもあそんでいるものの名前を教えたこと。
(2) たとえば、コップは、であらうし、ちびくろは、であらうと教えたこと。
(3) わたしが、コップを見せたとき、アイが、のボタンをおせば、チンパンジーは、コップの名前をあらわして、いるとおぼえたことになること。

写真③ 筆者になって図形文字をアイに見せる子ども



写真④ アイになって図形文字を覚える子ども



ている。これは、本文のそれから・たとえば・そこでという叙述に即して自分なりに順序立て、チンパンジーが物の名前を覚えていった経過を書いたものだと考える。次にマークとコップをいっしょに見せてやなんどもいってというように、筆者が教えるということは何回も物と図形文字とを合わせて見せることだということを実感したものだと言える。そして、アイがのマークを見せるというところは、本文ののボタンをおせばという叙述を、物（コップ）と図形文字を対応させることができたことを見せるという言葉に置き換えて自分なりに納得したものである考えられる。さらに、アイがわからなかったところを教えますとかおぼえているかどうか、もんだいを出しますというところは、子供自身が経験している学習場面と結びつけて、チン

資料④ 準体験化して作った物語文

それがこの図形文字をつか
て、こはを教えます。
まず、これがこの図形文字か
おぼえさせます。たとえば、わ
が。
のマークは、コップだよ。
とマークとコップをいっしょに見せて
なんどもいって、おぼえさせます。
つぎに、わたしがコップを見せた
とき、アイがのマークを見せる
アイは、コップだとおぼえた、と
になります。
そしてアイがわからなかったこ
ろを教えます。
さういふに、おぼえているかどう
もんだいを出します。

パンジーに熱心に物の名前を教えている筆者の熱意まで感じ取ることができている。このように、準体験化活動は、書かれている内容を子供たちなりに実感をもって分かる分かり方をさせることができると言える。

③【ひろげる段階】…物語を完成させた喜びを味わう(12/14時間)

資料⑤物語が完成したことの喜びを表す学習後の感想

子供たちは、説明文されている内容を自分で想像したり自分なりに納得したりしたことをチンパンジー物語として書きつづけていった。はじめにもった活動目的を達成して、自分にも教科書に書かれている説明文の内容を自分の身近な事象と結びつけて物語にしていけることができた喜びを味わうことができた。(資料⑤、写真⑤)

6. 全体考察

説明文と出会わせる前に、その題材に関する体験活動をさせることは、その題材でどのようなことを読みとらせたいかという

私は、このおぼえたチンパンジーを
パンジーで、もなん年かすれば、文字を
おぼえるというところ。きょうかしの
かいてあだけれど、どういふふうにか
うかがい、かきませんで、したけれど、
うさやうてみて、よううか、わかれまし
それ、もう一つ、わかれ、た、わかれまし
それは、じいじ、おや、みたり、チンパン
かたり、を作、て、みたり、きょうか
もの、で、な、い、か、出、て、き、ま、し、た、そ、し、て
チンパンジー、の、か、た、り、を、か、き、お、わ、た、あ
と、み、な、か、
と、私、た、ち、か、い、た、も、の、か、た、り、を、こ、し、し、つ、に
お、い、し、た、か、ん、さ、う、な、か、い、て、も、ら、お、つ、
と、い、き、し、た、そ、し、と、か、ん、さ、う、な、を、み、ん、で
す、こ、い、な、と、お、も、た、こ、が、あ、り、ま、す、
そ、れ、は、す、こ、の、文、が、な、い、こ、と、で、す、そ、し、
て、こ、の、こ、ん、ご、ん、で、い、る、こ、と、で、す、こ、も、
こ、の、へ、ん、き、ま、う、は、た、の、し、か、た、で、す、。

教師側からのねらいと子供たちの活動目的とを一体化させることが可能であり内容読み取りのための予備知識をもたせることができる。したがって、子供たちの読み進めていこうとする意欲を喚起し、持続することができると考える。次に、自分の知識や経験を想起し書かれている内容を具体的に想像させていった準体験化活動を仕組むことは、子供たちの説明文を読む抵抗をやわらげ説明されている情報内容の新鮮さやその中に含まれている新たな意味を実感的に理解させることができる。と同時に、低学年の理解指導の重点である順序に着目していくことができる。

今後は、説明文の特質に応じた表現目的の設定のあり方を究明する必要がある。

7. おわりに

さらに説明文を読む楽しさ、分かる楽しさを味わう子供を求めて。

<参考文献> 倉澤栄吉 著『倉澤栄吉国語教育全集』12巻 1992

写真⑤ 物語の完成



未来社会に生きる子供を育てる社会科学学習指導

——個のこだわりが生きる活動を通して——

社会科部 芋生 修 一

社会科

1. はじめに

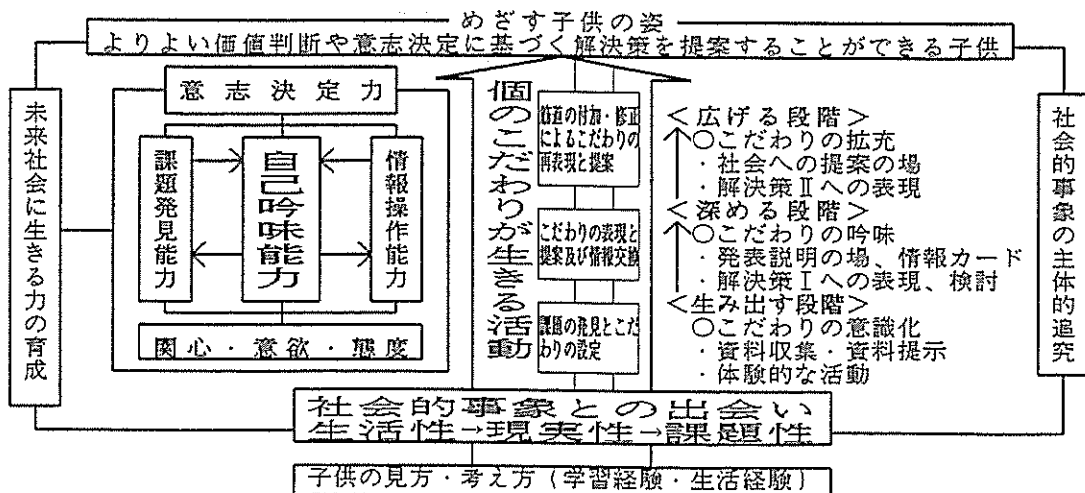
社会的事象に内在する問題点や課題を解決する過程において、解決策の中核となる考えやその筋道を多面的に検討し、自他の考えのよさを取り入れた解決策に高めていく活動を行うことで、よりよい価値判断や意志決定を行い、社会を創造する楽しさを味わうことができる。

2. 主題の意味と重要性

未来社会に生きる子供を育てるとは、社会的事象の変化の中で自己の課題を見出し、既存の経験を生かした見方・考え方を大切にしながら、よりよい価値判断や意志決定に基づく解決策を提案していくことができるように支援することである。具体的には次のような姿を考えている。①社会的事象の発展の過程や仕組みを調べ、その意味をとらえる。②課題に対するこれからの社会的事象のあり方を提案する。③多様な解釈や価値観の存在を認める。④自他の考えを吟味し、自分の考えを論理的に説明する。⑤未来の社会を創造する楽しさを味わう。このような子供には、価値的な考えや行為を選択・判断し、解決策として表現していく意志決定力が必要である。この意志決定力を育てるには、①社会的事象に対する創造的な関心、意欲、態度を中心に、②解決策を磨き合い、高めていく能力（自己吟味能力）③社会的事象の問題点や課題を発見する能力（課題発見能力）、④課題解決のための情報を収集・選択する能力（情報操作能力）といった能力を培っていくことである。それは、よりよい社会生活を目指して人々とのかかわりを深め、未来の社会をつくる主役としての立場を自覚させるとともに、新しい学力観で重視する社会的判断力をもった子供を育てる上からも意義深いものである。

個のこだわりとは、問題や課題に対する解決策を構成するときに、既存の経験に基づいた見方・考え方から生まれた、最も中核になる考えのことである。そして、個のこだわりが生きる活動とは、解決策における中核となる考えやその筋道を多面的に検討し、自他の考えのよさを取り入れ、より価値的な解決策に高めていく活動である。この活動は、こだわりやその筋道を解決策として表現し検討するため、自分の考えを振り返る診断的評価機能を有している。また、自他の考えのよさを取り入れる過程を設定するため、友達とのかかわりの中からよりよい価値判断や意志決定が行われるといった対策的评价機能を有している。したがって、より価値的な解決策を提案することができるとともに、追究の過程で得た自分のよさや可能性を実感することができるといった意義がある。

<主題の構想>



3. 学習指導上の問題点

- (1) 追究対象としての社会的事象が、過去からの発展や現状の仕組みといった面に限定され、知識・理解を目的的に追究していくがために、自分の生活現実に密着した緊急の追究課題として意識されなかった。そのため、社会を生きていくために必要な価値判断や意志決定の力を十分に育てることができないとともに、社会をつくる主役としての自覚を促すこともできなかった。
- (2) 誤答をすぐに排除してしまうことが多く、子供の先行経験から生まれる見方・考え方を大切にしたい追究のあり方を認めた学習の展開が十分でなかった。そのため、自分の考えのよさ（こだわり）を生かした主体的追究やよさを実感することが十分に行われていなかった。

4. 問題点説明の方途

- (1) 次の順序で社会的事象に出会い、過去や現状を踏まえた未来志向型の追究課題を設定する。
 - ①生活性…体験的な活動によって社会的事象を身近なものとしてとらえ、興味・関心などをもつ。
 - ②現実性…社会的事象の過去からの発展や現状に出会い、社会的事象の仕組みや意味をとらえる。
 - ③課題性…社会的事象における問題点や課題に出会い、未来志向型の追究課題を設定する。
 - (2) 個のこだわりが生きる活動を以下のように構成し、学習過程に位置づける。
 - 生み出す段階…社会的事象の問題点や課題を発見し、こだわりをもつ活動（こだわりの意識化）。
 - ①自分とのかかわりにおいて社会的事象をとらえ、社会的事象の現状を追究する（生活性・現実性）。
 - ②追究した現状の中から課題を見出し、その解決のためのこだわりを設定する（課題性）。
 - 深める段階…こだわりやその筋道を表現し、互いに吟味し合う活動（こだわりの吟味）。
 - ①調査・資料収集などをもとに、こだわりやその筋道を解決策Ⅰに表現する。
 - ②こだわり別に4～6人の班を作り、それぞれのこだわりや筋道を提案し、意見を交換する。
- ＜提案する場の条件＞
- それぞれの班が同時に発表し、子供の興味・関心によって発表内容を選択できる活動的な場。
 - 各班の発表に対する自分の考えを情報カードに表現して、考えを交流する情報交換の場。
 - ③他の班の提案や情報交換で得た考えを吟味し、自他のよさを取り出す。
- 広げる段階…付加・修正を加え、より価値ある解決策に高めていく活動（こだわりの拡充）。
 - ①自他のよさや友達の思いを取り入れ、解決策Ⅱとしてこだわりやその筋道を再度表現する。
 - ②こだわりやその筋道を表現した解決策Ⅱをもとに発表会をしたり、社会に提案したりして、効力感・有用感を味わう。
- (3) 基本的指導のしくみ

階	生み出す	深める	広げる
学習活動と内容	1. 事象に対する自分の思いを取り出し、現状を追究する ○かかわりの明確化 ○事象の現状の把握 2. 問題点や課題を取り出し本質的追究課題を設定する。 ○こだわりの意識化	1. 観察や調査によりこだわりを解決策Ⅰに表現する。 ○こだわりやその筋道の表現 2. こだわりを議・辯する。 ○こだわりやその筋道の提案 3. こだわりを見直す。 ○自他のよさの取り出し	1. こだわりやその筋道を解決策Ⅱに再表現する。 ○自他のよさの付加・修正 2. 解決策の発表会や社会への提案をする。 ○解決策の発表 ○解決策の実践化
手立て	○体験的な活動・見学・調査・観察・作業 ○追究対象とので出会わせ方（生活性→現実性→課題性） ○現状の問題点や課題の提示	○解決策Ⅰへの表現 ○班による検討の場 ○こだわりの発表・説明の場 ○情報カードによる意見交換 ○こだわりを見直す場	○資料収集、分析 ○情報カードの活用 ○解決策Ⅱへの再表現 ○発表会の場の設定 ○社会への提案の場の設定

5. 指導の実際と考察

(1) 単元 これからの自動車工業－第5学年－

(2) 単元の意義

本単元で取り上げる自動車工業には、流れ作業や分業、関連工場との結びつきなど生産向上の工夫や努力が多様にみられる。また、貿易摩擦や円高不況によるこれからのあり方が問われている。そこで、生産向上の工夫をとらえた上で、今後の自動車工業のあり方を課題とし、多様なこだわりを吟味する活動を設定する。そして、その過程で得た解決策を社会に提案していくことで、よりよい価値判断や意志決定の力を培うとともに、社会をつくる楽しさを味わうことができる。

(3) 目標

① 自動車に対する自分のかかわりや自動車工場の生産向上の仕組みの中から、自動車工業の問題点や課題を見出し、意欲的に今後の自動車工業のあり方について考えることができる。

② 自動車分解や工場見学などの体験的な活動から得た見方・考え方からこだわりやその筋道を表現し、そのこだわりが生きる活動を行っていくことで、追究の楽しさを味わうことができる。

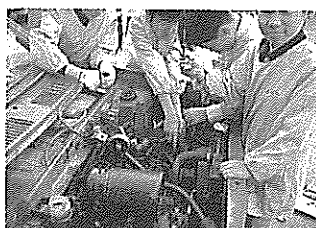
(4) 計画（約10時間）

階	ね ら い	活 動 と 内 容	配時
生 み 出 す	○自動車工業に関心をもち、かかわりを明らかにする。 ・自動車とのかかわりをもつ ○生産の工夫や努力を調べ、課題を設定する。 ・新たな課題の発見と追究の方向としての問題設定 ・こだわりの設定	1. 自動車に対する思いや自動車の分解から、自動車工業の現状を追究する視点をもつ。 ○自動車に対する自分の思いを語ったり分解作業を行ったりして、自動車工業の現状を追究する意欲をもつ。 ・自動車は生活を豊かにしてくれる便利なもの－どんな構造になっているのか→たくさん部品があるので、組み立てるのに大変だ→どの様にして組み立てているのか、調べてみたい。 ①大量の自動車を生産する仕組み ②速く自動車を生産する仕組み ③性能がよい自動車を生産する仕組み 2. 見学を通して自動車生産の様子を意欲的に調べ、大量生産の仕組みと本質的な課題を明らかにする。 ○見学や調査を行い、生産の仕組みをまとめる。 ○大量生産の仕組みについて話し合い、新たな追究の課題と解決へのこだわりをもつ。 ・大量生産の仕組みと生産高の現状→販売量の減少 <追究課題> もっと自動車が売れていくためには、自動車工業は今後どうあるべきか。 ・新車の開発、・安い車の生産、・貿易の拡大・開発	2 ② 2 計 ②
深 め る	○自動車工業の今後の在り方を判断する。 ・情報の収集・選択とこだわりの表現 ・お互いのこだわりとその筋道の検討	3. 自動車工業の現状をとらえ、今後の自動車工業のあり方を表現する。 ○新聞などの資料を収集して、今後のあり方としてこだわりとその筋道を『解決策Ⅰ』に表現し、班で話し合う。 ・こだわり別の班での話し合いと資料作成 ○各班毎の発表・説明と情報カードによる意見交換で、自他のこだわりやその筋道の吟味とよさの取り出しを行う。	4 ② ②
広 げ る	○よさを位置づけた表現を行い、解決策を提案する。 ・よさを取り入れた再表現 ・提案による有用感の感得	4. 今後のあり方を『解決策Ⅱ』に再度表現し、深まったこだわりとしての解決策を自動車産業に提案する。 ○お互いのよさを自分のこだわりに取り入れて、『解決策Ⅱ』を完成する。 ・考えや筋道の付加・修正によるこだわりの拡充 ○自分たちの解決策を自動車産業へ提案し、意見を聞く。	2 ② 計

(5) 子供の反応と考察

① 生み出す段階-自動車工業に関心をもってその現状を追究し、本質的な課題をとらえて、こだわりをもつ(1~4/10時間)

まず、子供が自動車工業へ関心をもつために、自動車の解体やアンケート調査を行った(生活性)。自動車を分解するといった解放感から、夢中になって取り組んでいった。ドライバーやプラグを片手に、自動車の部品を一生懸命取り外し、「取れた、取れた」と部品を嬉しそうに眺めている子供の姿が見られた。左下資料①の作文は、生活性に出会わせた後のI児のものである。I児は、部品の多さや作業の大変さを感じ、生産の仕組みに関心を抱き、追究の意欲を高めていった。〈写真①自動車分解する子供〉



〈資料①自動車解体後のI児の感想〉

自動車分解して
やっぱり、車も分解するのには、大変でした。
「こんなのドライバーとかですれば、簡単に
とって出せばいいものではないか」と、けっ
こつて思っていました。しーかりと
のつけられていたものがあつたので、友達と
何人かいてはなればいれませんでした。初め
て知ったのは、ドライバーやレンチなど、ちゃんと
力が必要であつたことでした。むりやむりするの
は、順番に一つずつしていくことが必要だ
と、自分で気がつくことができました。
また、自動車が、たくさんある部品が、あつた
れていることにびっくりしました。
これまで、車をただ便利な道具として、た
けあつていました。でも車を分解して、みて
便利にするために、どんな生産の仕組みにな
っているのか、また、生産する人々がどんな
工夫や努力をしているのか調べてみたくなり
ました。

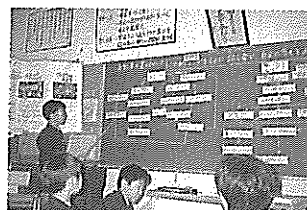
次に、子供たちに生産の仕組みといった自動車工業の

現状に出会わせていった(現実性)。子供たちは、意欲的に自動車工場の見学やそこの資料収集を行っていった。そして、自分なりにとらえた生産の仕組みを多面的に検討していった(写真②)。そのことで、分業や流れ作業、機械化、関連工場との連携、働く人々の努力などが、大量生産を支えていることをとらえていった。

これまでの学習では、生産向上の仕組みや意味をとらえるまでで十分であった。しかし、未来社会に生きる子供を育てるためには、自動車工業が抱える課題に出会わせ、その課題を追究させることが必要である。

そこでさらに、販売量の激減の資料を提示し、円高不況や貿易摩擦など自動車工業が抱える問題点に出会わせていった(課題性)。そのことで「自動車工業は、今後どうあるべきか」といった本質的な追究課題を設定し、その解決策として資料②のようなこだわりをもった。

考察1 子供が未来志向型の課題をもち、こだわりをもつことができるために、生活性→現実性→課題性といった順序で自動車工業に出会わせていった。このことは、次のような子供の姿を生み出す上で有効であった。まず、分解活動によって生活性へ出会わせたことで、I児の作文の内容から判断できるように、自動車工業に関心をもち生産の仕組みという現実性を追究する意欲を高めることができた。そして、そのことが現実性への出会わせ方を必然的にもっている。次に、子供の追究意欲を大切にしながら、工場見学や資料収集によって自動車工業の現実性を追究させたことで、大量生産の仕組みを

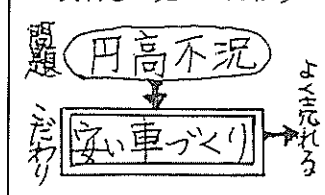


〈写真②生産の仕組みの検討〉

〈資料②こだわりの類型〉

- 新車の開発——10人
- 安い車づくり——14人
- 貿易拡大・開発——16人

〈資料③S児のこだわり〉



多面的にとらえることができた。さらに、資料②からもわかるように、自動車工業の現実性をとらえさせた上で課題に出会わせたことで、子供が未来志向型の追究課題をもち、その解決策としてのこだわりを生み出すことができた。この時S児は、「どうしたらこの円高不況を乗りきれるかな」といった課題意識から、「安い車づくり」を自分のこだわりとして設定している(資料③)。S児のこだわりは、大量販売による不況脱出といった論理から生み出されたものであろう。

このように、生産の仕組みといったことを目的的に追究するのではなく、未来志向型の課題やこだわりを設定していくためには、生活性から現実性、さらには課題性といった社会的現象との出会わせ方を行うことが必要であると考えられる。ここで留意することは、社会的現象に

内在する多様な課題の中から、今一番大きな問題で、その対応が迫られている課題に視点をあてて追究させていくことである。

② 深める段階－自動車工業のあり方を提案し、自他のこだわりを吟味する(5～8/10時間)

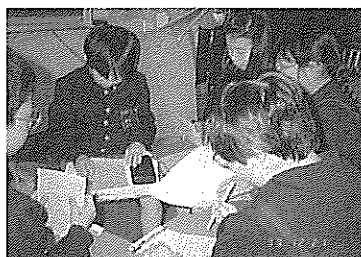
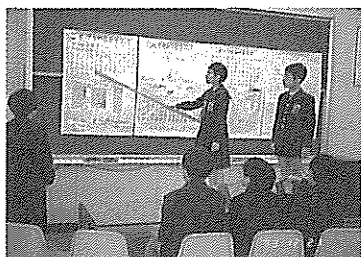
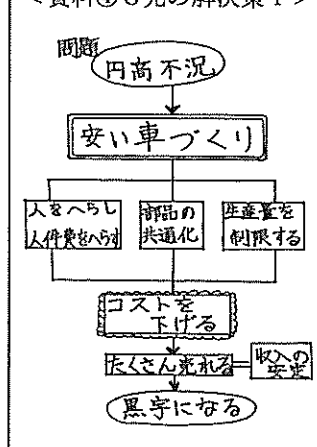
子供たちは、自分のこだわりやその筋道を解決策Ⅰに表現した(資料④)。その後、こだわり別に4～6人の班に分かれて解決策を具体化していく話し合いを行い、自分たちのこだわりを正当化する補助資料の作成を行っていった。そして、班別の発表を行う中で、他班のこだわりやその筋道のよさを認め、今後の日本の自動車工業のあり方に対するよりよい価値判断や意志決定する場の設定を行った。

①それぞれの班が同時に発表でき、発表を聞く子供たちも発表を選択できる場(診断と対策)

②班毎の発表を聞いた後には、その班への自分の意見を情報カードに書いてわたす場(診断)

③情報カードや他の班の発表内容を参考に、自分たちのこだわりを見直す場(対策)

<資料④S児の解決策Ⅰ>



<写真③班による話し合い> → <写真④意欲的な発表の様子> → <写真⑤自己評価の活動>

S児は、この場の中で次のような活動と反応を示した。①安い車をつくることの意義を意欲的に説明していった。安い車をつくるためには、部品の共通化、働く人々の削減、生産量の制限を行ってコストを下げていくことを主張していった。②そして「コストを下げると車の性能も下がるのでは？」と質問されたが、その質問に対し十分に答えきれなかった。③そこでコストを下げて性能が下がらないことを正当化する考えを求めて、別の班の発表を聞きにいった。④S児は安全な車づくり(新車の開発)の発表を聞き、「安全な車はお金がかかるのでないか」と質問する。それに対し、技術面や資金面などで外国と協力を行っていくという返事が帰ってきた。⑤S児は「外国と協力することでコストが下げられる」と言って、コストの面からの考えを情報カードに書いた(資料⑤)。⑥自分の班に戻って友達からもらった情報カードを読み、コスト面の考えに朱線を入れていった。

<資料⑤S児の情報カード> <資料⑥S児がもらった情報カード>

考察2 S児は、友達の問題によって、自分の不十分な点を見出し(反応②)、必要な考えを求めて班の発表内容を選択している(反応③)。そして、コストの面からの質問を行い、自分のこだわりを正当化できる考えを見出すことができていた(資料⑤・反応⑤)。また、資料⑥は、S児が受けとった情報カードである。カードに朱線を入れながら、自分に必要なコストの面の考えを取り出した跡がうかがえる。そして、その考えを班内で相互に評価し合い、自分のこだわりや筋道を正当化していった姿がある(診断と対策)。

このように、各班での発表と選択性のある場を設定し、発表に対する自分の考えを情報カードによって交

○自分が納得した点
性能がよい車を作るとい うことは、円高不況をかんた ん、外国と協力することば、 いいことだと思う。
○自分の考えと違った点
安全な車を作ると安い車は、 できないと思う。それは、 コストが高くなって、もう、 コストを下げる方法がある。

○自分が納得した点 円高不況問題を
①コストを下げるという点の 対話をしていた。新聞で 事実がありわかりやすい。 またコストを下げる5つの対話を 知った。コストを下げる方法が あった。
○自分の考えと違った点 ぼくは、
「コスト」という言葉に 気がついていなかった (まだいいない)

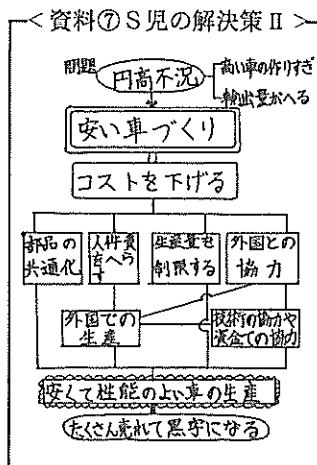
換したことは、自分のこだわりを吟味する中で友達や他班の考えのよさを認め、また参考にしながら、解決策を高めていく上で有効であった。また、このような場の設定を行うにあたっては、子供の意欲的な姿や思考し判断する姿を生み出すためにも時間的、空間的な場の保障も大切である。

③広げる段階－解決策を再表現し、社会に提案する（9～10/10時間）。

情報カードの交換や他班の発表を聞いたことから、自他のよさ感じとり、自分のこだわりやその筋道を見直し、解決策Ⅱへ再表現していった。再表現された解決策Ⅱの中には、友達から取り入れたこだわりやその筋道が表現されていった。出来上がった解決策Ⅱは、自動車販売営業所へ出かけたり、工場へ郵送したりして提案していった。

考察3 S児は、前時までの活動の中で、安い車作りといった自分のこだわりをより深めていくために、コストを下げることにについて多面的に検討してきている。その結果、コストを下げるための筋道をさらに具体化し、解決策Ⅱに再表現してきている。特に、前回の解決策Ⅰよりも、海外での生産や外国との協力（技術面、資金面）といったことを付加し、こだわりを正当化しようとしている。

このように、各班の発表や情報カード交換をもとに、自分のこだわりについて十分に検討し、自他のよさを取り入れた解決策Ⅱを再表現させたことが、こだわりやそれに対する筋道を見直し、自分の解決策をより具体化して深めていく上で有効であったと考える。



6. 全体考察

右の作文は、この学習を終えたN児のものである。このN児の作文から、「社会的事象の事実やその奥にある仕組み」といった知識・理解を目的に追究するのではなく、未来志向型の課題をもった時、意欲的になることがわかる。また、自分のこだわった解決策を認めてもらおうと、全知全能を駆使した追究の姿もうかがえる。しかも追究の過程の中で、自分の考えの高まりも自覚し、学習する喜びも感じている。さらには、自分のこだわった解決策が自動車産業に提案されることで有用感も感じている。

＜資料⑧N児の感想＞

今回のテーマ「これからの自動車工業」を考えたとき、意欲がわいてきた。ぼくのこだわりは、安い車づくりを行うことで、赤字を回復し、経営がうまくいくという点だった。とにかく、安い車づくりをするために重点を置いて解決策を書いていた。次に、ゲルマンで協力し、人件費のこと、外国との貿易の関係をよりよく話し合い、模造紙にまとめ、提案した。なんとか自分の安い車づくりを認めてもらおうと、今までの考えを全て使って説明した。そして、友達の見解カードや他のゲルマンの発表を聞いて、より高まった考えになったと思う。このようにぼくは、自己の考えをゲルマン協力し提案し見直し新しい考えという学習が楽しく感じた。

最後に、自分たちの考えを自動車会社に提案した。実際の社会に役立ったように感じた。

このように、個のこだわりが生きる活動を設定することで、社会的事象の変化から課題を自ら設定し（考察1）、自他のこだわりを多面的に検討し（考察2）、自他のよさを積極的に取り入れてより深まった解決策（資料⑦）にしようとする姿が見られた（考察3）。このような姿は同時に、社会的事象に対する興味・関心・態度を中心に課題発見能力、情報収集能力、自己吟味能力といった意志決定力、すなわち未来社会に生きる力が高まっていることでもある。また、友達とかかわりながら自分のこだわりを主張していく学習の楽しさ、社会に自分の解決策を提案して社会を作ったり社会に役立ったりする喜びを味わう姿でもある。

7. おわりに

よりよい社会生活を目指して、社会に対して有為なアイディアを提起することができる子供を目指して

＜参考文献＞ 小西正雄著『提案する社会科』 明治図書 1992

—— 数学的表現活動の活性化を通して ——

算数科

算数科学習の活動構成を、①自分らしさの引き出し、②自分の表現の見直し、③自分なりの数理の活用、という過程で連続的に展開していけば、子供の創造的な思考から多様な表現が生み出され、個性的な追究活動が連続しながら、生活に生きて働く数理や数学の見方、考え方が培われていくであろう。

子供も自らが数理を求め続けるとは、問題事象と積極的にかかわり、個性的な追究活動を展開して
いく過程で、算数における基礎・基本の内容を身に付け、生活のなかで適用・応用できる生活に生き
て働く数理や数学的な見方・考え方を作り出していくことである。具体的には、①日常の事象や具体
的活動から、数学的な問題を自らの問題や目的として取り出そうとする。②自分の能力、興味、発想
で問題事象や追究方法を選択し、自分なりに解決をする。③自分なりの解決結果や解決までのプロセ
スを自己吟味と相互交流によって見直し、よりわかりやすいものへと再表現する。④培った数理や見
方・考え方を生活の中の新たな問題の処理に活用し、その有用性を感じるとともに、自分の見方・考
え方の高まりと喜びを味わう。これらの姿は、①問題解決を目的化、主体化していく関心・意欲・態
度、②見通しや筋道を作り出す論理的思考力、③数量や図形の性質や関係を自分にとってわかりやす
く処理しやすいモデルに表していく数学的表現力、といった態度や力によって支えられている。

「めざす子供像」

-145-

3. 学習指導の問題点

- (1)自分を中心にすえた問題解決の学習過程ということにおいて次の点で十分でなかった。①他者から設定された問題であって、自分の問いというものを持って取り組んでいない。②問題の解決において、自分なりの考えや発想でまず解決に取り組んでいくという活動の場の設定が十分でない。③子供の数学的な見方・考え方の高まりを考えた単元構成が十分でない。④数理内容や数学の見方・考え方の有用性を教師は理解していても、子供自身は十分感じていない。
- (2)算数を生活化していく段階（算数の学習と日常生活をつないでいく学習）からの教材化が十分でない。そのため、生活の中にある事象を数学的な目で見たり、問題意識を持って考えたりするような子供の姿、態度が育ってきていない。

4. 解明の具体的方途

- (1)子供が意欲を持って学習に取り組み、自分の数学的な見方・考え方にこだわりながら、それを高めていく単元構成を以下のように考える。

○出会いの体験…子供たちの生活に身近であるもの、追究の目的意識を強く持たせるものといった観点から、事象の提示や活動の設定をする。

①つくる段階…子供が、自分の能力や興味・関心に基づいて問題事象を選択し、自分なりの発想、（自分らしい引き出し）方法で数理の解明に迫れる場の設定や活動構成の工夫をする。

②ねりあげる段階…前段階で作った表現物や考え方を、よさや不十分さといった観点から自己吟味（自分の表現の見直し）したり相互交流したりして、見直し再表現していく場の設定を工夫する。

③生かす段階…単元を通して培った数学的な見方、考え方のよさを個性的にまた自由に活用できる学（自分なりの数理の活用）習活動、場の設定を工夫する。

(2)基本的な学習指導の仕組み

段階	つ　　く　　る	ね　り　あ　げ　る	生　　か　　す
目　的	数理、数学的な見方・考え方の取りだし ●問題事象に対し、解明にせまる考えを作る。	数理、数学的な見方・考え方の構成 ●自分の考え、表現の価値づけ意味づけ、修正を行い、再表現する。	数理、数学的な見方・考え方の一般化・生活化 ●題材を通して培った数理や数学的な見方・考え方を発展事象や生活場面に生かす。
表　現	○自分らしい数学的な考えの引き出し	○自分の数学的な表現の見直し （数理構造の表現と簡潔、明瞭な構造への再表現）	○自分なりの数理の活用 数理活用の具体的な表現と有用性の表現
興　味・関　心	○自分なりに問題を解いてみる楽しさ → ○自分の見方・考え方が変わり育ちていく楽しさ → ○数理を活用していく楽しさ 数学的な見方・考え方の変容と高まりへの感動		
手　立　て	○生活に身近な事象の提示や活動の設定 ○問題事象を自己選択できる多様な事象提示の工夫 ○解決への考えを自由に表現できる場の設定	○弾力的な学習過程の工夫 ○自分の考え方の根拠を確かにする学習ノート ○よさと不十分さから、自分の考えを見直す場や交流の設定 ○学習の進め方を示す板書	○個性的かつ自由な追究が認められる場の設定 ○数理や数学的な見方、考え方の有用性を味わえる活動構成の工夫

5. 指導の実際と考察

(1)題材 6年生「資料を作って調べよう。」

(2)題材の意義

本題材は、記述統計の基本的な知識やテクニックを教える学習であっては、子供の創造的な思考、多様な活動は期待できない。子供たちが出会った問題に対して、統計の手法をいかに使って解決に迫っていくか、資料収集から判断・推測まで具体的な体験をもって味わっていくことが大切であると考え。ここでは「人間の持っている量の感覚で一番鋭いものは何だろう。」という問いから、子供の興味・関心をかきたてていく。そして「調べたい、調べられるのだろうか、調べられそうだ。」と気持ちをゆさぶりながら、子供たちが自分なりのアイデア、発想を駆使し、作り、見直し、作るという表現を繰り返しながら実践的な統計の手法を徐々に高め身につけていくことに価値がある。

(3)目標

- ①解決の目的に向かって、・自分なりに工夫して統計的資料に表現していく楽しさ、さらに・それを見直し吟味することで、それぞれの持つ統計的な資料のよさと不十分さがわかる楽しさ、・作った資料から判断推測していく楽しさを味わうことができる。
- ②量の感覚調べなど目的を設定し、それに向かって、1, データの収集、2, 分類・整理、3, 図表の作成、4, 表やグラフなどからの傾向や特徴の読み取り、5, それに基づいた適切な判断や推測という連続した統計処理活動を意欲的に行い、目的を達成することができる。

(4)計 画 (約11時間)

ね ら い	活 動 と 内 容	時 間
○資料づくりを行っていく目的意識を持たせ、データを集めることができる。 自分なりの資料の作成 ○収集しているデータを統計的に処理し表現する態度を作る。 自分の作った資料の見直し ○相互交流により、自分の作った資料の長所、短所に気付くことができる。 統計的手法の自分なりの活用 ○生活場面のなかで、統計的に処理し判断したいことを取り出し、身に付けた統計的手法を活用できる。	1、量の感覚を調べようという目的意識を持ち、資料集めを行う。 体験 米の量(重さ)、水の量(かさ)、時間を見積もっての数量の活動 問い 私たちの持っている量の感覚(長さ、重さ、かさ、広さ、時間)のなかで、一番鋭いのは何の感覚だろう。 (1) 新聞、雑誌等で集めた統計的資料のよさと読み取りを行う。 (2) 量感覚のデータの集め方について話し合い、資料集めを行う。 ○目的の設定、データの収集 2、自分なりにわかりやすい資料づくりを行う。 思い 私たちが持っている量の感覚のなかで、一番鋭いものは何か、それを説明できるわかりやすい資料を作ろう。 (1) 資料づくりの計画を立てる。 (2) 計画に基づいて資料を作る。 ○データの分類・整理、図表などの資料の作成 ・数直線、平均、最大値・最小値、度数分布表、柱状グラフ、棒グラフ、円グラフ、折れ線グラフ、言葉など 3、自分が作った資料の見直しと吟味を行い、再度作り直す。 (1) 作った資料をもとにデータの読み取りを行い、それぞれの表現のよさを話し合う。 ○表やグラフの読み、判断や推測 (2) 自分が作った資料を再度わかりやすい形に作り直す。 4、自分の目的に基づき必要なデータの収集、分類・整理、作成、判断をする。→ 小学生の生活情報新聞を作ろう ○統計的な手法や考え方を生活場面に活用しそのよさを味わうこと 有用感 ○資料の学習で勉強したことを生かして小学生の生活情報新聞を楽しく作ることができた。 効力感 ○作った新聞を楽しくみんなに読んでもらえた。	3 時間 課外 ① ② 2 時間 0.5 1.5 3 時間 ② ① 3 時間

(5)子供の反応と考察

「出合いの体験（課外）…子供たちが調べてみたいというものに出会わせる。」

御飯作りには自信があるという子供数人に、計器をまったく使わず、米の量、水の量、時間を自分の感覚で見積もらせ御飯を作らせた。結果はうまくできなかったのであるが、何の見積もり方が不十分だったのか話し合うなかで、「人間の量の感覚で鋭いものは何で、鈍いものは何であろう？」という話題になり、そのことを明らかにしていきたいということで調査目的の意識が作られた。

第2、3時…量感覚のデータの集め方を話し合い資料集めを行う。

子供たちの話し合いのなかで、全部の人の資料を集めることはできないので、集め易さから考えて、まず6年1組の測定データを集めようということになった。そして時間（100秒、200秒）、長さ（250cm、100cm）、かさ（750ml、1000ml）、重さ（1000g）、広さ（1000cm²、8170cm²）の測定データを集めることになった。



（1000gの砂を直接で取り出している子供たち）

考察1 子供たちは、自分たちの量感覚の鋭さを確かめたいという気持ちもあって、意欲的にまた楽しく測定データ取りを行うことができた。本題材においては、何を資料として使うかが教材化のポイントとなるが、子供の興味性とデータの集めやすさから考えて、人間の量感を資料作りの素材として選んだことは子供の意欲を高めるうえで有効であったと考える。

第4、5時…自分なりにわかりやすいと思う資料を作る。●自分らしさの引き出し

本時は、どの量の感覚が一番鋭いと言えるか判断しにくい資料1のような形で提示された測定データを、自分なりにわかりやすいと思う形の資料に表現していくことをねらいとしている。

〈つむぎ段階〉 資料1のような形で測定結果を提示し、

資料1〈子供たちに提示した資料〉

「どの量の感覚が鋭いと思いますか？」と尋ねた。

F児：長さだと思う。だいたい目標値に近いし、大きくずれている人があまりいない。

K児：時間だと思う。重さやかさなどは、とても離れているものが多いが、時間は平均して誤差が20秒以内だ。

A児：長さだと思う。目標値に近いものが多いし、ぴったりのものもあるから。

	時間	長さ	かさ	重さ	広さ
1. どの量の感覚が鋭いと思いますか？	100秒	250cm	750ml	1000g	1000cm ²
2. どの量の感覚が鈍いと思いますか？	200秒	100cm	1000ml	750g	8170cm ²
3. どの量の感覚が正確だと思いますか？	100秒	250cm	750ml	1000g	1000cm ²
4. どの量の感覚が不正確だと思いますか？	200秒	100cm	1000ml	750g	8170cm ²
5. どの量の感覚が面白いと思いますか？	100秒	250cm	750ml	1000g	1000cm ²
6. どの量の感覚が難しいと思いますか？	200秒	100cm	1000ml	750g	8170cm ²
7. どの量の感覚が簡単だと思いますか？	100秒	250cm	750ml	1000g	1000cm ²
8. どの量の感覚が面白いと思いますか？	200秒	100cm	1000ml	750g	8170cm ²
9. どの量の感覚が難しいと思いますか？	100秒	250cm	750ml	1000g	1000cm ²
10. どの量の感覚が簡単だと思いますか？	200秒	100cm	1000ml	750g	8170cm ²
11. どの量の感覚が面白いと思いますか？	100秒	250cm	750ml	1000g	1000cm ²
12. どの量の感覚が難しいと思いますか？	200秒	100cm	1000ml	750g	8170cm ²

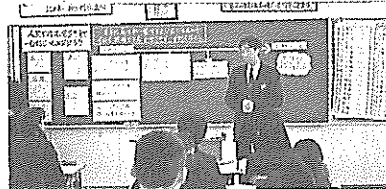
資料1を見ての学級全体の予想

長さが鋭い→25人、重さが鋭い→7人、かさが鋭い→0人、時間が鋭い→3人、広さが鋭い→1人

考察2 全体結果から見て、長さが人数的に多いが、重さや時間、広さが鋭いと判断している子供もおり、このままでは確かな結論をだせないで、もっとわかりやすい資料を作ってはっきりさせようという目的意識は十分もたせることができたと考える。

〈学習の進め方を示した板書〉

〈見通し、調べる段階〉 ①右写真のような、計画の立て方から資料づくりまでの手順を示した板書による援助、②1, どんな形の資料に、2, 何人の測定データを使って、3, 集めた測定データのどれを使って、という3点から資料の作り方を自由に自己選択できる場の設定、など創造的な思考、多様な活動が生まれるような場の設定と支援を行っていった。また③学習ノートに自分が作ろうと考えている資料の見通しについて表現させることで自分の考えというのを明確化させていった。



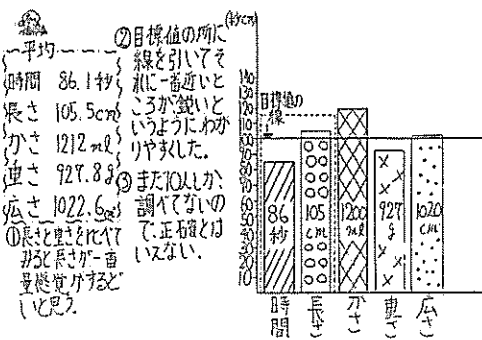
しについて表現させることで自分の考えというのを明確化させていった。 ↓〈考えを明確化させるための学習ノート〉

F児の学習ノートより

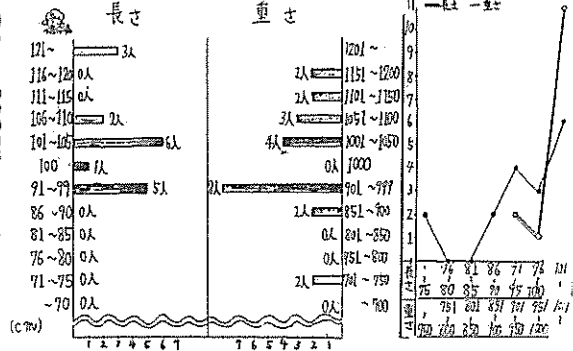
1. どの型の資料を作りたいと思いますか。	2. 何人の測定結果を使おうと思っていますか。	3. どの種類の測定結果を使おうと思っていますか。
①棒グラフのような形に表したいと思う。 →見やすく、わかりやすく、かきやすいから。	②男子10人、女子10人、合計20人の測定結果を使おうと思う。 →多すぎると時間がかかるし、少なすぎると正確さがだせないから。	③長さ 100 cmと重さの1000gのデータ資料を使おうと思う。 →長さや重さのどちらが鋭いか知りたから。

子供たちが自分なりに作った資料は以下のようである。

資料3 〈I児が最初に作った資料〉



資料4 〈U児が最初に作った資料〉



考察3 I児は平均を棒グラフにしたり、棒グラフの両側に目盛りをうって異なる2つの量をいっぺんに比べようと工夫している。しかし広さが一番鋭い結果になったことに疑問を持っている。U児は棒グラフで比較しようとしているが、度数の幅が一定でない不十分さがある。このように39人の子供たち全員が不十分ではあるが自分のアイデアで資料作りを行い、自分なりの結論が出せたのは、追究の方法を自己選択でき、自由に表現できる場の設定があったからであると考えられる。

第6、7時…相互交流による自分の資料の見直し●自分の表現の見直し

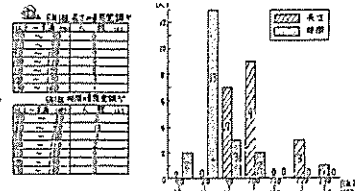
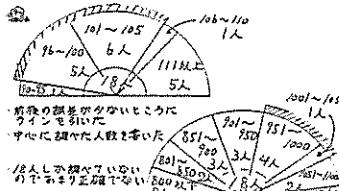
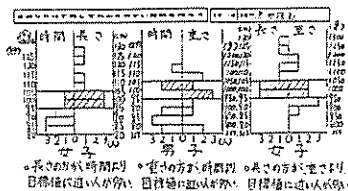
本時は、前時までに作りだした様々な資料を比較吟味することで、自分の作った資料のよさや不十分さを再認識したり、他の資料の表現のよさに気付いていくことをねらいとしている。

ここでは、上記資料3のI児の考え方の変容を、前時から作り直していくまでの過程で述べていく。I児は前時までに、資料3を見てわかるように10人の測定値の平均をだし、それを棒グラフで表して判断していこうとしている。こう考えた理由について次のように学習ノートに表している。

- a、平均をだして棒グラフにすることについて → 一人一人の数値をかくていくのはたいへんだから平均を使うことにし、それをさらに比べやすくするために棒グラフにした。
- b、10人の測定結果を使うことについて → 40人じゃないと正確にならないと思うけれど、40人もやっていたらたいへんだから。
- c、長さ(100 cm)と重さ(1000g)の測定結果を比べることについて → 重さが長さのどちらかが鋭いと思うから。

そして相互交流で友達の資料を見たり考えを聞いたりして、自分の資料を次のように見直している。

①ピラミッド型の資料(K児) ②半円グラフの資料(N児) ③度数分布表と棒グラフの資料(U児)



I児
の
考
え
は
ばく
の
資
料
は
平
均
を
使
っ
て
い
る
ん
だ
け
ど、
北
原
さ
ん
の
バ
ラ
の
と
こ
ろ
に
目
盛
り
が
あ
い
て
あ
る
の
が
わ
か
り
や
す
い。
た
と
え、
目
盛
り
に
い
ん
人
が
多
く
も、
目
盛
り
か
ら
違
い
人
が
多
い
と
思
え
ば
何
れ
も
な
ら
な
い
で
そ
う
い
う
と
こ
ろ
が
見
え
る。

N児
の
考
え
は
誤
差
の
ラ
イ
ン
を
ひ
い
て、
そ
の
誤
差
の
ラ
イ
ン
が
ど
れ
程
間
い
て
い
る
か、
角
の
大
き
さ
で
判
断
で
き
る
と
こ
ろ
が
よ
い。
180
度
を
18
人
で
わ
つ
て
一
人
を
10
度
に
し
て
い
る
と
こ
ろ
は
よ
く
考
え
て
い
る。

U児
の
考
え
は
度
数
分
布
表
を
使
っ
て
い
て
10
づ
つ
区
切
っ
て
い
る
の
が
わ
か
り
や
す
い。
そ
れ
を
さ
ら
に
柱
状
グ
ラ
フ
に
し
て
見
え
る
と
こ
ろ
が
ま
た
よ
い。

さらに、自分の発表に対して次のような交流が行われ、質問や意見をもらっている。

I児； ぼくは長さと重さを比べました。目標値のところに横線を引っ張って棒グラフの先が一番近いところが鋭いと思ったんだけど、

平均でやったら広さが一番鋭くなって、平均だと正確にしらべられないということがわかりました。

K児； グラフの右と左に、2つの目盛りが書いてあるのは何ですか。

I児； 時間は100秒だから100を基本に目盛りをグラフの右側にかけ、かさは1000gということだから、1000を基本に目盛りをグラフの左側にかけました。

T児； 居の出した広さの平均1020というは、極端に多い人と極端に少ない人が結構いて、それらが相殺し合って1000という（作った資料を説明するI児）
 数値に近くなっているの、本当に感覚が鋭いとはいえないと思います。

N児； 平均は平均でも誤差の平均を出していけば、プラスもマイナスもなくて、そのまま平均で使えます。

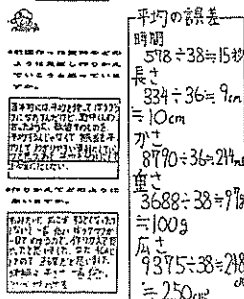
T児； 誤差で出すと目標値が違っていても比べられると思います。

I児； 誤差を使えば、ぼくがやった平均の考えがまだ生かせる。

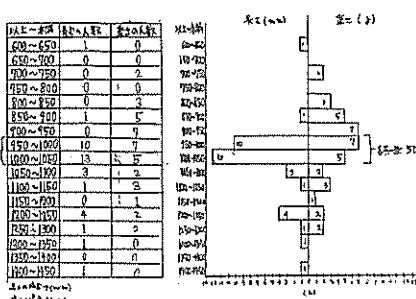


このあとI児は自分の作った資料を下記のように作りかえていった。

資料5 〈I児が見直し作り直した資料〉



資料6 〈U児が見直し作り直した資料〉

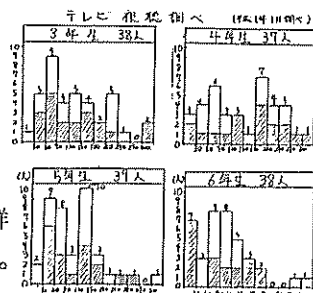


考察4 I児は交流によって、のように簡単さ、わかりやすさといった観点から資料の見直しを行っていった。そしてI児は、資料3から資料5のように、平均を使っていくことにはこだわりながら、測定値の平均ではなく誤差の平均という形で、また正確さを大事にしていこうと10人の測定値から39人全員の測定値を使うことに修正していった。これは、学習ノートで自分の考えを明確化させたこと、また自分とは発想や考えの違う友達の見直しや自分の資料を紹介してみんなに吟味してもらう交流の場を与えたりしたことが、自分の考えの見直しへと有効に働いたと考える。

第9時 統計的な手法を生活場面のなかに活用する。●自分なりの数理の活用

本時はこれまでの学習によって深めてきた統計的な手法を生活場面のなかに生かして、その有用性を味わうことをねらいとしている。

話し合いの結果「小学生の生活情報新聞」（詳細略）を作ることになり意欲的に作っていった。



「高学年になっていくほどTVを見る時間多くなっていますね。学年が上がるにつれて時間が限られるので、少し見る時間を減らしましょう。昨年の女子のみなさんのTVを見る時間の多いのが目につきます。受験を控えているのに大丈夫ですか」
 〈新聞記事の内容の一部〉

6. 全体考察

本題材の学習はこれまで、統計的資料としてまとめるデータを教師が与え、度数分布表や柱状グラフのかき方を教師が教えていくという教師主導型の授業になりがちであった。本題材では子供たちにものごとを統計的に処理し、判断するということはどういうことなのか体験をもって知らせることを大切にしていた。そのために統計的な活動構成を、まず①自分自身の考えで統計的資料を作ってみる。そして②よさや不十分さを吟味しながら自分の作った資料を見直し、作り直していく、最後は③培った統計的手法を発展的生活場面に活用していくという過程で展開していった。その結果39名の子供たちがそれぞれにアイデアを駆使した資料を作り、少しでもわかりやすい資料へと意欲的に作りかえていった。子供も自ら考えていく学習、考えを作り出していく学習にするためには、子供の個性、今持っている考え、能力を最大限に生かしてやる場の設定、活動構成を作っていくことを教師が支援援助していくことが大切である。子供自身に学習の喜びを味わわせる創造的な算数科学習の教材化を今後ともはかっていきたい。

7. おわりに 子供が主体者となる創造的な算数科学習指導をもとめて

自然事象の意味づけをする子供を育てる理科学習指導

——生活体験を見直す活動を通して——

理科部 安 永 純 二

理
科

1. はじめに

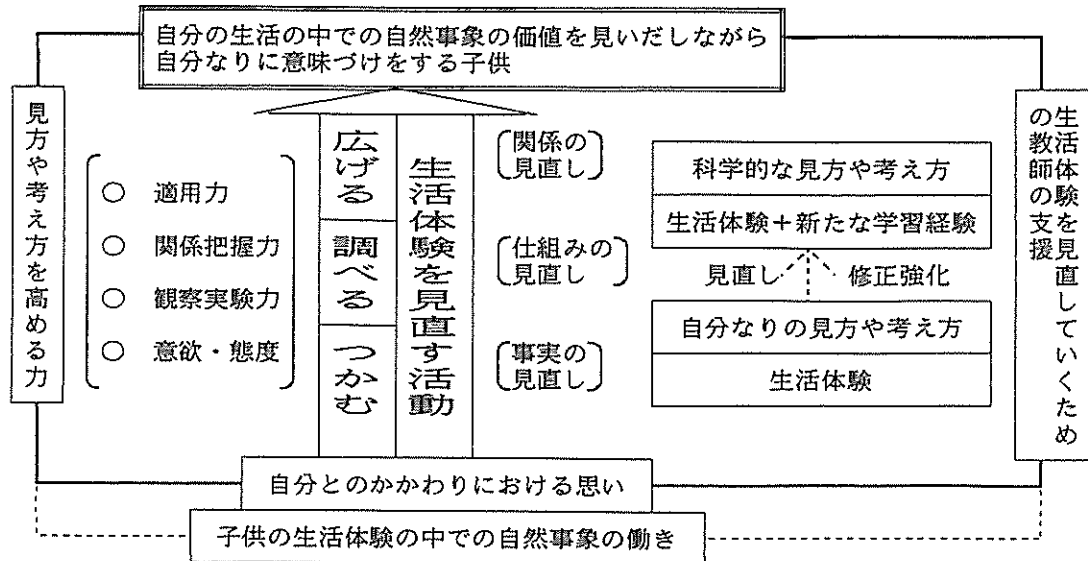
子供一人一人が、生活体験の中で接する自然事象の働きに目を向け、その働きを生かしたり抑えたりしながら、自然事象のきまりや性質を見いだしたり関係づけたりする活動を設定すれば、自分が生活していく中での自然事象の持つ価値を見いだすことができる。

2. 主題の意味と重要性

自然事象の意味づけをするとは、自然事象が持つ自分にとっての働きをとらえ、その働きが生まれる仕組みを追究していく中で、自然事象の性質やきまりを見いだし自分の生活の中での価値をとらえていくことである。これは、①生活の中で接する自然事象の働きに気付き、くわしく調べたい観点を持つ、②自分なりの見方や考え方をもとに自然事象の働きが生まれる仕組みを確かめていく、③自然事象の働きについて確かめたいいくつかの観点を関連付けながら生活体験の中で価値づけていく、などの子供の姿でとらえることができる。これらの活動を行っていくためには、①自然事象に対する自分なりの見方や考え方を生活体験を見直す中で高めていこうとする意欲や態度、②条件を整えて自然事象の働きの仕組みを確かめていく観察実験力、③調べた観察実験の結果の比較から、自然事象の働きを要因と関係づけてきまりや性質などをとらえていく関係把握力、④自然事象の働きを他の事象の中で見いだししていく適用力、などの力を育てていくことが必要であるとする。

生活体験を見直す活動とは、今まで当たり前のこととしてとらえていた生活する上での自然事象の働きを問題とし、自分なりの見方や考え方から調べる内容、方法、順序などを決め、自然事象のきまりや性質を見つけていくことである。この活動は、先行経験から生まれたこれまでの見方や考え方を、一人一人が問題を解決していく過程で、新たな見方や考え方に構成しなおし、自分の生活場面に広げていくことをねらいとしている。この活動には次のような価値がある。①自分自身の自然に対する見方や考え方の変容がわかる。②学習したことが生活体験の中で価値づけられ、科学的な見方や考え方のよきをとらえていくことができる。③自然事象と自分自身との関係を意識し学習したことを生活に生かしていく意欲や態度を育てることができる。

<主題の構想>



3. 学習指導上の問題点

子供が持っている自然事象に対する見方や考え方を大切にしたい問題解決を行っていくといいながらも、今だに学習内容とかかわり合いの少ないものはなるべく除外していることが多い。そのため、自然事象と子供自身とのかかわりが薄れ、学んだことの価値をなかなか見いだせず生活に生かしたり生活の中の自然事象を見つめ直したりしていくことが少なくなっている。

4. 問題点解明の方途

自然事象に対する自分自身の見方や考え方のよさや不十分さを意識し、自然事象の価値をとらえていくために、自分自身の生活体験の中で自然事象の働きをとらえる「事実の見直し」、自然事象の働きが生まれる仕組みをとらえる「仕組みの見直し」、仕組みがわかった自然事象の働きの共通点をさぐる「関係の見直し」を行う調べ活動を学習過程に位置づける。

「つかむ」段階・・・自然事象の働きをとらえ直し、自分なりに自然事象の働きについてくわしく調べていく観点を明らかにする段階である。

＜事実の見直し＞今まで当たり前としてとらえていた自然事象の働きを、自分自身が生活していく場面で生かしたり抑えたりする体験を行い、自然事象に対する自分なりの見方や考え方を知る。

「調べる」段階・・・調べたい観点について、自然事象の働きが生まれる仕組みを追究し、自然事象の性質やきまりを確かめていく段階である。

＜仕組みの見直し＞調べていく観点や方法、順序などの計画をたて、条件を整えて、自然事象の働きを生かしたり抑えたりしながら比較実験を行ったり、実験結果を交流しあったりするなかで、自分なりの見方や考え方を再構成する。

「広げる」段階・・・自然事象の働きの共通点や差異点を明らかにしながら、自然事象の働きはお互いに支えあって働いていることを確かめる段階である。

＜関係の見直し＞調べた自然事象の働きについて生活場面での共通点を取り出し、条件を整えて比較実験することにより差異点や自然事象の働きの相互関連を確かめ、今までの自分自身の見方や考え方が高まってきていることを実感する。

＜基本的な指導のしくみ＞

	つかむ	調べる	広げる
活動と内容	1. 自然事象の働きを生かしたり抑えたりして生活体験を行って情報を収集する。 （事実の見直し） 2. 収集した情報を用いて、調べる観点を明らかにする。 ○ 自然事象に対するこれまでの自分自身の見方や考え方の自覚と、問題点の把握。	1. 調べる観点について自然事象の働きが生かされた時と抑えられた時を比較しながら調べる。（仕組みの見直し） 2. 自分なりに解決したことを表現したり交流したりする ○ 自然事象に対する自分の見方や考え方の修正強化による自然事象のきまりや性質の発見。	1. 自然事象の働きを比較して、共通点や差異点を取りだし、生活体験の中で確かめていく。（関係の見直し） 2. 今までの学習してきたことについての自分の考えが変わってきたことを表現する。 ○ 高まった自然への見方や考え方の適用。
で だ て	○ 自然事象の働きが生かされたり抑えられたりする生活体験の場の設定 ○ 自然事象の働きを意識しやすい表現方法の支援	○ 問題を解決するための比較実験を行う場の設定や実験方法の参考提示 ○ 調べたことを友達と比較する表現や交流の支援	○ 自然事象の働きの比較の仕方についての支援 ○ 実験方法の参考例の提示

5. 指導の実際と考察

(1) 単元 生活するための体のはたらきを調べよう

(2) 単元の意義

自分の体図鑑を作るという目的を達成する中で、生活体験を見直しながら体の働きやつくりを自分なりに追究していく子供の姿がみられる。このことにより、生活していくためにいろいろな器官がそれぞれの役割を担いながら総合的に働いていることを自分なりに意味付けをしていくことができる。

(3) 目標

○ 目・耳・皮膚等の感覚器官や関節・筋肉などの運動器官について、自由に使えるときと使えない時を比較しながらその働きを生み出す仕組みを調べることができるようにする。

○ 人の体の仕組みや働きのすばらしさや巧みさを実感することを通して、今までの体に対する自分なりの見方を深め、自分の体を大切にすることや生物を愛護する態度を育てる。

(4) 計画 (約13時間)

ね ら い		活 動 と 内 容	時
つ か む	○ 自分の体のつくりについての意識付け	1. ポートボールをして、生活の中で体の中の器官がどのように働いているのか話し合う。 ○ 生活していく上で色々な器官がはたらいっていることへの気付き ※なくては困る体の器官に付いて考えさせる。	3 ①
	○ 自分の体の各器官での生活上の働きへの気付き (事実の見直し)	2. 自分で特にないと困ると思う器官を不自由にしてポートボールや生活体験を行う。 ○ 色々な器官がないときの不便さ ※自分自身の体を写し取った等身大の人体図に、活動して感じたことを書かせる。	②
調 べ る	○ 調べていくことについての焦点化	3. 生活体験から生まれた体の働きに関する自分の問いについて調べる計画を立てる。 ○ 調べる部分と内容及び順番について ※目、耳、皮膚、関節、筋肉についての調べたい内容の順番を考えさせ、学習のコースを自分で作らせる。	7 ①
	○ 体の各部分について、働きやつくりについての見直し (仕組みの見直し)	4. 自分の計画にしたがって体の働きについて調べ、自分図鑑を作る。 ・目 ・耳 ・皮膚 ・関節 ・筋肉 ※子供が考えた実験方法で結果がわかりにくいときは、観察実験の方法を紹介する。	③
広 げ る	○ 自分が調べたことの自己評価や相互評価	5. 調べたことをもとに、目・耳・皮膚・骨や筋肉などの働きについて発表する。 ○ 自分の体図鑑の見直しと新たな計画 ※新しくわかったことやもっと調べてみたいことについても、人体図に書き込ませる。この時、体のつくりや働きについて、他の動物との比較なども提案する。	①
	○ 体の各部分について、働きやつくりについての見直し (仕組みの見直し)	6. 友達の発表の内容や他の動物との比較などで、自分が調べてみたいことを調べる。 ○ 自分の体図鑑に新たな内容の付け加え 人の体のいろいろな部分は、生活していくのにうまくできたつくりになっているんだな。	②
広 げ る	○ 体の各部分について、働きやつくりについての新たな見直し (関係の見直し)	7. 調べてわかった体のいろいろな部分の働きについて、自分の体図鑑から共通点を話し合う。 ○ 器官が違うのに同じ働きをしていることがあること。	3 ①
		8. 同じ働きをしている器官の役割を調べる。 ○ 同じ働きをしているが、それぞれの器官で役割があり、互いに補いあっていること。 人の体は生活していくのに1つの器官だけでなくいろいろな器官が一緒に働いているんだな。	②

(5) 子供の反応と考察

① つかむ段階（1～3 / 13時間）

この段階のねらいは、体の各器官の働きを制限しながら生活体験を見直し、自分なりに調べていく観点を明らかにしていくことである。そのために体育で行っているポートボールをする時、自分たちの体のどの部分が働いているのかを自分の体を写し取った人体図に書きこませた。その結果子供たちがとらえた各器官の働きは右の表①である。そこで、どれくらいその器官が役に立っているのかを自分で特になくは困ると思われるものから、写真①のように働きを制限してポートボールを行わせた。また、休み時間でもそれらの働きを制限して生活体験を行い、困ったことを人体図に書きこませた。その後の話し合いが次の通りである。

T1 耳栓をしたとき困ったことを発表して下さい。

C1 何人かでパスをしあってボール投げをしたとき、誰かが声をかけているのにわからなくてどっちに投げていいのかわからなかったです。

C2 ドッチボールをしていて「パス」っていつている人が近くににいるのに耳栓をしているとあんまり聞こえないから不自由でした。

C3 トランプをしていると誰がどこへんで何を言っているのかわからなくて大変でした。

C4 ボールを投げあいして、「パス」という声が聞こえていないけど相手は言ったつもりで投げてきて顔なんかにはぶつかってとても不便でした。

T2 耳栓をすると聞こえにくくなるってことはわかるけど、人の声の方向までわからなくなるのかな。

この後に、片方の目に眼帯をしたときや腕や足の関節を曲がらないようにしたとき、手袋に紙をつけて手のひらの感覚がわかりにくくしたときなどに困ったことを発表した。この中で、体の各部分の働きにはまだよく知らないことがたくさんあることに気付いていった。そして、自分の体のことをもっとくわしく調べていつでも見れる形として残していきたいという思いから、自分の体図鑑を作ることになった。

考察1

子供たちに体のいろいろな部分の働きを制限した生活体験を行わせたことにより、C1やC3にみられるように、今までの生活体験と比較しながら今まで当たり前として考えていた体の働きを各器官と関係付けながらとらえることができてきた（事実の見直し）。また、そのことをT2のように教師が焦点化していくことで、資料②にもあげているように、子供たちにこれから調べていく観点をはっきりともたせることができた。また、人体図が自分自身の体を写し取った物であることから、自分の体をもっとくわしく調べたいという思いをもたせることができたと考えられる。

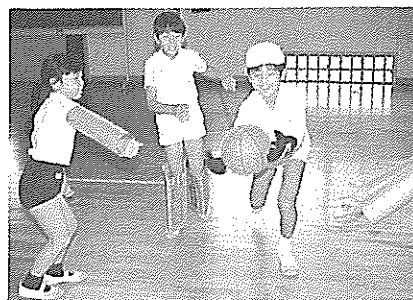
②調べる段階（4～10 / 13時間）

この段階のねらいは、自分の調べる計画にしたがって体の各器官の働きについてくわしく調べたり、他の動物と比較したりしながら働きが起こる仕組みを見直し自分の体図鑑を作っていくことである。

以下の写真②～④は、子供たちが自分の考えた方法や順序にしたがって調べているところである。

資料① ポートボールをするときに働く器官で気付いた主なもの

目	耳	皮膚	手足	首	骨	口
37人	21人	6人	38人	15人	3人	18人



(写真① 体の働きを制限してポートボールをしているところ)

資料② 子どもたちが体の働きについての調べていく観点

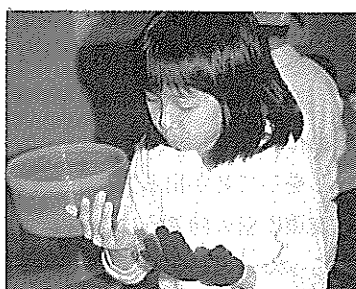
耳	耳が2つあるのは、聞こえる方向がわかるためか 片方の耳だけと両方の耳ではどれくらい聞こえ方が違うか	24人 21人
目	目が2つあるのは、物の位置をはっきりとさせるためか 目が2つあるのは、見える範囲を広くするためか	25人 18人
皮膚	さわってものの感じがわかる働きがあるのか 温度を感じる働きがあるか 痛さを感じる働きがあるか	15人 13人 11人
関節	体が曲がるようになっていのは体を動かしやすいするためか 腕や足を伸ばしたときと曲げたときの筋肉の様子はどうか	27人 24人



(写真② 音が聞こえる方向を調べている)



(写真③ 関節の位置を調べている)



(写真④ 皮膚の感覚を調べている)

S児は、目（遠近感）→目（視野）→耳（聞こえる方向）→皮膚（温度の感覚）→関節（曲がる様子）の順に調べる計画を立て、一人調べを行っていった。その中で耳の働きを調べる場面では、まず、友達に自分の右側で鈴を鳴らしてもらい両耳で音の聞こえ方を確かめた。そして、右の耳に耳栓をして音を聞いた後、左の耳に耳栓をして音の聞こえ方の違いを調べていった。その結果、右耳をふさいだ時が聞こえにくくなり、左右の耳で音の方向を聞き分けられていることに気付いていった。

資料③ 耳の働きを調べた時の実験カードと感想

耳 調べたいこと 耳が2つあるのは、聞こえる方向がわかるようになっているのだから よく耳か左右に2つあるのは、右の耳が左の耳の音が同時に聞こえるため。 かんさつ・じっけん 右の耳に耳栓をした時と、左の耳に耳栓をした時の、右の耳の音の聞こえ方がいかに変わる。 わかったこと 右の耳をふさいだ時の、おかしな聞こえにくかった。だから右耳で右の音をよくきき、左耳で左の音をよくきくやくめがある。	今日調べた体の部分の働きについて、自分の考えがどのように変わって来ているかを書こう。 耳・はじめは、耳が2つあるのはよく聞こえるためのけだと思っていたけど、耳には音がどこから聞こえてくるかわかるようになっているのがわかりました。そして右の耳では右のどの方向から聞こえてくるかがよくわかるようになっていて、左も同じようなやくめがあるのわかりました。
--	--

資料③は、耳の働きを調べた時の実験カードと感想である。

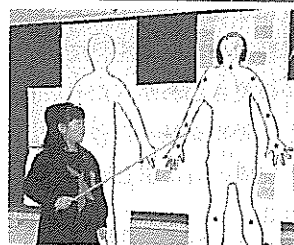
子供たちが自分の計画にしたがって十分一人調べを行った後に、調べたことの発表会（写真⑤）を開いた。ここで、友達の発表から自分が調べていない観点についての体の働きに気付いていった。さらに、「人と同じように体の働きがうまくできている動物はいないかな」と問いかけると、ウサギとの比較から耳殻の働き、猫との比較から瞳の働きなどに興味を持ち追究していった（写真⑥）。

考察2

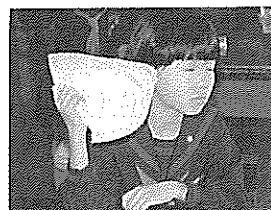
子供たちに調べるための十分な時間や空間、必要な実験道具、調べていく手順を示した板書、条件が整わなかったり実験が終わってしまった子のために実験参考カードを提示していったことで、写真②～④やS児に見られるように、子供たちは体の働きを自分の計画にしたがって調べ活動を行っていった。この活動で、S児の自分の体図鑑の中に書かれた感想（資料③）のように耳が2つあるという体の仕組みについての意味付けが変わってきていることがうかがえる（仕組みの見直し）。これは、生活体験の事実の見直しから生まれた問いが子供にとって調べたいという意欲を高め、調べていく内容や方法がはっきりとしているためであると考えられる。また、これは、自分の体図鑑の中にポートボールなどの生活体験を通して確かめた耳の働きを書き込んでいるので比較することができたためと考えられる。

③広げる段階（11～13 / 13時間）

この段階のねらいは、各器官は互いに補いながらうまく働いていることに気付き、生活体験の中で意味づけていくことである。子供たちは自分が作った体図鑑を見直す中で、共通する働きを右の資料④のように取り出している。子供たちはそれぞれどのように役割が違うのか自分の生活の場面を想定



(写真⑤ 自分の体図鑑で発表している様子)



(写真⑥ 耳を大きくして聞こえ方を調べている)

しながら調べ活動を行っていった。

S児は、「目と耳は人や物の位置がわかること」を調べるために、友達にウッドブロックを渡して音を出してもらい、目隠しをして音が出る方に近づいていった。また、目隠しを取って友達に壁の向こうに隠れてもらいしばらくして音を鳴らしてもらった。この実験からS児は、目を使わなくても耳でどこに人がいるのかわかることを確かめていった。次に「目と皮膚は物の様子がわかること」を調べるために、同じ種類のボールを用いて目でわかることと、さわってわかることを比較していった。

E児は、「目と皮膚は水の温度がわかること」を調べるために、水とお湯を入れた水槽を用意し目隠しをして、手を入れてどちらがお湯かを確かめていた。次に目隠しを取り、目で水の様子を見比べながら「つぶつぶがあって、湯気が出るからこっちがお湯」と見分けることができていた。

T 3 同じ働きをしている部分について確かめたけど、それぞれに何かよさがありましたか。

C 5 皮膚は湯加減なんか見るときに、すぐにわかる。目ではお湯になったか遠くからでもわかります。

C 6 同じ種類のボールを目で見ただけで汚れているとか色とかわかったけど、皮膚でボールを抑えようとボールの堅さがわかったり、後つるつるとかさざざとか手触りもわかりました。

C 7 例えば動物を触るときは、ふわふわしているねというときに目でも耳でもわかるけど、どちらかと言うと皮膚の方が感じがわかる。

考 察 3

C 5～C 7の発言にみられるように、自分の体図鑑からとらえた同じ働きがある器官の関係について調べていく中で、それぞれの働きは似ているがそれぞれに担う役目があることに気付いてきている。また、資料⑤のS児の感想文から、今回調べたことと耳や目だけの働きを調べた時とを比べ、ものの位置を確かめるためにそれぞれの器官が補い合いながら総合的に働いていることを自分なりに意味付けしていることがわかる（関係の見直し）。また、このような活動を仕組んだことで学習してきたことを用いて、新たな発見をしていることを実感していることがわかる。

6. 全体考察

以上のように、3つの学習過程を仕組み、自分の体図鑑を作るという目的をもって生活体験の中での自然事象の働きの見直しを行わせたことにより、子供が自然事象に対する自分自身の見方や考え方をはっきりともたせることができた。そのため、自分自身の見方や考え方を調べていくために内容や方法、順序をはっきりと意識した意欲的な活動を促すことができ、自分なりの自然事象に対する意味づけしていくことができたと考えられる。また、表現物として体図鑑を作ったことで学習の記録が残っていくために、他者との意味づけの違いを比べたり、自分自身で調べたことを比べたりしながら自己評価を促していくことができたと考えられる。

7. おわりに

子供の生活体験に根ざした学習活動がさらに生活の中で生かされる活動のあり方を求めて。

進藤 公夫『最適化理科学習法—環境とのかかわり合いの最適化をめざして』1992

資料④子どもが取りだした共通する働き

人や物の位置がわかること	目・耳
どんな物かわかること	目・耳・皮膚
物の様子がわかること	目・皮膚
水などの温度がわかること	目・皮膚
物の速さがわかること	目・耳・皮膚



(写真④ 目隠しをして音が出る方向へ歩いているところ)

目と耳で物のいちのわかり方の方がいいを
調べました。目では物のいちがはっきり
わかるけど、かべのむこうや物のかけらにある
物のいちを、ぜんぜんわからない。
耳だと音をたてている物のいちがはっきり
とはわからないけど、物のかけや、
かべのむこうでもわかる。
物のいちがわかるには目と耳が、
それぞれ大事なやくめがあり、両方が
あわせて、よくわかるようになり
ます。だから、体をだいにすること
は、とても大切だなど思いました。

自然とのかかわりを深める理科学習指導

—— 調べ方のねりあげ活動を通して ——

理科部 猿 渡 邦 彦

1 はじめに

自然のきまりを、自らが考えた方法で調べる活動に重ねて、工夫された方法のよさをとりいれてくりかえし調べることができる場を整えれば、子供は実験や観察の仕方の工夫や改善を通して、自分の調べ方の科学的なよさを実感しながら、自然とのかかわりを深めていく。

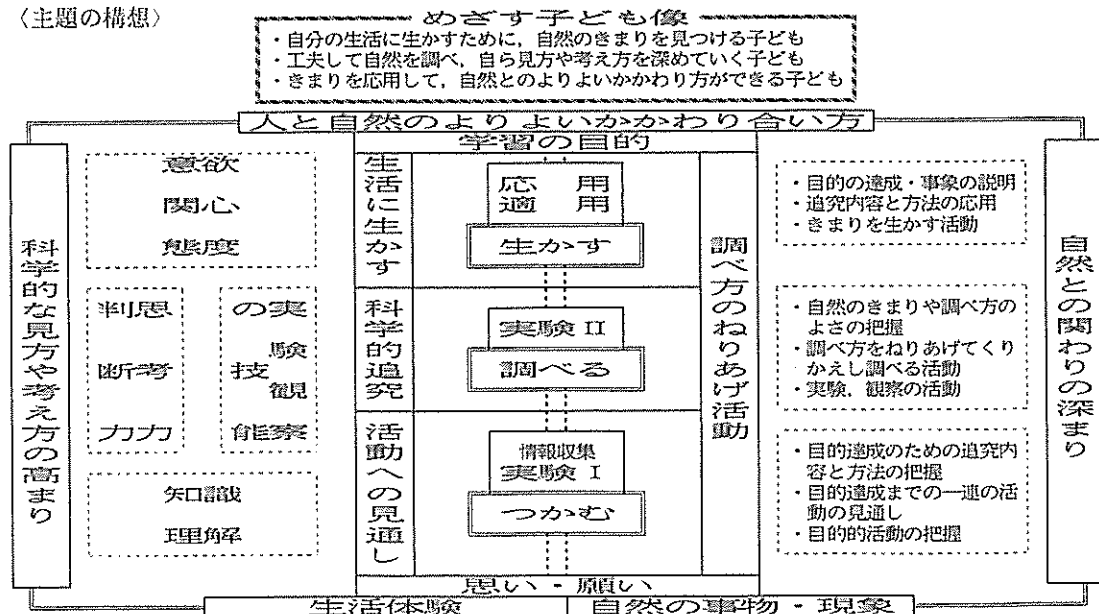
2 主題の意味と重要性

自然とのかかわりを深めるとは、自然の事象がもっているきまりを調べて見つけたり、見つけたきまりを使って生活に役立てたり、生活事象を科学的に説明したりできるようになることである。具体的には、次のような姿であられる。つまり、説明できない自然事象をうまく説明できるようになりたいと思っている、目的（例えば「おもちゃを作る」等）を達成するために自然事象のきまりを知りたいと思っている、きまりを見つけるために実験や観察の仕方を考えて調べている、用具や方法を工夫してもっといい調べ方がないか探している、自然のきまりを調べる方法がもつ科学的なよさを見抜いている、きまりを生活場面に適用したり目的達成のために応用している。これらの活動は、①自然を調べ生活に生かす意欲・関心・態度、②きまりを見つけ応用していく思考力・判断力、③自然を調べるための実験や観察の技能、④問題解決を行うために必要な知識・理解、によって支えられている。

換言すれば、自然とのかかわりを深める過程は、科学的な見方や考え方を高める過程なのである。

調べ方のねりあげ活動とは、きまりを見つけるための実験・観察を、より実証的に目的に合うものになるように工夫や改善を加えながらくりかえしていくことである。具体的には、問題解決のためにそれぞれが考えた方法でまず調べ（実験Ⅰ）、方法と結果を交流し合う。そして、実験Ⅰを行ったことによる関心の拡大や焦点化、また不十分な点の補充などの必要感をもとに、調べ方についての情報収集を行い、よく工夫された方法を紹介し合う活動を行う。そして、実験Ⅰの方法や結果、また調べ方についての情報の中から、自分の目的に必要な内容を取りいれて、実験Ⅰに改善や付加などを行った実験Ⅱにねりあげていくものである。この調べ方のねりあげ活動により、自然のきまりが確かに調べられ自然とのかかわりが深まるとともに、ねりあげた調べ方がもつ科学的なよさをも実感することができる。これらが科学的に自然の事象をみていく見方・考え方を高める上で有効であると考えられる。

〈主題の構想〉



3 学習指導上の問題点

- (1) 客観的に調べることは重視したが、学習者の思いや願いについては十分な配慮をしなかったために、調べる方法論が先行して、学習者が主体的に自然とかかわっていくことができにくかった。このことが、自然を調べていくことへの興味・関心・意欲を失わせる一因となっていた。
- (2) 自然のきまりを調べるにあたっては、子供自らが方法を工夫することが大切といいながら、実際には、すでに十分に工夫され効率よく結果が出る方法、つまり一番いい方法をはじめから与えてしまうことが多かった。このために、子供は自然とかかわる過程で味わうべき「科学的に調べていくことのよさ」を実感することなく、結果をだけを知識としてとらえてしまう傾向にあった。

4 問題点解明の方途

自然を調べる過程に、調べ方のねりあげ活動を次の3段階でしくむ。

- ①「つかむ段階」学習の目的をつかみ、そのために調べるべき問題および目的達成までの一連の活動をつかむ段階である。この段階では、問題解決のためにまず自分なりの方法（実験Ⅰ）で調べ、個人的なレベルではあるが、自分できまりをつかむ。
 - ・学習の目的把握・・・例えば「おもちゃをつくるため」、「説明できない生活事象をうまく説明できるようになるため」など。
 - ・調べるべき内容の把握・例えば「水を温めたら、どのように変化するのだろうか」等
 - ・実験Ⅰ・・・・・・・・一人一人の興味・関心の方向に応じて、最も調べてみたい内容や方法でまず行う個性的な実験。自分なりの工夫で実験を計画し調べるので、主観的な面や非科学的な面も含んでいる。
- ②「調べる段階」実験Ⅰの結果をもとに、調べる内容を拡大したり焦点化したりしてさらに追究していく段階である。そのために、実験Ⅰの方法に工夫・改善・付加を行って実験Ⅱにねりあげていく。その過程では、自分が行う実験に必要ないろいろな調べ方を知るための情報収集の活動やそれを紹介し合う活動を行い、それぞれのねりあげ活動にとり入れられるよう支援していく。
 - ・レポート表現・・・・・・・・実験Ⅰの方法と結果、及び情報収集の結果つまり工夫された多様な調べ方を他の人に伝えるために、レポートをつくり交流する。
 - ・交流・・・・・・・・多様な調べ方や工夫された調べ方に出会い、自分の調べ方に必要なアイデアや工夫をとり入れることができるようにする。このような流れの中で実験Ⅰに改善や付加、変更を行い実験Ⅱとしてねりあげていく。
 - ・実験Ⅱ・・・・・・・・実験Ⅰに重ねて行い、自然のきまりをつかむだけでなく、科学的に調べていくことのよさを実感する。
- ③「生かす段階」つかんだきまりを使って学習の目的を達成する段階である。おもちゃをつくったり、身の回りの生活事象をより統一的・科学的に説明したりする。

〈基本的な指導の仕組み〉

	つかむ段階	調べる段階	生かす段階
活動と内容	1 学習の目的について話し合う ○生活事象を科学的に説明すること 2 調べるべき内容と活動の流れについて話し合い、実験Ⅰを行う ○追究する内容と自分なりの実験法 ○自分なりに見つける自然のきまり	3 実験Ⅰの方法と結果や工夫した調べ方をレポートに表現し交流する ○多様な実験方法との出会い ○自分の調べ方の改善、付加、変更 4 実験Ⅱの方法を決定し、実験を行う ○きまりと調べ方のよさの把握	5 自然の事象やきまりを応用して、学習はじめの目的を達成する ○事象の役割や機能の判断 ○生かす方法の判断 ○事象やきまりを役立てる活動 ○生活事象の科学的説明
てだて	・問題を意識する事象提示 ・学習の目的を焦点化する場合作り ・実験Ⅰの材料と道具、場の提供	・レポートの表現形式の工夫 ・多様な実験法に出会う交流の場合作り ・実験Ⅱの材料と道具、場の提供	・生活情報、工夫事例の提示 ・活動の流れをふりかえる場合作り ・生活に役立てた効力感を味わう場

5 指導の実際と考察

(1) 単元 「水の変化を調べよう」 (第4学年, B・C領域)

(2) 単元の意義

本単元では, 水は温度によって状態が変わるという見方や考え方や自然界では水が姿を変えて循環しているという見方や考え方を育てることができる. また自ら調べ方をねりあげ構成していく活動により, 自分の科学的な見方や考え方のよさを自分で評価しながら実感させていくことができる.

(3) 目標

①水は温度によって状態が変わること, 及び自然界での水の状態変化について調べることができるようにする.

②水を温めたり, 冷やしたりしたときの変化の様子を調べる実験を工夫しながら, 調べ方をねりあげていく活動をとおして, 自分の調べ方や考え方のよさを実感することができるようにする.

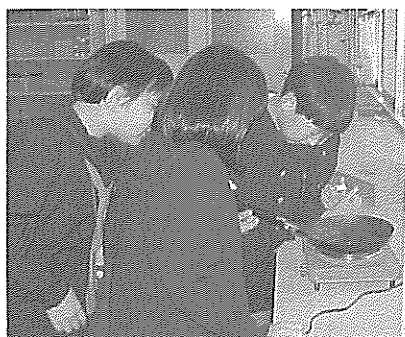
(4) 計画 (約14時間)

段階	おもな学習活動と内容	時間	おもな手だて
つかむ	1 日常生活事象の中から調べる問題をつかむ. ・水たまりが乾く ・霜が降りる ・霧が出る等 思いや願い —水の変化について調べ, 科学的に説明できるようになりたい	1	○生活事象と既習経験のずれを意識させる出会わせ方
	2 興味・関心の方向を出し合い, 類別化して学習の流れや順序について話し合う. ○常温以上で調べる内容 (例)・水の沸騰, 自然蒸発 水を蒸発させる, 等 ○常温以下で調べる内容 (例)・水がこおるようす 氷や霜をつくる, 等	1	○興味・関心を出し合い, 類別化する場
	3 実験Ⅰを計画して行い, 結果やさらに調べてみたいと思った内容について話し合う. 実験Ⅰ —それぞれの興味・関心に応じて自分なりに行ってみる実験 (例)・温めると100℃で沸騰し水蒸気になる ・水蒸気を冷やしてみたい→水に戻るか? (例)・冷やすと0℃でこおり始め, 氷になる ・空気中の水分で霧や霜がつくれそう	4	○多様な思いを実現できる材料や道具の準備, 提供
しらべる	4 実験Ⅰの結果や多様な調べ方についてレポートに表現し, 交流を通して実験Ⅱにねりあげる. ※多様な調べ方については, 実験Ⅰを行ってみて生まれた必要感をもとに情報収集を行わせる.	2	○表現を工夫したレポート形式 ○交流の場の設定
	5 実験Ⅱを行い, きまりや調べ方のよさを実感する. 実験Ⅱ —それぞれの興味・関心の拡大や焦点化に応じてねりあげた実験 (例)・水蒸気を冷やすと水ができることの確認 ・湯気を温めると水蒸気に戻ることの確認 (例)・空気中の水分を冷やして霜をつくること ・色水やジュースを凍らせてみること 水は, 温度によって水蒸気や水や氷に姿を変える. 自然界でも, 水が姿を変えることをくりかえして, 蒸発したり, 霧や霜や雨になったりしている.	4	○道具や材料の準備, 提供 ○内容別グルーピング
生かす	6 つかんだきまりを使って, 日常のいろいろな事象を説明する. (例)・ひなたの水たまりの水がなくなるのは? ・寒い朝, 自動車の窓ガラスが白くこおるのは?	2	○視点を与える写真などの提示

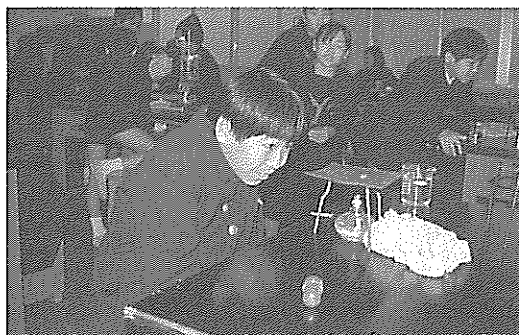
(5) 子供の反応と考察

<つかむ段階>～常温以上の内容を中心に～

日常生活の中から「雨上がりの水たまりが乾いてしまうこと」「寒い朝、霜が降りたこと」などの事象を取りあげた。いずれも水に関係する事象であるが、これらを「科学的に説明できるようになりたい」という思いで子供たちは学習を始めた。子供たちは水の姿の変化について調べたい内容を出し合い、常温以上で行うものと常温以下で行うものに類別し、それぞれの内容で実験ⅠとⅡを行っていくように話し合った。



写真① フライパンで水を蒸発させる S 児

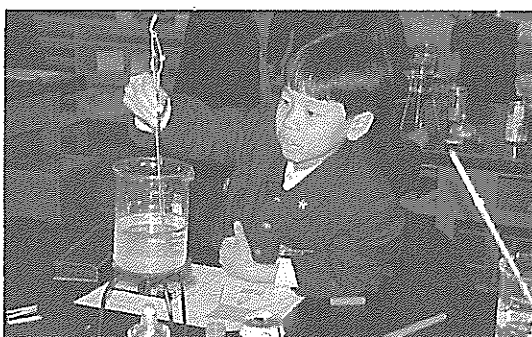


写真③ 熱した銅板に水滴を落とす K 児

考察 身近な事象の中から既習経験では説明できない事象に出会わせたことで、子供たちはうまく説明できるようになりたいという願いをもち、「水が乾いてなくなる」ことを説明するために、自分なりの方法で水の変化を調べ始めた。S 児は「水たまりが乾くのは水が蒸発しているからだと思うので、実験で水を温めて蒸発していくところを見てみたい」と考えて実験Ⅰを行った（資料①、写真①）。その他の子供たちも、それぞれの興味・関心に応じて自分が調べてみたい方法で水が蒸発する様子などを調べていった（写真②～④）。このようにつかむ段階では、一人一人がその時点でもっている見方や考え方を総動員して実験Ⅰを行い、問題を解決しようとしていることがわかる。

資料① 子供がたてた実験Ⅰの計画の例

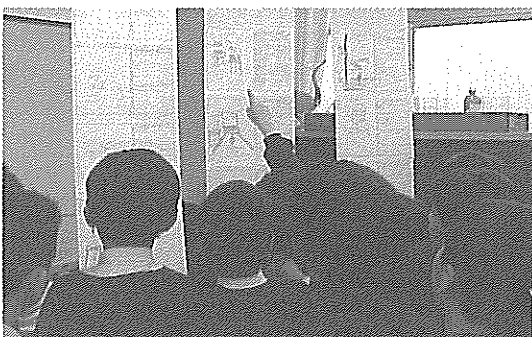
実験の計画	名前
金属の容器に水を入れて蒸発する所を見てみたい。	金
蒸発する時に温度は上がる途中での様子とは？	金
金属の容器 マッパ 三ッパ おれぞうさん アルコールランプ 大きな容器（熱の管理がしやすいもの）	金
①大きな容器に水を入れて蒸発する様子を見る ②熱の管理がしやすいものを入れる ③アルコールランプに火をつける ④おれぞうさんとおれぞうさん ⑤おれぞうさんとおれぞうさん ⑥おれぞうさんとおれぞうさん	金



写真② 水を熱して温度変化を調べる T 児



写真④ 沸騰の様子を観察する I 児



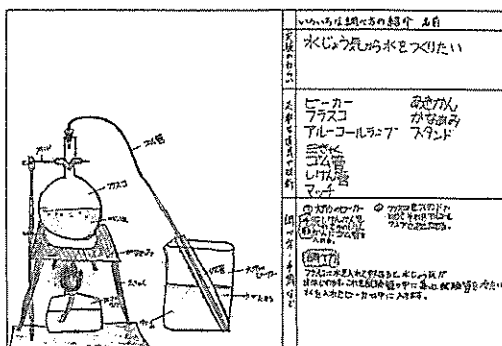
写真⑤ 実験Ⅰの結果を交流する子供たち

<調べる段階> ～常温以上の内容を中心に～

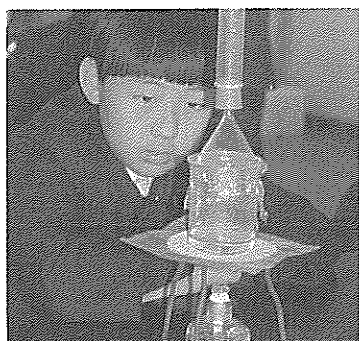
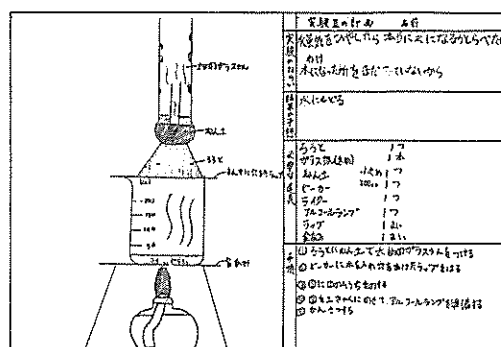
つかむ段階で、自分なりの調べ方で水が蒸発する様子などを調べた(実験Ⅰ)子供たちは、自分の調べ方のよさを自己評価し、実験Ⅱを計画していった。実験Ⅱでは、実験Ⅰではうまくわからなかった点をわかりやすく工夫したり、実験Ⅰを行いながら気付いた内容を付加したり、実験Ⅰを逆から行ってみるなどのねりあげを行っている。実験Ⅱをねりあげるにあたっては、多様な調べ方についての情報収集の結果を紹介し合う交流の場を設定し、多様な調べ方のよさをとり入れることができるようにした(写真⑤、資料②)。

考察 S児は、実験Ⅰではフライパンで水を温めて水が蒸発してなくなる様子を観察したが、蒸発していく様子を見て「水蒸気はまた水に戻るのか」と関心を広げていった。そこで、水蒸気や湯気を冷やして水に戻ることを観察するための実験Ⅱを計画し(資料③)、実験を行っている(写真⑥)。その際、S児は、多様な調べ方をレポートで紹介し合う交流(資料②)の中から、水蒸気を「冷やす」という発想を得ている。つまりS児は水は温めると水蒸気になるという見方に、冷やすとまた水に戻るという見方を付加しているの

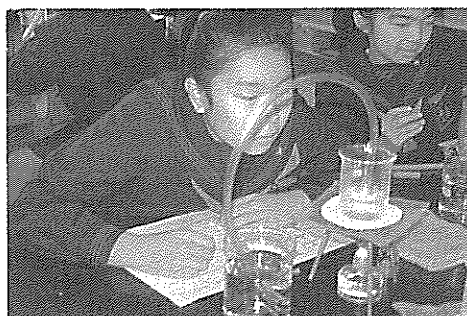
資料② 多様な実験法を紹介するレポート例



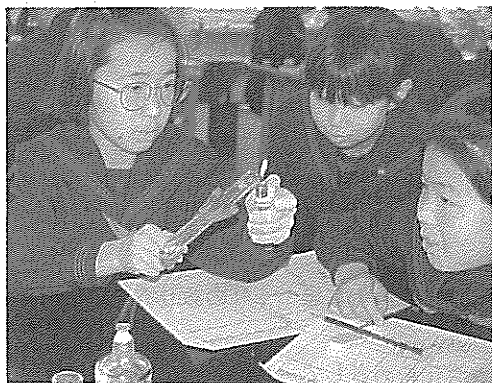
資料③ 交流でねりあげた実験Ⅱの計画(S児)



写真⑥ 出てきた水蒸気を筒で冷やすS児

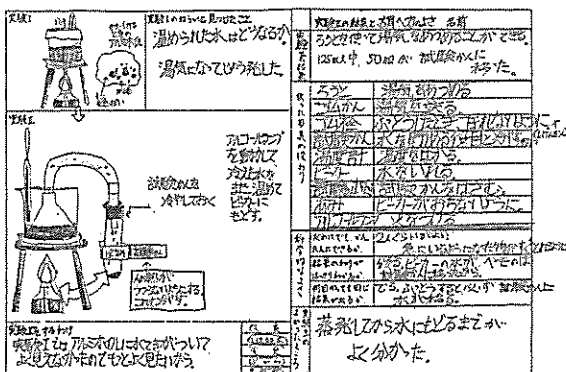


写真⑦ 水蒸気を冷やして集めるK児



写真⑧ 湯気を再度温めて水蒸気にするM児

資料④ 実験Ⅱの方法と結果を表現したノート(例)



る。他の子供たちも、それぞれの関心の拡大や変化に応じて実験Ⅱをねりあげている（写真⑦⑧）。このように、自分なりの実験Ⅰの結果をもとに拡大したり焦点化したりした関心に応じて、実験Ⅱを重ねて行ったことにより子供たちの水の状態変化についての見方・考え方に高まりがみられる。それだけではなく、資料④のように、実験に使った用具の意図や自分がねりあげた調べ方の科学的なよさまでも実感し、表現することができている。これも調べ方をねりあげたことによる見方・考え方の高まりであるといえる。

常温以下で調べる内容についても同様に、実験Ⅰから実験Ⅱへと調べ方のねりあげを行った。例えばH児は「水は0℃でこおり始め、氷になるとさらに温度が下がる（実験Ⅰ・写真⑨）」ことを調べているうちに、ビーカーのまわりにできた霜や霧に気づき、実験Ⅱでは、意図的に霜や霧を発生させることを行っている（写真⑩）。

<生かす段階>

子供たちは、みつけたきまりを使って日常生活のいろいろな事象を説明できるようになった。

【考察】 S児は、やかんから出る湯気が見えなくなることや、朝露が草の葉に降りることを、水の液体（湯気や露）と水の気体（水蒸気）の状態変化でとらえて、図や文で説明している（資料⑤）。他の子供たちも、水たまりが乾くことや霜ができること等のわけを説明することができた。高まった考え方を生活に適用している姿であると考える。

6 全体考察

一人一人の興味・関心を大切にしながら、問題解決のために自分で調べ方を工夫しながら実験・観察をくりかえしていくことは、自然とのかかわりを深めていく上で有効である。このような過程では調べ方についての情報収集を行ったり、結果の交流を行ったりすることが、多様な調べ方のよさを取り入れて、自分の調べ方をねりあげていく上で有効である。従来、既に十分に工夫された優れた実験方法を教師が紹介していくことがあったが、子供の関心とは一致しない場合があり、このようなとき子供は工夫された調べ方がもつ科学的なよさを実感することなく、実験の結果のみを受けとることが多かった。しかし、今回のように自分の見方・考え方で重ねて実験を構成していったことで、自らきまりをとらえるだけではなく、自分の調べ方を自己評価しながら、自分の考えのよさを実感させていくことができたと考えられる。

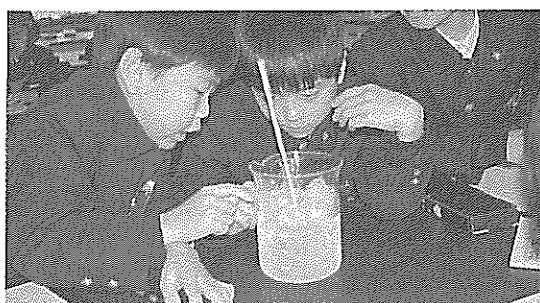
7 おわりに

限りなく広がり深まっていく子供の探究の意欲に対応できる柔軟な場づくりのあり方を求めて

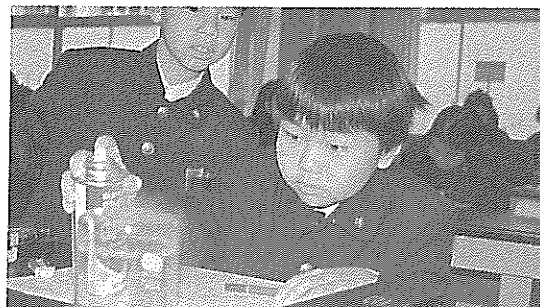
<参考文献>

進藤公夫『最適化理科学習法－環境との関わり合いの最適化をめざして－』（1992）

ギブソン、J. J.『生態学的知覚論』古崎敬ほか訳、サイエンス社（1985）

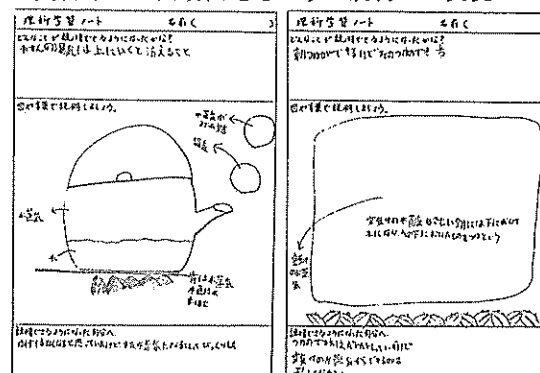


写真⑨ 水を冷やしたときの変化を調べるH児



写真⑩ 水蒸気を冷やして霧や霜をつくるH児

資料⑤ 生活場面をきまりで説明した表現



対象や自分への気づきを深める生活科学習指導

——子供自ら遊びを作り出す活動を通して——

生活科部 山下 浩 徳

1. はじめに

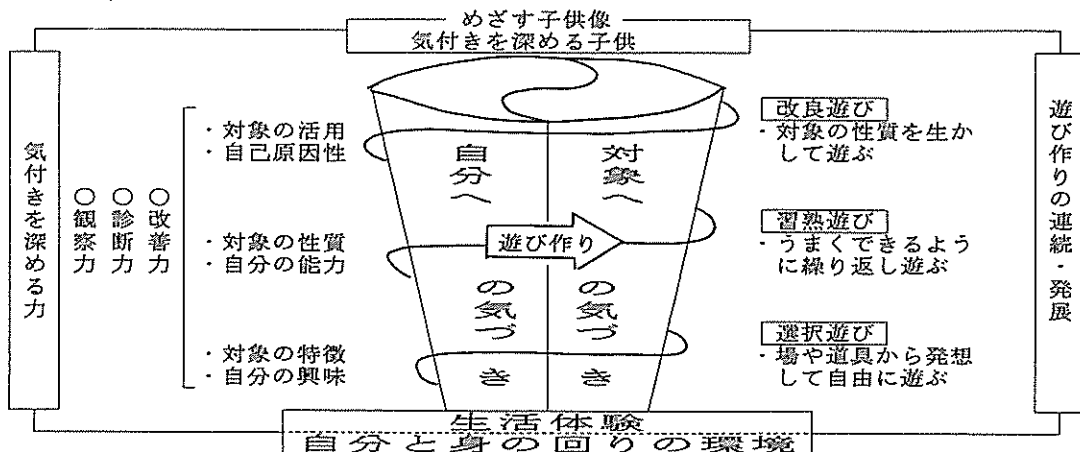
互いの遊びの中で気付いたことを紹介し合ったり友達との遊びで遊んだりして、遊び方を体験的に交流し、遊びを「選択遊び－習熟遊び－改良遊び」と発展させれば、対象の様子や性質などへの気づきや、自分の能力や自分が行動の主体者であるという自分への気づきを深めることができる。

2. 主題の意味と重要性

「対象や自分への気づき」とは、遊び作りの体験を通して得られる、対象の性質や自分の能力に対する理解である。その内容と深まりは、選択遊び－習熟遊び－改良遊びへの発展に応じて、次の様に考える。①選択遊びでは、「坂がある」「つるりとすべりそう」などの対象の全体的な特徴への気づきと、「ソリすべりがしたい」「ボーリングをしたい」などの自分の興味への気づき、②習熟遊びでは、「すべり方の違う坂がある」「急な坂はよくすべる」などの対象のもつ詳しい性質への気づきと「ソリで坂がすべれた」などの自分の技能や能力への気づき、③改良遊びでは、「ブレーキを作ると速さを変えられる」「坂ですべり台ができる」などの対象の性質を生かして遊びができることへの気づきと、「僕がスリルのあるジェットコースターをつくったよ」などの楽しい遊びを作り上げたのが自分であるという自己原因性の気づき。また、これらの一単元での気づきの深まりのほかに、年間を通しては、場や季節の変化とそれに応じた遊びや、自分の興味や能力の高まりなどに気付いていく。このような気づきは、①対象や自分の活動を観察する力、②対象や自分の活動を診断する力、③対象や自分の活動を改善する力、に支えられている。これらの力を育てていくことで、遊びが連続発展し対象や自分への気づきを深めていくことができると考える。

「子供自ら遊びを作り出す活動」とは、遊びの場や道具に出会い、より楽しく遊ぶために、場や遊び方を工夫して遊びを発展させていくことである。これは①選択遊び、②習熟遊び、③改良遊びへの発展としてとらえられる。遊び作りをすることで、①対象への働きかけ方を工夫しながら、自ら活動を連続発展させていくことができる。②身の回りの事象や自分に対する気づきを深めることができる。つまり遊び作りは、自ら対象へのかかわりを深めるとともに、行為者としての自分を意識しながら自分の力で遊びを作り上げる、価値高い体験をするものである。このことは生活科のねらいである、自立の基礎を育てるうえでも価値がある。

〈主題の構想〉



3. 学習指導上の問題点

- (1) 従来の学習は子供の活動を意欲化させることに重点が置かれていた。そのため、子供が活発に学習する姿は見られるようになった。しかし、活動したことで子供が何を学び取ったか分からなかった。それは、子供が活動して気付いたことを取り出し、意味付けてやることが不十分だったからである。
- (2) 活動を改善させたり新しい発想を持たせたりするのに、導入段階でモデルを提示することが多かった。しかし、それでは活動が真に内発的に発展するとは言いがたい。自らの気づきや新しい発想をもとに、自分で計画を立て活動を連続させて行くことができる支援が必要である。

4. 問題点説明の方途

- (1) 遊び作りの活動を次のように仕組む

①選択遊び……遊びの場に出会い、遊びを選択する段階。場の全体的な特徴や自分の興味などに気づき、したい遊びを決めることをねらう。

- ・対象の特徴がよく現れている場を設定し、遊びの場や遊びの基本になる道具に出会わせる。

②習熟遊び……自分の決めた遊びを満足するまで繰り返す段階。対象の性質や自分の能力に気付いたり、遊びを工夫したりすることをねらう。

- ・決めた遊びで遊ばせ、遊んで気付いたことや遊びの道具、遊び方を友達と交流させる。

③改良遊び……気付いたことやできるようになったことを生かして遊ぶ段階。楽しい遊びを作り上げたのが自分であるという気づきや遊びを作り上げた喜びを持つ。

- ・今まで気付いたことやできるようになったことをもとに遊びを工夫させる。
- ・相互に遊びあうまとめの遊びをさせ、集団で遊ばせる。

- (2) 単位時間における、気づきを深める具体的な手立て

① ひみつカード（主に対象への気づき）と、じまんカード（主に自分への気づき）を用意し、お知らせ板に貼らせ、適時に活動中の気づきを拾い上げる。

② 終末段階で、計画ノートにひみつとじまんを書かせ、自分の活動を振り返らせる。

③ ひみつやじまんの発表の後、互いの遊びを実際に体験して交流し、自分の遊びの改良の方法や遊びを楽しくする新しい発想を持たせる。

〈基本的な指導のしくみ〉

段階	選 択 遊 び	習 熟 遊 び	改 良 遊 び
活動と内容	1. 遊びの場に出会い、遊びを選択する ○場から発想した遊び ○道具から発想した遊び	1. 自分の決めた遊びを、満足するまで繰り返す ○よりうまくできるための遊びの繰り返し ○場の特徴を生かす	1. 気付いたことを生かして遊ぶ ○場や遊び方を変えた遊び 2. みんなで遊ぶ ○できた遊びの紹介
気づき	○場の全体的な特徴 ○友達との興味の違い ○自分の遊びへの興味	○遊びの場のくわしい性質 ○遊びの約束事 ○自分の技能や能力	○場の性質の活用や遊び方の工夫 ○自分が工夫して、楽しい遊びにした満足感
支援	・場の設定と道具の準備 ・カードとお知らせ板 ・計画ノート	・カードとお知らせ板 ・計画ノート	・場や遊び方を変える材料 ・カード、計画ノート ・遊びの紹介の場

5. 指導の実際と考察

(1) 単元 不思議の森で遊ぼう（西公園の遊び・秋） 第1学年

(2) 単元の意義

- 身近にあるものを使って、遊びに使うものを作り、楽しく遊ぶことができる。
- 工夫して遊びを作り上げることを通して、自分の成長を感じることができる。
- 西公園の木や地形などを生かして遊び、身近な自然と触れ合ったり、季節の変化に気付いたりすることができる。

(3) 目 標

- 西公園の自然に触れ合うとともに、木や地形を利用して家作りをしたり、木の葉や草で衣服作りをしたりして楽しい遊びを作ることができるようにする。
- 遊ぶ場や遊び方などを工夫して遊び、西公園の秋の様子や自分の能力、自己原因性などに気づくことができるようにする。

(4) 計 画 （約7時間）

	ね ら い	活 動 と 内 容	時間
選 択 遊 び	・遊び場に出会い、遊び場の特徴をつかむ ・自分の興味に気付く	1. 不思議の森を探検して遊び（選択遊び）、遊び場の特徴に気付き、楽しい遊びを計画する。 ○ 選択遊び ・坂や竹林を探検 ・いろいろな落ち葉を拾う ※遊びに必要な基本的な道具の準備 思い・願い 不思議の森で、楽しい遊びをつかって、遊びたい	1
習 熟 遊 び	・遊びの計画 ・自分の遊びの追求 ・遊び場の性質や自分の能力に気づく	2. 自分の決めたことで遊び（習熟遊び）、遊び場の特徴や自分の能力に気づく。 ○ 習熟遊び ・ビニル袋に葉を貼って変身遊び ・木や木の枝などを使って家作り ・坂や竹林を使って忍者の探検修行あそび ○ 気づきの交流 ・赤や黄色の葉がたくさんあったから、鳥に変身した ・木と木の間に、ロープを張って、家ができる ・ツタがあった。ツタにぶら下がりて忍者の修行ができた ※気づきを書くカードやノートの準備	2
改 良 遊 び	・遊びの工夫 ・有能感や実効感を持つ ・活動の振り返り	3. 工夫してもっと楽しい遊びにし（改良遊び）、紹介しあって楽しい遊びにした喜びを味わう。 ○ 改良遊び ・家をお化け屋敷にする ・クッションなどを作り、本物の家らしくする ・忍者の修行場をあちこちに作り、忍者ごっこをする ○ 遊びの交流 ・友達をお化け屋敷に招待する ・忍者の修行をさせる 4. 遊んだことを絵や文に書く ○ 遊んで楽しかったことやじまん ・お化け屋敷に来た人が驚いて、楽しかった ・だんだん一人前の忍者になった ・楽しく遊ぶことができた	4 ② ① ①

(5) 子どもの反応と考察

① 第1次「選択遊び」の段階（1／7）



写真1 わくわくドキドキ！不思議の森

〈ねらい〉特徴のある遊び場に触れて、そこを探索する中で、これからの遊びを決める段階である。

支援として、西公園の中でも落ち葉が多く、木や竹が密集して生えている場所を選んで、不思議の森として設定し（写真1）、遊び始めに必要な道具として大きなビニル袋とビニル紐を用意した。活動と気付きは以下の通りである。

選択遊びでの活動	カードやノートに書いた気付き
・いろいろな木を見てまわる。太さや形などの珍しい木を探す。 ・落ち葉やドングリ、キノコなどの珍しいものを見つける。	・前に遊んだモミジ谷と違って木がたくさんある。 ・いろいろな葉っぱがあった。 （写真2）
・木と木の間にビニル紐を張る。木の根の穴を広げる。	・木にロープをはって、ビニル袋をつるすと家になる。
・ビニル紐で坂を下りたり、登ったりする。（写真3）	・木や坂でロープを張ると、ロープウェイになりそう。
・迷路のような感覚で、竹林の中を探索してまわる。 ・大きなビニル袋を頭からかぶり、袋に葉っぱをつける。	・竹林があって忍者が出てきそう。 ・忍者になって遊べそう。



写真2 「ワイ葉っぱのシャワーだ」



写真3 「坂だ！登れ、登れ」

○このような気付きを発表しあい、次時の遊びを決めさせた。その結果、主に「忍者や鳥に変身する遊び」、「木に紐を張って家やお化け屋敷を作る遊び」、「忍者ごっこ」などを子供は考えた。

考察1 選択遊びでは、上表の様に木々や竹林、秋の落ち葉などの不思議の森の特徴に気付いている。そして下線のような気付きから「忍者ごっこをしたい」（資料1）と自分の遊びを決めることができた。また、初めはバラバラに探索していたが、終末段階では「忍者ごっこをする人集まれ」と呼びかけ、自分の興味を意識し、同じ興味を持つ者が小グループ化していく姿も見られた。

森の中らしい遊びや気付きが生まれたことから考えて、落ち葉や木々などの秋や地形の特徴がよく表れている場所を設定し、ビニル袋やビニル紐などの道具を準備したことが遊びを発想させるのに有効であったと考えられる。留意することは、遊び場や道具によって変わるため、その場で子ども達がどんな遊びを始めるかを想定し、気付かせたい特徴に応じて場や道具を吟味する必要がある。

資料1 A児の計画ノート

ひみつ (ひみつ 秘密) 竹がいっぱいあった 竹のところにいぬやがあった ひまん (ひまん 秘密) 竹の下にいぬがうさぎをつれてきた だんだんいづつとした	つぎの じかん に したいこと 竹のなかからにんしゃがでて ぎょう竹をあらうとおもったけ じおれなれたからいぎょうしたい 竹のなかからにんしゃがでて ぎょう竹をあらうとおもったけ
--	---

② 第2次「習熟遊び」の段階（2～3／7）

〈ねらい〉自分の決めた遊びを繰り返して行う中で、主に対象の性質や自分の能力に気付く段階。

ここでの中心的な支援は、「ひみつ」と「じまん」の気付きカードとお知らせ板、友達との体験的交流である。友との交流を通して新しい発想を持たせ、改良する遊びへと発展させる。

習熟遊びでの活動と気付きは次の通りである。

習熟遊びでの活動	カードやノートに書いた気付き
・坂の上下の木にロープを張りカゴをすべらす。	・木の上の方にロープをつけて急な斜面にしたらすべる。
・木に紐を張り袋をつるして家やお化け屋敷を作る（写真4）	・細い枝にひもを結ぶとボヨンと（中だるみ）するが、太い枝はしっかりしている。
・木の枝を組んで、家にする。	・ちっちゃい松ぼっくりがいっぱい落ちていた。
・ビニル袋に木の葉やドングリをつけてお化けや忍者に変身。	・森の中でコウモリを見つけた
・忍者になって、竹林の中を探検し、枯れた竹を折ったり、ツタにぶら下がったりして修行する。（写真5）	・おおきなツタがあった。 ・修行して、茶色い竹を思いっきり力を入れてたたいたら折れるようになった。



写真4「そっちの端を押さえてね」



写真5「うんしょ、うんしょ、忍者の修行は大変だ」

○これらの気付きを発表させたあと、友達遊びを見せたり遊んだりさせて体験的に交流させた。

その結果、お化け屋敷の班では「見に来た友達をもっと驚くようにしたい」と計画し、子供の意識は「屋敷を作る」から「作ったお化け屋敷で驚かす」に変わっていった。さらに「コウモリがいた」という友達の気付きの発表を聞いて、人を驚かすためにコウモリの衣装を作ることを発想した。

忍者の班も交流の結果、一部の家の班と合流して、忍者の家を新たに計画して作るようになった。

考察2 習熟遊びでは、繰り返し遊んだことで自分がした遊びに応じて、対象の詳しい性質や自分の能力に気付いた。具体的には、上表中の下線部のような「ひもの張れる枝や家につける落ち葉」「折れそうな竹やぶら下がるツタ」など、対象の性質への気付きや、「修行して竹が折れるようになった」「家ができた」などの自分の能力への気付きである。これらの気付きがカードやノートに書かれたことからひみつやじまんのカードの手立て（写真6）が気付きを取り出すのに有効だったと考えられる。また、カードの気付きは、それぞれの子供のひみつの発見や遊びの達成に応じて書かれていた。そのため、お知らせ板を見ることによって、教師は適時に必要な内容の賞賛をして、支援をすることができた。



写真6 お知らせ板「私のじまんは家の壁です」させたことで、「屋敷を作る」から「作ったお化け屋敷で驚かす」のように遊びを楽しく作り変える発想を持たせることができた。このことから体験的に交流させることは、遊びを楽しくする発想を持たせ、遊びを発展させるのに有効な手立てであるといえる。

③ 第3次「改良遊び」の段階（4～7／7）

〈ねらい〉今までに気付いたことを生かして遊びを工夫し、楽しい遊びを作り上げた自分に気付いたり喜びを持ったりする段階。ここでの支援は、作りあげた遊びを互いに紹介させまとめの遊びをさせる。気付きは次の通りである。

改良する遊びでの活動	カードやノートに書いた気付き
・ビニル袋に落ち葉を入れてクッションにする。（写真7）	・落ち葉をビニルに入れるとクッションができる。
・松ぼっくりに枝を付けトウモロコシに見立てた食事を作る。	・カーテンや寝室を作って、家が立派になった。



写真7「気持ちがいいよ、私のクッション」

・ひもを弾いたり、輪を転がしたりして驚かす仕掛けを作る。 ・お化けや、コウモリに変身して、人を驚かす。(写真8) ・家や屋敷、修行場をひもでつないで、道をつくる。 ・忍者の家や竹林、ツタなどいろいろな修行場で遊ぶ。	・坂に輪を転がすと人が驚く。 ・ひもを、引っ張って離すと弓のように弾いて、人が驚く。 ・変身で先生も驚いたよ。 ・近道ができたよ。 ・立派な忍者になったぞ。
--	--

(写真9・10)



写真8 「ワッ! お化けやコウモリがいた」

○作り上げた遊びを紹介しあって遊ぶ中で、「じまん」の中に、以下の様に自分が遊びを楽しんできたという自己原因性に気付いたり、自分の能力の向上に気付いたりした表現がみられた。

- ・住めるような立派な家ができたよ。
- ・作ったしかけで、先生達をびっくりさせた。
- ・おばけになったから友達がいっぱい来てくれた。写真9「見よ修行の成果! 竹だって登れるぞ」 写真10「真剣白刃どり」
- ・友達から「りっぱな忍者だよ」と言われて、「やったついに立派な忍者になった」と思った。



考察3 下線のようにコウモリから発想して人を驚かすしかけを作ったり(写真8)、身につけた忍者の技能を生かして遊んだり(写真9・10)して、楽しい遊びへと改良している。また、前単元の「西公園の坂遊び」の輪転がし遊びを、人を脅かす仕掛けに生かして遊びの改良をしていた。

ここでは、作り上げた遊びを紹介しあって遊ぶ中で、「作ったしかけで先生たちをびっくりさせた」「ついに立派な忍者になった」など、自分が遊びを楽しんだという自己原因性や自分の能力の向上に気付いている。このことは、自らの遊びを追求させるだけでなく、相互に交流し遊びを紹介し合うことが自分の行為に気付かせるのに有効であるといえる。

6 全体考察

研究の成果としては、遊び場に出会って自分がしたい遊びを決め、最終的に楽しいお化け屋敷づくりや忍者ごっこをして遊び、自分で遊びを作ったという実効感や自己原因性を味わっている姿が見られたことである。このように、選択遊びから習熟遊び、改良遊びへと、気付きをもとに体験的な交流を通して、遊びを発展させることで、対象の性質や自分の能力への気付きを深めていくことができる。このとき、達成体験を気付きとして取り出すのに、考察2で述べたようにその子が発見や達成をして、人に知らせたいと思ったとき即時にひみつやじまんのカードに書かせたことは有効であった。また、年間を通した成果としては、考察3で述べたように前単元の坂での輪転がし遊びが、お化けの仕組みに生きていることである。さらにこの単元の後の「風で遊ぼう」(冬)でも、この輪転がしを応用した遊びが見られた。このことから、遊び作りの中で培われた力が次の遊びに応用されており能力的に高まっていると言える。留意点としては、低学年においてひみつ(対象への気付き)とじまん(自分への気付き)は厳密に分けられておらず、一体的に出てくることである。また、単元構成上は習熟遊びの段階、改良遊びの段階と遊びの段階をきちんと単位時間で分けているが、実際は一人一人の子どもによって、遊びが移り変わる時期が多少ことなっていると考えた方がよい。

7 おわりに すべての活動において、行動の主体者である自覚を持った子どもの姿を求めて。

〈引用・参考文献〉 滝沢武久著 『ピアジェ理論の展開』 国土社 1992年

梶田叙一編 『自己認識、自己概念の教育』 ミネルヴァ書房 1987年

———— ミュージカルづくりの活動を通して ————

音樂科

高学年の指導において、ミュージカルづくりの活動を設定し、せりふの言い方の工夫を通して歌をつくり、動きの工夫を通して歌い、演じる活動をしくめば、子供一人一人が主体的に表現に取り組むとともに、心情を音楽的な表現にあらわすことができ、表現する喜びを味わうことができる。

表現する喜びを味わうとは、子供一人一人が主体的に音楽の表現をつくりだそうと取り組むとともに、表現主題を豊かにとらえ、それに共感しながら自分なりの表し方を工夫していく充実感、自分の力でひとつのものを表現することができたという充足感にひたることである。表現する喜びは、次のような姿で現れる。①表現主題を明確に抱き、それに共感し、表現したいと意欲をもっている姿。②旋律の反復・変化・組み合わせを工夫して旋律づくりに取り組んでいる姿。③強弱・速度・唱法という表し方の工夫に取り組んでいる姿。④つくった表現を発表することを楽しんでいる姿。表現する喜びを味わう姿を実現するためには、心情を音楽的な表現にあらわそうとする意欲、リズムやフレーズをとらえて身体を動かす感受力、旋律の反復・変化、表情のちがう旋律の組み合わせを用いて旋律をつくる力、つくった歌を強弱・速度・唱法を変化させて歌う力が必要である。

ミュージカルづくりの活動とは、子供たち一人一人が自分の役を受け持ち、せりふの言い方の工夫を通して歌をつくり、動きの工夫を通して歌い、演じる活動である。ミュージカルづくりの活動は、子供が主体的に、心情をあらわす旋律（構成を考えた旋律）をつくり、より高まった表現であらわしていくことをねらいとしている。そのために、ミュージカルに用いる歌をつくり、歌い、演じていく活動を設定する。ミュージカルは、動き・言葉・歌を総合して感動をあらわすものであり、子どもたちがストーリーにひたりきって歌い、身体全体を使って表現し演じて行けるものである。したがって、登場人物の心情を豊かにとらえ、それに共感しながら表現することができる。このことは、表現のエネルギー源である子供たちの感情を揺さぶることとなるので、創造性を培う意味で価値がある。さらに、一人一人が明確に表現主題を持ち、それをもとに表現を工夫することができるので、子供がもっているよさがひきだされ、個性的な表現を生み出すことができる。また、高学年という発達段階から考えて、動き・言葉・歌という今まで学習してきたことをすべて活用して表現させていくことは、学習のまとめの時期である活動として適していると考ええる。

(主題の構想)

```

    graph TD
      A[「めざす子ども像」  
「心情を音楽にあらわすために、話し方の工夫に取り組む  
充実感を味わっている子ども」  
「つくりあげた表現で楽しむ充足感を味わっている子ども」] --> B[ミューズ]
      B --> C[有用感・効力感 自分がつくった歌で楽しめた。]
      C --> D[選択した場面の歌をつくり演じる。]
      D --> E[構成を考えて歌をつくり演じる。]
      E --> F[思い・願い 自分のミュージカルをつくりたい]
      F --> G[ミュージカルのストーリーを知り演じる。]
      G --> H[生 活 終 結]
      G --> I[音 楽 終 結]
      
      J[あじわう段階  
「つくりあげたミュージカルの発表会」] --> K[あらわす段階  
・速度・強弱・唱法の工夫。  
・動きの工夫。  
・構成を考えたい旋律をつくり、せりふの言い方の工夫。  
つかむ段階  
・ミュージカルをつくりたいという意欲をもつこと。  
・ミュージカルへの関心をもつこと。]
  
```

3. 学習指導上の問題点

これまでのつくって表現する活動では、言葉の抑揚やくりかえし、曲の形式という知識をもとに旋律づくりを行う活動が主であった。そのため、表現主題を豊かにとらえさせ、それに共感させ、子供たちの感情を揺さぶりながら表現していく活動とはなっていなかった。

4. 問題点説明の方途

(1) 子供たちの感情を揺さぶり、表現主題を豊かにとらえさせるためにミュージカルをつくる活動を次のように構成する。

① 「つかむ」段階 ミュージカルのよさや台本のストーリーを知り、演じる。

既成のミュージカルビデオを鑑賞させ、動き・言葉・歌が一体となってあらわされるよさを味わわせる。さらに、低学年に発表するという目的を持たせた上で、教師によるストーリーの提示を行い、感動を低学年に伝えたいという意欲を持たせる。また、実際に演じてみることにより表現主題をつかみ、せりふの言い方・動き・歌い方を工夫してミュージカルづくりへの意欲を持たせる。

② 「あらわす」段階 構成（旋律の反復・変化、表情のちがう旋律の組み合わせ）を考えて旋律をつくり歌う。

ア、心情を表現主題として構成を考えた旋律をつくり、歌い、演じる。

表情のちがう旋律が組み合わさるような表現主題を設定する。歌いながら音さがしができるような場の工夫・ノートの工夫・教師の支援の在り方を工夫する。

イ、選択した場面の旋律をつくり、歌い、演じる。

構成を考えた旋律のつくり方を応用して心情やようすをあらわしていく場を設定する。

③ 「あじわう」段階 つくりあげたミュージカルの発表会をする。

つくりあげた表現を観客に発表し、つくりあげた喜びを味わう場の設定を工夫する。

(2) 心情を豊かにとらえるために、せりふの言い方の工夫・動きの工夫を次のような条件の活動で設定する。

① 次のように、せりふの言い方の工夫・動きの工夫・歌づくりを設定する。

せりふの言い方の工夫→歌づくり→動きの工夫(表現主題の明確化、速度・強弱・唱法の変化)
(表現主題の明確化) (歌詞づくり) ↑ ↓
→旋律づくり→歌い方の工夫(速度・強弱・唱法の変化)

〈基本的な指導の仕組み〉

	つかむ	あらわす	あじわう
活動と内容	1. ミュージカルビデオをみる。 ○ ミュージカルづくりに関心をもつこと。 2. 実際に演じる。 ○ 全体の表現主題をつかむこと。	1. 心の動きをあらわす歌をつくりあらわす。 (1) せりふの言い方の工夫をする。(表現主題の明確化) (2) 旋律をつくりあらわす。 ○ 構成を考えた旋律の組み合わせ。 (3) 動き・歌い方の工夫をする。 ○ 速度・強弱・唱法の工夫 2. 選択した場面の歌をつくりあらわす。 ○ 学んだつくる方法を応用すること。	1. つくりあげた歌を発表する。 ○ つくりあげた喜びの感得。
だて	・ミュージカルビデオの鑑賞 ・ミュージカルを演じてみる活動。	・表情の異なった旋律が組合わさる表現主題をもてるようなストーリーの設定。 ・歌いながら音さがせるような楽器の場。 ・観客、役者の両方の立場に立つ相互評価の場。 ・チェックカードによる自己評価。 ・簡易ステージ、衣装、小道具	・発表会

5. 指導の実際と考察

(1) 題 材 ミュージカルをつくろう「ミュージカル龍の子太郎」(第5学年)

(2) 題材の意義 次のような観点から本題材を設定した。

- ① 松谷みよ子原作「龍の子太郎」をモチーフとしたものであり、世間知らずだった太郎が旅の途中で様々な体験を経ながら成長していくストーリーである。太郎と同年代である子供たちにとって太郎が成長していくようすは共感と感動を呼び、表現への意欲をもたせることができる。
- ② 今までの自分を反省し、強く賢い子供になりたいという心情を表現主題としてもたせることができるので、表情のちがう旋律を組合わせて旋律をつくる方法を学ぶことができる。
- ③ 場面が9場面に分かれるので、旋律をつくる方法を学ぶ活動・それを旋律づくりに応用する活動のふたつの場を設定できる。

(3) 目 標

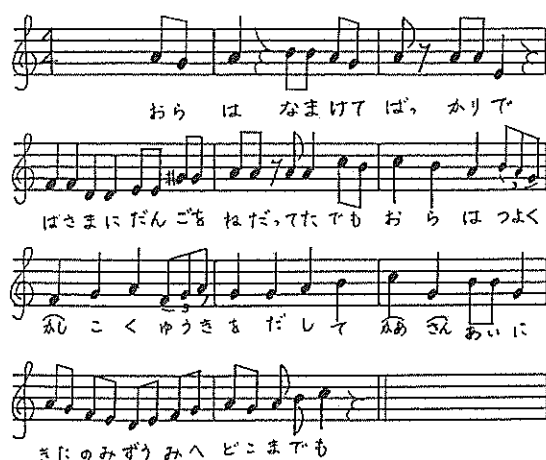
- ① 意欲をもってミュージカルに用いる歌をつくり、せりふの言い方・動き・歌い方を工夫してミュージカルをつくりあげ表現する喜びを味わうことができる。
- ② 旋律の反復・変化、表情のちがう旋律の組み合わせを意識して旋律をつくり、強弱・速度・唱法を工夫して歌うことができる。

(4) 計 画 (約10時間)

ね ら い	活 動 と 内 容	時 間
〈つかむ段階〉 ミュージカルへの 関心・意欲の喚起	体験活動・台本のあらすじを知り、演じる。 1, 「龍の子太郎」を演じ、話し合う。 ○ 表現主題をつかみ、ミュージカルをつくる意欲を持つこと。 思い・歌をつくり、動き・せりふの言い方・歌い方を工夫して ミュージカルをつくりあげたい。 問い・どうやって歌をつくれればよいだろう。	1時間
〈あらわす段階〉 ミュージカルつくり 表現の練り上げ	2, 第⑥場面の歌をつくり、歌い、演じる。 (1) せりふの言い方を工夫してあらわす。 ○ 第⑥場面の表現主題を明確にすること。 (2) 歌をつくりあらわす。 ○ 旋律の反復・変化、表情のちがう旋律を組み合わせること。 (3) 動き・歌い方を工夫してあらわす。 ○ 歌い方(速度・強弱・唱法)を変化させること。 問い・どんな歌をつくれればよいだろう。	4時間
〈あじわう段階〉 有用感・効力感 の感得	3, 好きな場面の歌をつくり、歌い、演じる。 (1) せりふの言い方を工夫してあらわす。 ○ 個々の場面の表現主題を明確にすること。 (2) 歌をつくり、動き・歌い方を工夫してあらわす。 ○ 学んだミュージカルをつくる方法を応用すること。 4, つくったミュージカルを発表する。 ○ つくりあげた喜びを感得すること。	4時間
有用感・効力感 の感得	4, つくったミュージカルを発表する。 ○ つくりあげた喜びを感得すること。 有用感・効力感 自分たちでミュージカルをつくりあげ、演じることができた。	1時間

資料4 子供の作品（太郎の気持ちをあらわす歌）

K児のグループの作品（7班）



O児のグループの作品（5班）



資料5 歌い方や動きを工夫する子供の姿

（歌い方を工夫している例・K児のグループ）

K：“ばあさまに”の
ところから小さくす
ると、太郎の反省の
気持ちがよくわかる。
C：反省していると
ころは太郎だけで歌
って、“でもおらは”
全員で歌うと、ちが
いがわかる。



（動きを工夫している例・O児のグループ）

O児：“ばあさまにめ
いわくかけた”で頭を
かかえこむ動きをする。
“かあさんさがしに行こ
う”でステップをふむ。
（“ばあさまにめいわく
かけた”までは、ゆっく
り、“北の湖”からは強く
はずんで歌っている。）



考察2 資料3からわかるように、K児のグループは太郎が反省している気持ちを悲しそうに消えるように読んだり“ぼろり”を反復させて読んだりすることにより、強く成長したいと願っている気持ちを強く読むことによりとらえていることがわかる。さらに、K児のグループの作品を見ると、最初の部分に太郎が反省している歌詞、後の部分に決意している歌詞を組み合わせ、反省している部分に短調・決意をしている部分に長調の旋律を用いている。また、決意をしている部分では、上昇旋律や3連符を用いて気持ちのはずみ・高まりをあらわしている。さらに資料5のK児の反応からわかるように、K児は、太郎の気持ちがよくあらわれるように強弱について歌い方の工夫をしている。これは、せりふの言い方の工夫をして太郎の気持ちを十分にとらえたことが旋律づくりや歌い方の工夫に生かされたと考えられる。資料5のO児の反応からわかるように、動きを工夫することにより、太郎の気持ちを深くとらえ、速度や強弱・唱法を工夫することができた。

イ、好きな場面の旋律をつくり演じる活動。6/10時～9/10時

ここでは、せりふの言い方の工夫(表現主題の明確化)→旋律づくり→動き・歌い方の工夫→協力班での相互評価→表現の見直しという⑥場面で学んだつくる方法をもとに、選択した場面のミュージカルをつくりあげた。

考察3 資料6の子供の作品からわかるように、人々が収穫を願う気持ちをゆったりしただんだん上昇していく旋律を用いてあらわしている。さらに、願いをあらわす部分を反復させ強調している。これは、せりふの言い方の工夫・動きの工夫をしたことが、心情を深くとらえるのに有効であったと考える。

資料6 子供の作品(人々が収穫を願う歌)



③ あじわう段階 10/10時

ここでは、つくりあげた表現を発表することにより、やりとげた充足感を味わうとともに、ひとつのものをつくりあげることができた自分の力を感じ取る喜びを味わわせた。

考察4

児童の感想文からわかるように、太郎の気持ちを深くつかみとり、動きや歌い方を工夫してきた充実感、1年生に発表できた充足感を味わっていることがわかる。

6. 全体考察

(1) ミュージカルをつくる活動によって、つかむ段階でのS児の作文(資料2)また、味わう段階での児童の感想文をみてわかるように、動き・言葉・歌すべてを活用して表現し、1年生に発表した楽しさを子供たちは感じている。(資料8)このことは、動き・言葉・歌を活用してあらわす素晴らしいさを感じ取り、低学年に発表するという目的意識を持った上でミュージカルをつくり、演じるという活動が、自ら表現する意欲をもってミュージカルをつくりあげていくのに有効であったと考える。

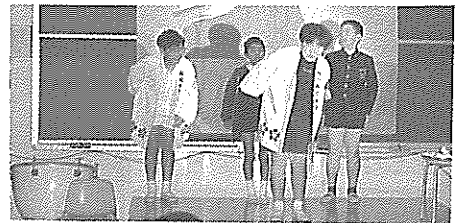
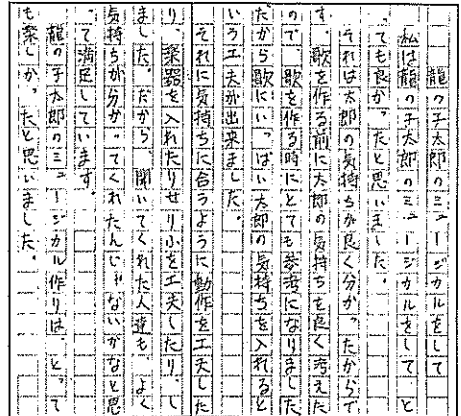
せりふの言い方を工夫することにより、太郎の気持ちをより明確にしていっていったことがわかる(資料3)さらに、それが、表情の異なる旋律を組み合わせせての歌作り・歌い方の工夫にまでいっていることがK児の姿によりわかる。(資料4・資料5)また、動きの工夫をすることにより、心情をより深くつかむとともに、強弱・速度・唱法の工夫をしていった。(資料5)つまり、せりふの言い方の工夫・動きの工夫をすることが、心情を音楽にあらわしていくのに有効であったと考える。

7. おわりに

ミュージカルづくりにさらに意欲的に取り組む題材の開発を求めて

参考文献 『音楽の本質と人間の音体験』(1993年3月25日イザラ出版発行 ルドルフ・シュタイナー著作)『龍の子太郎』(1969年3月10日講談社発行 松谷みよ子作)

資料7 児童の感想文



資料8 発表会のようす

創造的に音楽を表現する喜びを味わう

中学年音楽科学習指導

——総合的な音楽活動による題材構成を通して——

音楽科部 津 本 修

1. はじめに

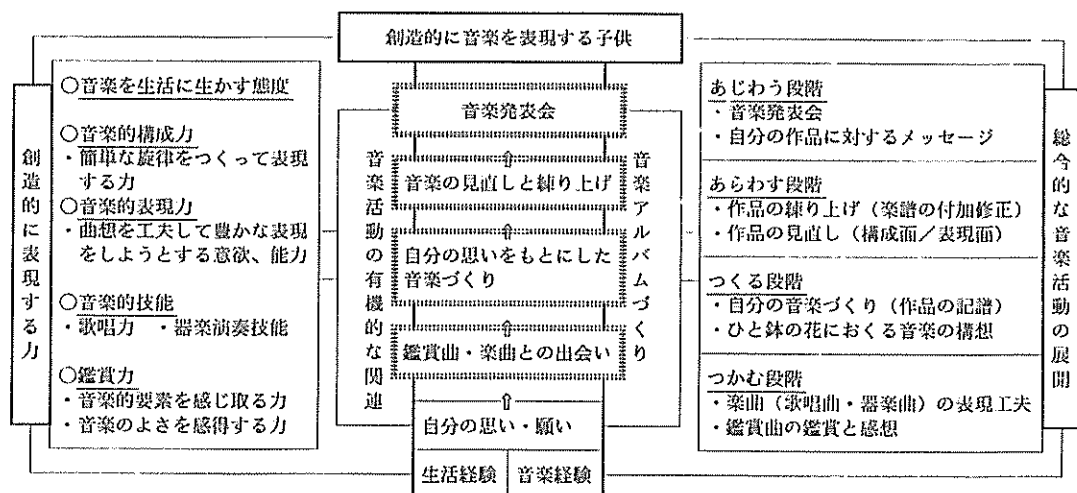
子供たちが、自分なりに音楽のよさをとらえ、自分の思いを音楽で表現していく学習過程を組んだ題材構成を行えば、子供一人一人が主体的に音楽活動に取り組みながら、創造的に音楽を表現する喜びを味わうことができる。

2. 意味と重要性

創造的に音楽を表現するとは、子供が、自分なりに表現を工夫して演奏したり、音楽をつくって表現したりしながら、主体的に自分の思いを音に託して表していくことである。創造的に音楽を表現する喜びを味わうとは、その表現活動の過程で味わう充足感・達成感にひたることである。創造的に音楽を表現する子供の姿とは、次のような姿でとらえることができる。(1)音楽を聴いて、自分なりによさを感じ取っている姿。(2)とらえたよさを、自分の表現に生かしていこうとする姿。(3)自分の思いや願いを音楽で表現しようとする姿。(4)つくった音楽を発表することにより、達成感・満足感を味わっている姿。このような姿を学習活動のなかで生み出していくことで、創造的に表現する力を育てることができる。創造的に表現する力とは、音楽のもつよさを自分なりに感得できる鑑賞力、自己の思いを曲想を工夫して豊かな表現をしようとする意欲および能力である音楽的表現力、簡単な旋律をつくって表現する力である音楽的構成力、そして、その表現を支える音楽的技能、音楽を生活に生かそうとする態度などから成り立っている。ここでは、特にそのなかでも自己表現に直接関わってくる音楽的構成力を中心に育てていくことが大切であると考えられる。

総合的な音楽活動による題材構成とは、子供の創造的に表現する力を高めるために、ひとつのテーマにそって様々な音楽活動を関連づけた学習活動を題材の展開に仕組むことである。すなわち、単独的につくって表現する活動だけをとりあげるのではなく、鑑賞、歌唱、器楽、創作といった音楽の諸活動が有機的に関連づけられた題材構成をしていくことである。有機的な関連づけとは、鑑賞でつかんだ表現の工夫を歌唱や器楽に生かしたり、鑑賞曲の楽曲構成をヒントに音楽づくりを行うなど、それぞれの活動の相互のつながりを図っていくことである。そして、子供が抱いた思いをふくらませ、自分なりの音楽として具現化していけるように、それぞれの活動を配列していくのである。子供たちは、創造的に音楽を表現していくなかで、これらの音楽活動に主体的に取り組み、音楽性を総合的に高めていくことができることに本研究の価値があると考えられる。

〈主題の構想〉



3. 学習指導上の問題点

- (1)これまでの音楽科学習指導においては、音楽美そのものを追求するあまりに、子供一人一人のもつ音楽的経験や音楽性の実態が個別に生かされるような指導が十分であるとはいえなかった。そのために、子供の創造性を発揮できるような学習にあまりなりえていなかった。
- (2)これまでの音楽科学習指導の題材構成では、セット型教材を仕組むなどといった音楽諸活動の関連性を図ろうとする傾向はみられるが、その有効な関連のさせ方についてはまだ十分に追究されてきておらず、子供が音楽性を総合的に伸ばす題材構成になっていなかった。

4. 問題点説明の方途

- (1)題材を次のような段階で構成し、音楽の鑑賞の感想カード、表現の工夫の書き込み楽譜、オリジナル音楽の楽譜などといった表現物や学習の感想や満足度を記録した自己評価カードを個人別に「音楽アルバム」として継続的にまとめさせていくようにした。

- ・ つかむ段階 楽曲（鑑賞曲／歌唱曲）との出会い、感動の経験の記録
楽曲を参考にした自分なりの表現の工夫の書き込み
- ・ つくる段階 自分の音楽の構想（表現主題・表現手段・表現－構成方法）
つくった音楽の記譜（五線譜／階名譜など）
- ・ あらわす段階 自分の音楽を構成面、表現面の2つの観点からの見直し
音楽の練り上げ（五線譜／階名譜の付加・修正）
- ・ あじわう段階 自分の音楽に対するメッセージの記録
友達の音楽の表現のよさ、感想の記録

- (2)総合的な音楽活動を次のような条件で構成する。

- ・ ひとつのテーマにそって鑑賞、歌唱、器楽、創作の諸活動を結びつけ、それぞれの活動の相互関連性を図る。
- ・ テーマは、子供の生活に身近で音楽的なイメージを喚起しやすいものを設定する。例えば、自然現象や季節に関係するもの、情景が想像しやすいストーリーなどが考えられる。
- ・ 基礎・基本的な力が総合的に身に付くように、題材にあった活動の内容を精選し、子供の創造的表現のプロセスに位置づける。

〈基本的な指導のしくみ〉

	つかむ	つくる	あらわす	あじわう
活動と内容	1 テーマについて話し合う ○テーマに対するイメージをもつこと 2 楽曲に出会う ○鑑賞曲の鑑賞 3 歌唱曲の歌唱 ○自分なりの表現の工夫	1 テーマや鑑賞曲・歌唱曲からイメージをもつ ○作品の構想をたてる 2 表現手段を選択する ○楽器（音）選び 3 自分のイメージを音楽で表現する。 ○旋律づくり	1 音楽の見直しの観点をとらえる ○作品の交流 2 音楽を見直す ○構成面／表現面 3 表現の工夫をする ○音楽の練り上げ ・構成面（音高・リズム） ・表現面（強弱・速度）	1 発表会をする ○作品の完成に対する成就感を味わうこと 2 音楽アルバムの仕上げ ○題材全体の自己評価
手だて	・ テーマに関係する音楽に対するイメージ・感想の記録 ・ 鑑賞曲の聴き比べ ・ 歌唱曲の表現工夫	・ 構想スケッチづくり ・ 鑑賞曲、歌唱曲からの構成上のヒント ・ 作品の記録法の選択（五線譜／階名譜）	・ モデル表現の提示および交流 ・ 見直しの焦点化 ・ 五線譜／階名譜の付加修正	・ つくった音楽の発表会 ・ 自己メッセージ（評価）

(1) 題材「わたしの花におくる音楽をつくろう」 第3学年

1. 自分の思いを音楽で表していく活動を通して、音楽に主体的にかかわり、その中で自分なりに音楽性の高まりに気づき、創造的に音楽を表現する喜びを味わうことができる。

(3) 目 標 ○自分なりに音楽のよさを感じ、自分の表現に生かしていこうとする主体的な活動態度を身に付けることができる。

(4) 計 画 (約8時間)

-177-

(5) 子供の反応と考察

① 第1次 「つかむ段階」 (第1時——第2時)

この段階では、子供たちがひと鉢運動で育てているパンジーの花に対する思いや、花に対する音楽的イメージをふくらませることをねらいとした。そのために、自分の育てているパンジーに対する思いを短い手紙文で書かせ(資料1)、花に対する思いを表した音楽にはどんなものがあるか話し合い、課外で花にまつわる楽曲さがしを行った。そして、その中から「エーデルワイス」と「野ばら」(F. シューベルト)の2曲を鑑賞させ、感想を音楽アルバムにまとめさせた。(資料2)また、「野ばら」は、いくつかの演奏を聴き比べさせ、表現の多様性に気付かせた。それから、「野ばら」の邦訳版を歌唱曲として、自分なりに表現の工夫をして歌わせた。子供たちは、「すこしゆっくり」と強弱の変化をつけたり、ここを「やさしく」歌いたいというように、自分なりの表現の工夫のしかたを音楽アルバムの楽譜に記入していた。(写真1)

考察1 自分の育てているひと鉢運動のパンジーを題材にとったことは、M児の手紙文からも読み取れるように、子供たちに思いを抱かせ、表現意欲を喚起するうえで適切であったといえる。また、資料2のZ児の感想から、鑑賞曲の鑑賞によって、「やさしい感じ」というような曲想や、旋律の音高の動き、強弱といった音楽的要素を感じ取り、花に対する音楽的イメージをふくらませていることがわかる。このことから、花に対する手紙文や花に関する鑑賞曲の鑑賞といった手立ての有効性がうかがえる。

② 第2次 「つくる段階」(第3——5時)

この段階では、「つかむ段階」でふくらませてきた自分のひと鉢のパンジーに対する思いをもとに、鑑賞曲や歌唱曲でつかんだ花に対する音楽的イメージや鑑賞曲のつくりを参考にしながら、8小節程度の短い旋律をつくらせることをねらいとした。

A. 表現主題の設定 (第3時前半)

「つかむ段階」で書いた手紙文や鑑賞曲および歌唱曲をもとに子供たちは、「パンジーの風にゆれている様子を表現したい。」「パンジーに丈夫に育ってほしい。」というように実際に音楽としてパンジーにつたえたいメッセージや自分の思いを「音楽アルバム」に記入しながら自分の表現主題を明確にしていた。(資料3)

I. 表現手段の決定 (第3時後半)

ここでは、自分の思いを音楽で表現するために必要となる表現手段としての楽器を自己決定させることをねらいとした。そのために、まず、楽器を使って曲をつくるか、自分の思いを歌詞にして歌をつくるかを自己選択をさせることにした。楽器を使った曲の場合は、①自分が表したい気持ちを表現するのに適当な音色をもつ楽器、②自分なりに演奏ができる楽器という2つの条件をもとに、各自表現に用いる楽器を選択

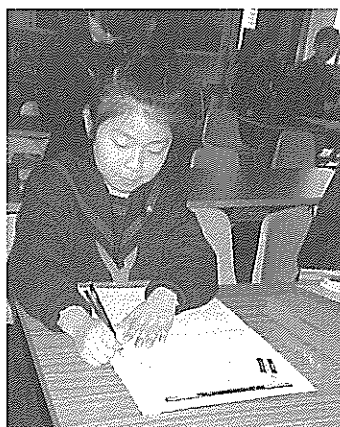
〈資料1〉M児のパンジーに対する手紙文

一人一はちのお花さん
ぐんぐん大きくなあれ
ほかの花たちとどーいどー
まかにいなるのゆいであらう
早くかわいお花をさかせてね
やさしてだれがーばんに
なるのからあと考えた
やぱりいぶんの花さんに
おうえんついついおうちう
お花さんがんばってね
明るくきれいに光れ

〈資料2〉Z児の「エーデルワイス」の感想

【エーデルワイスにふれたいとみる】
・きれいな花だということがわかった
・やさしいかんじ
・花の様子がわかる
・高い音とひくい音がある
・強くなったり弱くなったりしてる。

〈写真1〉音楽アルバムの記入



〈資料3〉S児の表現主題

パンジーが、元気にさいているようす
をあらわしたい

させた。また、歌をつくりたいという子は、自分のパンジーに対する手紙文をもとに短い歌詞をつくらせ、自分の演奏できる旋律楽器を使って旋律づくりをすることにした。M児は、楽器を使って音楽づくりをする方を選択し、資料4のようにオルガンで自分の思いを音楽で表していくことにした。

ウ、構成方法の見通しの把握（第4時前半） 〈資料4〉「音楽のくみたてかた」（ワークシート）

旋律づくりの手引きとして、鑑賞曲として用いた「エーデルワイス」の前半16小節の旋律のつくりをモデルに一部形式（a-a'）の旋律構成法についてとらえさせた。しかし、これはあくまでも参考として自分なりに音楽づくりに生かさせるようにした。子供たちは、拡大楽譜をもとにaの始めの部分とa'の始めの部分が同じ旋律でつくられていることに気付き、モチーフの反復法をとらえた。

I. 音楽づくり（第4時後半——第5時）

第4時でたてた音楽づくりの構想をもとに各自選択した楽器を使って、音楽づくりをさせた。このとき、「音楽のくみたてかた」というワークシートを用いて旋律づくりの支援を行った。M児は、資料4のように、「出だし」→「続く感じ」→「出だしの反復」→「

終わる感じ」という構成のヒントをもとにa-a'の一部形式の旋律をつくっていった。子供たちは、自分の花に対する思いをもとに探り弾き—書き込みの試行錯誤を繰り返しながら音楽づくりに取り組み、音楽アルバムの五線譜または階名譜に自分なりにできる範囲で、記譜していった。S児は、次のような音楽をつくった。（資料5）

〈写真2〉音楽づくりのようす

〈資料5〉S児のつくった音楽「ぼくのパンジーくん」



考察2 これまで、まとまりのある旋律づくりを経験したことがない子がほとんどということであったので、旋律づくりの手順についてかなり細分化した。このことにより、子供の自由な発想を損なうのではないかとという危惧もあったが、子供の作品をみるかぎり、自分の思いをその子がもっている力の中で音楽として表現できているようであった。記譜については、1小節内の拍数や音符の向きなどといった楽典上の不正確さはあるが、子供たちは楽譜を用いてつくったフレーズを再生したり直したりするという試行錯誤を繰り返していた。このことから、子供たちにできる範囲で記譜させたことは、つくった音楽の保存・修正に有効にはたらいと見える。

③ 第3次 「あらかず段階」（第6時）

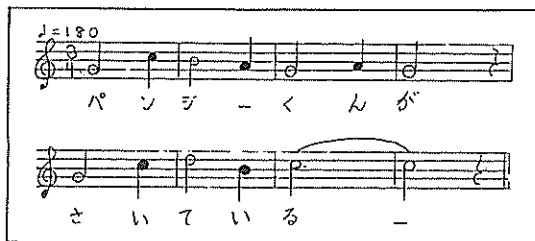
この段階では、前時までにつくってきた音楽を見直し、練り上げていくことをねらいとした。そのために、まず鑑賞曲および歌唱曲として用いた「エーデルワイス」をモデルに表現内容に合った旋律の音高の動きとそうでない例（資料6）、「野ばら」をモデルに言葉のリズムに合う旋律と合わない

ない旋律を提示して、対比させた。

〈資料6〉音楽の見直しの観点把握のためのモデル

ここで、子供たちは自分の思いにもっと合うように自分の音楽を音高やリズムを工夫してみようという意識をもった。S児は、自分の気持ちがよく表れていないと感じるところを自己判断し、そこを中心に音高を変化させて自分の表したい「元気にさいているようす」が出るように音楽アルバムの楽譜を付加・修正しながら音楽を練り上げていった。資料7は、S児の練り上げ後の音楽である。

〈資料7〉S児の練り上げ後の音楽



考察3 S児の例をみると、練り上げ前の音楽の旋律は、ほとんど順次進行であるのに対して、練り上げ後は、4度の跳躍進行がみられ全体的に旋律線が高くなっており、「元気にさいている様子」がよりよく表現されている。このことから、S児にとって資料6でのモデルが練り上げの方向づけとして有効であったことがわかる。

④ 第4次 「あじわう段階」(第7時——第8時)

ここでは、「花におくる音楽」の発表会を行い、創造的表現の成就感を味わわせることをねらった。(写真3)そして、音楽アルバムに自分がつくった音楽の自己評価を行い、題材全体をふり返って、自分の音楽的な成長を実感させるようにした。(資料8)

考察4 発表会により、子供たちに音楽づくりの達成感・満足感を味わわせることができた。また、資料8の自己評価表からも自分のつくった音楽の高まりや満足感を実感している様子がうかがえる。

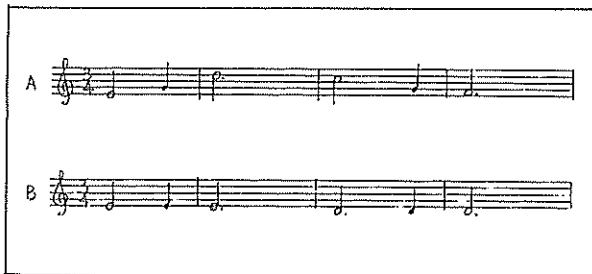
6. 全体考察

ひとつのテーマにそって、様々な音楽活動を関連づけるという題材構成は、資料3—資料8の音楽づくりの記録からもわかるように子供の学習意識の連続性を生み出し、主体的な音楽活動へとつながっていった。また、S児のつくった音楽の変容からもわかるように、鑑賞曲をモデルに音楽づくりの構成面に気づかせていくというような有機的な関連のさせ方にも有効性がみられた。このことから、単に子供の音楽性の向上を直接ねらうのではなく、子供自らが感じたことをどのように音楽で表現させていくかというプロセスが大切であることがわかる。また、授業の感想や満足度、表現の工夫、自分の作品などを音楽アルバムとしてまとめたことは、子供が音楽における自分らしさや音楽性の高まりを実感し、創造的に音楽を表現する喜びを味わうことにつながったと考える。

7. おわりに

他学年における総合的な題材構成による題材開発と音楽アルバムの内容の改善を求めて。

参考文献 「シュタイナー教育の創造性」ルネ・ケリードー著(佐々木正人訳)



〈写真3〉発表会の様子



〈資料8〉音楽づくりの自己評価表

タイトル	パンジー	名前		12	3
【よてい/計測】					
ひとはちの花におくる音楽をつくろう					
【感想/ほんせい】					
花に「かれないで」と伝えられる。音楽がだいたいできた。					
満足度	1	2	3	4	5
	○	○	○	○	○
タイトル	パンジー	名前		12	10
【よてい/計測】					
曲を元気なかんじにする。					
【感想/ほんせい】					
元気がようすがでた。					
満足度	1	2	3	4	5
	○	○	○	○	○
★自分のオリジナル音楽へのふりかへし					
ほかのパンジーが、元気にさいているようすがでた。					

えがく喜びを深める図画工作科学習

—— イメージ走査による再発想をとり入れた学習の展開 ——

図画工作科部 田 中 和 隆

1. はじめに

表現のよさを味わう目的で、自分の絵の中に入って遊んだり新たなイメージを発見したりするイメージ走査を行えば、子供たちは、主題をさらに豊かにふくらませて表現し、えがく喜びを深めていくことができる。

2. 主題の意味と重要性

えがく喜びとは、自分なりの思いや表現主題を抱き、既存の技能を駆使して表現していく過程で味わう充実感や成就感（熱中する楽しさ・できたという喜び）である。

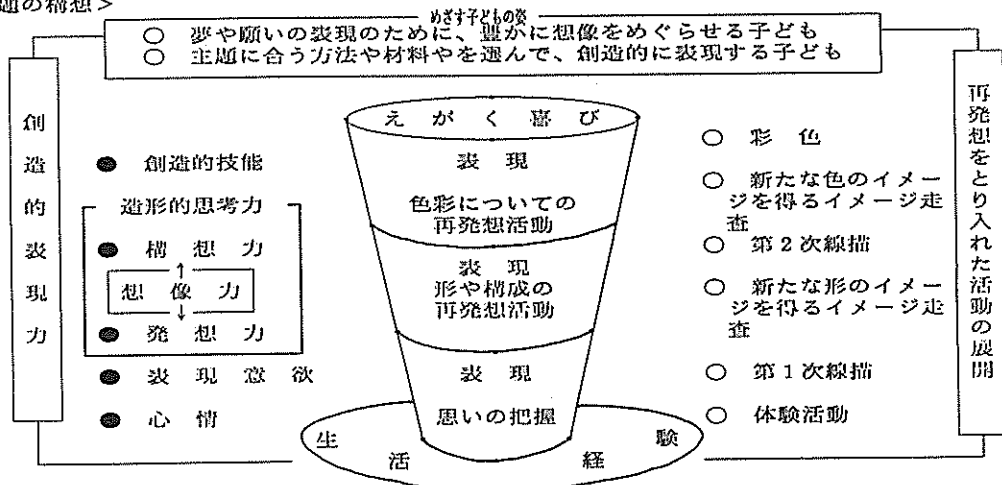
喜びを深めるとは、新しいイメージを発見し、それを表現しえた自己への効力感を味わうことである。深い表現の喜びは、最初に想像したことをそのまま表現するだけではなく、自分がいったん想像した物のイメージをさらに深めたり、つくり変えたり、増やしたり、位置関係を変えたりして、表現を豊かにしていくことによって得られると考える。

えがく喜びを深めていく子供の姿を学習過程に即して挙げると次のようである。①表現したいという思いを抱く子供。②どんな作品にしたいか、表現主題を抱いている子供。③表現主題を豊かにふくらませながら、適した方法や必要な材料・用具を選んでえがいていく子供。④自分や友達作品を見て、その思いのよさや表し方のよさを感じ取る子供。

これらの姿を支える力は創造的表現力である。この力は、造形に対する関心と意欲、自分にとって新しい形や色・材質で組み立てていく造形感覚と造形的思考力、美しい作品を生み出すために材料・用具を生かして使う技能、対象や作品のよさを感じとる鑑賞力によって構成される。とくに造形的思考力としての発想力・構想力が重要であると考え。その中核となるのは、既存の形や色のイメージを組み変えて、新しいイメージをつくっていく想像力であると考え。

イメージ走査による再発想は、自分にとって新しいイメージを発見することをねらう。具体的には、自分がえがいている絵の中に入ったと仮定して、その場の様子を視覚イメージによって走査したりその場面で遊んでいる様子を想像したりする心的活動と、得られた新しいイメージを表現する方法を考える活動とによって構成する。これらは、自己評価の過程でもある。その価値は、豊かな想像力を養うこと、それによって豊かな発想力や確かな構想力の基礎を培っていくこと、及び、それらの力を身につけることによって効力感などのえがく喜びを深めていくことにある。

<主題の構想>



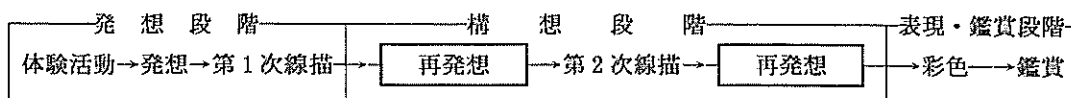
3. 学習指導上の問題点

(1) これまでの絵の指導は、最初に発想したことを構想指導で明確にし、計画を立ててかかせるという手順で展開してきた。これは、初めに感じたことや想像したことを大切に表現させたいという考えからであった。しかし、最終的に子供たちは「思いどおりの作品ができた」と感じることは少ない。このことは、最初のイメージが薄れたり、変容したりするためであると考えられる。

(2) 構想の指導では、初めにモデル等を提示し、形や画面構成の参考にさせる指導をしてきた。これは、指導内容を効率的に習得させるためや、イメージが湧きにくい子供を引き上げるための手だてと考えられている。それによって作品は効果的に仕上がるものの、「絵は先生が教えるもの」という意識が生まれ、「先生これでいいですか」と問いかけるような自己表現しない子供たちも現れた。

4. 問題点解明の方途

(1) 絵で表す学習の過程に次のように再発想をしくめば、最初に抱いたイメージを確かめたり、ふくらませたりして豊かな想像を生み出し、えがく喜びを深めることができるのではないかと。



(2) 構想の指導において、次のようにイメージ走査を位置づければ、自分がえがいてきた絵のよさを味わうとともに新しいイメージを発見し、生き生きと自己表現できるのではないかと。

再 発 想		< 自己評価 >
① イメージ走査の仕方についてのモデルを見る。	○ 走査によって描くイメージについてのモデル	○ 走査の仕方についてのモデル
② 自分がかいた絵の中に入ってイメージ走査する。	(診 断)	
※ 体をリラックスさせ、教師が視点の変換についての誘導をする。		
入口→ 足元→ まわり→ 向こう→ 遠く→ 自由に遊ぶ→ 入口に戻る		
※ イメージ走査しやすい環境をつくる。		
③ イメージ走査によって得た絵のなかの様子を話し合う。		
④ 初めの表現を改善していくことをメモする。	(対 策)	

< 基本的な指導のしくみ >

	発 想	構 想	表 現 ←→ 鑑 賞
活動と内容	1, 体験活動をする。 ○対象に対しての心情を抱く ○表現意欲の喚起 2, 主題文を書く。 ○表現主題の明確化	1, 第1次線描をする。 ○主題の追究 ○技能の習熟 2, 絵の中をイメージ走査する。 ○自分の絵のよさの感得 ○新しいイメージの発見 3, 第2次線描をする。 ○新しいイメージの定着	1, 色彩資料を見て話し合う。 ○寒暖・明暗の調子等の理解 2, 絵のなかの色をイメージ走査する。 ○色彩のイメージの再発見 3, 彩色する。 ○技能の習熟 4, 作品を見て話し合う。 ○効力感の感得
手だて	・体験活動 ・主題文カード	・画面構成の資料提示 ・走査の進め方のVTR ・走査の誘導	・色彩モデルの提示 ・走査の誘導

5. 指導の実際と考察

(1) 題材 今度するときは ——— 4年生・空想してかく絵 ———

(2) 題材の意義

- ① 情意面では、楽しい夢をえがくことによって、学校生活など自分たちの生活を楽しくしようとする意欲・態度を育てられること。
- ② 造形面では、自分がしていることを中心に、友達の様子や周りの様子とを関連づけて表現できる題材であること。また、創造的なものの見方・感じ方を育て、自分にとって新しい表現を生み出すことができることにある。

(3) 目標

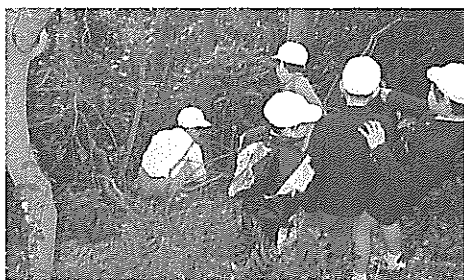
- ◎ 日常生活から生まれてくる、今度こんなことをこんなふうにしてみたいという思いを、空想的な楽しい絵として表すことの喜びを味わう。
- ◎ 中心になるものを生かすような、周りの様子を考へて画面構成をしたり、自分が表したいことに合う水彩絵の具の色や技法を選んで使ったりして表す。

(4) 計画 (約7時間)

階	ね ら い	活 動 と 内 容	時 間
発 想	○身近な生活の中からの、夢や願いの顕在化 ○表現主題の把握 ○表現主題の追究	1, 楽しい体験活動をして話し合う。 ○ 日常の身の回りの生活を振り返る ○ もう一度やるときは、どんなふうにしたいか話し合う。 ○ 想像を巡らし、仮定の楽しさを味わう 【思い・願い】 2, 絵の中で表現したいことを主題文を書く。 【表現主題】 ・ 今度するときは、たくさんの友達と遊びたいな・……。 ・ 今度するときは、こんな物がある、こんな所をしたいな。 3, 線描する。	2時間 ↓
構 想	○学習課題の把握 ○新しいイメージの発見 ○夢や願いの深化	4. 自分が線描した作品の改善方法について話し合う。 (1) 前後関係、位置関係についてのモデルを見て話し合う ○ 空間関係のイメージの描き方、表し方を大まかに把握すること (2) VTRを見て話し合う。 ○ イメージ走査の進め方の理解 【自己評価】 5. 自分の絵のなかに入り込みイメージ走査する。 ○ 物の形や細部のイメージを明らかにすること ○ 周りの様子についての新たなイメージを得ること ・ 物と物との位置関係を明らかにすること ・ 物の裏側のイメージも明らかにすること 6. 走査によって得たイメージの表し方を考える。 ○ 前時の線描をどの様に改善していくか ※ 改善の方針をメモする。	1時間 ↓ 診断 対策
表 現 ・ 鑑 賞	○表現主題の追究 ○新しいイメージの発見 ○夢や願いの深化 ○主題の追究	7. 走査して得たイメージをもとに線描を改善する。 ○ 新たなイメージの表現 【自己評価】 8. 色の種類と変化(色相と明度)についての資料を見る ○ 自然の中には、様々な色があることの確認 9. 自分の絵のなかに入り込み、イメージ走査する。 ○ 空間関係の把握 ○ 個々の物の色のイメージを明らかにすること ○ 個々の物の材質の感じを明らかにすること ○ 周りの様子など、全体的な雰囲気について、新たなイメージを得ること 10. 走査によって得たイメージの表し方を考える。 ○ 色彩、彩色方法について 11. 彩色の方針をメモする。 12. 彩色を仕上げて、作品を鑑賞し合う。	1時間 ↓ 診断 対策 2時間

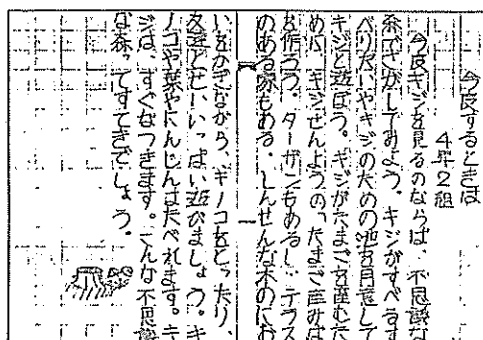
(5) 子供の反応と考察

① 体験活動をして、表現主題を抱く発想段階の学習 (第1時)



西公園の森でキジを探す子供たち

K児が書いた主題文



「西公園の森にキジがいる」という情報を、子供たちが知らせてくれた。都会では珍しいことである。早速、「では、キジに会いに行こう。」ということになり、学級全員で探しに行くことになった。キジを驚かさない、捕まえない等の注意を受けたあと、はやる気持ちを押さえて、抜き足差し足で森に分け入る。いつもは、はしゃぎまわる子供たちも、ぐっと口をつぐんで、緊張の面持ちである。やがて、「あった! あった!」と、K児がキジの首のあたりの羽を拾ってきた。騒然となる。

この騒ぎでキジは逃げてしまったらしい。諦めて教室へ戻ると、「また明日探しにいこう!」という子供たちの声。

そこで、「今度キジ探しに行ったとき、こんなだったらいいなという願いを絵にしよう。」と持ちかけると、子供たちの夢が広がった。左は、「今度キジ探しに行くときは」という題で書いた主題文である。楽しい計画の提案に触れて子どもの想像性が発揮されている。

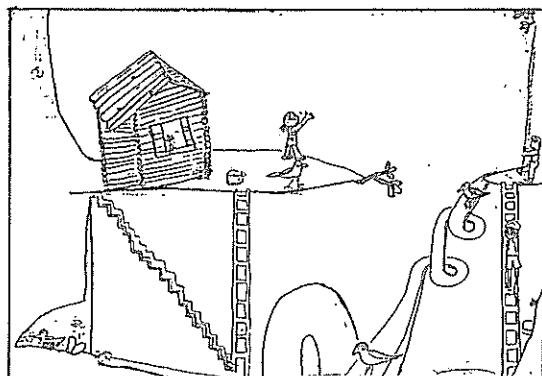
考察1 子供がこれから絵をかこうとするときは、例え空想の絵であっても子供自身に納得のいく動機が必要である。その動機は、現実とかけ離れたものであるよりも、実際に体験した、自分たちの生活から夢を広げていこうとする思いであることが望ましいようである。その体験の質としては、日常ありふれたことではなく、新鮮な興味がもてる事柄のほうがなお意欲的になるようである。

② 主題文をもとに、第1次線描をする構想段階の学習 (第2時)

第1次の線描では、とくに画面構成などについての指導はしていない。子供が自分なりに楽しく想像したことを、自分がこれまでに身につけてきた表現力を駆使して、精一杯表現できればよいからである。それが自己表現の出発であり、そこからえがく喜びが生まれると考える。

考察2 下は、K児がえがいた第1次線描の作品である。「キジがすべるすべり台」、「ターザン」、「テラス」などの、自分も遊ぶことのできる楽しい物をえがいている。また、隅っこの目立たない静かな場所にえがいた「たまご産み場」は、キジへの優しい心遣いからであろう。

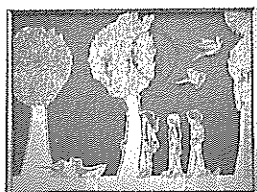
K児がえがいた第1次線描の作品



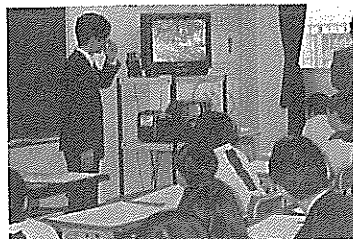
「こんな不思議な森ってすてきでしょう。」と語るこの絵のよさは、女の子らしい夢と思いやりに満ちている点である。一方、4年生の表現の内容である主になるものと周りの様子を表すという点からは、不十分さを残している。つまり、主題の中心になる近景の物だけをえがいて、向こう側の様子がかき込まれていないため、「不思議な森」の感じが十分に表しきれていないといえる。しかし、表現後のK児は「楽しい絵ができた」「絵をかくのが楽しかった」と満足感を抱いている。

③ イメージ走査によって新たなイメージを発見し、表現していく構想段階の学習（第3時）

子供がイメージ走査に入る前に、あらかじめ、走査によって何をイメージするのかということと、どのように走査を進めるのかということを知らせておく必要がある。それは、走査を効果的にするという意味と、勝手な走査によって表現主題から離れていくことを防ぐ意味からである。



周りの様子をイメージしていくことを知らせる資料



手順を示すVTRの提示

走査によってイメージしていくことを知らせる資料を見て、手順を示すVTRを視聴した後、子供たちは、教師の誘導によって3分間の走査に入った。この走査は、自分の表現のよさを実感する自己評価の「診断」に当たる活動でもある。ここでは、表現内容の楽しさ（よさ）を実感させるとともに、もっと楽しい新たなイメージを獲得させることをねらう。



走査する子供たち

走査の具体的な進め方としては、絵のなかに入った自分を視座として周りを見回し、物の形や材質の特徴、物と物との位置関係、人物の体の動きや表情、人物と物の関係などを想像し、イメージを確かめたりつくったりさせる。走査は教師の誘導によって進めさせ、視覚イメージがより鮮明になるようにさせた。自分が立っている足元から次第に視点を広げて行き、周りにある物や人物・動物の位置、形（大きさ・高さ・広さなど）、遠くに見えるものの様子などを鮮明にさせた。なお、イメージの定着を図るために心のカメラで写真

撮影をさせ、心のなかで現像したプリントを鑑賞させるように指示した。

走査が終わったのち、第1次線描の作品に改善の方針をメモさせた。それによると、41名全員が、多い子供で11か所、少ない子供でも3か所のかき加えや修正を行っている。中には、「トラがいたけど、キジがやられてしまうから絵にはかかない。」「海が見えたけど関係ないと思うから絵にはかかない。」というように、表現主題から考えて浮かんだイメージの取捨選択をする子供もいた。

考察3 走査によって、新しいイメージがどの子供にも生まれるということがいえる。また、表現主題とは無関係なイメージが生まれることもあるが、不要なイメージは表現の際に、子どもが切り捨てていくようだ。

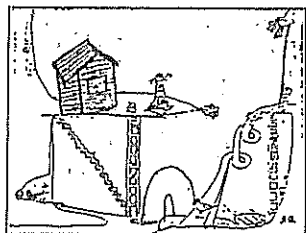
事後の聞き取り調査によると、イメージ走査することについての感想は次のようであった。

- | | |
|--|--------|
| ① 「いろいろ見たりするのが楽しかった。」 | T児 |
| ② 「絵の中に入って探検できたから楽しかった。」 | KN児 |
| ③ 「本当に、実際に、こんなところが見れるとは思わなかったけれども、なんだか寝るときに夢を見ているような感じで、自分の思っている所とかが見れて面白かった。」 | TK児 |
| ④ 「楽しかった。絵をかき直すのが楽しくなったような感じがする。」 | KJ児 |
| ⑤ 「もっと楽しい絵になりそう。」 | H児, N児 |
| ⑥ 「走査はイメージをふくらますのに絶対役に立つと思う。」 | K児 |

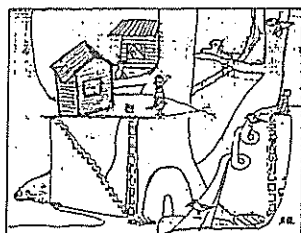
考察4 走査によって、自分がえがいてきた作品のよさを味わうことができるということが、聞き取り調査の①, ②, ③のような反応からいえる。また、表現意欲を増す効果もあることが④, ⑤, ⑥の各反応からいえる。

④ イメージ走査したことをもとに、第2次線描をしていく表現段階の学習（第4時）

K児は、走査のメモをもとに、下のように線描を改善していった。第2次線描では、画面中央の



第1次線描



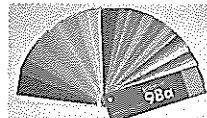
第2次線描

奥に、もう一本大きな木がえがかれ、手前の「テラス」と重なった表現になっている。向こうの木には半分かくれた丸太小屋が見えており、窓には二羽の小鳥がいる。木の枝には動物がのんびりと昼寝をしている。

考察5 走査によって、表現が豊かになっている。向こう側をえがくことによって奥行きが表現され、「すてきな森」の平和な感じがより表れてきているといえる。遠景については描かれていないが、彩色の段階で、空を描く時に必要性を感じるものと考えられる。

⑤ 走査によって色のイメージを発見したり豊かにしたりしていく表現段階の学習（第5時）

線描についての走査と同様に行った。概念色だけの表現にならないように、基本的な色相の種類を示す色相環と、色調の変化を示す98色の色カードを提示して色の選択範囲を広げたのち、走査させた。なお、キジの色については剥製によって知らせた。



提示した色彩資料

⑥ 走査によって得た色のイメージをもとに彩色していく表現段階の学習（第6時～第7時）

考察6 色のイメージは移り変わりやすいためか、あるいは微妙な色の変化は、4年生の子供にはイメージしにくいいためか、彩色の途中で何度も98色の色カードにふり返る姿が見られた。このことは、走査時に浮かんだ色のイメージが、概念色ではなかったことを裏付けることでもある。子供たちは、熱心に彩色に取り組んだ。



彩色の様子

6. 全体考察

イメージ走査による再発想は、考察5からわかるように、K児のように学年の基礎的・基本的内容に到達していない子供がいる場合、他の子供の作品や教師のモデルの模倣をうながすことなく、自ら改善し、到達していく姿を生みだす。しかも、「絵をかき直すのが楽しくなったような感じがする」という積極的な表現意欲を抱いてである。それは、走査することによって新しいイメージが得られるからであり（考察3）、走査すること自体が「楽しかった」と感じられる活動であるからである。走査が楽しいのは、「いろいろ見れるから」「探検できたから」というように、自分の作品にえがいた世界の楽しさ（よさ）を味わうことができるからである。ただし、色彩についてはイメージが壊れやすいので色カードなどの資料を用いながら、走査を繰り返す必要がある（考察6）。

以上のことから、走査による再発想は、子供の想像力を刺激し豊かなイメージを生みだし、子供の絵の表現を豊かにしていくといえる。そのことは同時に、子供の発想力・構想力などの造形的思考力を高めているのである。そしてその過程は、表現に熱中する充実感や作品を変容させていく効力感を味わっていく過程でもあった。留意点としては、表現主題によってあるいは一人一人のイメージをえがく能力の差異によって、走査に要する時間に個人差があるということである。そのため、集団で行うには、互いを妨げないような場所の確保などの配慮を要する。

7. おわりに この社会のすべてはイメージの表現物である。豊かなイメージは豊かな社会を築く。

参考文献 ピエール・クレメント『自己暗示トレーニング』東京図書 他

消費生活に生きて働く力を育てる家庭科学習指導

——多様な見方・考え方にふれる体験的活動を通して——

家庭科部 小 嶋 悦 子

1. はじめに

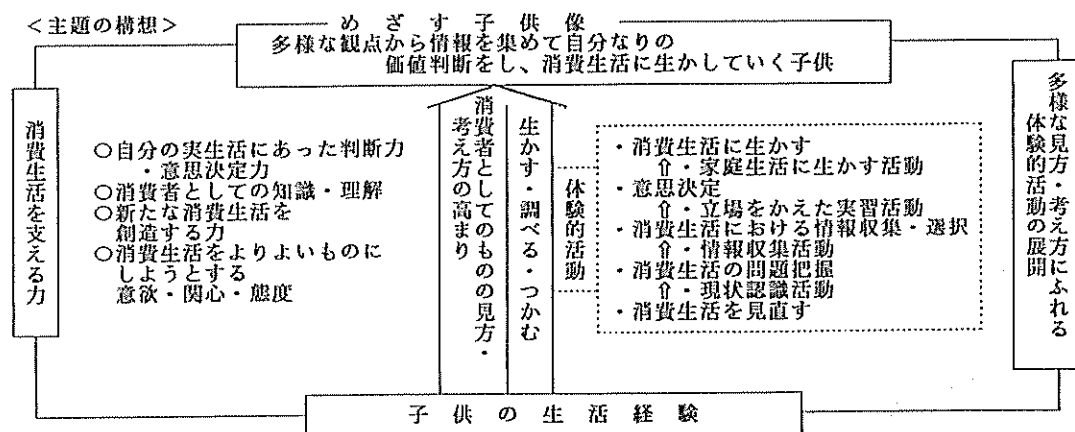
消費生活における自分の価値判断を見つめ見直していく活動を設定すれば、子供はそこで得た多様な見方・考え方をもとに自分なりの意思決定をし、家族の一員として消費生活に生きて働く力を培うことができるであろう。

2. 主題の意味と重要性

消費生活に生きて働く力とは、子供が自らを消費者として意識し、物の購入の仕方や品物の選び方、しまい方や活用の仕方などに対する価値判断を多様な観点から見つめ見直して新たな意思決定をし、実際の生活に生かしていこうとする能力や態度である。具体的には、①自分や家族の消費生活に関心をもち、なんとなく行動し生活していたこと、価値判断していたことをそれでよかったのだろうかと問題意識をもって見つめること②問題の解決にむけて、方法を考えたり、情報収集したりすること③相互交流をとおしていろいろな考えを長所・短所の両面から比較・検討し自分なりの価値判断をすること④自分の価値判断をもとに意思決定し、よりよい家庭生活をめざして実践しようとすること⑤自分の価値判断の高まりや家族の役にたったという喜びを味わうことである。これらの姿を支える力は、自分や家族の消費生活をよりよいものにしようとする意欲・関心・態度、消費者としての知識・理解、消費者として自分の実生活にあった適切な判断力や意思決定する力、である。子供一人一人が、自ら学ぶ意欲をもち身近な問題に気付き、多面的な見方や考え方をもちて意思決定し、豊かな自己実現を図っていくことは、家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる上からも意義がある。

多様な見方・考え方にふれるとは、自分の消費生活に対するとらえ方を意識し、そのとらえ方は正しい情報のもとでの判断であったのか体験的活動を重ねる中で、目的性や安全性、経済性等の多様な観点を見だし、その観点から再度自分の考えを見直して、自分なりの見方・考え方をつくっていくことである。体験的活動とは、自分のとらえ方の根拠を調べたり、情報収集や立場をかえて見つめたり、実習や相互交流をしたりする活動である。つまり、今までの自分の見方・考え方に問いをもって追究する中で、いろいろな見方・考え方を比較・検討し、自分や家族の生活をよりよくしていく意思決定をしていくことである。そのために、特に思い込みの見られることにゆきぶりをかけたり、作り手だけでなく、買い手や売手など立場をかえて活動させたりしていく。これらの体験的活動をおこなうことで、子供たちは多様な見方・考え方のもとに主体的に判断し実践していくことができると考える。

家庭科



3. 学習指導上の問題点

- (1) 自分が消費者のひとりであることを意識したり、立場をかえて見つめたりする体験的活動が不十分である。①消費生活における自分の一方的なとらえかたを意識させその概念をゆさぶった上で多様な観点到に気付かせたり、判断させたりしていくような場がない。②消費生活を作り手だけでなく、売手や買い手など立場をかえて見つめさせ、多様な観点到がもてるようにしていく活動構成が十分でない。
- (2) 子供自ら自分や家族の消費生活に目をむけた課題づくりが十分できていないので、消費生活の中で生きてはたらいっているかどうか姿としてとらえにくい。

4. 問題点説明の方途

- (1) 消費生活における自分のとらえ方を意識させ、その概念をゆさぶる場を設定する。

さらに、ここでとらえた思いが連続・発展し家庭生活の中で生きては働くような課題をつくる。

- ①消費生活に対する実態調査を通して子どものとらえ方をつかみ、特に思い込みの多い観点到に視点をあて教材化する。

<実態調査の内容>・商品購買の際の選択基準 ・選択の際の理由や最優先順位

<教材化する観点到>

・子供のとらえ方が、あるかたよった観点到からだけであったり、もしくはある情報からだけの判断であったりすると思われるもの。

・とらえ方をゆさぶる等、体験的活動を通すことで多様な観点到にふれていくことが可能であるもの。

- ②子供自ら問いをもって追求できるような場を設定するために、とらえ方にずれが生じている内容を調査結果より取り出して提示する。

- (2) 多様な観点到にふれていくために立場をかえた活動を設定する。

<活動の内容>

- ・作り手や買い手、売手の立場から情報収集し、自分なりの判断をする。
- ・それぞれの判断を交流を通して比較・検討したり、実習をしたりする。
- ・展示会を開き、買い手の立場で友達の作品を選択してその根拠を表現する。
- ・買い手の立場で自分や家庭生活にあった意思決定をする。

- (3) 自己評価の機能をもち、自分なりに価値判断したことを表出するものとして学習ノート「アップルツリー」を準備する。自分のよさを赤で、課題点を緑で、両面から表現していく。

- (4)基本的な指導のしくみ

	つかむ	調べる	生かす
活動と内容	1. 現状認識に問いをもつ。 ○現状認識の把握 ○問い追究の観点到把握 2. 情報収集のもとに比較・検討し課題をもつ。 ○観察・調査・実習などによる比較・検討 ○相互交流による課題設定と見通し	1. 情報収集したことをもとに計画をたてて実習し、新たな課題をもつ。 ○計画と実習 ○新たな課題の追究 2. 立場をかえて考える。 自分のよさや課題を表現する。 ○立場をかえた活動 ○いろいろな観点到からの評価	1. 家庭生活に生かすための相互交流をする。 ○つくりあげた喜び ○よさを味わう相互評価 2. 家庭生活にあった選択をし、実践する。
手だて	○実態の提示 ○見方・考え方をゆさぶる事象提示 ○現状認識表現 ○情報収集できる場（観察・実習等）や比較・検討の場	○グループでの検討の場 ○情報収集できる場 ○相互交流 ○実態の提示とゆさぶり ○立場をかえての実習 ○自己評価	○展示発表会の場の設定 ○相互交流及び相互評価 ○選択の表現 ○家族の支援（実践カード）

5. 指導の実際と考察

(1) 題材 5年生「オリジナル野菜サラダとドレッシングをつくろう。」

(2) 題材の意義

本題材では、単においしい野菜サラダやドレッシングが作れるようになることだけでなくその「おいしさ」に含まれている観点に目をむけて、多様な観点から食物や調理学習をとらえることができるようになることが大切である。ここでは、「見た目や味だけで決めていいのだろうか」という問いから立場をかえて情報収集したり、実習したり相互交流したりして自分のとらえ方を見つめ見直し、新たな価値判断のもとに家庭生活へ生かしていくことに価値がある。

(3) 目標

- ① 家族の好みや健康などを考えた野菜サラダやドレッシングを工夫して作ることを通して、食物や調理を多様な観点から追究し、家庭生活に役立てる有用感を味わうことができる。
- ② 多様な観点（目的、栄養、安全、経済等）から野菜サラダやドレッシングの材料を選び、自分の家庭生活にあった実践をしようとするすることができる。
- ③ 生野菜に含まれる栄養素と性質、調理上の注意がわかり、実習に必要な用具や計量器の正しい取扱いや後始末ができる。

(4) 計画（約10時間）

段階	ね ら い	活 動 と 内 容	時間
つかむ	●こんな野菜サラダをつくりたいと思い・願いをもつ。 ●学習課題をつかみ見通しをもつ。	1. 「オリジナル野菜サラダやドレッシングをつくろう」という目的意識をもって、自分のわからないことを調べ、課題をもつ。 問い1 どうしたらおいしい野菜サラダやドレッシングが作れるのかな。 ○自分のつくりたい野菜サラダをイメージし、そのためにはどんなことがわかれば作れるのか疑問点を話し合い、調べる内容をつかむ。 思い・願い ○味だけでなく、栄養や安全など色々なことを考えて野菜サラダやドレッシングが作れるようになりたい。 問い2 自分が考える野菜サラダやドレッシングを作るにはどんな材料を選ぶといいのだろうか。 （情報収集する一課外）	2
調べる	●課題を追究する。 ・情報収集したことをもとに自分の計画をたてる。 ・自分の計画にそって実習する。 ・ドレッシングに対する現状認識を意識した新たな課題をもつ。 ・立場をかえて考える。 ・情報収集し比較検討する	2. 情報収集したことをもとに話し合い、材料購入と調理実習の計画をたてる。 （材料を購入する一課外） 3. 材料購入の仕方を相互交流しそれぞれのよさや課題をつかむ。 4. 自分の計画にそって実習する。 5. 前時で作ったドレッシングをもとに、家庭で使っているドレッシングに目をむけ問いをもつ。疑問 学校で作ったのはおいしかったけど、家では市販のドレッシングだ。 問い3 どうしてわが家は市販のドレッシングを購入しているのだろうか。ドレッシングをつくって紹介したい。 （情報収集する一課外） 6. 情報収集したことをもとに、自分のドレッシングを考えてつくる。 ○家族の健康や好みや考えた材料や分量 ○目的性、安全性、経済性 7. 立場をかえて自分なりの工夫をし自己評価する。 ○表示内容調べと自分のドレッシングの表示 ○かかった費用の算出と値段付け	0.5 0.5 2 1 1 1
生かす	●生活に生かす相互交流をする ・目標達成の効力感・有用感	8. ドレッシングを展示し自分の家庭生活にあった選択を考える。 ○友達のだレッシングを買い手として価値付ける ○これからの家庭生活にあった選択について自分なりの判断基準で考える 9. 家族に作ってあげたい野菜サラダを作る。	1 1

(5) 子供の反応と考察

〈つかむ段階〉…①「野菜サラダやドレッシング作り」に対する自分なりの思いをもつ(1~2/10時)

自分なりの思いをもって学習課題をつかむことをねらいとしている。まず、教師の作ったものを観察・試食し、自分なりの思いをもって考え、調べる場を設定した。その中で、子供の「おいしさ」に対するとらえ方である「見た目のよさ、味、いろどり」等の観点にそって話し合い、そのとらえ方は正しい情報のもとで判断されたのかを調べていった。：S児の感想「最初は、水につけてパリッとしたキャベツが見た目もいいし、おいしいと思っていたけどインドフェノール液で調べるとビタミンCがうばわれていることがわかってびっくりした。見た目だけでなく栄養のことも考える必要がある。」

〈調べる段階〉

② 思いを具体化するために情報収集し、調理実習をする(3~5/10時)

自分の課題を追究していくことをねらいとしている。そのために、必要な情報を収集し、材料を購入した上で自分の買い方を相互交流する場を設定し、調理実習にはいった。家庭やお店等から情報を集め自分の考えで材料を選んでいる。また、それらを交流する中で自分の観点を見直す姿がみられた。さらに、実習を通して洗い方、切り方、計量の仕方、味の付け方等自分の課題をつかんでいった。：T児の感想「ぼくは、新鮮な野菜をかうために、家のひとに尋ねたり、お店の人に教えてもらったりして選びました。ところが○君の買い方は虫食いの穴を見つける買い方でした。その方が農薬がついてなくて安全だということです。この次かうときはぼくも安全で新鮮な野菜を買いたいです。」

【考察1】最初に、自分のとらえた方を見つめ直す場を設定したことは、S児の感想にもみられるように「見た目がよいほうがおいしい」という自分のとらえ方を意識させ、そのとらえ方が、かたよっていたことに気付かせることができた。このような活動は子どもの思い込みをくずしていく上で有効に働いたといえる。T児は「新鮮さ」という観点から材料を選んでいたが、その自分の観点を意識するとともに、友達の「安全」という観点到にふれ、自分の課題を明確につかんでいっている。これは、情報収集したり、実際に購入した材料をもとに相互交流したりして多様な観点到にふれる場があったからであると考ええる。

③ 前時のドレッシングと家庭で使われているドレッシングに視点をあて新たな問いを持つ(6~7/10時)

ここでは前時に作ったドレッシングと家庭で使用しているドレッシングに対するとらえ方に視点をあて、自分の判断の根拠を調べることでこれからの課題をつかんでいくことをねらいとしている。そのために、前時に作ったドレッシングへの思いを発表させた上で、資料①②③の家庭でのドレッシング使用実態の結果を提示した。子供たちは自分のドレッシングを評価しながらも家庭では市販の物を利用することを理由(資料④)をあげて説明していった。

T：「自分でつくっておいしかったのにどうして家庭では市販のドレッシングを使っているのですか。」

C1：「家でつくるとおいしくないし市販のほうがおいしいからです。それに時間もかかります。」

C2：「野菜サラダを作る回数が多いので、そのたびに作ると面倒だから、家では市販のをつかいます。」

C3：「いろいろな材料を集めるのら費用がかかるからではないですか。」

C4：「市販の方が安くできます。」

自分のとらえ方を出し合う

中でその判断の根拠を明確にする必要を感じた子供たちは、味の比較、手作りにかかる時間や費用の算出、内容表示の



写真① 味をみたり計測したりしている

資料① 家庭でのドレッシング使用実態

・市販のドレッシング——41名
・手作りドレッシングと市販の併用——2名
・不明——1名

資料④市販のドレッシングを利用する理由

・いろいろな材料がはいっている——5名
・家で作るより市販の方がおいしい——32名
・家で作るのは面倒、手間が省ける——34名
・市販の方が安全——1名

複数回答

資料②

市販の購入優先順位

・味——30名
・材料——5名
・口宜伝——3名
・健康によい——2名
・値段——2名
・デザイン——1名
・新製品——1名

検討などそれぞれがはっきりさせたいことを調べ、わかったことを次のように相互交流していった。

- C5: いろいろな味を比べてみただけ、人によっておいしいと思うのが違う。好みがちがうからではないかと思う。
- C6: 10分以上かかったら面倒だと思っていたけど、たった3分しかかからなかった。味も工夫できそう。
- C7: 先生の手作りの材料費を計算してみたら、市販のものよりとても安かった。市販の方が、高い。
- C8: 手作りは保存出来る期間が短い、市販は長い、香辛料とかつかっている。何かわからないものがある。

その結果、自分の家庭はなぜ市販を使用しているのか調べたい自分なら工夫してつくるのにという思いをもつに至った。

考察2 自分で作るとおいしいにもかかわらず、なぜ家庭では市販のドレッシングを使っているのだろうか

資料①のよう
な実態調査の結果を提示してゆさぶったことは、児童の発言(C1～4)に見られるようにドレッシングを通して自分の消費生活を意識させるのに効果があった。自分では気付きにくい観点にふれさせ、自分の判断の根拠を調べようと意欲的に活動(写真①)させるのに有効であった。調べた結果を発言(C5～8)している姿やS児の感想(資料⑤)から思い込みを見直していこうとする思いが伝わってくる。これは、ここでの活動が新たな見方・考え方にふれていく活動構成になっており、有効に働いた結果であると考えられる。

④ 家族に紹介する自分のドレッシングについて追究する。(7～8/10時)

ここでは、家族に紹介するドレッシングを作り自分のドレッシングのよさや問題点を多様な観点から気付くために立場をかえて追究していくことをねらっている。そのために、作り手として家族から情報を収集したり、市販のドレッシングを参考に作り手や売手、買い手の立場から考えたりする場を設定した。家族のことを考えて材料を健康の観点から選んだり、材料にかかる費用を算出したりしていった。また市販のドレッシングと比べてラベルのないことに気が付いた子供たちは、意欲的に市販のラベルを調べ、自分のドレッシングにも工夫を加えていった。

考察3 家族から「市販の
がおいしくて手とり早いから使ってる」といわれた子供たちは、それなら自分たちで工夫して市販のものに負けない物を作ろうと意欲的に活動

資料⑥ S児のアップルフルーツに表現した内容



写真②③④ 追究活動の様子

する姿として表れた。具体的には家族の健康や好みを考え材料を選んだり、市販より安く出来ることを家族に知らせようと自分の材料費を計算したり、ラベル作りをしたりする姿である。このように、意欲的に活動できたのは前時の市販と手作りを比べた活動に対する思いが連続・発展したこと、前時での活動

おいてあること	→ 人々のために、どんな書かして → 自分のドレッシングでは
・品名・絵	→ 誰うにか、買いたく食べ、ヘルシー・レモン・ドレッシング(ごま油) 食べたくなるような絵
・製造年月日	→ いずれの物か、おろしたものに 11・5・
・原材料名	→ どの物か、おろしたものに 卵・サラダ油・しょう油・塩・こしょう・レモン汁・うめぼし・こしょう
・内容量	→ どのくらいあるか、150ml
・保存方法	→ どのくらいあるか、150ml
・賞味期間	→ どのくらいあるか、150ml
・販売者(等)	→ どのくらいあるか、150ml
・注意(等)	→ どのくらいあるか、150ml

(味見、材料計算、安全性調べ等)を参考に、資料⑦ 市販のドレッシングの表示内容を調べて自分のドレッシングの表示内容を考えたノート立場をかえて自由に追究できる場があったからと考える。さらに、費用を算出して値段を考えたことは、自分の作ったものを経済的な観点から価値付けさせることができたとともに、値段に含まれる物を考えさせ、買い手として購入する時の観点をもちこにつながつた^⑧と考える。また、ラベル作りをしたことは、売手がどのような観点で製品を作っているかを考えさせ(資料⑦)、買い手になっ

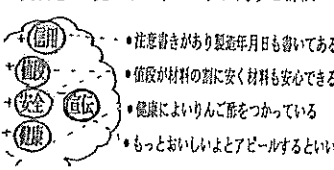
た時の判断の観点を自ずと学習させる上で有効であったといえる。このように、単に作り手だけでなく、買い手や売手の立場にたったことは、自分のドレッシングを多様な観点から評価することにつながっていった。(資料⑥)

〈生かす段階〉⑤ 生活に生かすために自分の家庭生活にあった選択を考え実践する。(9~10/10)

ここでは家庭生活に生かすために自分の家庭にあった選択をしたり、家族のための野菜サラダをつくったりして達成感や有用感を味わうことをねらいとしている。そのために、お互いのドレッシングを展示し、「購入するとしたらどれを選ぶか」という視点で友達のドレッシングを観察させ、相互評価をさせたり、自分の家庭ではどんな選択がよいか考えさせたりした。さらに、家族のための野菜サラダ作りを実践させた。S児は資料⑧のようにK児のドレッシングを経済性や安全性だけでなく、信用という観点からも選んでいっている。また、市販のドレッシングを選択するとしてその最優先順位



資料⑧ S児のドレッシングに対する評価



資料⑨ 市販購入最優先順位

- ・味—14名
- ・安全性—13名
- ・材料—7名
- ・値段—5名
- ・健康—5名

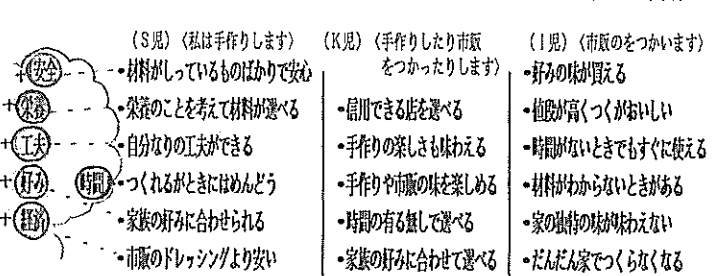
資料⑩ 家庭生活にあわせた選択

- ・手作りとし市販の併用—28名
- ・手作り—8名
- ・市販—8名

(資料⑨)を考えさせ、自分の変容を味わわせた。

【考察4】 S児のこの姿は、前時のラベルを調べた活動が本時買い手になった場を設定したことで生かされたと考え。また資料④、⑥、⑧、⑪でS児の意識の変化を追うと最初は味や材料の観点しか持っていないが、

資料⑪ 自分の家庭生活にあわせた選択理由 アップルフルーツに表現した内容



資料⑪では観点が安全、経済、栄養等広がっている。これは立場をかえての活動が有効に働き、それぞれの家庭の状況に合わせた選択をさせるに至ったと考える。同様に、学級全体の意識も資料①と⑩、②と⑨を比べてわかるように多様な観点から選択するように変化している。資料⑫の感想にみられるように効力感や有用感を味わっている姿をみることができた。これは、子供が自分の生活に生かしていく喜びを体得した姿、消費者としての見方・考え方の高まりに他ならない。

資料⑫ 学習を終えての感想

お母さんたちがたくさん来て私たちのつくったドレッシングを見たり、味見をしたりして感想を書いてくださいました。お母さんたちが味見をしているときは胸がドキドキしました。私のドレッシングには「ごまの風味がきいて、そのうえピリッ辛さもあっておいしいですよ。値段までもかんがえたんですね。これなら、お家でつくったほうが安いですね」とか、「ラベルに材料名が書いてあるから安心して使えますね。」など書いてありました。今まで市販のドレッシングがおいしいと思っていたけど、いろいろなことを考えると手作りもいいことがわかりました。これからは、いろいろなことを考えてから決めたいと思います。妹が私のつくったサラダやドレッシングをととても喜んでくれたのがうれしかったです。

6. 全体考察

- (1) 消費生活の中で生きて働く力として、①情報収集活動を通して必要な情報を集め比較・検討する力②多様な見方・考え方にふれることで多様な観点から意思決定する力③意欲的に追究する中で自分の消費生活を見つめる力が育ってきた。特にゆさぶりは意識を変容させる上で効果的であった。
- (2) 多様な見方・考え方にふれ意思決定していくために立場をかえて活動させたことは有効であった。

7. おわりに 多様な見方・考え方を身につけ消費生活に生かしていく子供を求めて

〈参考文献〉武藤八重子著「消費者教育を導入した家庭教育」家政教育社 1992 経済企画庁発行「消費者教育の実践に向けて」1992

——体験活動を生かした身体表現の創造を通して——

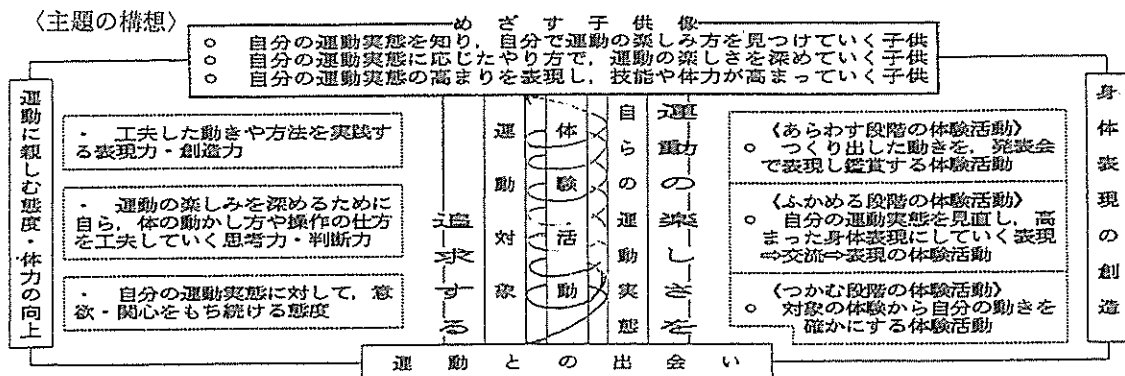
体育科

子供たちが運動と出会い動きを高めていくとき、自分の運動実態から場や動きを工夫して、新しい運動を味わっていく体験活動をしくめば、課題に意欲的に取り組み、自らの可能性にくり返し挑戦し続けながら運動の楽しみを深めていくことができる。

運動の楽しさを追求するとは、運動がより楽しめるように、自分が今もっている運動実態を生かしながら運動を行い、新たな運動体験を味わっていくことである。この過程で、子供たちは、自分自身の運動実態の変容と高まりを味わいながら、運動の楽しさを深めていく。子供の姿としては、①過去の運動体験から、出会った運動に対して、「できたらいいな」「やってみたい」などと、自分なりの思いをもつ ②自分が今もっている運動実態をもとにその運動を行い、自分なりの課題を見つける③課題を解決するために、自分の運動実態に合わせて、場や用具を工夫したり、学習資料を参考にしたりしながら自分なりの動きをつくり出す ④友達との交流を通して、自分なりの動きを高めていく ⑤高まった動きを身体で表現しながら、自分の伸びを実感することなどが考えられる。これらの姿を具体化するための力としては、①運動に対する自分の実態に対して興味・関心をもち続ける態度 ②場や用具を工夫したりする思考力・判断力 ③イメージを形に表して創造的に表現する表現力などが考えられる。

体験活動を生かした身体表現の創造とは、子供たちが、自分の運動実態を手がかりに新しい運動の体験を積み重ねながら場や動きを工夫し、自分なりの表現方法で身体表現をつくり出していくことである。具体的には、次のような体験活動を学習過程に位置づけて身体表現をつくり出していく。①表現主題のイメージをもつために、表現対象を実体験したり、観察・模擬体験したりする、②自分がもったイメージを自分なりに身体表現し、自分の身体表現を確かにする〈つかむ段階の体験活動〉、③自分の身体表現を友達と表現→交流→表現をくり返したり、場や用具の工夫をしたりしながら、つくり出した新しい運動の体験を積み重ねていく〈ふかめる段階の体験活動〉 ④グループでつくった動きを1つの作品としてまとめ、互いに発表し鑑賞し合う〈あらわす段階の体験活動〉。

この活動は、子供が自分の運動実態に対する理解を深め、交流活動や場や用具の工夫を通して新しい運動を体験することにより、自分の運動の可能性を広げることができる。また、技能や体力の向上を図る姿も生み出すことができ、子供が自ら進んで運動に親しみ、生涯を通じて運動に親しみ続ける能力や態度を育てる上で価値ある活動だと考える。



3. 学習指導上の問題点

これまでも体験活動をさせる学習は行われてきたが、体験活動が、導入における表現のイメージをもたせるためだけのものになっていることが多く、単元を通しての体験活動になっていなかった。そのため、イメージをもつことができても、学習を進めていく過程において、教師側からの働きかけが多くなり、自ら課題を解決していき、楽しさを追求していく学習になりえてない面があった。

4. 問題点解明の方途

(1) 一人一人のイメージからの動きを、学習の終わりの段階まで生かしていけるように、学習過程に、体験活動を次のように3つの段階で位置づける。

〈つかむ段階の体験活動〉

表現対象を実体験したり観察・模擬体験したりする活動を通して、自分の表現のイメージをもち、それを自分の身体で表現する体験活動を通して、自分の運動実態をつかむ。

〈ふかめる段階の体験活動〉

自分の身体表現を、友達と表現＝交流＝表現をくり返したり、場や用具の工夫をしたりする体験活動を積み重ねながら、新しい運動をつくり出していく。

〈あらわす段階の体験活動〉

自分たちでつくった動きを1つの作品としてまとめ、互いに発表し鑑賞し合う。

(2) 子供自ら動きを工夫することができる場や教材・教具の準備、教師の支援・援助を行う。

- 場や教材・教具 ― 目的性、選択性があり自らの課題に応じて自由に選べるもの。
- 教師の支援・援助 ― 理解の浅さに気づかせるために、異なる視点を与えたり、比較のモデル提示をしたりする。また、学習の相談にのる立場で接する。

〈基本的な指導の仕組み〉

段階	つかむ	ふかめる	あらわす
活動と内容	1. 表現対象の体験をする。 ○ 表現対象の実体験 ○ 表現対象の活動体験 2. 自分がもったイメージから動きをつくる。 ○ 一人での動きづくり 3. 学習の見とおしをもつ。 ○ 学習課題把握 ○ 学習の進め方の把握	1. 自分自身や友達と新しい動きをつくる。 ○ 2人での動きづくりの表現→交流→表現活動 ○ グループでの動きづくりの表現○交流○表現活動 ○ 動きを高めるための場や用具の工夫	1. グループで1つの作品にまとめる。 ○ 全体構成の工夫 ○ 効果音の工夫 ○ 補助用具の工夫 2. 互いに鑑賞し合う。 ○ 表現方法の発見 ○ 良さの認め合い ○ 自分の伸びの実感
手立て	・ 観察・体験カード ・ 題材との出会わせ方の工夫 ・ めあての持たせ方の工夫 ・ 学習計画表作成	・ 動きのポイントカード ・ 動きづくりボード ・ A & V機器の活用 ・ 課題を解決するための場や練習方法への支援・援助	・ A & V機器の活用 ・ 自分の伸びを実感できる場の設定 ・ 一人一人が生かされる発表の場の設定

5. 指導の実際と考察

(1) 単元 「たき火が燃える様子を体で表そう」 —— 5年生・表現運動 ——

(2) 単元の意義

本単元は、たき火が燃える様子を自分の体で表し、グループで一つの作品をつくりあげていくものである。たき火が燃える様子は、燃えはじめから燃え終わりまでの、はじめ・なか・おわりが分かりやすく、また、燃え方の違いにより、激しい感じや柔らかい感じなど様々な様子が感じられる。これは、はじめ・なか・おわりを工夫したグループでの表現をしやすく、激しい感じや柔らかい感じの表現もしやすく、5年生の学習内容として適している。

(3) 目 標

- 焚き火が燃え上がって消えていく様子を、自分の身体の動きを使って、はじめ・なか・おわりの変化がある動きで、楽しく表すことができるようにする。
- 自分が表せる身体での動きを生かしながら、グループで協力して、焚き火が燃え上がって消えていく様子を楽しく表現することができるようにする。
- 一人一人の身体の動かし方の変化や、集団としての全体の動きの変化を見て、表したい感じを見分けることができるようにする。

(4) 計 画 (約9時間)

階	ね ら い	活 動 と 内 容	時 間
つかむ (3時間)	・ 燃え方のイメージの把握	1. グループごとに「焚き火」の体験活動をする。 ○ 燃やすものを集める活動 ○ 燃やし方の工夫 (火のつけ方、燃やす物のくべ方など) ○ 「観察カード」への記録 ※ いろいろな燃やし方を体験させ、自分のイメージをもたせる	1時間
	・ 自分の動きの実感の把握	2. 自分がもったイメージをもとに、自分の動きをつくってみる。 ○ 自分自身のイメージをもとにした自由な身体表現 ○ 学習カードへの記録	1時間
	・ 課題把握 ・ 学習の見とおし	3. 学習のねらいや進め方について見通しをもつ。 (1) 自分の動きをつくりあげる。 (2) 友達と交互に動きを見せ合い、新しい動きを覚える。 (3) 2人の動きをグループで互いに見せ合い、動きを広げていく (4) 音楽や音や用具を工夫して作品をつくりあげる。 (5) 互いのグループの作品を鑑賞して、表現のよきを見つめる。 ※ 学習カードや場やビデオ機器の使い方も十分に把握させ、できるだけ自分たちで学習が進められるようにする。	1時間
ふかめ (7時間)	・ 自分のイメージと動きの把握 ・ 自分の動きの広がり ・ 集団での動きの工夫 ・ 集団での動きの高まり	4. 学習計画にそって、学習を進めていく。 (1) 自分のイメージの動きをつくりあげ学習カードに記録する。 ※ 友達の動きにとらわれずに、自分のイメージからの動きをつくらせるようにする。 (2) 友達2人と交互に動きを見せ合い、動きを広げる。 ※ 自分にはない友達の動きを新しく付け加えたり、「動きのポイントカード」を参考に、動きの工夫をさせたりする。また、動きが連続するように、動きの変化がわかりやすいように、口伴奏でリズムをつけたり、ゴム紐を張った場で高さを意識して動きづくりをすることができるようにしたりする。 (3) 2人の動きをグループで見せ合い、グループでの動きをつくっていく。 ※ 集団での「動きのポイントカード」を参考に、動きの工夫をさせる。また、「動きづくりボード」を活用し、一人一人の移動の仕方工夫をすることができるようにしたり、カラーコーンを用意し、横に広がりのある動きを工夫したりすることができるようにする。 (4) 工夫してきた動きを1つの作品としてまとめる。 ※ 音楽や音や表現を効果的にするための小道具など自分たちで工夫することができるように、十分相談に乗る。	5時間
あらわす	・ つくりあげた喜び	5. 出来上がった作品を互いに鑑賞する。 ※ 自分たちの表現と比べて、その違いやよきを見つめることができるように、観点をもって鑑賞させる。また、発表の仕方など、自分たちで工夫して計画させるようにする。	1時間

(5) 子供の反応と考察

① 《つかむ段階の体験活動》 — 3時間

【焚き火と観察の体験活動をする子供たち】

この段階のねらいは、身体表現することへの興味・関心を高めることから、身体表現に対する思いをもたせ、その思いをかなえていくための課題を見つけ、学習の見通しをもたせようとするものである。そのため、まず第1時間目に、右の写真のように焚き火とそれを観察する体験活動をした。子供たちは、グループごとにいろいろなもやし方を体験し、一人一人が自分のもったイメージを観察カードに書き込んだ。第2時は、一人一人のイメージをもとに、自分自身で自由に身体表現をさせた。そして、下記のような思いから、まず、自分自身の身体表現をやってみる体験をした。



- うまくできたぞ、なかなかおもしろいな。みんなに見せてみたいな。
- なかなかうまくできない。どうやったらいいかな。友達の動きを見てみたいな。
- 一人では燃え上がる様子は表しにくいな。もっと多くの人数でやってみたいな

第3時は、思いをかなえるため、具体的に学習の進め方について話し合い、計画を立てた。ここでは、できるだけ自分たちで学習を進めることができるように、自分の動きからグループでの動きへとつくりあげていく時の手順・方法（表現→交流→表現を通して1人から2人からグループへ）の確認。個人と集団の動きをつくるときに参考になる「動きのポイントカード」や「動きづくりボード」、動きを高める場を作るときの用具の紹介などを行った。そして、立てた計画は、下図のように学習計画表として子供たちに持たせた。

考察1 焚き火の体験活動を、燃やすもの集めから観察まで自分たちで行わせたことは、自分自身の表現イメージや表現意欲をもたせる上で効果的であった。焚き火について身体表現してみたいと思っていた子が学習前では、8人だったのに、学習後には、32人になっている。また、自分自身のイメージを自分で表現する体験の後に学習計画の話し合いを行ったが、実際にやってみて、自分の実態を知り、問題点もつかんでいたため、子供側から動きをつくっていくときの留意点が出され、動きづくりの手順、方法や「動きのポイントカード」「動きづくりボード」、場を作る用具の紹介などが子供の要求に応じて提示することができた。

② 《ふかめる段階の体験活動》 — 5時間

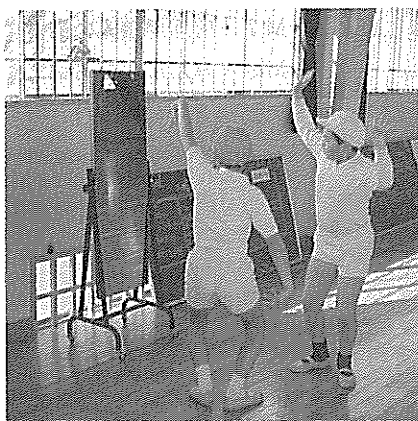
この段階のねらいは、前時に立てた学習計画にそって子供たちが「たき火が燃える様子を身体で表そう」という目的意識のもと、グループでの作品を自分たちでつくりあげていくことである。まず自分自身の動きを確かなものにし、次に2人でその動きを互いに交流し合い動きを広げる。さらにその動きをグループで交流し作品をつくりあげていった。

1. 自分のイメージからの動きをつくりあげ学習カードに記録する。
※ 友達の動きにとらわれなくて、自分のイメージからの動きをつくる。
2. 友達2人と交互に動きを見せ合い、友達の動きも覚えて動きを広げる。
※ 自分ない友達の動きを新しく付け加えたり、「動きのポイントカード」を参考に、動きの工夫をしたりする。また、動きが連続するように、動きの変化がわかりやすいように、口伴奏でリズムをつけたり、ゴム紐を張った場で高さを意識して動きづくりをすることができるようにしたりする。
3. 2人の動きをグループで見せ合い、グループでの動きをつくっていく。
(1) 2人の動きを見せ合い、自分の動きと違ったよいところを見つける。
(2) はじめ・なか・おわりのどこから表したいかを決める。
(3) グループみんなで表したい場面を語る。
(4) ビデオで撮影したり、他のグループに見てもらったりして、不十分などところを見つける。
(5) 「動きのポイントカード」を参考にしたり、カラーコーンやゴム紐を使ったり、「動きづくりボード」を使ったりしながら、もっとよい動きを工夫していく。特に、集団での一人一人の移動の仕方を工夫する。
(6) 同じようにして他の部分の動きも工夫する。
(7) はじめ・なか・おわりを結んだ動きを工夫しつくりあげる。
4. 工夫してきた動きを1つの作品としてまとめる。
※ 音楽や音や、表現を効果的にするための小道具など自分たちで工夫してつくりあげる。
5. 出来上がった作品を互いに発表し合い鑑賞する。
※ 自分たちの表現と比べ、その違いやよさを見つける。

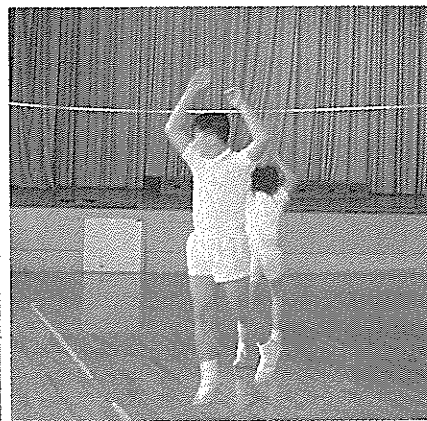
自分自身の身体表現を確かにする体験活動 ここでは、《つかむ段階の体験活動》で体験している自分自身のイメージでの動きを、グループで作品をつくりあげるという目的意識をもって、確かなものにしていっていった。そのために動きの高さに目を向けより大きな変化のある動きを生み出せるように、ゴム紐を張ったポールや、自分自身の動きを客観的に見れるように鏡を準備していたが、下の写真のように子供たち自らポールを出してきて、ゴム紐で高さの目安をつけ伸びのある動きを工夫したり、鏡で自分の動きを見直ししながら、自分の動きを高まった確かな動きにしていって姿が見られた。

考察2 ここでこのように自ら動きを工夫していく姿が見られたのは、《つかむ段階の体験活動》で自分の動きの問題点が明確になっていたことと、「動きのポイントカード」や用具の使い方など学習の見通しが一人一人にあったためだと思われる。

【鏡を見ながら自分の動きを確認しているO児】



【ゴム紐で高さの目安をつけ大きな伸びのある動きにしているM児】

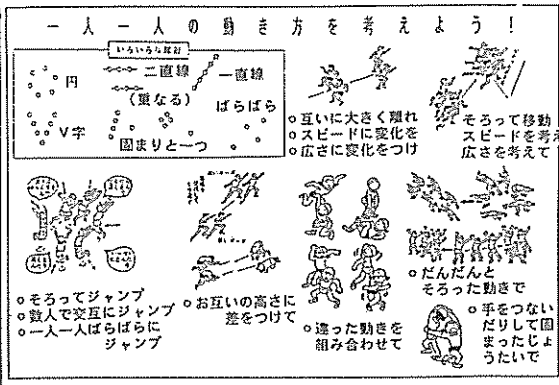
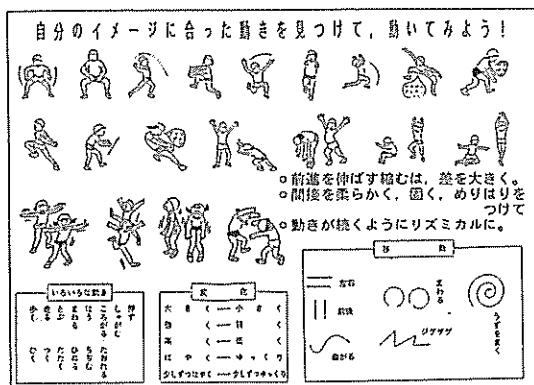


友達と2人で動きを交流する体験活動 ここでは、グループ内のペアの友達と互いの動きを交流し合い、動きを広げていった。子供たちは自分の動きを友達に教え、友達の動きを教えてもらいながら、新しい動きを体験していった。また、下図のような「動きのポイントカード」を参考にしながら、友達の動きと自分の動きを組み合わせ、新しい動きもつくっていく姿が見られた。

考察3 ここでこのような姿が見られたのは、2人での交流活動の場を設定したことと、「動きのポイントカード」を参考にできるようにしておいたことが有効に働いたためだと思われる。

【個人の動きの参考になる「動きのポイントカード」】

【グループで集団の動きの参考になる「動きのポイントカード」】



グループでの作品をつくりあげていく体験活動 ここでは2人での動きを交流し、はじめ・なか・おわりでのそれぞれの動きをつくり、一つの作品として完成させていった。

《ふかめる段階の体験活動》3時間目（6／11）の児童の反応と考察

● O児の反応

O1-ビデオで自分たちの動きを撮影。

● M児の反応

M1-燃え始めるときの煙が広がる感じが表れて

- 「速すぎてゆらゆら燃えている感じがしない」
 O2-もう1度燃えているビデオを見る。
 O3-「もっと高くゆっくりと動いた方がいい」
 O4-ゴム紐の場をつくり、みんなで「ポン、ポン」とそろって、ゴム紐に届くようにやってみる。
 O5-もう1度ビデオに撮ってみる。
 O6-縦の動きが大きくなって速さもはじめよりゆっくりとなって、感じが表れてきた。

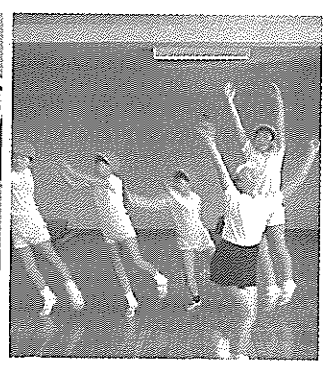
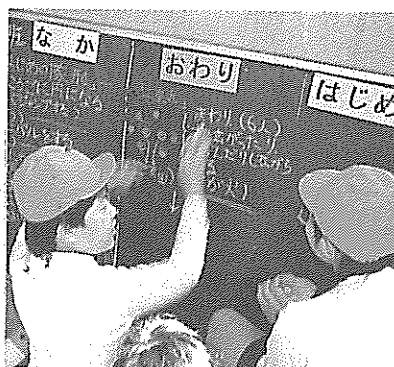
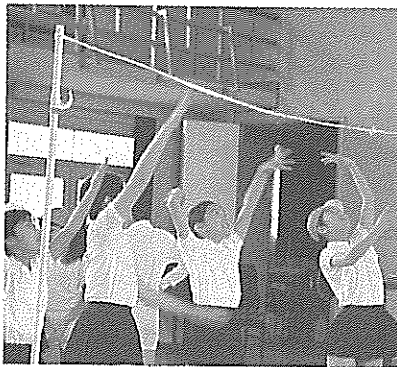
【ゴム紐で高さのある動きを工夫している様子】

【「動きづくりボード」で動き方を話し合っている様子】

【広がりのある動きの表現】

いない。

- M2-「動きづくりボード」で一人一人の動く位置の確認とカラーコーンでの範囲の設定。
 M3-リズムをとりながら徐々に広がる。
 M4-広がりだけで動きがうまくいかない。
 M5-「動きのポイントカード」をみる。
 M6-かがんで回転しながら跳び上がろう。
 M7-何回か個人の動きを練習をしてみる。
 M8-みんなでそろってやってみる。



考察4 子供たち自ら、焚き火のビデオを見たり、ビデオ撮影をして動きを見直したり、「動きのポイントカード」「動きづくりボード」を利用したり場を作ったりする活動が見られた。その結果、動きにも高さや広がりの変化が出てきた。これは、学習の見とおしがあったことと、子供たちが自由に使えるように、場や用具を準備していたことが有効に働いたためであると思われる。

③ 《あらかず段階の体験活動》 — 1時間

この段階のねらいは、つくりあげてきた作品を発表会を開いて表現し、自分の伸びを実感したり、友達の伸びを認めたりすることである。子供たちは、右の写真のように一人一人が生き生きと自分を表現し、発表体験のよさを味わうことができた。

6. 全体考察

本単元では、自分自身の新しい運動の積重ねを体験活動として位置づけ、「つかむ」「ふかめる」「あらかず」の3つの段階での体験活動に取り組みさせた。また、自己評価できる場・用具や学習カードを準備し、できるだけ自分たちで学習を進めてい

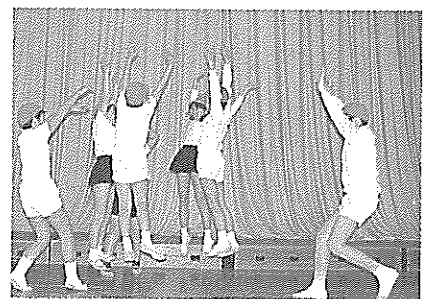
けるようにした。その結果、教師の手を借りる場面がまだまだあったが、自分たちで学習を進める場面が増え、学習の楽しさも増したと思われる。新しい運動の体験を積重ねていくことができる場や用具、学習カード等の準備をすることは、子供自ら運動の楽しさを追求していく上で大切である。

7. おわりに

新しい運動の体験を積み重ね、より自分達で、学習を進めていくことができる子供の姿を求めて

【主な参考文献】 高橋 亮三編 『体育科教育の学力』 第一書林 1989

【ステージでの発表の様子】



実践へたかめる体験的活動を通して 自己の生き方をつくりだす道徳学習指導

道徳部 池 田 隆

1. はじめに

子供の自主的な課題意識が連続発展し、道徳的な価値の内面化や実践化をうながす主題構想によって、支援意識から援助活動へと具体化する学習活動を設定すれば、自他の調和的な生き方をつくり出し、社会的に価値ある生き方を目指すことができるであろう。

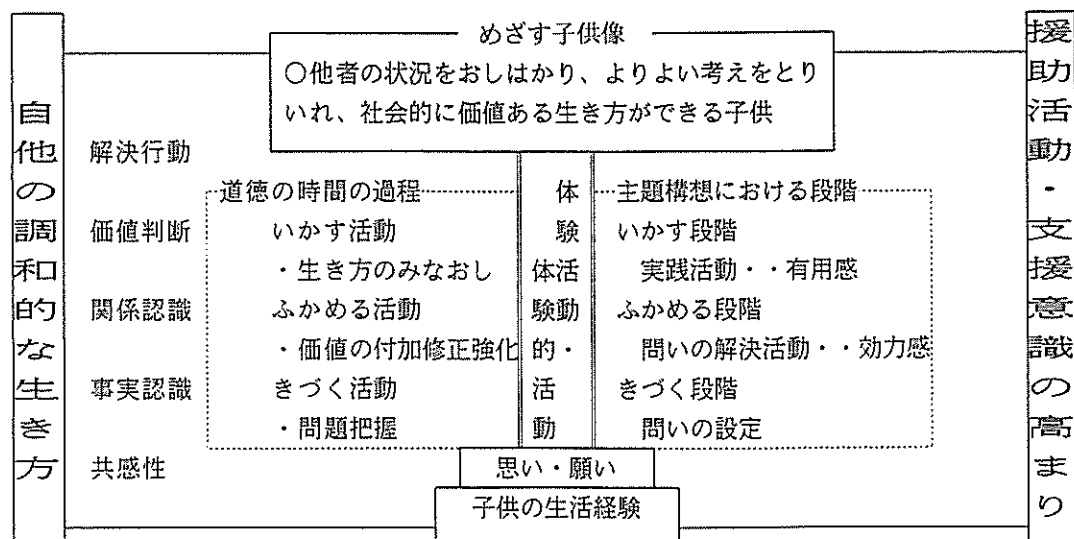
2. 主題の意味と重要性

自己の生き方をつくり出すとは、自分と他者の関係の中で調和的な生き方を見い出していくことである。その姿としては、自他の状況をもとに、①他者の願いや欲求を認識できる子供②解決のための効果的な行為を考えることができる子供③自分の行為と他者とのかかわりをふりかえり、評価できる子供④よりよい考えを取り入れ、社会的に価値のある生き方を選択し、実践できる子供の姿でとらえることができる。そのためには、他者に対する支援意識を高め、援助行動として実現される必要がある。

支援意識とは、相手の立場に立って、自分のことのように喜びや悲しみ、苦しみや悩みを感じ、相手にとってふさわしい生き方をしようとする心的な状態である。また、援助活動とは、相手にとってふさわしい解決のための行為である。これらの支援意識と援助活動が一体となったとき、調和的な生き方の実現をはかることができると考える。

実践へたかめる体験的活動とは、道徳的な問題に対して、実情や実態をもとに自分なりの考えを明らかにし、具体的な行為で対応しようとする学習活動を意味する。具体的には、まず、道徳的な問題場面に会った時に、「なぜ、どうして」という意識をもとに事実を把握する（事実認識）。次に事実をもとに問題の原因をあらわし（関係認識）、自分の見方や考え方を明らかにする。また、解決のための判断をする（価値判断）。そして、問題解決のための自分なりの方法を選択して、行為で表明し、道徳的な価値実現をおこなうことである。実践へたかめるには、道徳の時間に道徳の実践力を育てながら、他領域（ゆとりの時間や特別活動の時間）との関連をはかり活動を通して、道徳的価値を実現させることが大切である。また、そのことを通して自分が他者に対して役立つことを実感させることができる。

<主題の構想>



3. 学習指導上の問題点

これまでの高学年道徳学習指導では、資料をもとにした価値の追究過程において、見方や考え方を広げて、生き方を考える学習を行ってきた。しかし、道徳の時間の指導が、他の教科や領域の体験とかかわり、学習内容が深まるための関連づけが不十分で、実践化まで高めにくかったために、他者理解の追究にとどめるだけになってしまい、他者にはたらきかけ、役立ち、有用感を実感するような調和的な生き方まで高めるには不十分だった。

4. 問題点解明の方途

調和的な生き方を高める活動（実践化）の位置づけとしては、①道徳の時間と他の領域と関連させた事前、事後の体験的活動や体験活動の場の設定。②道徳の時間に自分と見方や考え方のちがう友だちと交流し考え方を練り上げていく交流活動。内容は、③自分の支援意識や援助活動のありかたをふりかえり、他者に積極的にいかかわっていくものを設定する。

(1) きづく段階・・・自分の生活経験や体験活動をもとに、思い・願いを喚起すること。

内容としては、日常の生活のなかで、時事的なことから子供が問題として直面していることごとし、追究する内容項目についての関心の高まりを目指す。

(2) ふかめる段階・・・問いによって生まれた、他者に対する認識や価値についての意識のずれを解決し、支援意識を追究することをねらいとする。ふかめる活動は、おもに道徳の時間を中心として、子供たちがいだいている問題意識をもとに価値の追究をおこなう。内容としては、体験的活動（模擬体験）をもとに、他者に対する共感性、切実感、働きかけようとする自発性を高めることをねらいとする。そして、自分のこれまでの見方や考え方や感じ方をふりかえり（診断）し、自分なりの今後の生き方（対策）について考える。

① きづく活動—————他者の欲求に気づき、自分のとる有効な行為を考える。

② ふかめる活動—————自分のとる行為と自分とのかかわりを検討する。

③ いかす活動—————よりよい見方や考えを取り入れ、行為の再決定を行う。

(3) いかす段階・・・資料によって高まった見方や考え方をもとに、自分の生活で生かしてみて、効力感や有用感を味わい、生き方を見直すことをねらいとする。

他教科、他領域において、道徳的実践活動をおこない、価値の実現をはかる。

<基本的な指導のしくみ>

段階	きづく活動	ふかめる活動	いかす活動
活動内容	1. 生活経験や体験活動をもとに思い・願いを表現する。 ● 自分と日常のかかわりによる生き方の問いづくり 2 問いの解決のための体験活動	1. 資料による生き方の話合いをする。 ● 自分の考えの確立、交流 2 資料による生き方の追究 ● 自分の考えの付加、修正 3 自分の生き方の見直し	1. 自分の生き方の見直をもとにした実践。 ● 生活場面での気づき ● 生活場面での実践化
手段	○ 生活実態 ○ 調査活動 ○ 取材活動 ○ 資料収集	○ 道徳ノート ○ 資料 ○ 交流活動 映像的資料 ○ 読み物資料 言語的資料	○ 生活実態 ○ 道徳ノート ○ 実践活動

5. 指導の実際と考察

(1) 主題名 自分にできる国際貢献5年生【4－(8)】

(2) 主題の価値

本主題では、国際理解と親善の心を育てていくことがねらいとなる。外国との関係においては、今後の学校教育における大切な課題の一つであるが、特に、国際理解の深化に努めることができ、そこから一歩前進して、日本人としての自覚をもって積極的に外国人と接したり、交流交換の機会を求めて参加したり、援助活動をするなど、国際親善に取り組むことが期待できる。

(3) ねらい

○ 外国の人々に対して、理解と愛情をもち、幸福のために役立とうとする態度を育てる。

(4) 計画(2時間) [関連する他領域での指導時間 約5時間]

	ね ら い	活 動 と 内 容	時間
き づ く	援助活動についての気づきと関心の高め 自分の支援意識の明確化	1 日常生活のなかに見られる援助活動について考える。 ○ めぐまれない人たちや老人の施設への訪問 2 街頭募金のVTR資料をもとに、自分自身の援助活動にたいする考え方を明らかにする。	課外 第1時 (道徳)
ふ か め る	援助を必要としている国の理解 援助を必要としている国の人々の生活のようすの理解 援助を待つ人々の願いの追究と自分の支援意識の見つめ直し	3 援助を必要としている国のことについて、資料をもとに、援助の仕方や内容について考える。 ○ 援助を必要としている国 ○ 援助の内容 4 援助を必要としている国の子供たちの生活の様子について話し合う。 (1) 経済的条件によって、働かされている子供達や低賃金で労働をしている人々について考える。 (2) 自然条件によって、困難な生活を余儀なくさせられている人々について考える。 5 援助を待つ人々の願いをもとに、自分の生き方について話し合う。 (1) 水と生命のかかわりをもとに、水の確保の大切さと苦勞について話し合う。 (2) 体験的活動による、人々のねがいをふかめる。 (3) これまでの援助活動についてふりかえる。	1時間 (道徳) 3時間 (道徳) ① ② 第2時 (道徳)
い か す	価値実現の体験	6 これまでの学習をもとに、具体的な場面での実践を考える (1) 自分にできる国際協力についての話し合い。 (2) 啓発活動、援助活動の実践	1時間 (学級活動) 課外

(5) 子供の反応と考察

① きづく段階（課外の資料収集活動）

ねらい・・・自分の他者に対する援助意識と気づき

本学級の子供たちは、新聞やテレビなどを通して、生活をしていく中で援助を求めている人々がいることや、それらの人々に援助活動が行われていることは知っている。しかし、援助とはただ寄付や募金など経済的な解決行為ととらえている者が多く、援助を求めている人の切実なねがい十分わかっているとは言いがたい。また、身近に接する機会が少ないためか、援助にたいしての関心はあまり高くなく、知識としても知らないことが多い。そこで、まず、だれに、どのような援助がおこなわれているのか、資料収集を行った。2週間ほどの資料収集をおこなってのA子の感想である。

冬休みに私は新聞の記事をいろいろ集めました。毎日の新聞を見て思ったのは、多くの人たちが募金をしているんだなということです。特に多かったのが歳末たすけあいの運動のことです。そのほかに、老人ホームへのいもんとたくさんありました。それから、恵まれない子供たちを助けているグループがあるということも分かりました。毎日、たくさんの人たちがボランティアで活動しています。私は学校があるので、助けるグループには参加できませんが、募金グループに募金することならできそうです。でも、今まで、何回も募金をしている人と出会ったのにはずかしくてなかなか募金できませんでした。募金したいけどできるかなあとも思います。

作文からわかるように、A子は、自分の知らなかったさまざまな援助活動が毎日行われることに注目している。そして、新聞社によせられた善意あふれる人達の行為のすばらしさに目を向けている。しかし、これまで街頭での募金活動を目にしながらもなかなかできなかった自分のことに気づいている。

考察 資料収集によって、身のまわりにはさまざまな援助活動があることに気づき、関心を高めることができた。

(イ) 道徳の時間での解決活動（1／2時）

ねらい・・・資料をもとにした課題意識の把握

道徳の時間第1時では、街頭でよく見かける募金活動のVTRをもとに、「なぜ、すすんで募金ができないのか」を話し合った。全員の理由をわけて、なかなかすすんで募金ができないわけを出し合い、類型化した。すると、「はずかしい」「ほかの人がすれば、自分がしなくても」「自分とはあまりかわりがないから」「お金がもったいない」「忙しいときにはめんどろ」「何につかわれるのかわからない」などがあげられA子は「はずかしい」からという理由に自分の名前の磁石をはった。



A子は、街頭での募金活動では、お金を寄付したいという気持ちはあるものの、実際の中では

考察 恥ずかしさがあってできないという自分自身の課題を把握することができた。また、海外への援助活動のVTRをみることによって、募金の使われ方や、援助を求めている人々についての問題意識をもたせることができた。

②ふかめる段階

(ア) ゆとりの時間での調査活動（4時間）

ねらい・・・援助を求めている国での人々のくらしの調査活動

ゆとりの時間は、援助を必要としている国や、援助の内容について調査活動を行ったり、VTR資料「ユニセフ親善大使 黒柳徹子 ソマリア報告」をもとに、どんな国がどんな援助を必要としているのか具体的に考えた。

VTR資料の視聴を通して、A子は同じ年ごろの子供たちがおかれている厳しい状況を知りおどろいたこと、ひたむきに生きる子供たちの姿を見て感動をうけたようだ。「自分とはあまり関係ない」と思っ

ていたA子であったが、視聴後は「これからの世界は助け合っていくことが大切ではないのかな」と述べるなど感想が変わってきた。

考察 A子は、世界の状況がわかり、何らかの支援意識はもったが、自分が主体的にはたらきかけようという姿までにはいたっていない。それは、厳しい状況の子供の立場にたつての切実感を味わっていないからだと考えられる。そこで、道徳の時間第2時(2/2)では、援助を必要としている国でもっとも問題となっている、飲料水と衛生について焦点をしぼり、学習をすすめた。

(イ) 道徳の時間での解決活動(2/2時)

ねらい・・・模擬体験をもとに支援意識を高める。

授業の導入では、ユニセフVTR資料「水をもとめて」を視聴し、飲料水確保に6時間もかかっていることや、不衛生な水を飲まざるをえないために重い病気にかかる人々の姿をつかませた。そして、VTRに映っている人たちが運んでいる水が、どれくらいの重さかわからないので運んでみようという

T あなたは水を運んでみてどんな感想をもちましたか。

A 私は、(金のたらいで)これだけだったんだけど、ビデオのひとは水瓶を頭にのせて、毎日6時間も運ぶんだけど、重たくて自分にはできないと思う。それに、始めは頭にのせようと思ったんだけど重たくてとてもできません。そして、せっかく運んできたのに、(洗濯用のたらいに)移しかえたら、たったこれだけ(と言って、指で3cmほどを見せる)しかたまなかったから、ビデオのひとは家族の分まで運ばなくてはならないから本当に大変とわかりました。

T 水を運ぶまえとあとで、新たに気がついたことはどんなことですか。

A 私は、ビデオを見たときは、水をたくさん入れたつぼをかついで運ぶことがすごく大変だろうなと思っていたんだけど、実際に運んでみると、水が重いということもあるんだけど、それよりも、一滴の水もこぼせない、一滴の水もこぼさずに運んで家族にとどけるということが大変なことなんだとはじめて気がつきました。



「あれっ!かんたんだと思ったのに、私あたまたの上にのせてはこぼなんて、とてもできない」

A子は水の問題で苦しみ、援助を待つ者の切実な願いをつかんだ。

この後、ユニセフの資料を提示した。そして、募金の使いみちや、単価を知らせて、道徳の時間第1時での募金に関する自分の課題をふりかえり各自がノートにまとめた。ノートには、「私達が出したお金で、困っている人が、1日でも生き延びられたり、助かるかもしれない。募金活動を見つけたらまよわず募金したい。機会があれば、人通りの多いところで募金活動に参加したい。」という内容が多かった。

考察 A子が、「募金をしたい。機会があれば参加したい。」とまでに変容したのは、模擬体験による切実な他者理解や、援助を待つ者の願いの把握、さらに、それに応える生き方の追究によるものであると考える。

③いかなる段階

授業後のA子の感想

私は、募金について、ほかの人がすればいい、はずかしい、お金がもったいないなどの理由であまり参加していませんでした。。けれど、この授業をきっかけに、募金をしたいし、機会があるなら参加してみたいと思うようになりました。アフリカでは食料が足りなくて苦しい思いをしています。水がないところでは、6時間もかかって水をくみにいっています。ビデオを見てびっくりしました。実際にしてみると、30分もたたないのにかたやこしがいたくなって、とてもいたかったです。階段では何回も水をこぼしました。現地の人の大変さがよくわかりました。そして、1500円あれば、一人の子供の命をすくうことができます。いままでみたいにじっとしておかないで、何かしたいと強く思います。

（ア）学活の時間での話し合い活動

ねらい・・・自分にできる援助活動の具体化

学活の時間には、「自分にできる援助をかんがえてみようよう。」というめあてで、話し合い活動をおこなった。そして、「学校のバザー開催時に募金活動や手作りの小物や不用品の販売を行って、収益金を寄付してはどうか」という具体的な援助活動が話し合われた。また、そのために、学級や集会の場でのお知らせ活動をしたり、ポスターやアピール文の掲示をしてはどうかという内容が出された。

A子は、自分の活動計画として、募金や他の学級へ行ってのお知らせ活動を考えた。準備は、放課後や、休み時間等を利用して協力して行った。

考察

道徳の時間に高まった支援意識を、自分にできる具体的な行動としてあらわす話し合いによって援助活動への意欲を高めることができる。

（イ）援助活動の実践

ねらい・・・自分なりの援助活動の実践と有用感の味わい

P T A主催のバザーに向けて、まず、他の学級へ行って、水の問題で困っている世界の人々の現状やそれを救うための活動を紹介するなど啓発活動を行った。さらに、バザー当日は、主旨を訴えて募金活動を行ったり、バザー会場にユニセフコーナーを設けていただき、販売活動を行った。



「手作りのペン立て買ってくれるといいね」



「困っている子供たちのために1年生も5年生に協力してください」



「ユニセフ募金にご協力お願いします」

贈呈式後のA子の感想

私達はとても豊かな生活をしています。しかし、世界各国では戦争のために食料に困っていたり、死をもたらず病気に苦しんでいる人がいます。道徳の時間に世界中の子供のことを勉強しました。はじめはかわいそうと思っていたのですが、何かできることはないだろうか考えるようになりました。そこで、私達は学校のバザーの時募金活動をし、小物や不用品を売ってユニセフに寄付しようということになり、給食の時間に手分けをして全校に宣伝をしました。バザーの日、私達の班は体育館の前で募金活動をしました。通る人の多くがお金を入れて下さいました。けれど、知らん顔をして通りすぎていく人もいます。ふと、考えると私も天神では知らん顔で通りすぎています。その時募金をお願いしている人達も私と同じ気持ちだったんだなと思いました。学校で贈呈式をしたとき、「やってよかったね。」と話し合いました。今までの勉強で自分が実行することの大切さを知りましたし、すすんで募金や活動をしたいという気持ちが前より強くなりました。

考察

課外での援助活動によって、子供達は学習の成果を具体的な形であらわすことができ、自分の行為が他者や社会のために役立つ有用感を味わうことができた。

6 全体考察

道徳的価値を実践と関連させた主題構想での学習活動を設定することにより、他者とのかかわりを深め、ともによりよく生きようとする調和的な生き方を高めることができる。特に、知る（きづく活動）→考える（ふかめる活動）→実践する（いかす活動）という学習活動を位置づけることによって、支援意識を高め、援助活動を具体化し、社会的に価値ある生き方を選択実践させることができる。

今後の課題としては、子供達がより主体的にかかわっていける主題の開発と年間指導計画への位置づけが必要である。

7 おわりに

社会的に価値ある生き方を実現していくことを求めて

（参考文献）財団法人 日本ユニセフ協会「わたしたちのユニセフ」＝国際社会に理解と貢献のできる人間の育成をめざして＝1982年

仲間とともに生きることのよさを味わう学級活動

——年間大主題構想にもとづく「スターシップ401号の大航海」の活動を通して——

特別活動部 中原 浩

1. はじめに

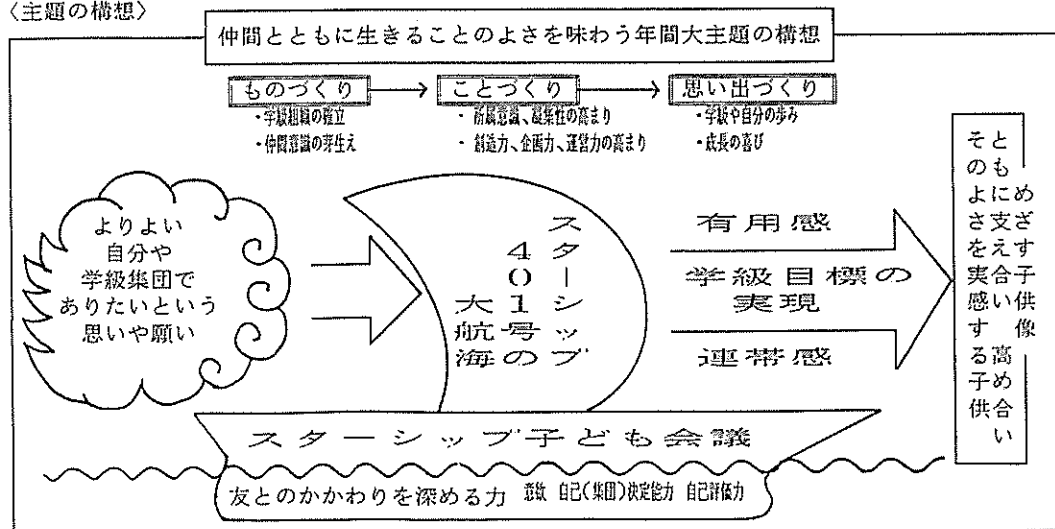
子供たちの学級集団に対する思いや願いを具体化する年間大主題「スターシップ401号の大航海」のもとに、ものづくり・ことづくり・思い出づくりの活動を設定すれば、学級目標に迫る自主的・実践的な活動を楽しみながら、ともに生きることのよさを実感する子供を育てることができる。

2. 主題の意味と重要性

仲間とともに生きることのよさとは、学級生活の向上を目指した活動に友達と協力して取り組む過程で味わう快の感情であり、有用感・連帯感としてあらわれる。有用感とは、自分が学級集団にかけがえない存在であり、自分の言動がその成長に役立っているという自己実現に結び付く心の動きである。連帯感とは、共通の目標のもとに活動し、集団の中で成長する自分を自覚し、友達と手を携えていこうとする意欲や所属意識であり、学級の凝集性に結び付く心の動きである。具体的には、①同じ目的にむかって、友達とともに考え、実践することの喜び、②自分たちで力でやり遂げた、新しい活動を創造できたという喜び、③自分らしさが発揮できた、自分が学級集団に認められその向上に役立ったという喜びを味わう子供の姿としてあらわれる。これらの姿は、①学級生活の向上を目指して自分の周りの諸問題に目を向け、友達と協力して解決や実践をしていこうとする関心、意欲、態度、②学級における自分の役割をとらえ、どのように行動すべきかを判断する自己決定能力、③活動を見つめ直し、自分と友達の成長や課題をとらえる自己評価力、という力によって支えられている。

年間大主題構想とは、子供の思いや願いを結集した学級目標と学級イメージ像を設定し、それを具体化する活動を年間計画の中に一連の取り組みとして位置付けていくものである。本学級では、学級を「スターシップ401号」という船に、その歩みを「航海」にたとえ、目的地（学級目標）をめざすという場の設定を行い、実践していく。具体的には、友達とのかかわりを深め、学級集団の中で成長する自分と友達を自覚する「ものづくり・ことづくり・思い出づくり」の活動を子供とともに設定し、年間を通した仲間（人）づくりを行っていく。年間大主題の構想のもとに活動を設定していくことは、学級目標実現という共通の意識をもって仲間とともに活動する必要感を持たせ、意欲の継続化、課題・見直しの観点の明確化、自分や学級の伸びの自覚化を図る上で価値がある。

〈主題の構想〉



特別活動

3. 学習指導上の問題点

これまでも学級目標を立て、その実現に向けた年間計画のもとに指導がなされてきた。しかし、学級目標の実現に向けて年間を貫く題材構成、活動構成とその評価活動への配慮が不十分であった。そのため、子供たちに学級や学級目標とその成長の過程を常に意識化させることができにくく、活動が細切れになり、有用感や連帯感を十分に味わわせることができなかった。

4. 問題点説明の方途

(1) 年間大主題の構想のもとに年間指導計画を設定し、日常指導と関連させて具体化する。

① 学級目標とその歩みを常に意識させる年間大主題を次の観点から子供とともに設定する。

《第4学年1組の年間大主題「スターシップ401号の大航海」の設定の観点と価値》

- ・内発性-学級のめざす目的地(学級目標)を常に意識化する。いろいろな出来事を経験するという夢とロマンがあり、航路決定の主体性がある。内発的意欲を喚起できる。
- ・協同性-「目的地を目指す航海」という共通の目的があり、その乗組員としてそれぞれの役割と分担がある。協力して航海(活動)する必然性がある。
- ・発展性-1年間の航海という長期にわたるものであり、1日の航海を確かめながら次に向かう。そのことにより航海(活動)の高まりが期待できる。

② 個の発達段階と集団の凝集性の分析、特別活動の全体計画の面から学級活動の年間指導計画を見直し、重点主題を設定し、議題化していく。

《「スターシップ401号の大航海」の年間指導計画作成について》

友とのかかわりを深め、学級集団の凝集性を高める「仲間づくり」の活動を、「ものづくり・ことづくり・思い出づくり」の活動として構成し、重点主題を設定する。

	1 学 期	2 学 期	3 学 期
ね ら い	造形的な活動を通して、仲間と活動する喜びを味わい学級の凝集性を高める。(ものづくり)	創造的な活動を通して、仲間意識の深まりと集団の企画運営力を高める。(ことづくり)	構成的な活動を通して、自分と学級の成長を確かめる。(思い出づくり)
重 点 主 題	○さあ、401号の出航だ ・乗組員の紹介をしよう・目的地と針路を決めよう ○401号仲良し大作戦 ○401号のシンボルを作ろう	○教生先生と一緒に航海だ ○401号の宝物を作ろう ・スターシップの旅・船号文化祭 ○401号で新年を迎えよう	○401号1/2成人式 ○航海を記録に残そう ・思い出ビデオを作ろう・航海日誌を完成させよう ○目的地到着おめでとう

* 他の議題や内容2の題材についても、適時性をもたせ航海と関連して年間指導計画に組みこむ。

(「ちょっと一人旅、その計画を立てよう(夏休み前の適応指導)」「緊急事態発生、対策をこうじよ(インフルエンザ予防)」など)

③ 自分や学級の変容を見極める継続的で診断的な見直し活動の場を設定する。

《「スターシップ401号の大航海」の日常活動における評価の工夫》

- ・自分の思いや友達とのかかわりを意識化させ、記録として残すために毎日書き綴る「航海日誌」
- ・自分や友達の成長と抱負(課題)を中心として月ごとに書く「このごろの私と401号のみんな」

(2) 「スターシップ子ども会議」(話し合い活動)を次のような観点から構成する。

① 実践活動後の評価が、次の活動のめあてとなつて活動を高めていくような見直し活動の仕組みを構成する。

《「スターシップ子ども会議」の事前・事後における評価活動の工夫(見直し活動の1・3)》

- ・議題選定や原案作成、課題をつかむ段階に前の活動の成果や問題点を見直す活動を設定する。
- ・実践後にその活動によって得られた成果と残された課題を明らかにする評価の場を設定する。
- ・今までの活動を振り返り、今後の活動を見通す議題や題材を設定する。

② 交流から自己決定・集団決定にいたる過程に、目的性や現実性などの見直しの観点を子供自らが内面化していけるように支援する。

「スターシップ子ども会議」における見直し活動の工夫

- ・活動の姿が具体的にイメージ化できる提案・情報収集の工夫（ビデオや体験的活動）を図る。
- ・学級目標の実現に向かうものか（目的性）、自分たちでできるものか（現実性）などの話し合いの観点を内面化していく援助の積み重ねとノートの工夫を行う。

《スターシップ子ども会議の基本的な流れと支援・援助》（1 議題、1 題材）

段階	つかむ（学級集団の課題をつかむ）	つくる（議題について交流し決定する）	いかす（高まりを実感する）
活動と内容	1. 議題や題材について話し合う。 ○学級目標実現の観点からの生活のふり返り（見直し活動1） ○自分なりの考えの把握や解決活動への見通し	1. 解決策や活動案について話し合う。 ○学級目標の実現という観点からの自他の意見の吟味（見直し活動2） ○実践のための準備や役割の検討 ○学級目標の実現のための集団決定	1. 協同して実践する。 ○学級目標の実現に向けた協同での実践活動 2. 活動をふり返る。 ○自己や集団の高まりの自覚化
支援援助	・思いや願いの取り出し（航海日誌） ・見直し活動3の想起 ・401号ニュース（話し合い活動の計画）の配布と記述	・交流場面の設定 ・共通の思いの取り出し ・学級目標実現の観点（目的性・現実性）による焦点化	・励ましや賞賛の声かけ ・高まりを見つめる自己評価を促すノート

＊司会グループへの援助…話し合いの基本型、内容に応じた司会者メモ、提案者を交えた事前討議

＊計画・実行係への援助…原案作成ノート、提案の仕方、情報収集への支援、励ましや賞賛

5. 指導の実際と考察

(1) 1学期の活動…学級集団の凝集性を高め、仲間としてのつながりをつくる「スターシップ作り」

子供たちは、自己主張や競争意識が強く争いが随所に見られた。学級活動では、レクリエーション的な議題のみが上がり、自分の興味や考えに固執して勝ち負け的な多数決で決める傾向が強かった。しかし、どの子ももっと仲良く楽しい生活をしたいという思いはもっている。その思いを「航海日誌」で取り出し、学級目標とそれを実現する方法を話し合っていた。6月になると、今までの歩みと学級や仲間への思いを形あるものとして表したい、みんなの力を一つに結集していくものを作りたいという思いが高まってきた。そこで、実行係を募り、学級の課題と新たな活動について話し合った。

- C1 航海日誌で、「友達のよさを見つけよう」に取り組み、少しずつ仲がよくなってきた。
- C2 だけど、レクリエーション集会では、ルールが守れなかったり勝手にしたりする姿もあって協力できなかった。
- C3 仲良くという目的をしっかりとっていなかったし、どうすればいいかということがはっきりしていなかったからだと思う。
- T1 今度は、協力という目的をもって、学級全員が力を合わせまともにならないとできない活動を考えてみましょう。
- C4 みんなの思いがこもった4年1組のシンボルを作ったらいい。
- C5 何を作ろうか。今までスターシップの航海でやってきたのだから、ぼくらの船を作ったらどうだろう。



【写真① レクリエーション集会の初め】



【写真② レクリエーション集会の後半】

スターシップ子ども会議では「スターシップ401号を作って、進水式を行おう」が全員の賛成で決定された。また、必要な係を決め、その係を中心に準備や制作活動を行っていった。子供たちは、すばらしい「ぼくら」の船を作ろうと一人一人が精一杯のアイデアを出し、活発に活動した。

〔資料① 子供たちが作った係とその思い〕

旗 係 3人	マスト係 6人	船室係 7人
船首につけたい。応援として利用できる。	船らしくなる。絵はみんなに募集する。	雨が降ってもぬれないようにしたい。
似顔絵・模様係 10人	地 図係 9人	進水式係 4人
一人一人がスターシップに乗っている感じになる。自分たちで作ったという思い出になる。楽しい船になる。	みんながもっと仲良く、そして優しくなれるように地図を作り、よいことをしたら一つずつ進むようにする。	スターシップが完成したお祝いをしてみんなで喜び合う。みんなが仲良く楽しくなるし思い出にもなる。

〔写真④ 自分の顔を描く子供たち〕



何度も係で話し合い、子ども会議に提案して全員の同意を得る、係ごとの調整をして、活動を積極的にまた継続的に
行う姿が見られた。〔資料② 「航海日誌」より〕

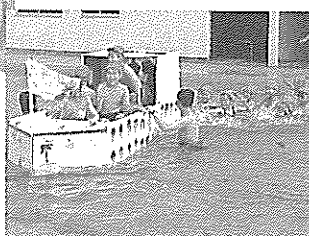
このスターシップができれば、クラス全体がまとまっていける。完成はまだだけど、みんなの協力で早くすむかもしれない。これからも協力し合えるクラス、太陽学級への道を力強く進んでいきたい。どんなアクシデントがあっても、お互いに認め合って進んでいきたい。

〔写真④ 誓いの言葉を言う子供たち〕



ぼくたち、わたしたちは、このスターシップ作りを通して協力のすばらしさと大切さを学びました。これを生かして…

〔写真⑤ スターシップに乗って〕



進水式では、自分たちが作った船が本当に浮くのか、乗ることができるか、期待と緊張の子どもの瞳があった。浮かんだ瞬間、大きな歓声と拍手に包まれた。

〔考察1〕 子供たちは、資料②のように学級目標を意識し、友達とともに活動することの楽しさを味わうことができた。これは、年間大主題に結び付いた「ものづくり」の活動が、(1) C4やC5の発言にみられるように、スターシップづくりという自分たちのシンボルを作る活動であり、子供の意欲を高めること(内発性)、(2) 写真⑤のように、自分の活動が学級の思いの結集としての制作物に表れ、みんなの役に立っていることを実感することができること(協同性)、(3) 資料①の表のように、協同的な係の役割分担があり、一人一人が自分の思いやアイデアを出して活動する場が保障されたこと(協同性と発展性)、という条件を備えているからである。また、写真①②のような視覚的な資料は、C2やC3の発言にみられるように、活動を見直し課題を明らかにして、次の活動へとつないでいく上で有効である。

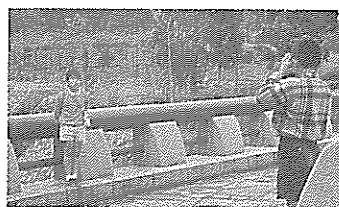
② 2学期の活動…仲間意識の深まりと集団の創造力・企画力を高める「スターシップの旅」

子供たちは、運動会、学芸会、教育実習と様々な活動や行事の中で落ち着きをなくし、活動が停滞しがちになった。1学期の401号作りで協力して活動する喜びを味わった子供たちは、このままではいけないという思いを「航海日誌」に綴っていた。そこで、それを取り出し、話し合いを仕組んでいった。「みんなの心を合わせて取り組む、401号だからできることをしたい」「自分たちの力を発揮して、新しいことをしたい」という意見や「計画や実践の準備で、先生や友達などに頼りがちであった」という反省が出された。こうして実行係から提案されたのが「スターシップの旅」である。

〈つかむ段階〉思い・願いを話し合い活動目標を設定する。(課外)

実行係を中心として、今までの活動の見直しやアンケート調査を行い、原案を作成した。そして、どんな活動をすることが、目的に沿うイベントになるか自分の考えをノートに書いていった。実行係は、事前に目的地に下見にいき、紹介のVTRを作りあげていった。

〈つくる段階〉目的地で行う中心的活動を決定する。(2/2時)



〔写真⑥ 紹介ビデオを作る実行係〕

——スターシップ子ども会議(食事後の2時間の過ごし方について)

司会 活動Bについて話し合っています。大縄とびや草スキーなどが出ていますがどうですか。

C1 草スキーがいいと思います。丘があって、ここでなければできないからです。

C2 草スキーは、ただ自分たちですべてるだけで旅の目的の協力という面からよくないと思います。

C3 ぼくたちは実際にやってみたら、全然すべりませんで [資料④ 見直し活動の表とその後のノート]

した。ウォークラリーが時間内にもできるし、協力という面でも、ここでしかできないという面でもよいと思います。

(実行係がとってきたビデオを視聴。)

T1 協力という目的や場所を生かしたもののか、時間内にできるものかという面で、ノートに見直してみよう。

*ノートで考えを見直した後、再度交流し、集団決定をする。

C4 はじめは草スキーがいいと思っていたけど、場所を生かすという面でウォークラリーもいいと考えが変わりました。

C5 やっぱりウォークラリーがいいと思います。自然と触れ合えるし、問題を解くにはみんなの協力が必要だからです。

見直してみよう	なかに	なかに	草スキー	スター
みんなが協力できよう	△	○	○	○
場所、自然を利用	△	○	○	○
時間内にできる	△	○	○	○

今宿野外センターにせっかく来たのだから自然を利用したい。ウォークラリーは協力しあわないとできないからいい。みんなに関係なく進まないといい。じゃあ物(に)をくりす(葉)をむろ、てけあかりして仲がよくなると思う。

〈いかに段階〉「スターシップの旅」を実践し、活動を評価する。

[写真⑦ バーベキューをつくる子供たち]

当日。実行係を中心として自主的に運営が進んでいった。入所式でセンターの方から「学級だけで利用することは、めったにありません。活動的な学級ですね」と言われた子供たちの顔は誇らしげであった。昼食作りでは、分担し声をかけ合って協力する姿、ウォークラリーでは、順位を気にせず楽しむグループの姿が見られた。一人一人に、安全で楽しく協力しあっていこうという目的意識が強く働いている。



考察2 資料⑤のように、自分がこの活動(学級)

に役立っているという有用感を味わい、自分の成長を自覚する姿が見られた。これは「この学級でしかできない、自分たちの力による活動を」という「ことづくり」の活動目標が、意欲や創造力・役割意識の高まりを生み出したからである。また、係で紹介ビデオを作ったり、進んでインタビューしてきたりする自主的な姿がみられた。これは、目的地の選定において、教師が事前に下見に行き、そのビデオをもとに交通手段や

ぼくはでスターシップの旅の企画になりました。司会や下見の役を引き受けました。下見は、「みんなの代表で来たのだから、ぼくがこうでもみんなも同じか?」などとそれぞれの立場に立って考えることが必要でした。一人一人の意見を生かしてみんなの納得のいくことを決めていくのが司会の仕事です。しかし、たくさんの意見が出てくると、やっぱり一つにはおさえがたいものです。「みんなのため」「成功させるため」と思っていました。ぼくは1学期と比べてよかったのは、「みんなのことを考える」ということです。自分さえよければという考えをもうやめ、太陽学級に向かってがんばっていきたくと思っています。また3学期、ぜひこういう役をしたいです。

[資料⑤ 「このごろの私と401号のみんな」より]

安全性について話し合わせたことが、情報収集の大切さと方法を感じさせたことによると考える。資料④のようにノートで見直す場の設定は、C4の考えの変容やC5の考えの強化を生み出し、納得ある集団決定を行う上で有効である。留意点は、交流における観点を整理し深める教師の支援である。C1は場を生かすという現実性、C2は目的性という観点から活動内容を選んでいる。そこで、まず目的性から深め、次に現実性から見直していくような観点をしぼった交流の仕組みが必要である。

(3) 3学期の活動…自分と学級の歩みや成長を確かめる「思い出ビデオ作り」

子供たちは、残り少ない航海をむかえ、目的地への到着を意識しはじめた。今までの歩みを残すこと、さらに学級のまとまりを高めることをねらって「思い出ビデオを作ろう」が議題化された。その

①1年間の様子…今までの活動のビデオをつなぎ、ナレーションを入れて4年の記録として残す。

②1年後の私への一言…20歳の自分へのメッセージを一人一言。全員登場することができる。

③みんなで取り組めるもの(劇など)…最後の活動として、さらに仲良くなり思い出として残す。

内容として左記の3点がスターシップ子ども会議に提案され、原案通り①と②は承認された。③の内容としては、タイムカプセル作り

と劇作りが決まった。劇では、自分たちで作るオリジナルA・Bと西遊記とに焦点化された。そこで、実際にやってみて、401号らしさ、協力性などの観点でノートで見直し、話し合っていた。

司会 三つの劇を見て、どれがいいと思えましたか。

C1 西遊記は、楽しそうだけど、怪物をやっつけるばかりで、何かけんかしているみたい。自分たちで脚本を作った方が今までのスターシップの航海を生かせるし、協力できてよいと思う。

C2 仲のよくなかった4年1組が冒険してだんだん協力していくようになった劇がびったりする。

司会 西遊記のほうがいいという意見はありませんか。オリジナルの劇でいいかいってください。

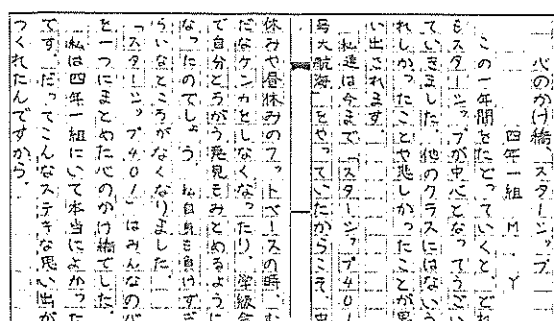
C3 劇を見るまでは西遊記のほうがよかったんだけど、オリジナルの方がやりがいがありそうです。

C4 せっかくだから西遊記の魔物をやっつけるという場面をオリジナルに入れてほしいと思います。

C5 オリジナルAの4月ごろのありのままの4の1の姿を入れて、スターシップの航海をして、冒険しながら協力できるようになったというBと合体させるといい。冒険に、魔物をやっつけるという西遊記の部分を取り上げることもできると思う。

その後、子供たちは、①②③の内容のビデオを作り上げ、その完成を祝う会を行っていった。

考察3 今までの自分や学級の歩みをふり返り、まとめる「思い出づくり」の活動は、資料⑥にみられるように、仲間とともに成長してきた自分を見つめさせることができる。これは、①「航海日誌」やビデオでふり返る必然性をもっていること、②作っては見直すことができ、制作と協力の過程が見えることが要因として考えられる。また、話し合いにおいて、意見が分かれたとき、実際にやってみて見直すという体験的活動



は、話し合いをより具体的に深め、納得のある集団決定を行う上で有効である。本時では、三つの劇の一部を試しに行ってみることによって、C4やC5のように、友達の思いやそのよさを取り入れ、統合・納得しながら内容を決めていくことができた。

6. 全体考察

1年間の「スターシップの大航海」活動を通して、子供たちは、資料⑥や⑦のように友達とのかかわりを広げ、深めてきた。年間大主題のもとに、ものづくり、ことづくり、思い出づくりの活動を設定し、仲間とともに活動する中で有用感と連帯感を味わっている。

	4月	12月	3月
総選択数	209	256	302
相互選択数(ペア)	34	52	61
相互選択0の人数	8	5	3
被選択0の人数	6	0	0
被選択5以上の人数	17	26	26

年間大主題の構想は、①子供の活動への意欲を高め、[資料⑦ ソシオメトリックステストの結果] 造形的活動やイベント的活動などの創造的な活動を生み出し、企画力や運営力を養う。②学級目標の実現をめざした話し合いの必然性を生み、目的性や現実性を見直しの観点を意識し、交流を深める。③活動後の自己評価が要求され、成果と課題が次の活動につながり、話し合いや実践活動の高まりが見られ、有用感や連帯感を味わうことができる。今後の課題は、低学年の生活や学習への適応などを含みこむ年間大主題、高学年の学級集団から学年、学校集団、そして社会へとかかわりを広げていく年間大主題の構想とその条件を具体的な実践を通して明らかにしていくことである。

7. おわりに 個と集団の存在のすばらしさを深く心に刻む子供の姿を求めて

[参考文献] 宇留田敬一編 『学級活動の年間指導計画と展開』 明治図書 1992

児島邦宏著 『学校文化を拓く先生』 図書文化社 1992

一人一人の海外体験に根ざした帰国子女教育

——特性伸長指導を通して——

帰国子女教育部 吉 永 玄

1. 研究の主張点

帰国子女一人一人の海外体験の実態をもとに、未学習部分の補充を中心とした適応指導とともに、海外体験に基づく個性を重視しながら、海外で身につけてきた特性の伸長を図る指導をおこなうことによって自分の能力に自信を持ちながら日本の教育に主体的に適応する子供を実現できる。

2. テーマ設定の理由

本校帰国子女学級は設立以来十数年をたとうとしている。帰国子女の滞在国を見直すと、設立当初はアメリカ合衆国、ヨーロッパを中心とし比較的教育形態や内容が似通った国から帰国したケースが多かった。しかし、近年はアフリカや中南米など教育形態や内容が今までの滞在国とは大きく異なる国からの帰国子女が増え始めている。つまり、帰国子女の海外体験が多様化しつつある。そのため多様な海外体験に応じた帰国子女教育の見直しが必要になってきている。さらに、海外体験で身につけた能力の伸長を図ることで主体的に日本の教育に適応しようとする子供を実現する必要がある。

3. 主題の意味と重要性

一人一人の海外体験に根ざしたとは、上記したように近年多様化しつつある帰国子女の海外滞在状況を積極的に考慮した教科指導を行うことである。具体的に教科指導にかかわる海外滞在状況としては、次の内容が考えられる。

- ・ 教育環境の多様化……………日本人学校、現地校、補習校、アメリカンスクールなど
- ・ 海外滞在条件の多様化…………英語圏、仏語圏などの言語圏の多様化、滞在期間の多様化
- ・ 学習内容の多様化……………滞在した国の伝統、社会環境にともなう学習内容の多様化
- ・ 生活経験の多様化……………自然環境、社会環境にともなう生活経験の多様化
- ・ 教育観の多様化……………宗教教育など各国の国民性に応じた教育観や、進学体制の違い
- ・ 家庭教育の実態……………短期滞在を前提とした場合や永住を前提とした場合

帰国子女教育とは、日本の学校教育において海外体験のある児童の早期の適応と、海外生活で身につけた能力や特性の伸長を図りながら、国際理解の力を身に付けさせることである。そのため、次の4つの指導に重点を置く。①海外生活で身につけた能力や特性の伸長をめざす指導（特性伸長指導）。②生活面・学習面での早期の適応をめざす指導（適応指導）。③海外体験などにともなう子供の個性を重視した指導（個性重視の指導）。④国際理解の力を身に付けさせるための指導（国際理解教育）。

特性伸長指導を通してとは、前述した①～④の指導の中で①の特性伸長指導を重視することである。従来帰国子女教育は、海外滞在の結果子供たちが日本の教育に適応するため障害になる部分に着目しその補充や修正を重視してきた。その結果いわゆる外国剥がしと言われている傾向がみられ海外体験を通して身につけてきた能力を十分に生かすことができずにいた。そのため日本の教育環境に適応することが受け身になっていた。そこで特性伸長指導を重視することによって、帰国子女に海外で身につけてきた能力のよさを自覚させ、日本の教育環境への適応を主体的にすることが重要である。

4. 学習指導上の問題点

- (1) 海外帰国子女の海外滞在状況の多様化にともなう教育実態の多様化に対応できる学習指導が不十分であった。
- (2) 海外帰国子女の海外で身につけた特性を伸長する指導が不十分であったため、日本の教育に適応することに主体的に取り組むことができず、また海外で身につけた特性を失うことになっていた。

5. 本年度の研究の取り組みについて

本校帰国子女学級に入学してくる子供の実態の多様化に対応し、主体的に日本の教育に適応できる子供を実現できる教科指導の在り方をあきらかにしていく。そのために、特性伸長指導の在り方と特性伸長指導を生かしていくための適応指導と、個性重視の指導の在り方をあきらかにする。

(1) 特性伸長指導

- ・ 具体的な海外体験の内容……………海外で直接体験した生活経験や学習経験は他の子供たちにはない帰国子女の特性である。
- ・ 海外の学校で体験した学習方法……………フィールドワークや見学、レポート学習、ディベートフォーラムなどの学習経験から考えられる学習過程を重視し意欲的に学習に取り組む傾向が帰国子女の特性である。
- ・ 海外体験で身に付けた表現力……………前述のディベートフォーラムなどを通して身に付けてきた（コミュニケーション力）自分の考えを表現することや他の考えを理解することの重要性に対する認識や具体的な方法は帰国子女の特性である。

以上の特性を学習活動の中で生かしていく指導である。

(2) 適応指導

- ① 生活適応指導……………言葉や生活習慣に慣れ、友人ができるという、言い換えれば学校生活の基盤を固めるための努力を優先することが、学習適応にもつながる。
- ② 学習適応指導……………学習に必要な日本語の指導や未学習の部分の補充指導が学習適応指導の基盤となる。
 - ・ 日本語の指導……………子供の日本語の力の実態は様々である。日常の会話については生活場面などを通して指導可能であるが学習に必要な日本語の指導については教科指導の中で考慮する必要がある。
 - ・ 未学習部分の指導……………海外での教育状況（特に学習内容）や生活状況によって培われた学習実態と、日本の各教科の指導内容の違いによって未学習になっている部分を補充できる指導方法をあきらかにする。

(3) 個性重視の指導

- ・ 学習の個別化……………子供の興味・関心または既習学習の実態に対応できる指導をする。
- ・ 個性の尊重……………興味・関心、学習方法の傾向性を重視した指導をする。

【研究の重点】

以上述べてきた学習指導を実現するために以下のことを工夫する。

(1) 教材の工夫、単元構成の工夫

子供の実態の多様化にともなう未学習部分の多様化に対応するための系統性や子供の興味・関心を考慮した教材と単元構成の工夫が必要である。

(2) 活動構成の工夫

学習に必要な日本語の補充を行いながら、子供の個性を生かした特性伸長を図ることのできる活動構成の工夫が必要である。

(3) 学習形態の工夫

帰国子女の集団参加への力や、学力の達成度を考慮し、通常学級復帰のために交流学級での学習や、3組全体での能力別指導などの学習形態を考慮する。

<取り組みの視点>

- ・ 帰国子女の実態把握の方法をあきらかにし、適切な指導方法・内容・形態を社会科、算数科、理科の実証授業を通してあきらかにしていく。

国際的視野を育てる帰国子女社会科学学習指導

——海外在住体験を生かす活動を通して——

帰国子女教育社会科部 柿 添 展 宏

1、はじめに

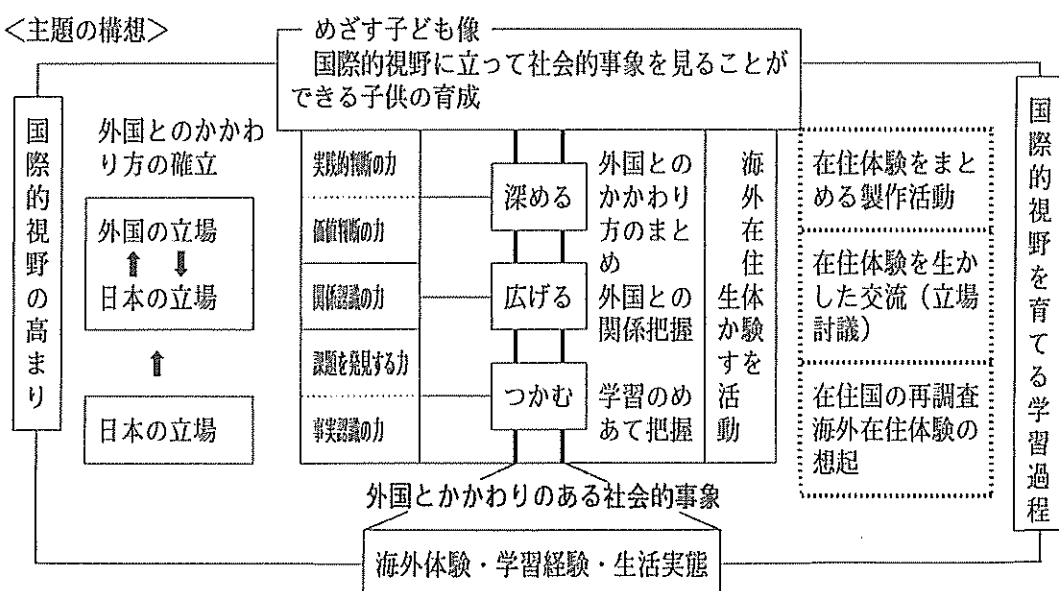
帰国子女の子供たちが海外在住で得たその土地ならではの情報や情報の多様な収集方法や、自己の考えを表現することが得意という特性を生かして、多様な立場に立った討論を仕組み、外国とのかかわりのある社会的事象の意味を追究すれば、子供は国際的視野に立った社会的事象の見方ができるようになるであろう。

2、主題の意味と重要性

国際的視野を育てるとは、子供が社会的事象を日本の立場からだけでなく外国の立場からも見ることができるようにすることである。具体的には、①人間のもつ願いの共通性や多様性を理解する（人権尊重）、②自他国の文化や歴史などに関心をもち、それぞれのよさを理解する（文化理解）、③外国と協調し、互いに依存していくことの大切さを自覚する（国際協調・相互依存の自覚）、④人類の共通課題への意識や関心をもち（地球的な見方・考え方）などの姿としてあらわれる。このような子供を育てるためには、次のような力が必要である。①社会的事象から外国とのつながりの事実をつかむ力（事実認識をする力）、②外国との関係における追究課題を考える力（課題を発見する力）③事実を関係づけ、社会的事象の意味を考える力（関係認識をする力）、④外国と日本とのかかわりにおける社会的事象に対してその価値を考える力（価値判断の力）、⑤価値付けた考えをもとに、外国とのかかわりにおける問題の解決策を考え実践する力（実践的判断の力）。このような力を育てることは、新しい学力観で重視されている社会的判断力を育てることであり、外国とのかかわり方を判断する国際理解教育の上からも意義深いものである。

海外在住体験を生かす活動とは、外国の人々の生活の様子や考え方を調べたり、日本との相互の関係を調べたりするとき、海外在住体験で得た情報や情報の多様な収集方法、自己の考えを表現することが得意という帰国子女の特性を利用して、多様な立場に立って社会的事象の意味を明らかにしていくことである。この活動は、外国の出来事に興味・関心をもちやすい、あるいは外国の立場に立ちやすいという帰国子女の特性を、外国とのかかわりにおいて見られる社会的事象の意味の追究に生かした活動であり、世界の中の日本人という意識を育てるねらいがある。したがって、日本と外国の関係を自分なりにとらえて世界の国々といっそう協調できる子供を育てることができるという価値がある。

<主題の構想>



3、学習指導上の問題点

- (1) 外国と日本の文化の共通性や差異性をとらえた自他国理解の指導は行われたが、日本だけでなく外国の立場に立つ活動を通して、社会的事象の意味を判断し、問題を解決するような国際的視野にたった子供を育てる帰国子女社会科学学習指導は行われなかった。
- (2) 子供の判断の傾向を生かしたコース別学習指導は行われたが、海外在住で身につけた特性を積極的に生かすことができるような学習指導は行われなかった。

4、問題点説明の方途

- (1) 外国の立場に立って社会的事象の意味を追究できるような事象を教材化する。

<内容条件>

- ・日本と外国のかかわりが問題となるもの
- ・外国の人々の生活や産業、文化、日本とのつながりなどを追究できるもの

<方法条件>

- ・立場討議をすることができるもの
- ・海外在住体験で得たさまざまな情報や情報の多様な収集方法を使って価値的判断することができるもの

- (2) 海外在住体験で身につけた特性である、(a)通常学級の子供に比べて海外の情報量が多い、(b)情報の多様な収集方法を持っている、(c)自己の考えを表現することが得意である、という特性を、次のように学習指導過程に位置付ける。

○つかむ段階・・・外国とのかかわりがある社会的事象と出会い、学習問題をつくるとともに学習計画を立て、在住国について再調査する段階

- ・海外在住体験による情報量の多さの活用
- ・情報の多様な収集方法の活用（両親への聞き取り、友達への電話・手紙、外国の本など）

○広げる段階・・・日本と海外とのかかわりについて調べ、日本と外国の関係を認識する段階

- ・海外在住体験による情報量の多さの活用
- ・外国の立場に立った討議ができやすいという特性の活用
- ・自己の考えを表現することが得意であることの活用

○深める段階・・・外国とのかかわり方について考えを確立し、海外在住体験のよさを実感する段階

- ・学習内容をまとめ、自己の考えを表現物に表し、発表会を開く（表現力の活用）

<基本的な指導のしくみ>

観	つかむ（問題把握）〔事実〕	広げる（問題追求）〔関係〕	深める（まとめ）〔価値〕
活動と内容	1、社会的事象との出会い ○社会的事象の提示 ・外国とのかかわりを追求できる事象との出会い ○問題把握と学習計画の立案 ・追究内容、方法の明確化 ○在住国の再調査	1、追究問題の調査 (1)社会的事象の意味の追究 ○外国の立場や自国の立場からの課題の追究 ・自己のもつ情報の活用 ・多様な情報収集の仕方 (2)社会的事象の価値の把握	1、問題解決と考えの確立 ○外国とのかかわり方の自覚 ○製作物の完成と発表 ・自己の有用感の自覚 在住体験のよさの自覚
手立て	○在住国想起の活動 ・目的意識としての発表会 ○自己評価活動1 ・自己のもつ情報の自覚	○調査活動と立場討議(交流) ○保護者からの支援 ○自己評価活動2 ・表現物の見直し	○製作物の発表会 ○自己評価活動3 ・海外在住体験の価値の実感 ・製作物発表と自己の有用感

5、指導の実際と考察

(1)単元 わたしの住んだ国と日本（世界の中の日本） 第6学年

(2)単元の意義

自分の住んだ外国の人々の生活や学校生活の様子、日本とのつながりについて調べ、多様な立場に立って外国と関わりのある社会的事象の意味を追究することによって、子どもは日本の立場からだけでなく外国の立場からも社会的事象を見ることができるようになる。

(3)目標

自分が滞在したまち（国）の人々の生活の様子、経済や文化面での日本とのつながりなどについて関心を持ち意欲的に調べることを通して、これからの国際社会の中では外国と協調しながらいっそう深いつながりをもつことが大切であることがわかる。

計画（約11時間）

過程	ねらい	活動と内容	時間
つかむ	・海外在住体験を想起する。	1、在住国の人々の生活の様子や学校の生活の様子、日本との関わりを想起し、在住国との関わりについて話し合う。	課外 および 1時間
	・1組の友達に海外在住体験を発表し、再度調べて発表するという目的意識をもつ	(1) 1組の友達への在住国のことについて発表する体験をもとに、学習のめあてについて話し合う。 ※ <u>思い</u> 「 <u>在住国のことについてくわしく調べ、また1組の友達に発表したい</u> 」 学習のめあて <u>自分の住んだまち（国）のことについて調べよう。</u>	1時間 および 課外
広げる	・調べる内容および方法について考える。	2、調べる計画を立て、在住国の再調査をする。 (1)調べる内容、調べる方法について話し合う。 ・在住国の人々の生活、学校生活の様子、日本とのつながり ・保護者への聞き取り、滞在地の友達への手紙、電話	8時間
	・在住国について再調査する。	(2)在住国についての再調査をする。	① ① ①
深める	・調べたことを発表し国際的視野にたって社会的事象を見る。	3、在住国の人々の生活の様子、学校生活の様子、日本とのつながりについて話し合う。 (1) 在住国の（アメリカ、スウェーデン、ケニア）での生活の様子や日本とのつながりについて調べたり、聞き取ったりしたことを発表する。 ① 生活の様子について話し合う。 ※ 保護者からよいところや改善点を指摘してもらう。 ② 学校生活の様子について話し合う。 ③ 日本とのつながりについて、各自が調べたことをもとに話し合う。 ア、家族と在住地との関わり イ、日本と在住国との貿易 ウ、青年海外協力隊の活動	② ③
	・外国の立場に立って社会的事象について考える。	(2) (1)で考えた新たな内容について話し合う。 ① 米の自由化について立場に立って各自の考えをまとめ日本とアメリカとの米輸入自由化問題について立場討議をする。 ② 元青年海外協力隊員を招いて話を聞き、隊員の苦労や工夫、外国の人との関わり方について話し合う	1時間
	・外国との関わり方を自覚する。	4、在住国との関わりを表現物に表し、自分の住んだまち（国）や外国との関わり方についてまとめる。	
	・海外在住体験のよさを感じ得する。	※交流学級で表現物を発表し、自己の海外在住体験のよさを感じ得する。	

(5) 子供の反応と考察

①第一次 <事実認識の段階> （つかむ段階 1～2/11） 外国とかかわりがある社会的事象と出会い学習問題をつかむ段階。まず、交流学級の友達に海外在住体験を発表する場を仕組んだ。子供たちは、友達の質問を受けて「もっと調べて、もう一度発表したい」という思いをもった。そして、「自分の住んだ国について調べよう」というめあてをもち、学習計画を立てて、在住地の再調査をした。

【考察】 海外在住体験発表の場を仕組んだことで、「また発表したい」という思い（目的意識）をもたせるとともに、学習のめあてをつかませることができた。S, N 児は「1組のみんなに外国のことを知ってもらって世界に目を向けてほしい」と考え、調べる計画を立てた。そして、在住国の再調査をし、人々の生活や学校生活の様子を改めて自覚し、さらに貿易問題があることに気付いた。

②第二次 <関係認識の段階> （広げる段階の 3～8/11） 調べたことを交流しながら、国際的視野に立って社会的事象を見ることができるようにする段階。この段階では、(a)子供たちが海外在住で得た情報の活用、(b)両親への聞き取り、海外で得た本やビデオの活用など、多様な情報収集の方法の活用、(c)自己の考えの表現が得意であるという帰国子女の特性を生かして学習を進めていった。

【第3～4時・・・生活の様子・学校生活の様子について】

一人調べしてきたことを、写真をはったり絵や文をかいたりして紹介本にまとめている（写真1）ので、本時は各自発表し質問した。また保護者に発表内容を見てもらいよいところや改善すべきところをアドバイスしてもらった（写真2、資料1）。

資料1 S, N 児がもらったアドバイス（生活の様子）

「ぼくは、交通の便がいいと書いていましたが「車がないと困るので、交通の便は悪い」とお母さんからアドバイスされました。まったく反対のことを書いているのに気づきました。」

【考察】 帰国子女の特性である上記(a)・(b)・(c)を生かし、話し合いをもったことは、自分たちの海外在住体験を生かし、在住国の文化について改めて考える上で有効であった（文化理解）。また、写真2 保護者からのアドバイスを受けるS, N 児 保護者にアドバイスをもらったことは、自分たちの調べた内容のよさを自覚するとともに改善点をはっきりする上で有意義であった（資料1）。実際に海外在住体験をしているので、在住国の情報を持ち情報の多様な収集もできるし、現在日本で生活しているので日本のようすとも簡単に比べることができた。

【第5時・・・日本と在住国とのつながりについて】

子供たちは、S, N 児が調べてきた日本とアメリカとの貿易問題や教師提示資料「貿易額の差」のグラフおよび「米の輸入自由化について」の新聞を例に、在住国と日本との間にも貿易問題があることに気付いた。また、M, Y 児の「青年海外協力隊員だった父親の話」と教師提示の「青年海外協力隊員の派遣国」の資料から青年海外協力隊のつながりがあることを知った。

【第6～7時・・・米の輸入自由化について】

第6時でひとり調べをした後、第7時において次の3つの立場に立って考えを交流した。立場は①アメリカの立場、②日本の生産者の立場、③日本の消費者の立場の3つである。



写真1 外国との関わりをまとめたS, N 児の紹介本

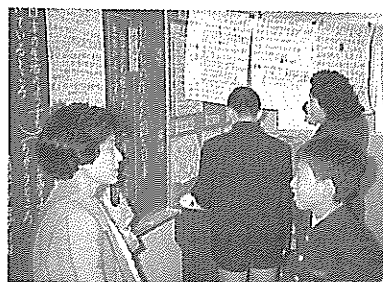


写真2 保護者からのアドバイスを受けるS, N 児

教師の働きかけ	アメリカの立場	日本の生産者の立場	日本の消費者の立場
・これからの貿易は、どうあればいいか。 ・輸入のようすをビデオで見せる。検査をしているから安全。 ・おいしい方がいいのでは。	C1: 対米輸出入の割合は、全然つり合っていない。だから日本は米を輸入すればいい。 C2: 今年、200万トンの米不足。毎年45万トンしか買ってもらえないのか。アメリカの米は、1キロ97円。日本の米は960円。食べてみても 味は変わらない。 C4: アメリカの中では、リフォルニアで日本人が作っているところがあるの、味にも自信がある。 C5: 断然安いのに、なぜ消費者は、買ってくれないのか。 C10: アメリカで食べたけど、味は変わらなかった。	C7: 安全性の面を考えると、日本の米は十の国より農薬が少ないから安心 C8: 味がいいから少々高くても買ってください。	C3: いくら安いといっても、農薬のことも考えてほしい。 C6: 味、安さ、安全ならアメリカの米を買う C9: 味は、同じだから安く

考察 C2「アメリカの米は1キロ97円、日本の米は960円」やC4「アメリカでは、カリフォルニアで日本人が作っているの味にも自信がある」やC12「アメリカで食べたけど味は変わらなかった」などの発言は、アメリカに住んだ経験によるものである（海外在住で得た情報の活用）。また、アメリカの米の値段は、家庭で保護者に取材した結果である（多様な情報収集方法の活用）。この後これからの貿易のあり方について考えを書かせたところ、次のような考えがだされた。

職	T, T	H, K	S, N	S, H	S, T	M, Y	O, Y	M, E
今後の貿易について	日本は、もったいもない国と貿易をして、いろんなものや食料を輸入する。	なるべく外国と仲良くして貿易を続ける。	米を輸入しないでアメリカに輸出する量を減らす。日本が輸出しすぎない。	日本が輸出ばかりするのでなく、その国の製品も大切にしてみよう。	世界の国々ともよく貿易をしよう。みんなが貿易をやるからいい。	交換のようにして貿易額を同じにする。今までのようなことをしたら争いになる	これからは米が不作のときだけ輸入して、不作じゃないときはやめる。	外国とのつながりを大切にしよう。貿易でお互いに助け合う。

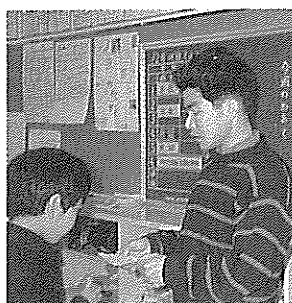
資料2 これからの貿易のあり方

アメリカの立場に立ったS、N児の考えの「米を輸入しないで」（資料2）の文言は、日本の立場を理解し受け入れたものであり、その後の文言はアメリカの立場を考慮していることがわかる。他の子供たちも「貿易額を同じにする」とか「貿易でお互い助け合う」など、今後の貿易の在り方について「自分の国だけでなく、相手国のことも考えなければならない」と判断している（相互協調・相互依存の自覚）。これは、交流の段階でそれぞれの立場に立って米の輸入自由化問題について話し合ったからだと考える。本時指導においては、以上のような姿で国際的視野の高まりが見られる。

〔第8～10時・青年海外協力隊員の仕事について〕

写真3 山上さんの話を聞く子ども

子供たちは、青年海外協力隊について調べた後、隊員であった山上さんの話を聞き（写真3）、仕



事の苦労や努力の様子を知ることができた。この後、第10時では山上さんの生き方をもとに外国の人々との付き合い方について話し合った。この話し合いでは「外国の人とつきあっていくとき、どんなことに注意する必要があるのだろうか」という発問をもとに、隊員の立場やひいては現地の人の立場に立つことができるようにした。

教師の働きかけ	子 供 の 反 応
外国の人々と付き合っていくときどんなことに注意したらいいか。	C1: 願いとか心の中を考えて、自分を合わせていく。慣れたら自分の考えもわかってもらうようにする。 C2: 例えばアメリカ人は、スパゲティを音をたてずに食べる、日本では音をたてて食べる。アメリカでは、音をたてるのは行儀が悪い。友達の家に行ったとき礼儀とかしきたりとか考えなければならない。だから山上さんはタンザニアの人たちの食物などを一緒に食べて、現地の人たちの考えを知った外国の人と付き合うときには<u>外国の人たちに迷惑をかけないように</u>しながら付き合っていく。 C3: ばくのお父さんは協力隊員でした。<u>第一に心がけていたことは、現地の人と仲良くなることです。</u>もう一つは、<u>現地の人の意見を取り入れてから自分の意見を取り入れる</u>ということです。山上さんもやっぱりこういうことを言っていたので、こういうことはいいなと思った。

考察 C1, 2, 3とも、自分の考えよりも現地の人々の考えや気持ちを大切にすることが大事だと考えている(人権尊重)。それは、上の表のC2(S, N児)の例のように海外在住した体験があるから出てきたものである。また、C4児は父親が協力隊員であったことから、父親への取材をし、まず外国の人と仲良くなること、そして、現地の人の考え気持ちを大切にすることが大事だと考えている。このような発言があったのも、海外在住体験を生かしているからである。以上のような子どもの姿から、国際的視野の高まりが本時においても見られる。

③第三次 <価値判断の段階> 深める段階(11/11) 外国とのかかわり方について考えを確立し、海外在住体験のよさを実感する段階。外国とつき合うときは、外国の立場を尊重することが大切であると、外国の立場に立って判断することができるようになった(資料3)。国際的視野が高まったと考える。

6. 全体考察

子どもたちは、日本の立場だけでなく外国の立場に立つ活動を通して、国際的視野に立って社会的事象を見ることができるようになってきた。本単元のように外国との関わりが問題となるような教材を開発したこと、および(1)海外在住で得た情報の活用、(2)情報収集の方法の活用、(3)考えの表現が得意という帰国子女の特性を生かしたことによるものであると考える。在住体験を生かした姿としては、在住地の人々の生活の様子や学校生活の様子を想起してまとめたり(写真1)、保護者からのアドバイスもらった姿(写真2)、米の輸入自由化問題(第5～6時)の話し合いで外国の立場を尊重することの大切さを理解した姿、青年海外協力隊の活動をもとに外国の人とつき合っていくとき大切なことを話し合った姿(第10時)からわかる。

7. おわりに 国際的視野に立って社会的事象を見ることができるような教材の開発

参考文献 古川清行著 『社会科指導法の改善・変革への提言』 東洋館出版



写真4 1組で発表するS, N児

資料3 国際的視野が育ったS, N児の感想

最後に勉強した外国の人との付き合い方では、みんなの考えや話を聞いて、なるほどなと思いました。ばくもほかのみんなと同じような体験をしてきたのでよくわかりました。自分勝手に自分の考えばかりを主張していたら相手の国の人ともうまくいかないと思います。だからばくは外国の人とであうときは相手の国のことも考えるべきだと思います。

基礎・基本をたのしく身に付ける帰国子女算数科学習指導

——多様な学習実態に対応できる包括的な題材構成を通して——

帰国子女教育部算数科部 秋 穂 章

1. はじめに

子供一人一人の学習の内容や方法が様々に異なる帰国子女の図形学習において、不十分だったり未学習だったりする学習内容を取り出し、みんなで学習できるように同一教材で題材を構成し、その中で自由に形を作ったり操作したりする遊び的な要素を取り入れた学習を仕組みば、一人一人が学習特性を生かしながら図形の基礎・基本を身に付けていくと考える。

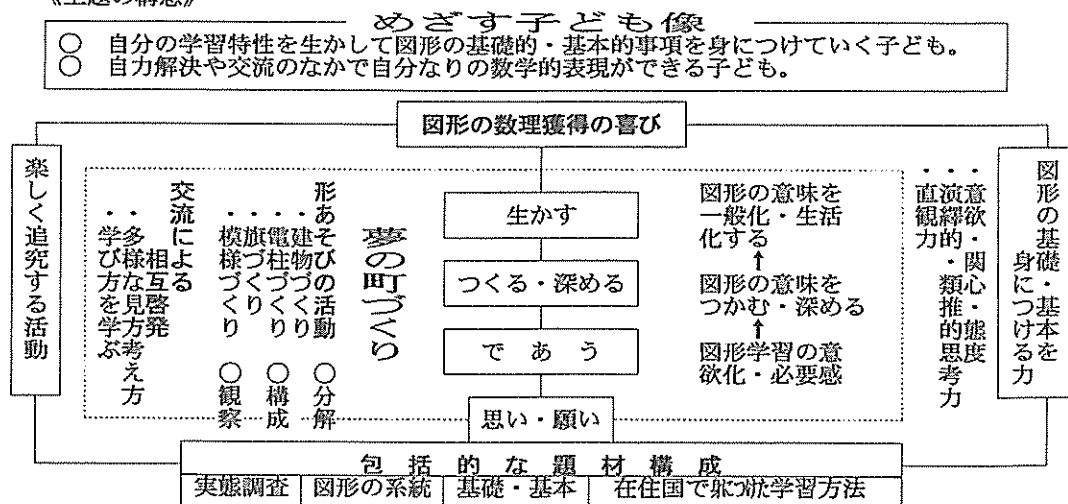
2. 主題の意味と重要性

図形の基礎・基本をたのしく身に付けるとは自力で問題解決に取り組み、交流をする中で主体的に図形の基礎的な内容や基本的な見方・考え方を獲得していくことである。自力解決と交流という学習過程をふむことによって子供が本当に学習内容をつかむことができると考える。また、たのしく身に付けるとは遊び的な要素を学習に取り入れて、構成要素に着目した図形の見方を追究しようとする意欲・関心・態度を高めていくことである。帰国算数の研究主題に図形を取り上げたのは、未学習の内容が他の領域に比べて一番多く、また日本語が不十分な子供でも比較的取り組みやすいためである。

基礎・基本をたのしく身に付ける子供の具体的な姿を①事象から問題をとらえ自分の考え方で解決しようとする意欲をもつ、②自分の興味・関心を大切にしながら、自分で図形を作図したり構成したりする、③自分の考えを活発にのべながら、相互に啓発し合い、構成要素や要素間の関係、位置関係に着目して図形を見ていく見方・考え方を深めている、④学習した見方・考え方で日常の事象をみている、在住国で学んだ学習内容や学習に対するとらえ方を自分のよさとして実感している姿と考え、多様な学習実態に対応できるように包括的な題材構成を次のように考える。

包括的な題材構成とは同じ目的の活動をしながら帰国子女の特性である自己選択、自己修正、自己追究が十分行えるように、1学年から4学年までのいろいろな図形学習の内容が全部含まれるような年間を通した一つの題材を設定することである。包括的な題材構成によりア不足したり未学習になっている学習実態が様々に異なる帰国子女の学習内容を補充しつつ、一人一人の学習特性を生かすことができる、イ同一教材、同一目的でいっしょに学習できるのでみんなで取り組むという意識がもて交流もできる、ウ個に応じて図形の構成要素に着目する見方を深めさせる学習が仕組めるという価値がある。さらに、活動に遊び的な要素を加えることによって①から④に対応できる。

《主題の構想》



3. 学習指導上の問題点

(1) これまでの帰国子女算数科学習においても、不足したり未学習になっている基礎的・基本的事項を習得させようとしてきたが、みんなで学習を深めていくというよさを失わないで、学習の内容や方法が様々な異なる帰国子女に対応できる題材が十分に開発されていなかった。

(2) 帰国子女の算数科学習の個人差に対応するためにプログラム学習を仕組むなど当該学年の学習を補充する試みがなされてきた。しかし、子供の興味・関心や意欲を育てたり、表現するよさを味わわせたりすることが十分ではなかった。

4. 問題点説明の方途

(1) 包括的な題材構成によって、自力で問題解決に取り組むだけでなく、交流による相互啓発によっても学習を深めていくことのできる学習過程を工夫する。包括的な題材構成は、具体的にはまず「夢の町づくり」という年間を通した題材を設定することから始まる。「夢の町づくり」とは住んだら楽しいと思うようなすばらしい町の模型を自分達の手でつくっていく共同製作の活動である。次に実態調査で明らかになった各個人の補充すべき図形学習の内容を系統が前後しないようにならべる。そして補充すべき学習内容から夢の町の何を共同製作するか決定し、ストーリーによる小題材とする。

(2) 小題材は図形の基礎・基本をたのしく身に付け帰国子女の特性である自己選択、自己修正、自己追究が十分に行えるように次の3段階で仕組み、その過程に製作活動やゲームなどの活動および算数トピックノートづくりの活動を設定する。

① 「であう」段階は、事象から共通の学習目標と自分の学習目標をつかみ、図形を自分で作ったり構成したりしてみたいと意欲をもつための活動をする。

② 「つくる・深める」段階は、今までの自分の図形の見方の不十分さに気付き、構成要素や位置関係などに着目する見方へと視点を広げていく製作活動やゲーム等をする。また、包括的な題材構成を取り入れた帰国子女学級では多様な観点で交流ができるという特色から、交流を通して新しいことを学んだり、自分の考えのよさに気付いたり相互に啓発し合うことができる。

③ 「生かす」段階は、図形の構成や分解などの活動で学習したことを活用して自分が表現したいものを算数トピックノートに表現していく。

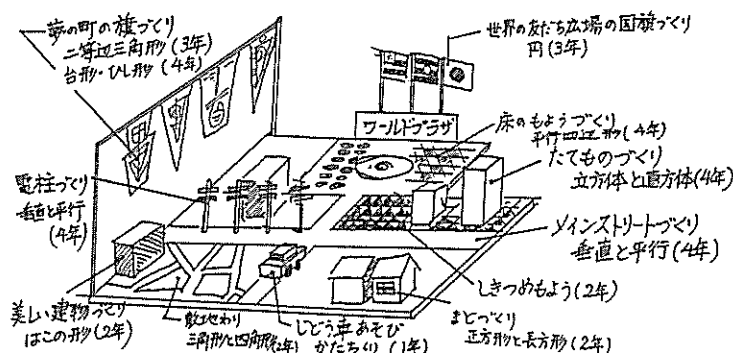
算数トピックノートとは図形の基礎的・基本的事項と学習内容に関連して自分が調べてみたいことなどをガイドブック的にまとめたノートのことである。このノートづくりは、帰国子女一人一人の調べたり追究したりする学習の方法を生かしたり、基礎的・基本的事項を定着させたりするといった価値がある。また、数学的に表現する力を培うこともできると考える。

〈小題材での基本的な指導のしくみ〉

	であう	つくる・深める	生かす
活動と内容	1. 事象から問題をとらえ自分なりの考え方で解決しようとする。 ○既習との共通点・差異点を明らかにして解決の見通しをもつこと。	1. 解決の見通しにもとづいて、形を観察、構成、分解する。 2. 自分の考えを交流する。 ○構成要素や位置関係などに着目して図形をとらえること。 ○基礎・基本の獲得。	1. 基礎的・基本的事項を確かにする。 2. 基礎的・基本的事項を生活に生かす。 ○個性的な表現活動をする。 ○基礎・基本の定着。
手だて	・夢の町づくりのストーリー。 ・個人差に応じた課題をつくる場の設定。	・建物づくりや平行づくりゲームなどの学習あそびの教具。 ・形を構成分解する表現活動の場の設定。 ・表現活動の結果について深めあう交流の場の設定。	・操作や表現を見直す場の設定。 ・算数トピックノートづくり

5. 指導の実際と考察

(1) 包括題材 「わたしの夢の町をつくろう」



<「わたしの夢の町」に含まれる小題材名一覧>

- ① 自分が住んでみたい夢の町をつくろう-I
・都市計画(道路・敷地の区割りなど)
・電柱作り、メインストリートづくり。
- ② 自分が住んでみたい夢の町をつくろう-II
・夢の町の建物づくり、平行ゲーム
- ③ 世界の友だちが集まる広場をつくろう。
・国旗作り、噴水づくり
・床の模様づくり
- ④ 夢の町の旗をつくろう。

(2) 小題材名「夢の町の旗をつくろう」(該当学年 3年「三角形と角」 4年「四角形」)

① 小題材構成の過程

(ア)入級した時点で、滞在国のノート、本人などからの聞き取り、日本のペーパーテストでその子の学習の実態を調べる。(イ)1学年から4学年までの日本の図形学習の系統と対比しながら、不足したり未学習になっている内容をチェックし、今回は次の内容を補充することを決める。(ウ)補充が必要と考えられる学習内容を包括題材からとりだし子供の実態にあわせて構成しなおす。

② 同一教材でみんなで学習できるように構成した題材例。

※ () の学年はその算数の内容が指導されるべき学年

	S 児	O 児	M 児	A 児	F 児
補充する内容	三角形や四角形の定義、構成要素、二等辺三角形と正三角形の定義と性質	二等辺三角形と正三角形の定義と性質、角の定義と意味。	二等辺三角形と正三角形の定義と性質、角の定義と意味。ひし形・台形の作図、構成。	ひし形・台形の定義、作図、角の用語、二等辺三角形などの角の大きさ。	ひし形・台形の定義、性質、作図、構成。角の用語、二等辺三角形などの角の大きさ。
配時	○ 三角形や四角形の定義、基本性質 (2年) ただし S 児のみ。			○ ひし形・台形の定義と基本的性質 (4年)。	
①	○ 二等辺三角形と正三角形の定義と性質 (3年)				
①	○ コンパスの働きの理解や、二等辺三角形と正三角形の作図 (3年)。			○ 台形やひし形の作図のしかたと構成 (4年)。	
①	○ 二等辺三角形や正三角形や台形やひし形を自由に作図 (3年・4年)				
①	○ 角の定義と意味。二等辺三角形等の角の大小関係 (3年)。				
①	○ 対角線によってできた三角形の考察 (3年)。 ○ 二等辺三角形と正三角形の相互関係 (3年)。		○ 対角線の用語や定義 (4年)。 ○ 正方形、長方形、平行四辺形、ひし形、台形一般四角形の相互関係 (4年)。		
①	○ 構成要素に着目する見方を楽しく深めること。				
生かす	① ○ 日常の事象のなかで形に対して辺の長さや位置関係で見れること。 ○ 二等辺三角形と正三角形、ひし形や台形を自由に作図したり構成したりできる。				

(3) 題材の意義

「夢の町の旗をつくろう」は自分たちの手で夢の町の旗をつくるという活動を取り入れ、自分が

イメージした旗の形や模様を自由に作るという題材である。旗づくりという製作活動をするので、意欲や興味をもって構成要素（辺）の長さの相等関係や位置関係（垂直や平行）に着目して三角形や四角形をみていく見方を深めることができる。また三角形や四角形の作図についての考え方を交流しあうので多様な考えを学んだり、自分の考えのよさに気付いたりできる。

(4) 目標

〔共通目標〕 ○ 二等辺三角形や正三角形、平行四辺形や台形を構成している要素（頂点・辺・角）や位置関係（平行）に着目して特徴をとらえ、旗として作図したり構成したりできる。

〔個別目標〕

S児	○児	M児	A児	F児
○ 三角形や四角形を辺や頂点といった構成要素に着目してとらえる見方ができる。 ○ 夢の国の旗づくりという形あそびを通して、 <u>三角形の辺の長さの違いや角の大きさに着目して二等辺三角形や正三角形をとらえることができる。</u>	○ 夢の国の旗づくりという形あそびを通して、 <u>三角形の辺の長さの違いや角の大きさに着目して二等辺三角形や正三角形をとらえることができる。</u> ○ 二等辺三角形や正三角形の弁別が得意言葉で表現できる。	○ 夢の国の旗づくりという形あそびを通して、 <u>三角形の辺の長さの違いや角の大きさに着目して二等辺三角形や正三角形をとらえることができる。</u> ○ 角の相等や大小比較を通して二等辺三角形や正三角形の性質をとらえることができる。	○ 夢の国の旗づくりという形あそびを通して、 <u>台形やひし形の位置関係に着目してとらえる見方ができる。</u> ○ 角の相等や大小比較を通して二等辺三角形や正三角形の性質をとらえることができる。	○ 夢の国の旗づくりという形あそびを通して、 <u>台形やひし形の位置関係に着目してとらえる見方ができる。</u> ○ 角の相等や大小比較を通して二等辺三角形や正三角形の性質をとらえることができる。

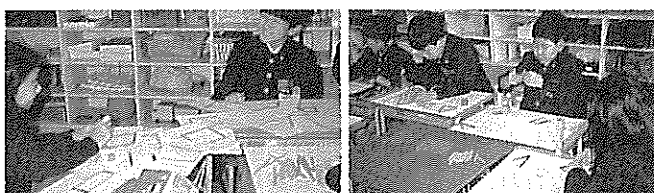
(5) 指導計画（約7時間）

ねらい	活動と内容	時間	<子どもの意識の流れ>
「であう」段階 ○ 二等辺三角形や台形などを自由に作ったりかいたりしたいという意欲や必要感をもたせる。	1. いろいろな旗の形のモデルを作り、自分が作りたい旗の形を選ぶ。 [O・M・S児] 三角形をつくる。 [F・A児] 四角形をつくる。 ○ 二辺が等しい三角形を二等辺三角形といい二辺が等しい三角形を正三角形ということ。 ※ 仲間わけをさせて、その仲間わけの理由を交流させる。	7時間 1/7	○ 夢の町の旗をつくらう ○ どんな形と模様がいいかな。 ○ どうすれば2つの辺が等しくなるように作図できるかな
「つくる・深める」段階 ○ 直観的な見方から構成要素や位置関係に着目して見方へと変容させる。	2. 旗の外形を製作する。 [O・M・S児] 二等辺三角形や正三角形を作図する。 [F・A児] 台形やひし形を作図する。 ○ どうすれば同じ長さの辺になるかを考えて二等辺三角形の作図の仕方を工夫する。 ※ コンパスや定規などを使う旗づくりの活動の場を設定する。	2/7	○ いろいろな形を組み合わせで旗をつくってみよう。
○ 角の意味を理解し角の大小関係をとらえさせる。	3. 自分の旗に模様を描く。 [O・M・S児] 主に二等辺三角形や正三角形で模様づくりをする。 [F・A児] 主に台形やひし形で模様づくりをする。 ○ 定義や性質を使いながら二等辺三角形や正三角形等を作図して旗の模様を工夫する。 ※ 二等辺三角形や台形等を組み合わせた模様を例示する。	3/7	○ 思いどおりにできたぞ ○ 三角の旗の開き具合を調べてみよう。
○ 角の大きさに着目して三角形の違いをみることができるようにする。	4. [O・M・S児・F・A児] つくった旗の模様比べをする。 ○ 二つの辺の開き具合を角ということ。角の大きさは辺の長さに関係しないこと。 ※ みんながつくった旗の模様の中から三角形の模様を取り出し、違いを調べる場を設定する。	4/7	○ 二等辺三角形と正三角形の角の大きさの違いはどうなっているだろう。
○ 対角線の性質を調べることをおして四角形の見方を深める。	5. [O・M・S児・F・A児] つくった旗の形や模様がおもしろいところや工夫したところを比べる。 ○ 角の大きさに着目して二等辺三角形と正三角形の違いをみること。 ○ 二等辺三角形と正三角形の違いを探す場を設定する。	5/7	○ Y君の模様の作り方を調べよう。
○ 図形の相互関係をとらえることができる。	6. [O・S児] P1やいろいろな四角形に対角線を引いたときにできる三角形を調べる。 ○ 二等辺三角形と正三角形の相互関係。 ※ 模様の旗のコピーを持たせ、模様の作り方について調べさせる。 ※ 対角線から四角形を構成させる。	6/7	○ 対角線によっていろいろな三角形ができる。 ○ 対角線でどんな四角形ができるのだろう。
「生かす」段階 ○ 二等辺三角形や台形等の基礎的・基本的事項を言語化したリ、生活とつないでいく。	7. 算数トピックノートづくりをする。 [O・S児] ○ 二等辺三角形等の基礎的・基本的事項と調べてみたいことをトピックノートにまとめる。 ※ 基礎的・基本的事項の定着と次にくる婦国子女が利用できるようにガイドブック的にまとめさせる。M児は二等辺三角形についてもまとめさせる。 [F・A・M児] ○ 台形やひし形等の基礎的・基本的事項と調べてみたいことをトピックノートにまとめる。	7/7	○ 旗づくりで学んだことを今度来る友達にもわかるようにしよう。

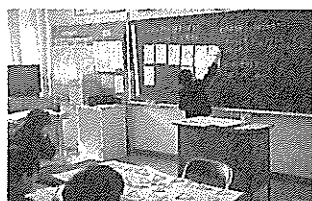
(6) 子供の反応と考察

① であう段階（第1／7時） 本時は、二等辺三角形や台形などの形を使って美しい旗を自由につくりたいという思いをもたせることがねらいである。そのために前小題材で製作した国旗やペナントなどモデルの旗を見せた。この提示によって、わたしたちの町にも旗を作りたいという声があがった。そして思いついた旗のアイデアを子供達は口々に述べた。そこで、S児・O児・M児（二等辺三角形学習グループ）には、三角形にもい

ろんな種類があるのでどんな三角形の旗の形がいいか3色の長さの違う色棒で実際に思い思いに作ってみることになった。同様にF児・A児（台形学習グループ）も夢の町だから長方形だけではなくいろ



んな種類の四角形の旗の形を4色の長さの違う色棒で作ってみてその中から旗の形を選んでみようということになった。[写真1] S児・O児・M児は赤、黄、みどりの3色の長さの違う棒を組合せ二等辺三角形などの3種類の旗の形をすべて作っていた。F児・A児も4色の長さの違う色棒を組合せ、一般四角形、台形などの旗の形を作った。みんながつくった形を見比べてみて「似たような形がある」という二等辺三角形学習グループのS児の

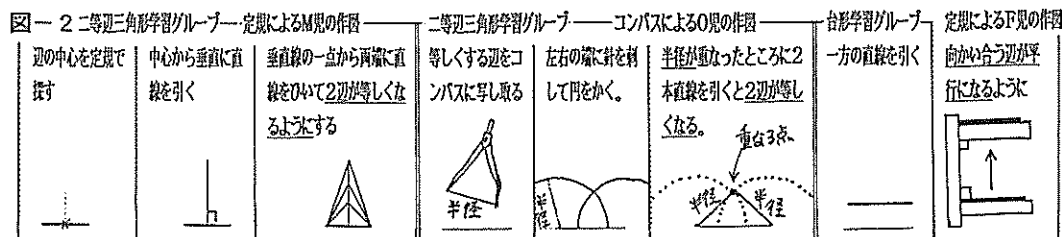
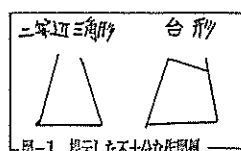


発言からみんなで旗の形の仲間分けをすることになった[写真2]。S児がきちんとした三角形（正三角形）はみんな辺の色が同じであることに気づいたことから、辺の色（同じ長さの辺）に目を付けて三辺が等しい、二辺が等しい、等しい辺がないと仲間分けをしていった。そしてS児・O児・M児は一番旗の形らしいという理由で二辺が等しい三角形を選んだ。F児・A児は辺の平行を観点に仲間分けをしていった。そして夢の町にふさわしい形として台形を旗の形に選んだ。

考察 S児・O児・M児（二等辺三角形学習グループ）はいろいろな種類の三角形の旗の形の中から二等辺三角形を、またF児・A児（台形学習グループ）も作った四角形の中から台形を旗の形に選んだ。これは違うグループが辺の長さや位置を視点に旗をつくるという意欲を持った姿と考える。またS児も色棒による形の構成と交流で、未学習であった辺や頂点の数で図形をみる見方を同時に学んでいったと考える。

② つくる・深める段階（第2／7時） ア＜一人で調べている場面＞

本時は、二等辺三角形や台形の定義、性質を使って作図を工夫させることがねらいである。そのために、旗の外形作りを仕組んだ。製作の過程で2辺が等しい三角形の作図等に見通しがもてないでいたので、不十分な作図（図-1）を提示して見通しをもたせた。その結果、次のように旗を作図した。（図-2）



考察 旗づくりの意識をもちながら、図-2の下線部分のようにM児達(二等辺三角形学習グループ)は、2辺の長さが等しいとか、円の半径が等しいという定義や性質を使って二等辺三角形を作図した。また、F児達も向かい合う辺が平行という定義を使って台形を作図した。これは夢の町の旗づくりという目的を設定し、不十分な作図の提示によって辺の長さや位置関係の特徴をとらえさせたためと考えられる。イ<相互啓発の場面>二等辺三角形や台形が正しくかけたか確かめる場面を設定することでM児ら(二等辺三角形学習グループ)とF児ら(台形学習グループ)の交流を仕組んだ。その結果M児とO児でどちらがより作図しやすいか交流が行われた。O児は同じ長さは何回も取れるコンパスでの作図のよさを主張したが、M児は「自分のやり方は変わらない。O児はコンパスを使っただけ。」と主張。これに対して二等辺三角形学習グループからは適切な反論がだせなかった。しかし、F児(台形学習グループ)から「M児のやり方は 垂直の線を確認するときは真ん中を調べるのがめんどうだ。90°を調べなければならない。」と意見がだされた。この交流によってM児は二等辺三角形の模様作りにコンパスを使いはじめた。(図-3)

考察 垂直を調べるのはめんどうというF児の意見をきき、模様作りをする中でM児の方法が変容した(下線部分)。一方、F児達はM児の方法の不十分さを主張するために垂直で学習したことを使ったこれは、異なるグループの交流を仕組んだことで自分の考えのよさや不十分さを学んだためと考える

③ つくる・深める段階(第3/7時)

本時は、二等辺三角形や効力感ももてたり、幾何学的な模様の美しさをあじわわせたりすることがねらいである。そのために、旗の模様を例示したり、イメージをスケッチさせたりして、二等辺三角形や台形等を組み合わせた旗の模様づくりの形あそびをした。(図-3、図-4)

図-3…二等辺三角形2つでもようをつくるM児の作図過程

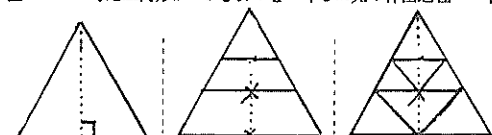


図-4…台形でもようをつくるF児の作図過程

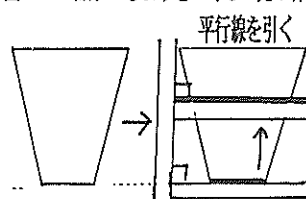
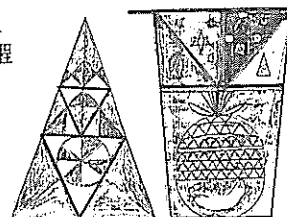


図-5 <完成した旗>



M児の作品 F児の作品

考察 M児やF児達は今までに学習した二等辺三角形や台形等を自由に組み合わせて模様づくりを楽しんでいた。これは旗の模様づくりという形あそびを設定したことで、定義や性質、見方など図形の基礎的・基本的事項を模様づくりを通して深めていった姿と考える。(図-5)

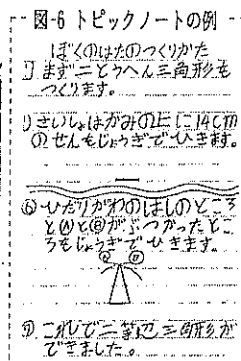
④ 生かす段階(第7/7時)

二等辺三角形や台形の基本的事項と調べてみたい内容をガイドブック的にトピックノートにまとめた(図-6)。

6. 全体考察 包括的な題材構成によって多様な学習実態でも同一目的をもって学習に取り組ませることができた。多様な考え方を学んだり、気づかなかった自分の考えのよさや不十分さを学ぶ交流がみられた(②の(b))。さらにイメージする旗が作れた喜びを味わう姿(写真3)や図形の構成要素に着目して追究する姿も見られた。このことから、包括的な題材構成で学習を仕組み、学んだことをあそびの中で活用させていけば、多様な学習実態の帰国子女が楽しく図形の基礎的・基本的事項を身に付けていくことができると考える。



写真3 やった。うまくできた。



7. おわりに 帰国の特性を生かしながら子供が生活と学習をより深くつなげていく姿を求めて。

自ら科学的な見方や考え方をつくる帰国子女理科学習指導

—— リサーチ・ワークの活動を通して ——

帰国子女教育理科部 吉 永 玄

1. はじめに

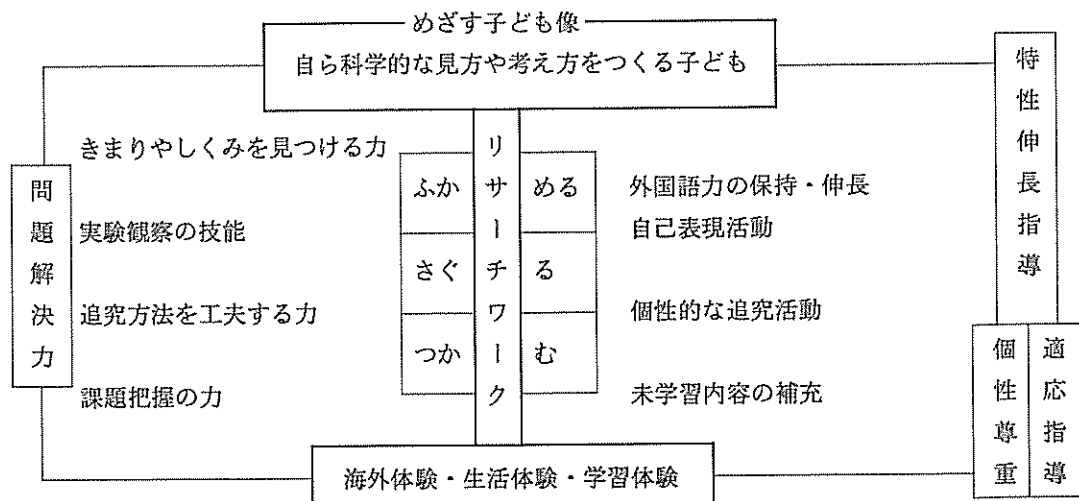
様々な環境の中で海外体験をしてきた帰国子女の理科学習指導は、子ども一人一人が海外で培ってきた体験を生かしながら、未学習部分を補うことが重要である。そのため、子ども自ら未学習部分に取り組み、海外で身に付けてきた特性を伸ばしながら新たな見方や考え方をつくる活動が必要である。

2. 主題の意味と重要性

自ら科学的な見方や考え方をつくるとは、帰国子女が海外滞在経験によって培ってきた見方や考え方をもとに日本の教育内容の未学習部分を補充しながら自然のきまりやしきみをとらえ、きまりやしきみが自分にとってどのようなかわりがあるかをとらえることである。すなわち、①自然事象に出会い課題意識をもつ。②自分が調べてみたいことをとらえる。③調べ方を工夫する。④調べたことを実証する。⑤友達と交流することによって新たな自然のきまりやしきみをとらえる。⑥見つけ出した自然のきまりやしきみの価値を自分とのかかわりでとらえる。ことのできる子どもを実現することである。以上のような子どもを実現するためには、①自然事象から課題を把握する力。②追究方法を工夫する力。③実験・観察の技能。④実験・観察の結果からきまりやしきみを見つけ出す力。⑤見つけ出したきまりやしきみを自分とのかかわりで価値づける力。を育てることが必要である。すなわち、自然事象にのきまりやしきみを問題解決の過程を踏みながら発見し、自分とのかかわりで新たな科学的な見方や考え方に高めていくことである。

リサーチ・ワークとは、帰国子女が海外で経験してきた学習方法や表現力を生かしながら、問題解決の過程を踏んで新たな科学的な見方や考え方に高めていく活動である。自然事象からとらえた問題を追究していく過程の中で、情報収集の方法や自分の考えを実証する方法を工夫させることによって、学習過程を重視しながら帰国子女の特性を生かし主体的に学習に取り組ませる活動である。また、未学習部分に取り組むために学習問題を個別に設定し、その結果を交流することによって多様化している帰国子女の実態に対応することができる。さらに日本語を英語に直す活動を行うことによって学習に必要な日本語の補充と外国語力を伸ばさせる指導を行うこともできる。このことは、帰国子女の特性を生かしながら、日本の教育への適応を主体的なものにするうえから価値がある。

〈主題の構想〉



3. 学習指導上の問題点

- (1) 従来の単元構成では、多様化しつつある帰国子女の海外での学習体験に対応できず、未学習部分の補充が十分に行われなかった。
- (2) 日本の教育実態に基づいた学習過程が帰国子女の学習の基本になっており、帰国子女の特性を十分に活かすことができなかった。
- (3) 従来国語の学習を中心に日本語の指導を行ってきたが、各教科で必要な日本語の指導が十分行われなかったため学習内容の理解が不十分であった。

4. 問題点説明の方途

(1) 単元構成の工夫

- ①学習内容の系統性を明らかにし未学習部分の取り込みができる単元構成の工夫。
- ②上記の単元構成を実現するための教材開発と活動の工夫。

(2) リサーチ・ワーク

帰国子女の海外で身に付けた特性を活かすために、学習方法を子ども自身に工夫させる。そのために単元を「つかむ」「さぐる」「ふかめる」の3段階を設定し下記のような活動で構成する。

「つかむ」段階……未学習部分の確認と、一人一人の子どもの問題づくりを主なねらいとする。

- ①生活事象に出会い、自分とのかかわりを考えることから自然事象に対する興味・関心をもつ。
- ②自然事象についての既習の経験を出し合い、未学習部分を含む自分の問題をつかむ。
- ③リサーチ・ワークのガイダンスを通して学習の見通しをもつ。

「さぐる」段階……2次情報を中心に知識を収集したり検証方法を考えたりして、きまりやしくみを発見することを主なねらいとする。

- ①2次資料をもとに情報の収集を行う。未学習部分の補充を行うための知識の収集と、それを確かめるための検証方法を考える。個別に工夫する活動とし教師が一人一人にアドバイスを行う。
- ②情報の交換と検証活動を行う。知識の広がりや実験・観察の技能や考えの深まりをねらう。

「ふかめる」段階…きまりやしくみの価値づけを行い科学的な見方や考え方の高まりをねらう。

- ①見つけ出したきまりやしくみの価値を自分とのかかわりで見直すための交流活動を行う。
- ②学習後の見方や考え方を感想文で表現する。

(3) 日本語の指導

後から入ってくる友だちのために英語で表したテキスト作りを行わせることによって、日本語の補充と共に英語力の保持・伸長を図る。

〈具体的な指導のしくみ〉

	つかむ	さぐる	ふかめる
活動と内容	1, 生活事象の中の出来事から自然事象に対する興味・関心をもつ。 ○自然事象と自分の関わりの実態 2, 自分なりの課題をもつ。 ○リサーチ・ワークの課題	1, 情報の収集 ○自然事象に関する知識 ○知識の検証方法 2, 情報の交流と検証活動 ○自然事象のきまりとしくみ	1, 自然事象と自分のかかわりについての見直し ○自然のきまりやしくみの価値づけ 2, 学習後の自分の見方や考えの表現 ○新たな自分なりの見方や考え方 3, 外国語版テキストづくり ○日本語の補充・外国語力の保持伸長
てだ	・ 既習の経験の想起と未学習部分の確認 ・ リサーチ・ワークのガイダンス	・ 2次資料の準備 ・ 情報の整理と検証方法についてのアドバイス	・ 学習テキストの日本語版と外国語版の作成 ・ 学習後の感想文

5、指導の実際と考察

(1) 単元 「わたしたちの体」(3, 4, 5年人体に関する学習)

(2) 単元の意義

本単元は、ヒトと他の動物を比較したり資料を活用したりして、ヒトの発生や成長、体の各部のしくみなどを調べることができるようにすることをねらっている。また、この学習を通してヒトの生命の連続性を自分の成長と関係づけながらとらえることのできる見方や考え方を育てることもねらっている。さらに、ヒトに関する学習内容を複数学年に渡って取り込むことにより未学習部分の補充を行い、外国語のテキスト作りをとおして外国語力の保持・伸長を図る。

(3) 目標

○ ヒトの体のしくみやはたらきについて、未学習になっている内容を補充しながら、調べる活動をとおして生命の連続性をとらえることができる科学的な見方や考え方を育てる。

○ 外国語のテキストづくりをとおして、外国語力の保持・伸長を図る。

(4) 計画(約11時間、総合活動)

段階	活動と内容	ねらい	配時
つかむ	1, 自分の体を見直したり、成長の過程を直し自分なりの問題をつくる。 追究課題 ヒトのからだのしくみを調べてテキストをつくろう。 ※帰国時の自分や友だちの様子を想起させ、英語のテキストの必要性に気づかせる。	未学習部分の確認と問題づくりなどをして学習の見通しを持つ	2
	2, 追究方法(リサーチ・ワーク)のガイダンスをする。 ○ リサーチ・ワークの方法 ①自分なりの問題の設定 ②仮説の設定 ③情報の収集検証活動による情報の収集 ④知識の体系化と検証活動 ⑤テキストにまとめる。		1
さぐ	3, 情報の収集などによって、自分の問題を追究する。 ○ 問題解決のために必要な情報や事実 予想される子どもの問題 ・耳のしくみとはたらき・目のしくみとはたらき・皮膚のはたらき ・骨や筋肉のしくみとはたらき・運動したときのヒトの体の変化 ・男女の成長の違いヒトの発生と成長のしくみ	自ら方法を工夫して追究活動を行い新たな見方や考え方をつくる。	4
	4, テキストの内容の交流 ○ ヒトの各器官のしくみとはたらき ・耳、目、皮膚のしくみとはたらき ・骨、筋肉とヒトの体と運動 ・ヒトの発生と誕生		3
ふかめる	5, ヒトの体のしくみやはたらきと自分とのかかわりについての話し合い。 ○ ヒトの体のしくみやはたらきの多様さ、巧みさ ○ ヒトのからだの各器官の重要さ ※自分の体をこれからどのようにしていくか考えさせる。 6, 理科学習テキスト英語版づくり ○ ヒトの体のしくみやはたらきについての英語表現	はたらきとのかかわりをとらえ、外国語の保持・伸長を図る。	1 総合活動

(5) 子どもの反応と考察

(学習前の子どもの実態)

海外滞在経験

項 目	I. A	H. M	S. W	W. M
滞 在 国	ドイツ・イギリス	アメリカ合衆国	ウガンダ	アメリカ合衆国
滞在期間	約3年6ヵ月	約3年6ヵ月	約10年3ヵ月	約5年6ヵ月
教育機関	現地校	現地校・補習校		現地校
外国語	英語	英語	英語	英語
帰国時期	第2学年3月	第4学年4月	第5学年7月	第2学年11月

学習内容についての実態 (ヒトの体の各部のはたらきやくみ等についての理解)

	明暗での目	二つの目	耳の形	二つの耳	皮膚	骨	筋肉	運動と体	脈拍	呼吸	体温	男女の違い	ヒトの誕生	
I. A	○	◎	●	○	○	○	◎	◎	●	●	●	◎	○	◎理解している
H. M	●	●	○	●	●	◎	●	●	●	○	○	○	○	○一部理解している
S. W	●	○	●	●	●	○	●	●	●	●	●	○	○	●理解していない
W. M	◎	●	○	●	●	○	○	○	●	●	●	●	○	

3 年の内容

4 年の内容

5 年の内容

言語についての実態 I. A……日本語には問題はない。英語力も単語の保持はできている。

日常の観察結果とペーパー H. M……日本語には問題はない英語力も単語の保持はできている。

による調査結果から S. W……体の各部を表現するためには英語の語彙の方が多い。

W. M……日本語には問題はない。英語力も単語の保持はできている。

① 第1次 つかむ段階 (約3時間)

ねらい・活動……(4)計画参照

写真①のように子どもたちは、眼帯や耳栓をして1日の学校生活を送る経験をした。その結果、遊び時間にボール投げをやりずらかったり、給食時間に準備がしづらかったりしたことからヒトの体のしくみについて興味を持った。さらにお互いの考えや既習の経験を交流することによって、各々次のような自分の問題と考えを持った。

I. A…問題「目、耳、皮膚のはたらきについて調べよう」

考え「目は物を見るはたらきをする。目はなぜ2つあるのか。どうして物が見えるのか。どんな仕組みになっているのか。耳は音を聞くはたらきをする。耳はなぜ2つあるのか。耳はどうして複雑な形をしているのか。耳あかはなぜ出るのか。耳の奥はどうなっているのか。皮膚はどんなはたらきをしているのか。なぜこすると垢が出るのか。皮膚も息をしているのは本当か。なぜ皮膚は温かい冷たいなどを感じるのか。」

H. M…問題「人の体と運動について調べよう」

考え「人間は走ったり強い運動をすると息が苦しくなって心臓や脈が多くなる。人間は走ったり強い運動をしなくても心臓や脈は動いている。寝ているときだってもちろん心臓も脈も動いている。」

S. W…問題「人の骨と筋肉について調べよう」

とを文章であらわす。

考え「人間の体は骨でささえられている。筋肉は物とかを持ち上げるときに使うと思います。」

W. M…問題「動物や人がどうやって生まれてくるか調べる」

考え「人間はどうやってお母さんのお腹にできて生まれるのだろう。ぼくはそこが不思議でたまらない。」

さらに、S. W児が学習で使用する日本語が十分に理解できないことから英語版のテキスト作りも試みることにした。



写真① 目のはたらきを体感する子ども

理科学習テキストづくりの方法

後から3組に入ってくる友だちのために、理科で学習したことがわかる日本語と英語で書いたテキストをつくりましょう。

1. テキストをつくる順序

- (1) 日ごろの体験や、理科の教科書などを参考に自分の学習問題をつくる。
- (2) 自分の考え(予想)や知っていること
- (3) 自分の考えを確かめる方法を考える。
- (4) 実験などで確かめたことを、理科学習テキストに書く。
- (5) テキストに書いたことをみんなに発表し確かめる。
- (6) 発表の結果をもとにテキストを書き直し英語のテキストもつくる

考察 1

② 第2次 さぐる段階（約7時間）

《I. Aの追究活動》

《H. Mの追究活動》

〈S. Wの追究活動〉

《W. Mの追究活動》

教科書や他の本を利用して、運動したときの体の変化を調べる方法を知り、実際に行って確かめ、その結果をテキストに表現した。

学習に使う日本語を十分に理解することができないので、2次資料をさらに国語辞典などを使って理解し、テキストに表現した。

2次資料を使って調べたことを、得意な絵や図、漫画を使ってテキストに表現した。

--- W. M 兎のテキストの一部

おしり
おしり
おしり
おしり
おしり
おしり
おしり
おしり
おしり
おしり

2次資料を中心に個別に追究する活動では、上

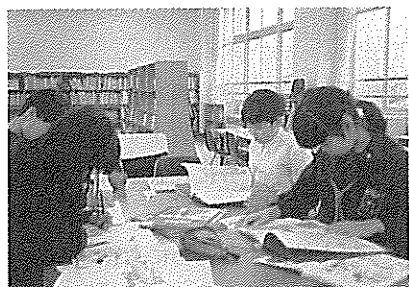
--- I. A児のテキストの一部 ---

目について
目というのは、生物が物を見るように
体にながえしているもの。
目のつくり

虹彩
瞳孔
水晶体
網膜
目蓋

暗いところ、明るいところでは、
ひとみがどうちがうか。
明るいところ、暗いところでの
ひとみ

ひとみは小さい
ひとみが大い

[illegible]

写真② 個別に追究する子ども



写集
③

I
児

考察 2

記のように4人それぞれ工夫して追究することができた。このことは、それぞれの学習傾向を生かした追究活動ができたと考える。また、個別に学によって、子どもたちは意欲的に活動でき、帰国過程に興味を持つ特性を活かせたと考える。

〈I. A児の発表を中心にした交流活動の一部〉

I. A 児の発表

明暗でのひとみにちがいがあ。鏡を使って観察すると
 変化がわかる。明るいとこではひとみは小さくなる。
 暗いところではひとみは小さい。
 明るい部屋から暗い部屋に入ったらしばらくして少し見
 えるようになる。
 皮膚についての実験で、本当に感じ取れるか空き缶をつ
 かって水やお湯で実験したらわかる。
 空き缶つの中に、それぞれ水と湯を入れどのくらいまで
 入っているかを手で空き缶の外側をさわって調べる。

他の児童の発表や活動

暗いところでは、ひとみが大きくなるのが見えた。

井上さんがさっき言ったように、最初は見えなかったけれど、しばらくたったら見えるようになってきた。

冷たいや暖かいを見分ける。軍手をしたらわからなかったから、皮膚に軍手をかぶせたから皮膚のはたらきをやめさせる。軍手を取ったら、また皮膚のはたらきがある。

I. H児……液部実がジャンプの容器にさわっている様子を見て、手でさわって見分けられることに気がつく。耳がだめな時は手語など他のもので感じる。

H. M児……皮膚のはたらきで。目が見えないときは、皮膚のはたらきで点字を利用したり、耳が聞こえないときは目で手語を利用する。話。点字。

S. W児……皮膚とつぶやく。目が見えないときは、点字を利用したり、耳が聞こえないときは手語を利用する。

W. M児……ジャンプの容器にさわって違いに気がつく。「お互い助け合っているわけね。」「うなずく

この段階では、子どもたちは2つの立場のどちらにも意欲的に取り組んだが、特に発表者になることに興味を示した。このことは、自分の考えを表現することに意欲的な帰国子女の特性を活かすことができたと考える。さらに、上記の様に学習内容の広がりも見られ未学習部分の補充に主体的に取り組むことができたと考える。また、各器官相互の関係をとらえさせたり、しくみやはたらきを体感させたりすることにより、見方や考え方を高めることができた。

ねらい・活動……(4) 計画参照 (ここでは主に理科学習テキスト英語版作りを行った。)

考察4 学習後の日本語版テキストの内容をみると、学習内容が項目別に整理され体系的に未学習部分が獲得されたことが推察される。

6. 全体考察

○ 英語力の保持・伸長にだけでなく、日本語と外国語のギャップを解消するためにも役立つ。

● 多様な海外での学習体験や自然体験によって培われてきた帰国子女の見方や考え方を活かした指導法の究明が必要である。

- より帰国子女の実態に対応できるように、T、Tやオープンクラスなど学習形態の見直しが必要である。

主体的に日本の教育環境に適応し、その特性を発揮する帰国子女の姿を求めて

海外子女教育に関する調査研究会報告「帰国子女教育の充実方策について」文部省 1993.6 奥田眞丈・牧昌見・伊藤和彦編著「国際感覚を育む」東洋館出版社

生活力の基礎を育てる指導方法の研究

—— 自発的・自主的に活動する学習を探る（1年次） ——

特殊教育部 谷口 慎二

1. はじめに

多様な実態をもつ子供たち一人一人が、「もの」「ひと」「こと」に出会って出てきた課題を、自ら、自分のもっている力を最大限に発揮し解決できたとき、生活への積極性を生み出そうとする。

2. テーマ設定の理由

精神発達に遅滞のある子供たちにとっての社会的自立とは、将来において、自ら社会に参加し職業生活につくことである。そのためには、小学校の段階に生活力の基礎を育てることが大切である。ここでいう生活力とは、生活上起こりうる諸事象に対して出てきた課題を、自らの判断で行動し、処理していこうとする力である。

その基礎とは、次のような能力を支える意欲・態度や知識・技能である。自分で身の回りのことができる（身辺処理能力）、約束を守って友達と仲良く活動できる（集団参加能力）、自分の身体を自由に使って活動できる（体力）、相手を意識して自由に意思交換ができる（コミュニケーション能力）五感を使って感じとったことを自由に表現できる（感受力・表現力）、情緒を安定させて活動できる（自己コントロール能力）、自分のしたいことをはっきりもって活動できる（自己指南力）。

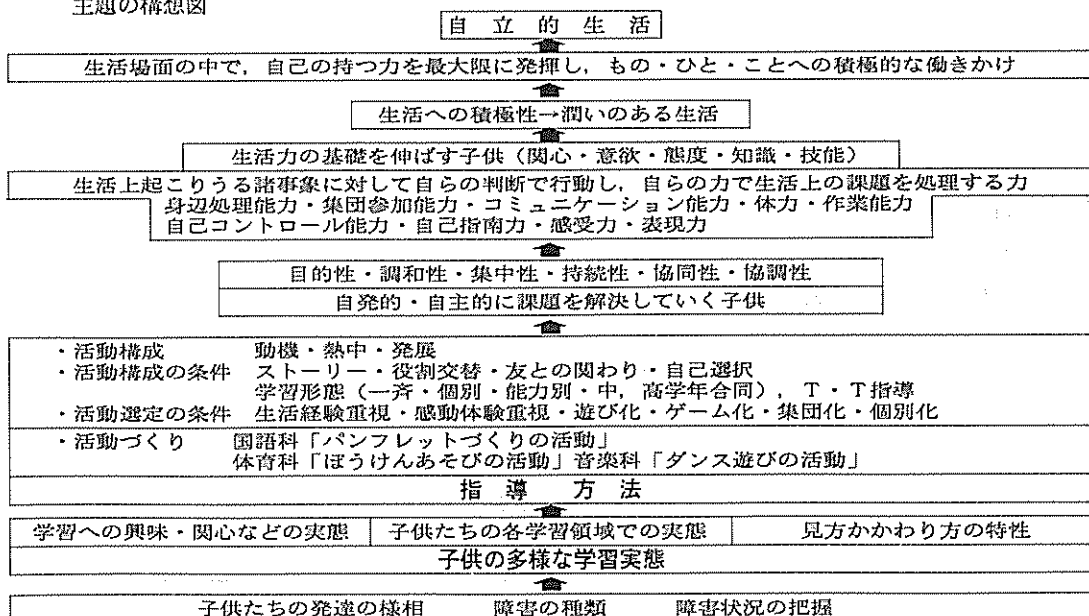
私たちは、このような生活力の基礎を育てるために、単元を系統化・配列して、年間とおして実践していきたいと考える。

3. 主題の意味と重要性

生活力の基礎を育てる指導方法の研究とは、発達の様相を異にする子供たち一人一人が、上述した力の基礎をできるだけ自発的・自主的に解決していくための活動づくりの方法を明らかにしていくことである。

具体的には、どんな教材を準備し、どんな動機づけで、どんな学習形態で、学習活動に配列・展開していけばよいかということである。

主題の構想図



自発的・自主的に活動する学習とは、子供たち一人一人が、自ら強い目的意識をもち、学習対象に粘り強く意欲的に繰り返し働きかけるなかで、課題を解決できたときに味わえる達成感・成就感である。

このような学習は、次のような意義をもつ。

- ①目的意識がより明確になる活動となる（目的性）、②調和的発達をうながす活動となる（調和性）
③多様な活動により、変化と繰り返しを引き出し活動性が高まる活動となる（集中性・持続性）、④友達とのかかわりが多様になる活動となる（協同性・協調性）

この学習は、一人一人の子供たちの障害と発達の段階がしっかりととらえられ、より個に即した指導方法が教科の本質にそって具体化できたときに実現する。

さらに、この学習が、年間カリキュラムの中で、低学年・中学年・高学年と系統化され、年間をとおした積み重ねの中で実践されてこそ、生活に生きて働く力の基礎となると考える。

4. 本年度の研究の方向性

本年度は、昨年度までの研究を基盤に、できるだけ自分たちで学習が連続・発展していくための指導方法に視点を当てて研究・実践していきたい。

その際、子供たち一人一人の「したい・またやってみたい・できそうだ」といった意欲が、年間をとおして連続・発展していくような活動展開していきたい。

①単元（題材）の選定条件

年間単元（題材）として連続・発展できるもので、子供の要求、志向など意欲面を大切にしたいもの。

- ・家庭生活や学校生活の中で経験したことがあり、感動を共有できるもの（学校行事や生活単元学習の中での共通体験のあるもの）
- ・遊び化、ゲーム化できるもの ・集団化、個別化できるもの

②活動づくり

できるだけ子供の力で学習が連続していく活動にするための工夫

- ・題材や単元をとおした同じ内容のストーリーがある。
- ・必然性のある役割交替がある。・能力にあった場や教具を選択できる。
- ・自由に約束を決めたり場を設定したりできる。
- ・友とのかかわりがある。・相手意識を明確にもつことができる。
- ・操作が順序だてられ見通しがもちやすい。

より個に即した指導や学習が連続・発展するための工夫

学習形態 ・ 中学年、高学年合同による学習（体育）

- ・ 一斉学習、個別学習、能力別学習 ・ T、T指導 ・ 単位時間の弾力的運用

パンフレットづくりを通して意欲的に書き進める国語科学習指導

特殊教育国語科部 落合 純 哉

1 はじめに

精神発達に遅滞のある子供たちが、生活単元学習で経験した、順序だてられる体感的な活動を素材にパンフレットに文字化して相手に伝え、さらに相手にわかりやすいように書き広げていく活動を年間を通して設定し、学習過程に取り入れれば、意欲的に書き進めていく姿を引き出すことができる。

2 主題の意味と重要性

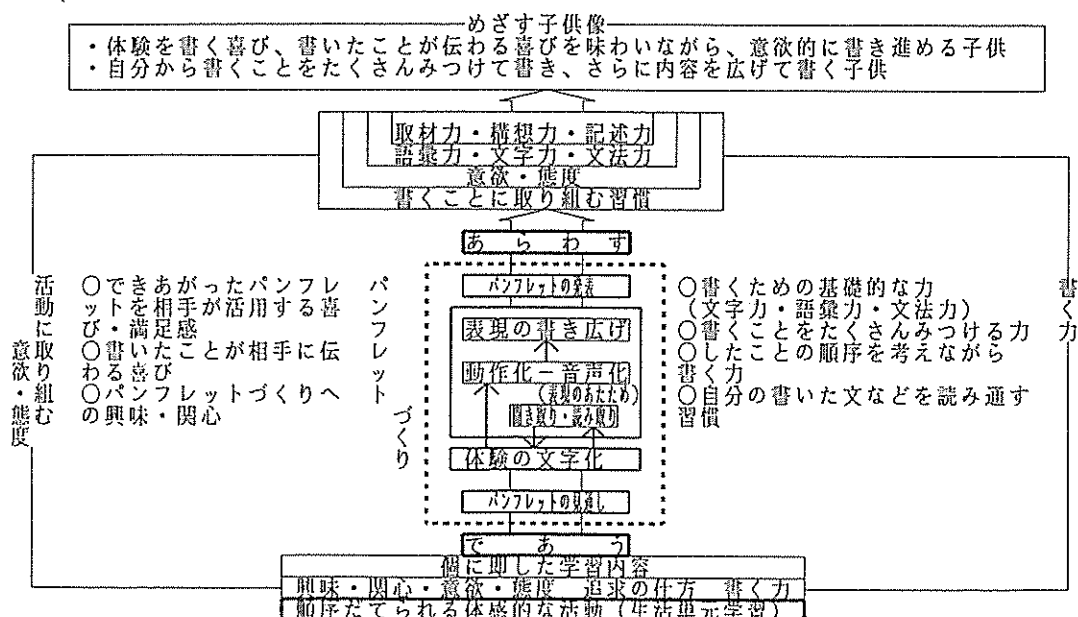
意欲的に書き進めるとは、書いたことが相手に伝わる喜びを味わいながら、書きたいことを選んで書いて相手に伝え、さらに表現を書き広げるといように、繰り返し書くことに取り組み続けていくことである。その具体的な姿を次のようにとらえている。①楽しい活動の体験を相手に書いて伝えたいという思いを喚起し、書きたいことをたくさんみつけている姿、②書きたいことを、体を動かしながら話し、体験を文字ことばに結びつけようとしたり、自分なりの表現をつぶやいたりしている姿、③自分なりの表現で楽しそうに繰り返し書いている姿、④相手の返事を読んだり、パンフレットを活用してもらったりして、書いたことが相手に伝わる喜びを味わい、書くことへの意欲を高めている姿。

梅組の子供たちの書くことに取り組む姿は、体験を相手に書いて伝える学習を積み重ねてきたことから、ある程度文字力が身につく、書くことを自らみつめるようになりつつある。

そこで本研究では、パンフレットづくりを学習過程に取り入れ①書くことに取り組む意欲・態度、習慣②書くことをみつめる力③語彙力・文字力・文法力などの書くための基礎力を育てたい。このことは子供たちの日常の言語生活を活発化し、コミュニケーション能力の基礎を育てる上で意義深い。

パンフレットづくりとは、相手にわかりやすいパンフレットを活用してもらおうという意識を持続させながら体験を文字化し、さらに書きたいことたくさんみつめ、動作したり話したりして表現を書き広げていく、という一連の活動のことである。これは子供たちが意欲的に書き進める姿を引き出すことをねらいとしている。その意義を次のように考える。①書いたことが相手に伝わり、表現物が活用される喜びを味わえる。②書くための基礎力や書くことをみつめる力を育てることができる。

<主題の構想>



3. 学習指導上の問題点

- (1) 体感的な遊びの場を通して書くことをねらう指導では、楽しい体験をしたことが書くことと結びつかない場合があり、書くことへの興味や関心を持続させることが難しかった。
- (2) 体験を選んで話し、文字化していくのみのこれまでの活動構成では、体験をことばに結びつけたり、表現をあたためたりすることが十分ではなく、体験と文字ことばの結びつきが少ないものや、表現の広がりや不十分なものがみられた。

4. 問題点説明の方途

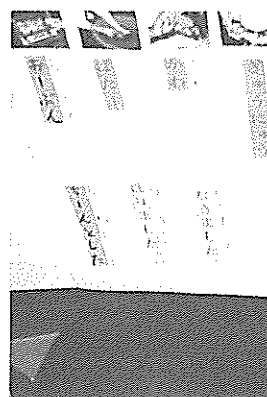
- (1) 順序だてられる体感的な活動を素材とし、パンフレットに書き上げて相手に活用してもらう活動を設定する。これにより必要感を持ちながら、書こうとする意欲を持続させることができる。
- (2) 文字表現をしていく際に、書きたいことをたくさんみつけさせ、内容の広がりを促していくパンフレットづくりの活動を以下のように構成して学習過程に位置付け、支援を工夫する。

<パンフレットの条件>

- ・これまでに経験のある楽しい行事において活動したことを、個に応じて文字表現するものである。
- ・書くことの成立過程にそって文字表現ができるように、写真や語句カード、文字表現の欄などが個に応じて配置されている。
- ・相手からの返事の欄が設けられており、伝えたい相手との文字表現のやり取りができるため、相手意識を持ち続けることができる。
- ・実際の行事の際に相手に活用してもらい、相手とのコミュニケーションを図っていくという積み重ねによって書く必要感を持つことができる。



〈書き上げたパンフレットを読む母親〉



〈個に応じたパンフレット〉

<基本的な指導のしくみ>

	で あ う	つ く る	あ ら わ す
活動と内容	順序だてて1パンフレットづくりについて体感的な話し合う。 活動体験○体験を想起し(生理的)見通しを持つ。	2 パンフレットをつくる。 ○体験を文字化し、さらに動作したり話したりして表現をあたため、それをもとに書き広げていく。	3 パンフレットをパジャラを活用する。ットが○達成感・成就感活用される体験(生理的)を味わわせる。

	で あ う	つ く る	あ ら わ す
活動と内容	1 パンフレットづくりについて話し合う。 ①前時のパンフレット紹介②相手の返事の紹介③モデル演示 パンフレットづくりの場	[文字化] 体験の書き上げ 文 字 化 2 パンフレットをつくる。 ①相手からの返事の読み取り・聞き取り ②動作や話により表現をあたためる。 ③あたためた表現をもとに書き広げる。 動作化 聞き取り: ↓↑ (表現の広がり) 読み取り: 音声化 → 表現の書き広げ	3 パンフレットを紹介する。 ①できあがったパンフレットを友達に紹介する。
支援	・体験中のビデオ ・モデル演示 ・相手の返事	[文字化] AG松一松の結び付け BG松一松の結び付け CG文の構成 DG順序の意識 お返事カード・模擬体験の場 AG松一松の結び付け BG松一松の結び付け CG松一松の結び付け DG松一松の結び付け	・できあがったパンフレット ・相手への紹介

5. 指導の実践と考察

(1) 題 材 「6ねんせいをおくる会のパンフレットをつくろう」(2月題材)

(2) 指導にあたっての基本的な考え方

①子供たちの実態

	書くことへの意欲・態度	書く力
Y児 (AG)	学習には見通しをもって取り組むことができるように促す。自分から文字に門を叩くとする意欲はほとんどみられない。	事物のイメージが明確でない部分があり、ことばと事物の結びつきが不十分である。書き始める意欲はあっても、書き進められなくなる。
I児 (BG)	学習に見通しをもてれば意欲的に取り組むことができる。ノートの行の数を数えながら書くようになった。	体験したことからの印象的な事物を話すことはあるが、書くことに結びつかない。援助されながら語句を複写して書くことができる。
N児 (CG)	自分から文字を書くことはあるが、慣習的な語句や文を複写して書く学習では見通しをもて書く。	体験から断片的な事物を話すことはあるが、書くことに結びつかない。援助されながら語句を複写して書くことができる。
O児 (DG)	課題として取り組むことができるが、体験を簡単な文章にして自分で書くことができる。学習では自分で見通しをもって意欲的に書くことができる。	体験を簡単な文章にして自分で書くことができる。学習では自分で見通しをもって意欲的に書くことができる。

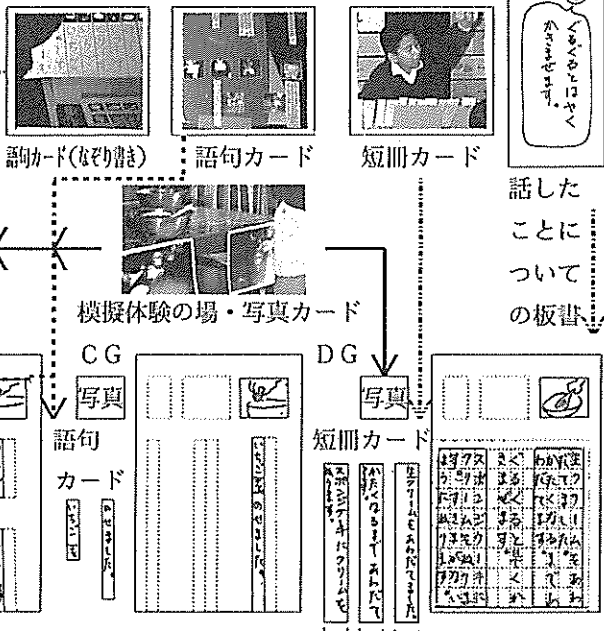
②基本的な考え方

本題材は、6ねんせいをおくる会の体験をお母さんに伝えようと、個に応じて文字化し、自分の書きたいことをもとに、さらに書くことをたくさんみつけたり、内容を広げたりさせようとするものである。本題材の意義として①ピザづくりなどの買い物や調理をさせることにより、興味や関心が喚起され、書きたいことをたくさんみつけることができる。②おくる会の中で実際にパンフレットを活用してもらうことにより、書きたかったことが相手に伝わる喜びを味わえる。③個に応じた文字表現の広がりを促すことができる。

③指導内容

	字を書く	語や文・文章を書く
Ⅱ	○文字を複写しようとする。 絵をなぞり文字が書けるようになる。 語句を複写しようとする。	○文字を複写しようとする。 絵をなぞり文字が書けるようになる。 語句を複写しようとする。
Ⅲ	○文字を複写しようとする。 絵をなぞり文字が書けるようになる。 語句を複写しようとする。	○文字を複写しようとする。 絵をなぞり文字が書けるようになる。 語句を複写しようとする。
Ⅳ	○天板のひらがなを書けるようになる。 絵の文字を併せて書く。	○天板のひらがなを書けるようになる。 絵の文字を併せて書く。
Ⅴ	○生活に必要の文字が書けるようになる。 絵の文字を併せて書く。	○生活に必要の文字が書けるようになる。 絵の文字を併せて書く。
Ⅵ	○生活に必要の文字が書けるようになる。 絵の文字を併せて書く。	○生活に必要の文字が書けるようになる。 絵の文字を併せて書く。

④教材・教具



(3) 指導目標

- 6ねんせいをおくる会でいちばん楽しかったことをたくさん書くことができる。
- AG：楽しかったことを写真からみつけて話し、たくさんなぞり書きをすることができる。
- BG：楽しかったことを一語文程度で話しながら、たくさん語句の視写ができる。
- CG：楽しかったことを二語文程度で話しながら、たくさん文の視写ができる。
- DG：楽しかったことを話しながら、語や文を付け加えたり、順序よく書いたりできる。

(4) 指導計画(約4時間)

1. 6ねんせいをおくる会について話し合い、パンフレットづくりについて想起する。—— 1時間
2. 6ねんせいをおくる会のパンフレットづくりをする。—— 2時間
- ①会食の準備の体験についての文字化 ②母親の返事をもとにした文字表現の書き広げ
3. 6ねんせいをおくる会の中で母親にパンフレットを紹介し、活用してもらう。—— 1時間

(5) 子どもの反応と考察

体験 (順序だてられる体感的な活動)

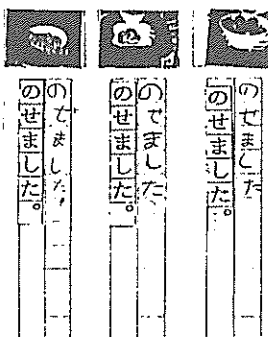
[生活単元学習「6ねんせいをおくる会をしよう」-会食の準備(約4時間)-]

活動: ケーキやピザづくりなど、会食の準備をする。

(・スポンジケーキにクリームをぬる。・いちごをケーキにのせる。など)

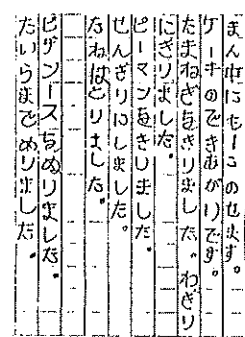
文字化 ← 体験の選択 → 動作化・音声化 → 文字化

(つくる段階 [かいしよくのじゅんぴのことをばんふれっとにかこう]-2/4時-)



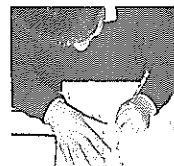
[N児のパムフレット]

印象に残ったことについて、写真カードを断片的に選び、語句を視写している。写真は教師の声かけで結び付いている。



[O児のパムフレット]

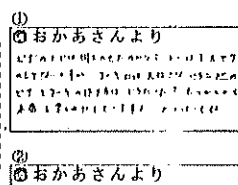
印象に残ったことについての内容的な広がりにはみられないが、体験をしたことを順序よく、またそれぞれの事柄について詳しく文章にまとめている



考察1

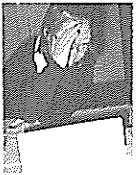
順序だてられる体感的な活動を素材にパムフレットづくりに取り組ませたことにより、子供たちは「楽しかったケーキづくりのことなどをお母さんに書いて伝えよう。」と目的意識を明確にしながら書くことに取り組んでいった。書く素材が調理という活動の見通しの持ちやすい、楽しい体験であったこと、行事の際に相手に活用してもらう経験を積み重ねてきていることから書く必要感を持たせることができたことなどが有効に働いたものと考えられる。

<課外> 活動: 2/4時に書き上げたパムフレットを持ち帰り、母親に見せる。母親はパムフレットを読んだ後、『おかあさんより』の欄にもっと書いてほしいことなどを書く。



文字表現の書き広げ ← 文字化 ↔ 聞き取り・読み取り ↔ 動作化・音声化 → 文字化(書き広げ):

(つくる段階 [かいしよくのじゅんぴをしたことが、おかあさんにもっとよくわかるようにかこう] -3/4時-)

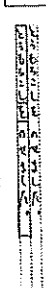
教師の発問・支援援助	N児(CG)	教師の発問・支援援助	O児(DG)
 T. 何をのせたのかな。 T. とうもろこしをどうした	N1. 母親の声「何をのせたのかな。」を聞き教師のところに持ってくる。 N2. 「とうもろこしのせました。」とつぶやく。 N3. 写真カードを取りに行く。とうもろこ	 T. 「お母さん	O1. 母親の声「ピザをつくるときに難しかったのはどんな所かな」を聞き「切る所」とつぶやく。続いて短冊カードを作文台紙にはっていく。 O2. 次々にカードの音声を

の。

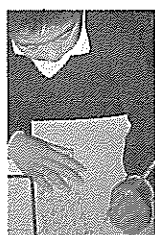


T. お母さん読んでくれるかな。

しをのカードを取る。
N4. 「のせました。」とつぶやき「のせました。」のカードを取り視写しながら文を書く。
N5. 書き終わると「書いたあ！」とつぶやく。教師の問いかけにうれしそうにうなづく。



に一番どんな所を教えたいかな。」



聞き「よし、これ！」とつぶやいて教師に「切る所。」話し動作化する。
O3. 「ピーマンをきりました。たねはさきにとりました。あぶないからねこの手できりました。」と書く。



考察2

N児は母親の声を聞きながら、自分で書くことをみつけようとする姿がみられた。書きたいことがことばと結び付かなかったN児は、母親の問いかけ（ランゲージカード）をもとに動作することにより、とうもろこしをパイ生地のにせる動作と『のせました。』ということばを結び付けることができている。さらに、動作したことを母親の問いかけに応じて話すことで、ことばを文字に結びつけている。文字化の際には、語句カードが有効に働き、視覚により記憶をつなぎながら書けたものとする。書き上げたあと「書いたあ！」とつぶやき、「お母さんにわかるように書けたね。」という教師の問いかけにうれしそうにうなづいていたことなどから、書いたことが相手に伝わる喜びを味わいながら、書き広げることのできた達成感を味わっていたものとする。



O児は母親の問いかけを繰り返し聞きながら、板書を手がかりにして文章を再構成したり、「切る所。（か難しかった。）」などと話して、切る動作をしたりし、「あぶないからねこの手できりました。」などと自分なりの表現をふくらませたりする姿がみられた。母親の問いかけをもとに動作したり話したりすることを繰り返したことにより、動きのイメージをふくらませながら語や文を生み出し、内容を広げて書くことができたものとする。

その他にも、Y児（AG）は、母親の問いかけを聞き、自分から写真と写真の結び付けを繰り返して事物のイメージを強化しながらぞり書きをし、S児やI児（BG）についても母親の問いかけをもとに、自分で動作をしながらたくさん写真を取ってきて、語句と結び付けながら視写を繰り返すなど個に応じた表現を書き広げる姿がみられた。

パンフレットの発表

「生活単元学習「6ねんせいをおくる会をしよう」－おくる会の実行（約1時間）－

活動：「6年生を送る会」のプログラムの
中でお母さんにパンフレットの紹介をする。

・母親と一緒にうれ
しそうにパンフレッ
トを読んでいるN児



・体験したことを順序
よく母親に話している
O児



考察3

喜んでお母さんにパンフレットを読み聞かせたり、出来上がったパンフレットを母親と一緒にうれしそうに読んだりする姿がみられたことから、パンフレットを書き上げた成就感や、書き上げたパンフレットを母親に読んでもらい、役に立ったという有用感を味わっていたものとする。

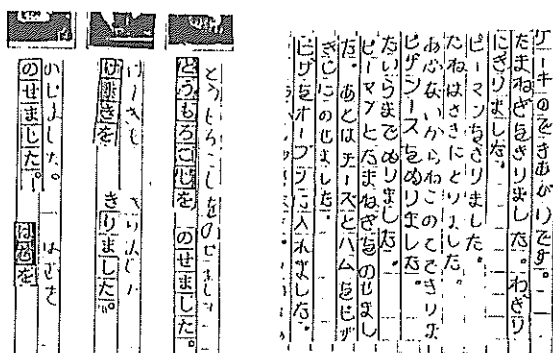
6. 全体考察

(1) 順序だてられる体感的な活動について

題材を通し、子供たちは体験を相手に書こうとする目的意識を持続させながら、意欲的に書くことに取り組み、さらに表現を書き広げていった。学校行事の中の楽しい体験であったこと、順序だてられる体験であったこと、書き伝える相手と体験を共有でき、その際に自分の書いたパンフレットが活用されることなどがこうした姿を引き出す上で有効であったものとする。

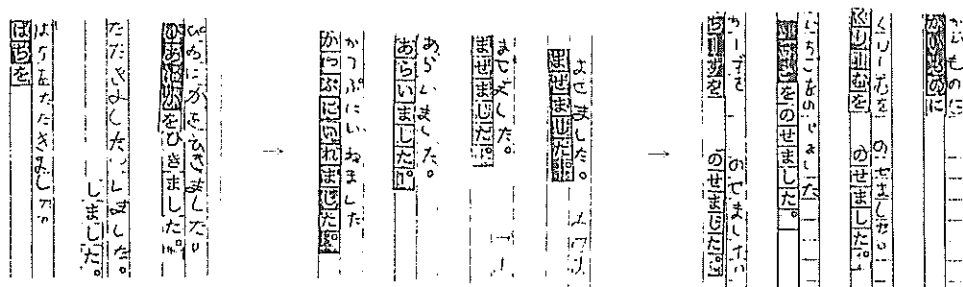
(2) パンフレットづくりについて

パンフレットを活用してもらおうという意識をもとに文字化し、書いたことが伝わる喜びを味わいながら、書きたいことをたくさんみつけ、動作したり話したりしていくことにより、子供たちはそれぞれに表現を書き広げていくことができていたと考える。まず、母親の返事や声による読み取り・聞き取りにより、目的意識の持続と書き



き広げの観点に気付かせることができた。 [できあがったパンフレットN児] [できあがったパンフレットO児]
次に、動作することは動きとことばと結び付けたり、語と語のつながりを時系列的につないだり、動きのイメージをふくらませる上で有効に機能すると考える。さらに、話すことは、ことばを文字に結び付ける上で有効に機能すると考える。文字化の際には、語句カードがことばと文字の橋渡しをする上で有効に働くと考え。「お母さんによくわかるように書いて伝えよう」という目的意識は題材を通して持続しており、母親からの返事、ランゲージカードがてだてとして有効であるとする。

年間を通してパンフレットづくりの題材を設定したことにより、子供たちは書くことが相手に伝わる喜びを味わいながら、意欲的に書き進めることに繰り返し取り組んできた。こうした取り組みから「またお母さんにパンフレットを書きたい。」などと話す姿がみられるようになってきた。また、日常生活での経験をたくさん話しかけてきたり、書くための基礎的な力である文字力や文法力などにも伸びがみられたりするようになってきた。



[9月題材でのパンフレット] [11月題材でのパンフレット] [2月題材でのパンフレット]

しかし、①題材での目的意識はあるが、1時間の活動の中で意識がとぎれる場面がみられた。活動構成を個々の意識にのせる工夫をしていくことが必要である。②書くことがみつけれなかったり、十分な書き広げができなかったりする例がみられた。より個に応じたノートの工夫が必要である。

7. おわりに

意欲的に書き進める子供たちの姿を求めて

主な参考・引用文献：飯高京子編『ことばの発達の障害とその指導』学苑社 1988 藤原宏編著『小学校作文指導辞典』

教育出版 1993

ぼうけん遊びを通して運動の喜びを味わう基本の運動の指導

特殊教育体育科部 松 本 良 一

1. はじめに

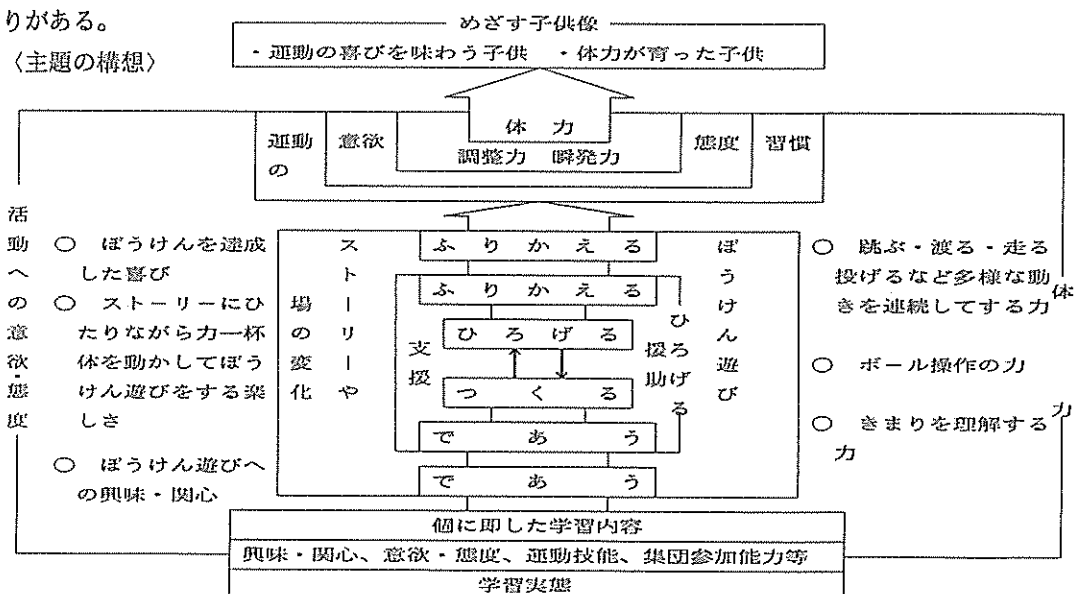
精神発達に遅滞のある子供たちの基本の運動領域の指導において、走る・投げる・渡る・跳ぶなどの総合的な運動内容を経験できるぼうけん遊びを、年間を通して継続的に行えば、一人一人が運動の喜びを味わうことができ生活力の基礎となる体力が育つ。

2. 主題の意味と重要性

運動の喜びを味わうとは、精神発達に遅滞のある子供たちが、自分の動きを意識したり動きへの達成感・成就感を味わったりしながら繰り返し運動の場にかかわって活動する中で、多様な動きの経験を蓄積することである。この多様な運動経験の蓄積が、結果的に調整力を中心とした体力を高めることになると考える。具体的に運動の喜びを味わっている姿を次のようにとらえている。①自分の動きのよさに気づき、「もっと速くへ跳ぼう」「もう一回素早く渡ろう」と繰り返し運動の場にかかわっている姿、②「これならできそうだ」と自分でコースを選択して、多様な動きを経験している姿③「～くんから逃げたい」「～さんに当てたい」と友だちとかかわりながら活動する姿、④「おもしろかった、この次もがんばろう」と、達成感・成就感を味わいながら、次の活動への挑戦意欲を高めている姿。

そこで本研究では以上のような姿を具体化するためにぼうけん遊びを学習に取り入れ、①運動への意欲的な態度、②きまりの理解力、③調整力を中心とした体力、④課題克服への意志力、などを育てていきたい。このことは、体が今まで以上に動くようになる、きまりを守って友だちと楽しくかわれる、運動課題の克服により自信がつくなど、日常の運動生活を活発にするとともに、生涯にわたって運動に親しむための意欲・態度や生活力の基礎となる体力を培う上でも意義深い。

ぼうけん遊びとは、ぼうけんのスリル（攻守の面白さ）を味わったり、友だちと競争したりしながら、総合的な運動の場に繰り返しにかかわっていくことである。これは友だちとかかわりながら活動する中で、運動の喜びを味わい多様な運動経験を蓄積していくことをねらいとしている。ぼうけん遊びの意義を次のように考える。①ストーリーからぼうけんの目的や運動内容、攻守のきまりをつかむことができる、②個に応じた多様な動きを引き出す場が工夫されている、③役割の交代など簡単なきまりがある。



3. 学習指導上の問題点

- (1) 運動の内容を限定した指導を行っていたため、単一の動きの高まりは見られたが、多様な運動の経験が不足しがちとなり、調和的な運動発達を促すまでには至らなかった。
- (2) 動きを意識したり動きのよさに気づいたりして、運動の喜びを味わいながら子供たち自らが新しい動きへ挑戦し、動きを工夫していく上での活動の構成と支援・援助が不十分であった。

4. 問題点説明の方途

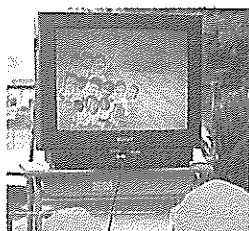
- (1) 多様な運動経験をさせるために、次のような条件をもつ総合的な運動の場を設定する。①追いかける・逃げる動きを中心とし、易から難、日常的な動きから非日常的な動きへと場を付加していく、③走りながら投げるなど動きの連続・組み合わせを引き出し、調整力を中心とした体力を高めるという視点から構成する。②個の運動能力に応じた選択できる多様なコースを設定する。
- (2) ぼうけん遊びの活動を以下のようにしくみ、学習過程の中に位置づける。

〈基本的な指導のしくみ〉

	であう（1時間）	ひろげる（6時間）	ふりかえる（1時間）
活動と内容	1. ぼうけん遊びについて話し合う。 ○ぼうけんのストーリーと場、動きとの出会い ○活動の手順と方法	2. 楽しくぼうけん遊びをする。 ○ストーリーや場の変化に応じた多様な動き ①走・ボール操作の動き ②走・ボール操作・渡る動き ③走・ボール操作・渡る・跳ぶ動き ○ぼうけんのきまり	3. ぼうけん遊びをまとめる。 ○つないだぼうけんの場のできるようになった動きを生かすこと ○ぼうけんの発表

繰 り 返 し			
つ く る (1時間)		ひ ろ げ る (1時間)	
活動と内容	1. ぼうけん遊びについて話し合う。 ○ストーリーと運動内容の把握 2. ぼうけん遊びをする。 ○基本となる動きの獲得 3. ぼうけんを振り返る。 ○ぼうけんの成果	ストーリーと	1. ぼうけん遊びについて話し合う。 ○体験による前時学習の想起 ○変化したストーリーと運動内容の把握 2. ぼうけん遊びをする。 ○動きの連続・組み合わせ 3. ぼうけんを振り返る。 ○ぼうけんの成果
	○前時学習のビデオ ○ストーリーのドラマ的ビデオ ○個に応じた動きへの支援・援助 ○4段階のコース設定 ○賞賛・励まし		○変化したストーリーのドラマ的ビデオ ○ストーリーに応じて変化した場の提示 ○個に応じた動きへの支援・援助 ○動きの連続・組み合わせを引き出す場の設定 ○動きのよさに気づかせる声かけ
ティーム・ティーチングによる支援・援助(場による役割分担・グループによる役割分担・支援の仕方による役割分担)			

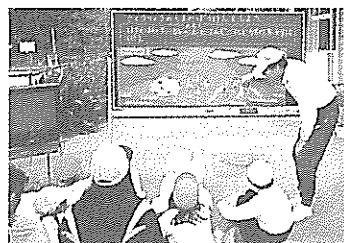
〈具体的な支援・援助〉



①ドラマ的ビデオ



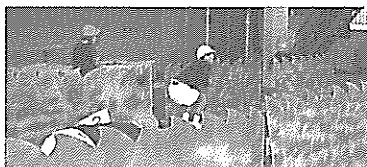
②役割を意識させるお面



③ぼうけん地図



④宝物のペーパサート



⑤平均台上の動きを引き出す渡る場



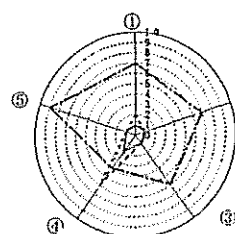
⑥遠くへ跳ぶ意識を引き出す跳ぶ場

5. 指導の結果と考察

(1) 題 材 第4・5・6学年さくら・梅組 きょうりゅうの島のぼうけん(基本の運動)

(2) 指導にあたっての基本的な考え方

① 児童の実態(体力テストの結果:平成5年7月実施)



K児—
(Aグループ)
S児—
(Bグループ)
O児—
(Cグループ)
D児—
(Dグループ)

体力テストの段階表

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
3歳前半	4歳前半	4歳後半	5歳前半	5歳後半	6歳前半	6歳後半	7歳前半	7歳後半	8歳前半

測定項目の内容と体力の要素(敏捷性・平衡性は調整力の構成要素)

①10m折り返し走	②ボール投げ	③平均歩速	④立ち幅跳び	⑤閉眼道徳片足跳び
走力・敏捷性・平衡性	筋力・運動技能	平衡性	筋力	持久力・平衡性

※「体力テストガイドブック」(日本体育協会スポーツ科学委員会編集 ぎょうせい 昭和57年)を参考に実施

② 基本的な考え方

本題材は、きょうりゅうの役と逃げる役に分かれて追いかっこをする中で、走る・投げる・渡る・跳ぶなどの多様な運動経験をさせることがねらいである。その意義は、①多様な運動経験をさせることにより体力が高まり、調和的な運動発達が促される、②ビデオにより視覚的に提示されたストーリーから、運動の目的や内容、きまりをつかみ、主体的な学習の仕方が身につく、③中・高学年の合同の学習形態(12人)を取っているので、友だちとのかかわりから動きがひろがる。

③ 指導内容

走	走る・投げる	走る・よける	渡る・よける	走る・跳ぶ
I コースを意識して走る。	I 目標物を意識してボールを投げる。	I ボールを意識して走る。	I ボールを見て止まる。	I 走って止まって両足で跳ぶ。
II 逃げる事を意識して走る。	II 動く目標物を意識してボールを投げる。	II ボールを見て止まる。	II ボールを見てスピードを変化させて渡る。	II 両足で連続して跳ぶ。
III 追いかけることを意識して走る。	III 走って目標物を追いかけてボールを投げる。	III ボールを見てスピードを変化させて走る。	III ボールを見てかんだりよついで渡る。	III 走ってまたぐ。
IV 目的地を意識して力一杯走る。	IV 走って目標物を追いかけてボールを投げる。	IV ボールを見て前後左右に動いたり、体をひねったりかんだりして動く。	IV ボールを見て体をひねったりそらせたりする。	IV 走ってまたぎこす。
V 追いかける方や逃げ方を工夫して走る。	V 走って目標物を追いかけてボールを投げる。			V 走って連続でまたぎこす。
VI きまりを理解して走る。	VI 走りながらボールを投げる。			VI 走って片足踏み切りで跳ぶ。

(3) 指導目標(下線部分のGはグループを、数字は上記の指導内容表の段階を表す。)

- 役割や得点などについての簡単なきまりを理解し、友だちと仲良く意欲的にきょうりゅうの島のぼうけん遊びを楽しむことができる。
- 友だちの動きを見たり、自分で動きを工夫したりしながら、走る・投げる・渡る・跳ぶ、などの一連の運動を組み合わせて連続したりしてできる。(AG:Ⅰ～Ⅱ, BG:Ⅱ～Ⅲ, CG:Ⅲ～Ⅳ, DG:Ⅳ～Ⅴ)

(4) 指導計画

であう(1時間)	ひろげる(2時間)	ひろげる(2時間)	ひろげる(2時間)	よりかえる(1時間)
【ストーリー】 宝物をさがしに恐竜の島へやって来たみんな。そこでは、恐ろしい恐竜(ワニ)の群衆をしようとして待っていました。	草原で恐竜がボールを持って追いかけてきました。	橋を渡ろうとすると、水の中から恐竜がボールを投げてきました。	橋のない川を前にして、恐竜がボールを持って追いかけてきました。	恐ろしい恐竜が追いかけてくる草原や橋や川(今までの学習してきた場をつないだ場)を冒険して、無事宝物を取りに行くことができました。
1. ぼうけん遊びについて話し合う。 ○ストーリーと動きとの出会い	2. 楽しく役割を交代しながらぼうけん遊びをする。 ○走る・投げる動きを中心に動きをひろげる	○渡る・よける動きを中心に動きをひろげる	○走る・跳ぶ動きを中心に動きをひろげる	3. ぼうけんのまとめをする。 ○できるようになった動きの発表

(5) 子供の反応と結果の考察

① であう段階 (1 / 8 時)

この段階は、ぼうけんのストーリー (きょうりゅうの島へ宝物を取りに行く。途中には恐ろしいきょうりゅうがぼうけんの邪魔をする。) とぼうけんのきまり (きょうりゅうの役ボールに当たらないように宝物を取りに行く。)、器械・器具や用具 (跳び箱・平均台・ボールなど)、動き (走る・投げる・跳ぶ・渡る) に出会わせ、ぼうけん遊びへの動機を高めることがねらいである。

支援・援助	子供の反応
○ストーリーをドラマチックなビデオで提示 ○器械・器具を使った、きょうりゅうの島の場の設定 ○きょうりゅうのお面 (役割の意識) ○ぼうけん地図	画面のストーリーを集中して見たり、笑顔で見たりして、「ぼうけん、がんばろうぜ」とつぶやき姿が見られた。また、走る、投げる跳ぶ、渡る、などの動きを経験して「もっと、やりたい。」というつぶやきが聞かれた。  ドラマチックなビデオを、笑顔で見る子どもたち

【考察1】きょうりゅうの島として設定された場で、お面をつけて自分たちで役割交代をしながら意欲的に活動する中で、走る・跳ぶ・投げる・渡るなどの動きを経験することができた。このような子供の姿から、色々な動きを経験しながら追いかけてこをするぼうけん遊びの見通しをもたせ活動への動機を高める上で、次のようなことが有効であったと考える。(ア) 目的意識をもちやすく、走る・投げるなどの運動内容を含んだストーリーの映像による提示、(イ) ストーリーに応じた場の設定。

② ひろげる段階 (2 ~ 7 8 時) (※子供の反応の中のT. は個に応じた教師の支援・援助)

この段階は、ストーリーに応じて変化していく場でぼうけん遊びを楽しむ中で、多様な動きを経験させ、動きへの達成感・成就感を味わわせることがねらいである。

ア、走る・投げる場での動きをひろげる活動：2 / 8・3 / 8 時 (試行回数 20 回)

支援・援助	I 児 (Bグループ)	O 児 (Dグループ)
1. 動きをつくる ・待ち伏せてボールを投げる場	T. ~君に当ててという声かけ I 1. 逃げる友だちを意識してボールを投げる。	T. 相手の動きを予想して 追いかけたら、という声かけ
2. 動きをひろげる ・追いかけてボールを投げる場	T. ボールを持って走る I 児に、投げるタイミングを示す声かけ	O 1. ボールを2個持ち、相手の動きを見てまわりこみ、走りながら投げる。
○声かけ	I 2. 走りながらボールを投げる。	
○モデル演示	 走りながらボールを投げる I 児	 ボールを2個持って、走りながら投げようとする O 児

【考察2】走る・投げる動きの連続・組み合わせを引き出す上で、次のことが有効であったと考える (ア) 待ち伏せていたきょうりゅうが追いかけてきたというストーリーの変化と、それに応じてきょうりゅうの役スタート位置を後ろにずらした場の変化、(イ) 追う役・逃げる役に2人の教師がついて行きながら、投げるタイミングを示す、追いかける方・逃げ方への助言、などの声かけ。

イ、渡る・よける場での動きをひろげる活動：4 / 8 時・5 / 8 時 (試行回数 18 回)

支援・援助	A 児 (Cグループ)	O 児 (Dグループ)
1. 動きをつくる	A 1. 投げられたボールを意識して、素	O 1. ついたてを利用してボールをよ

・逃げながら平均台を渡る場
2. 動きをひろげる
・ついたてのあ
る平均台を渡り
ながらボールを
よける場
○動きを意識さ
せる声かけ
・賞賛、動きの
意味づけ

早く平均台を交互足で渡ろうとする。
T. ボールがきたよという声かけや、
しゃがんでよける動きのモデル演示
A2. 平均台上で止まってボールをしゃ
がんでよけようとする。



しゃがんでボールをよけるA児

けるために、平均
台上で止まったり
しゃがんだりする。
O2. 体をひねった
りそらせたりして
ボールをよける。
T. どんなよけ方
をしたの。



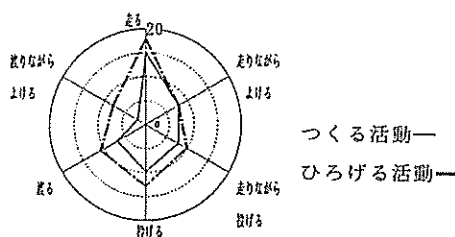
Y児のボールをよけるO児

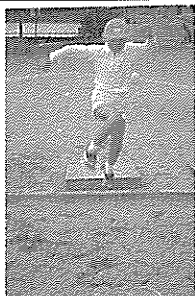
O3. 「ほくの、よけ方を見せる。」と
言ってやってみせる。
T. ボールを投げる。
O4. しゃがむ、後ろ歩き、止まる、動
きを連続してボールをよける。

【考察3】グラフⅠで分かるように動きをひろげ、走る・
投げる・渡る・よけるなどの多様な動きの連続・組み合わ
せを経験することができた。O児はできる動き（交互足で
平均台を渡る）から、しゃがんだり後ろ向きに歩いたり、
体をそらせたりするなど動きを工夫し、自ら発表する姿が
見られた。A児も投げられるボールを意識して、しゃがむ、
手でボールを落とそうとする姿が見られた。しゃがむ動き
を引き出す場の変化の設定と2人の教師がボールを投げる役になって動きを引き出したりモデル演示
をししたりする支援が、子供自らが動きをひろげていく上で有効に働いたと考える。

ウ、走る・跳ぶ場での動きをひろげる活動：6／8時・7／8時（試行回数15回）

グラフⅠ. O児の多様な動きの表出回数



支援・援助	K児（Aグループ）	Y児（Dグループ）
1. 動きをつくる ・走ってきて川 を飛び越える場 2. 動きをひろげ る ・遠くへ跳ぶと 宝物がたくさん 取れる場 ○動きを意識さ せる声かけ ・賞賛、動きの 意味づけ	K1. 走ってきて止まって両足跳びで跳 ぼうとする。 T. 手をつな いで一緒に跳 ぶ、動作援助 とモデル演示 K2. 走ってきて、片足踏み切りで跳ぶ T. 動きへの 賞賛 K3. 繰り返し 走ってきて片 足踏み切りで 跳ぶ。  教師の支援を受けるK児  走ってきて勢いよく跳ぶK児	T. 助走をつけた跳び方のモデル演示 Y1. 4点にとどき「ようし」と言う。 T. どうして4点まで跳べたの。 Y2. 練習したから、 と腕を振る真似を して助走を力一杯 したことを伝える。 Y3. 勢いよく跳ん で4点まで跳ぶ。 T. どうして4点 まで跳べたの。 Y4. 「高く跳んだから。」と言って満 足そうに宝物を4個取る。  助走を生かし遠くへ跳ぼうとするY児

【考察4】グラフⅡでも分かるように、動きをひろげ渡る・跳ぶ・走る・投げるなどの多様な動きの
連続・組み合わせを経験することができた。Y児は自分の動きを意識して、「力一杯助走したから」
「高く跳んだから」と動きのよさに気付く姿、自らもっと遠くへ跳ぼうと跳ぶ動きを繰り返し行い、

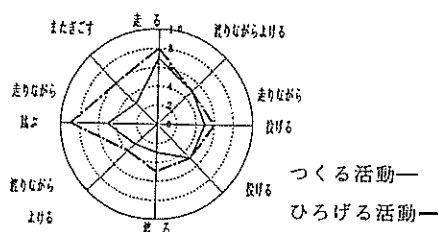
自分の動きへの達成感・成就感を味わいながら活動する姿が見られた。K児にも動きのよさに気付く姿（繰り返し跳ぶ姿）が見られた。教師の動きを意識させるモデル演示、「～から～できたんだね」という動きへの意味づけをする声かけなどの支援が、動きへの達成感・成就感を味わわせる上で有効であったと考える。

③ ふりかえる段階（8／8時）

この段階は、学習してきたぼうけんの場をつないだ場で、できるようになった動きを生かすことにより、学習への達成感・成就感を味わわせることがねらいである。

支援・援助	子供の反応
○動きを想起させるための動きの取り出し ○動きの発表	できるようになった動きを生かして、ぼうけん遊びを楽しみ、友だちに嬉しそうに発表した。

グラフⅡ. Y児の多様な動きの表出回数



大ジャンプを見せると言って、跳ぶ動きを発表するS児

【考察5】動きを生かす姿を引き出し、学習への達成感・成就感を味わわせる上で、次のことが有効であったと考える。①3つのぼうけんの場をつないだ場の設定、②動きを取り出す場で動きを想起させる支援、③自分がやりたい場を選んでの動きの発表。

6. 全体考察

(1) 総合的な運動内容を取り入れた活動の設定について

総合的な運動内容を取り入れた活動を設定し、継続的に指導を行うことにより、多様な運動経験が蓄積され、体力テストの結果（グラフⅢ）からも分かるように体力の向上を図ることができた。精神発達に遅滞のある子供たちの基本の運動領域の指導において、総合的な運動内容を取り入れた活動を設定することは、体力の向上を図る上で有効であったと考える。走る動きを中心に、投げる・渡る・跳ぶ動きを内容として付加していったが、題材をとおして総合的な運動内容を設定する必要もあったと考える。

(2) ぼうけん遊びについて

子供たちが動きをひろげながら運動の喜びを味わう姿を具体化する上で、次のようなことが有効であったと考える。

①ストーリーから運動内容と運動のきまりを、視覚的に映像でつかませたこと、②攻守のある活動を設定したこと、③個の運動能力に応じた選択きる場の設定、④チーム・ティーチングによる個に応じた動きをひろげたり意識させるための支援。しかし、自分の動きを意識させることが教師の動きや声かけだけであったので、映像などにより、より明確に自分の動きのよさに気付かせることも必要であったと考える。また、ひろげた動きをさらに高めることができるような、発展性のある場の設定も必要であったと考える。

7. おわりに

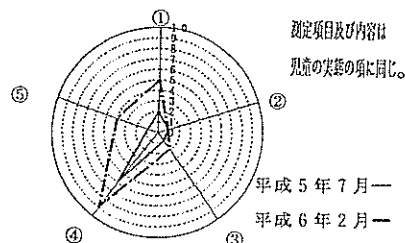
自分の動きのよさに気付く、運動の喜びを味わいながら新たな動きへ挑戦していく子供を求めて。

〈引用・参考文献〉 奈良女子教育大学学部附属幼稚園幼児教育研究会編 「調整力を高める運動遊び」 ひかりのくに 1979

ぼうけん遊び指導計画

9月	ぼうけん遊びⅢ（8時間） 「ジャングルのぼうけん」 ○多様な走る・投げる・跳ぶ・渡る動きを経験させる。
11月	ぼうけん遊びⅣ（8時間） 「きょうりゅうの島のぼうけん」 ○走る・投げる・跳ぶ・渡る動きの連続・組み合わせをさせる。
1月	ぼうけん遊びⅤ（5時間） 「スーパーマリオの国のぼうけん」 ○多様な走る・投げる・跳ぶ・渡る動きの連続・組み合わせをさせる。

S児（Bグループ）の体力テストの結果の変容（グラフⅢ）



ダンス遊びの活動を通して生き生きと表現する音楽科学習指導

特殊教育音楽科部 林 田 千 枝

1、はじめに

精神薄弱特殊学級低学年音楽科において、多様な表現ができる楽曲を取り上げ、身体表現を引き出す手具や手作り楽器や表現絵などがある場を設定し、友と一緒に自由に踊るダンス遊びの活動を構成すれば、生き生きと表現する姿が見いだせるであろう。

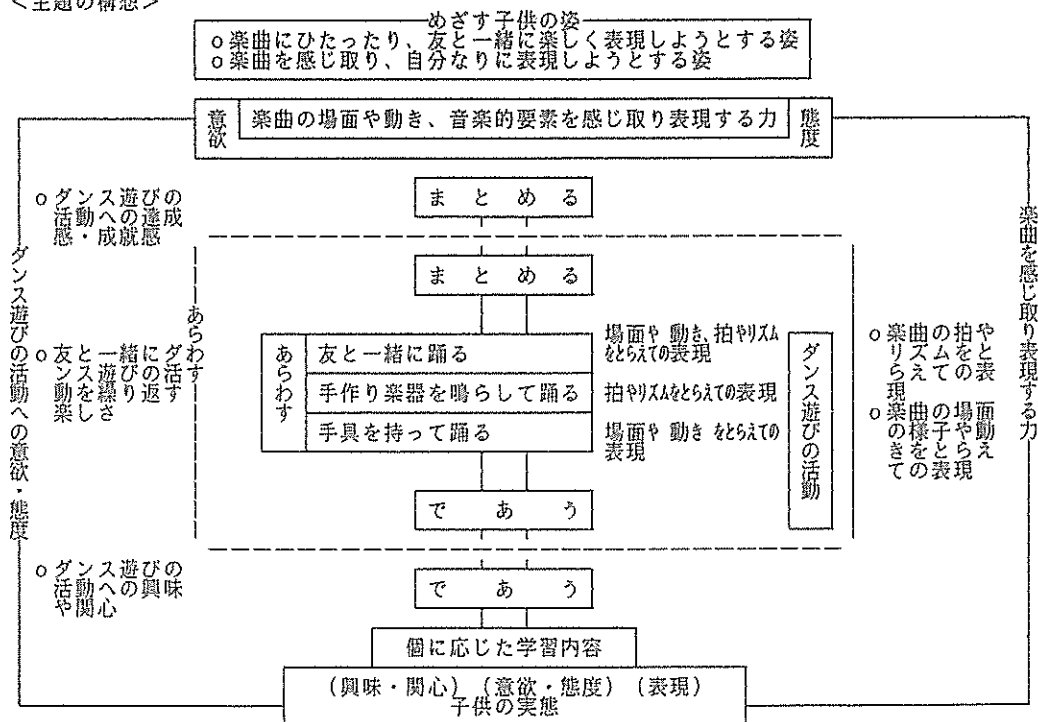
2、主題の意味と重要性

生き生きと表現するとは、楽曲に出会った子供たちが場から楽曲の感じを想い描きながら、身体全体を動かして表現する楽しさにひたっている姿である。具体的には次のような姿が上げられる。①楽曲を聞きながら、自ら場にかかわって興味・関心を示している姿②楽曲が流れる中、友が表現しているのをまねたり、友を誘ったりしながら表現している姿③楽曲の場面や動きを思い浮べて身体を動かして自分なりに表現している姿。

このような姿を引き出すためには、次のような力を育てていく必要がある。①楽曲に興味関心を持ち、友と一緒に楽しく表現しようとする意欲や態度②楽曲の感じを場から想い描いて、表現する力③楽曲の要素を感じ取る力である。このような力を育てていくことは、音楽を楽しむことが少なかった子供たちに、音楽に合わせて自由に身体を動かして表現する楽しみ方を経験させることができることで、情緒が安定し、生活への積極性を生むとともに、生活の中で音楽を楽しもうとする意欲や態度を育てることができる。このことは、潤いのある生活を送れるという点からも意義深い。

ダンス遊びの活動とは、楽曲が流れる中、楽曲の場面や動きを想い描かせる場で、友と一緒に身体全体を使って踊りながら歌う・楽器を鳴らす、といった自分なりの表現をする。この活動には次のような意義が考えられる。①「歌う」「楽器を鳴らす」「友と一緒に踊る」という楽曲の場面や動きを、自由に選択できる手具や手作り楽器、表現絵のある場から想い描くことができ、子供自らの表現を生み出すことができる。②一つの楽曲で、歌う、楽器を鳴らす、身体を動かすといった多様な表現ができるので楽曲の要素を感じ取らせることができる。

<主題の構想>



3、学習指導上の問題点

- (1) 身近な動物になりきって身体表現するといった場の工夫はあったが身体全体を動かしての自分なりの表現を引き出すまでの変化のある場の設定や活動構成が十分でなかった。
- (2) 楽曲の要素などを感じ取るための楽曲の工夫はあったが多様な身体表現に結びつくような楽曲になりえていなかった。

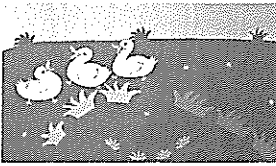
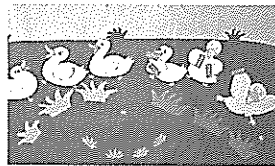
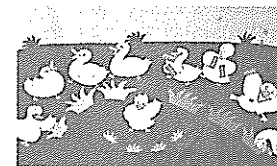
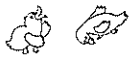
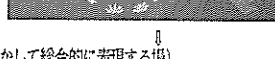
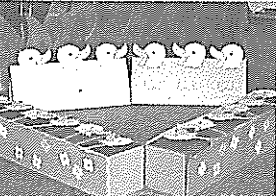
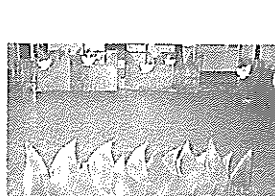
4、問題点解明の方途

- (1) 子供自らの身体全体を動かしての表現を引き出すための場の条件と基本的な指導のしくみを以下のように設定する。

①楽曲の歌詞内容（楽曲の感じ）をお話するパネルシアターの変化に応じて場が付加されていく構成になっていること。②パネルシアターや場には、楽曲の登場人物にあった多様な動きを表している表現絵があること。③動物の特徴的な動きや姿にあった手具、手作り楽器などがあり、自ら選択できる場があること。④友と一緒に表現できる広場や、リズムや拍を意識でき、歌詞にあった場があること。

<基本的な指導のしくみ>

	で	あ	う	あ	ら	わ	す	ま	と	め	る
活動	1. 自由にダンス遊びをする。 ○楽曲や場に出会うこと			2. 身体全体を動かしながら、歌ったり、楽器を鳴らしたりしてダンス遊びをする。 ○楽曲の場面や動き、音楽的要素をとらえた表現。						3. ダンス遊びを発表・表現し合う ○活動への達成感や成就感。	

	で	あ	う	あ	ら	わ	す	ま	と	め	る
	1. 本時のダンス遊びに対する動機を高める。 ○楽曲の把握			2. ダンス遊びをする。 (1) 手具を持って歌っておどる。 ○楽曲の場面や動きをとらえて特徴的な歌詞を歌っての身体表現。 (2) 手作り楽器を鳴らしておどる。 ○楽曲の場面や動きをふくらませ、拍やリズムをとらえての楽器を鳴らしての身体表現。 (3) 友と一緒に歌う。 ○楽曲の場面や動きを広げ、拍やリズムをとらえての多様な身体表現。						3. ダンス遊びを振り返る。 ○活動への達成感や成就感。	
支	・楽曲 ・パネルシアター ・絵巻			パネルシアター（楽曲のそれぞれの場面や動きをつかませる。）						・声かけ ・賞賛 ・励まし	
											
											
	場（友と一緒に歌う・楽器を鳴らす・身体全体を動かして総合的に表現する場）										
手具											
振・振	◇特徴的な歌詞を歌っている表現絵・手具			◇手作り楽器鳴らしている表現絵・手作り楽器			◇多様な動きの表現絵・手作り楽器・友と一緒に踊る場				
	楽曲の工夫										
	拍やリズム、旋律をとらえさせるために明快な（ピアノ・セレスタなど）音色						場面や動きを広げるリズムベースの工夫				
助	個に応じた手立て（モデル演示 賞賛や励まし） AG：擬態語や擬声語を強調して歌いかける。 BG：特徴的な歌詞を強調して歌いかける。 CG：場面や動きを想い描かせる声かけ			AG：擬態語や擬声語の拍を強調して鳴らす。 BG：擬態語や擬声語のリズムを鳴らす。 CG：場面や動きを想い描かせる声かけ リズム補助			AG：友の表現に目を向けさせる声かけ BG：場や友の表現に目を向けさせる声かけ CG：場や友の表現に目を向けさせる声かけ				

- (2) 子供自らの身体全体を動かして表現を引き出すための楽曲を以下のように選定する。

①子供の興味関心が持ちやすく、動きが思い描きやすい身近な動物が登場する。②簡単な歌詞で繰り返しが多く、擬態語や擬声語が多く含まれ動きに結びつきやすい。（低学年の子供たちが日常生活の中で経験している簡単な擬態語や擬声語でリズム感があり、動きながら楽器が鳴らしやすい）

5. 指導の実際と考察

(1) 題材 「ひよこやあひるとおどろう」－第1・2学年ふじ組－

(2) 指導にあたっての基本的な考え方

① 子供たちの実態

	身体表現する力	楽曲の要素を感じ取る力	意欲や態度
N 児 AG	楽曲の最初や最後や特徴的な歌詞やリズムの部分で声を出したり、歩いたり、手を振ったり、楽器を鳴らしたりする。教師や友の表現の印象的な部分を模倣表現する。	楽曲の最初や最後の部分を感じ取ったり、強調されると拍の流れの部分を感じ取ることができる。	自らの表現は少ないが、友が表現しているのをまねて表現する。音楽が流れる中で身体を動かしたり、声を出したり、楽器を鳴らしたりするのは好きである。
I 児 BG	特徴的な歌詞やリズムをとらえて歌を歌ったり、楽器を鳴らしたり、歌詞から印象的な動きを思い描いて、歩いたり跳んだりして表現する。	楽曲の拍の流れや繰り返したり、強調されたリズムを感じ取ることができる。	既習の楽曲が流れ出すと自分から歌を歌ったり、身体を動かして表現する。教師や友が楽しく表現していると一緒に身体を動かして表現しようとする。
H 児 CG	簡単な歌詞を歌ったり、登場する動物やものの特徴的な動きをまねて手や足を中心に動かし表現したり、特徴的な歌詞やリズムをとらえて楽器を鳴らすことができる。	楽曲の拍の流れや特徴的なリズムを感じ取ることができる。	楽曲が流れ出すと、自分から身体を動かして表現したり大きな声を出して歌ったり、友達を誘って一斉に表現しようとする。

② 基本的な考え方

本題材は、あひるやひよこと一緒に歌ったり、楽器を鳴らしたり、踊ったりして自分なりの表現をしていくことがねらいである。本題材の意義は①ひよこやあひると一緒に踊るという楽曲の場面や動きを、ひよこやあひるの手具や手作り鈴やカスタネット、表現絵のある変化のある場から思い描くことができ、子供自らの表現を引き出すことができる。②一つの楽曲で歌ったり楽器を鳴らしたりして総合的な表現ができるので楽曲の要素を感じ取らせることができる、である。

③ 指導内容

場面	内容	態度	表現	教師の役割や児童の役割	児童の役割や教師の役割
	身体を動かしての身体表現	歌を歌っての身体表現	楽器を鳴らしての身体表現	楽曲の要素を感じ取る力	意欲や態度
I	曲が流れる中で身体を動かす。(児)	I 擬態語や擬声語で声を出し手具を振る。(児)	I 擬態語や擬声語で楽器を鳴らす。(児)	I 歌詞の繰り返しに反応する。(児)	I 曲の始めや終わりの部分に合わせる。(児)
II	手を中心に動かす。(児)	II 擬態語や擬声語を歌って手具を振る。(児)	II 曲が流れる中で楽器を鳴らす。(児)	II 歌詞に応じて表現する。(児)	II フレーズの部分の繰り返しによって表現する。(児)
III	足を中心に動かす。(児)	III 特徴のある歌詞で声を出し手具を振る。(児)	III 拍の流れをとらえて楽器を鳴らす。(児)	III リズムに応じて表現する。(児)	III フレーズの始めの繰り返しによって表現する。(児)
IV	手振りをつけて動かす。(児)	IV 特徴のある歌詞の部分で歌って手具を振る。(児)	IV 擬態語や擬声語のリズムや歌詞にあわせて楽器を鳴らす。(児)	IV 歌詞やリズムに応じて表現する。(児)	IV 拍の流れを感じ取る。(児)
V	身体全体を動かす。(児)	V 特徴的な歌詞の部分で歌って手具を振る。(児)	V 特徴的な歌詞でリズムや歌詞にあわせて楽器を鳴らす。(児)	V 曲の感じをとらえて表現する。(児)	V 特徴的なリズムをとらえて表現する。(児)

(3) 指導目標

○ひよこやあひるの踊りを思い描いて、特徴的な歌詞や拍リズムをとらえて友達と一緒に歌ったり、楽器を鳴らしたして楽しく身体表現することができる。

I 児(AG): 「よちよちよち」「じゃぶじゃぶじゃぶ」「びよびよびよ」「がらがらがら」などの歌詞や拍の流れの部分をとらえて表現する。

II 児(BG): 擬態語や擬声語、「おててをならして」「しっぽがびよん」などの特徴的な歌詞や拍の流れをとらえて表現する。

III 児(CG): 簡単な歌詞やリズムをとらえて自分なりに表現することができる。

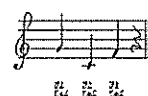
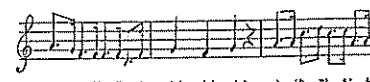
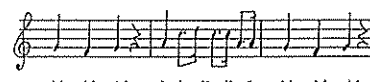
(4) 計画(約4時間)

1. ひよこあひる踊りに出会い、自由に踊る。―― 1時間
2. ひよこやあひると一緒に踊る。―― 2時間
 - (1) ひよこと一緒に……………①
 - (2) あひると一緒に……………①
3. ひよこやあひると一緒に踊り、学習をまとめる。―― 1時間

④教材・教具

ひよこ・あひるのうた

作曲 中田喜直 作詞 林田千枝



※子供の実態に応じて歌詞内容を変更した。

(5) 子供の反応と考察

①第1次 ひよこやあひるのダンス遊びの活動にであう子供の姿(1/4時であう段階)

この段階では、楽曲「ひよこやあひるのうた」に出会い、自由に歌ったり踊ったりして、ひよこやあひるのダンス遊びの活動への動機を高めることがねらいである。

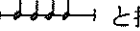
支援・援助	子 ども の 反 応
・楽曲 ・絵譜 ・パネルシアター ・野原の場	・ひよこやあひるのパネルシアターが出てくると、にこっと笑って「ひよこ」「ががああ」という。楽曲に合わせて教師がうたうと「ががああ」とうたったり、<u>手をくちばしのようにしたり、腰をかがめてダンス広場を歩いたりする</u>曲が終わると「またしたい」という声がきかれた。 

考 察

楽曲に出てくる動物に興味を持ち、教師と一緒に擬態語や擬声語のところを歌う姿。楽曲に出てくる動物を感じ取り、繰り返し広場で自由に踊る姿が見られた。この姿はダンス遊びの活動を「したい。もっとやりたい。」という態度のあらわれであり、動機を高めている姿である。このことは、楽曲にひよこやあひるなどの身近な動物を取り上げパネルシアターで出会わせたことや、動物の動きがとらえやすい歌詞であり、リズムのはっきりしている楽曲を選定したことが有効であったと考えられる。この段階では、子供たちが今までの想い描くひよこやあひるの動きで表現しており、まだ、拍やリズムは十分にとらえられていない。

②ひよこと一緒にダンス遊びの活動をする子供たちの姿(2/4時あらかわす段階を中心に)

ア、<歌う・おどる>この活動は、楽曲の「歌う」場面や動きをあらわしたダンス遊びの場で、「よちよちよち」「びよびよびよ」などの特徴的な歌詞を歌っておどることがねらいである。

支援・援助	N児の反応	H児の反応
・歌の表現 ・絵 T児：強調したモデル H児：場面や動きに目を向けさせる声かけ	N2 ひよこの手具を見て歓声を上げ、何度も裏返して眺める。 N3 歌いながら、拍に合わせて手具を大きく上下に振るモデル演説を見て楽曲の最初の部分で手具を上下に振ったり合わせたりする。楽曲の「<u>びよびよびよ</u>」では「がーがー」と歌いながら手具を振る。 	H2 歌っているひよこのパネルシアターを提示し、教師が「何しているのかなと」問うと「うたっている」のといって手を口のところに持っていった歌うまねをする。手具を持って、教師が歌い出すと「わたしも」といって手具を場に取りに行く。 H3 手具を持って、「かわいいひよこ」と言っていると  と拍に合わせて手具を振りながら歌い、「びよびよびよ」では、手具の口と口を合わせて動かして歌う。 

考 察

N2やH2のように楽曲の「歌う」場面や動きをとらえ、自ら場に興味関心を持つことができた。このことは、ひよこが「よちよちよち」「びよびよびよ」と歌っている場面をパネルシアターで提示して「歌う」場面や動きを想い描かせた後、たくさんの特徴的な歌詞を歌っている表現絵や、歌っている姿をした手具が選択できる「歌う」場を設定したことが有効であったと考えられる。さらに、その関心が意欲にかわり、N3 H3のように手具を拍をとらえたり、歌詞に合わせて動かしながら楽曲の擬態語や擬声語の部分をとらえて歌っている姿につながったと考えられる。その際、教

師が手具を大きく振りながら特徴的な歌詞を歌いかけたモデル演示が有効であったと考える

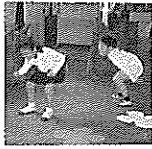
イ、＜楽器を鳴らす・おどる＞この活動は、楽曲の「楽器を鳴らす」場面や動きをとらえ、ダンス遊びの場で拍やリズムを感じ取って手作り楽器を鳴らしておどることがねらいである。

支援・援助	N児の反応	H児の反応
・手作り鈴 ・手作り鈴を鳴らしている表現絵 - T児：強調したモデル演示	N 5 表現絵を自分から貼って眺めた後、場にある楽器に気づき自分から取りに行き、嬉しそうに跳びあがって振る。 N 6 モデル演示を見て「よちよちよち」ではリズムに遅れながらと跳び上がりながら両手一緒に鈴を振る。  	H 5 羽を広げて鈴を鳴らしているひよこの表現絵を見て、手を曲げて鳴らし方をまねる。 H 6 楽曲が流れ出すと拍に合わせて手作り鈴を上下に振る。「よちよちよち」では羽のように手を振り、ひざを曲げてのリズムのふでは手作り鈴を鳴らすのをとめて振る。  

考 察

N 5 や H 5 のように楽曲の「楽器を鳴らす」場面や動きをとらえさせ、自ら場に興味関心を持つことができた。このことは、パネルシアターでひよこが羽を広げる・羽を上下に振るなど様々に手作り鈴を鳴らしている場面をパネルシアターで提示し、「楽器を鳴らす」場面を想い描かせた後、様々に手作り鈴を鳴らしている表現絵を場に貼らせたり、ひよこの羽の形をした手作り鈴が選択できる「楽器を鳴らす」場を設定したことが有効であったと考えられる。そして、楽曲が流れだすと N 6 H 6 のように特徴的な歌詞の拍の流れや繰り返しのリズムをとらえ、歌詞にあった動きをして楽器を鳴らす身体表現が見られた。このことは、踊ることによって音の鳴る手作り鈴に合わせて教師が合図し繰り返しのリズムを強調したモデル演示を行ったことが有効に働きリズムや拍を意識できたと考える。

ウ、＜友と一緒に踊る＞この活動は、楽曲の「歌う・楽器を鳴らす・友と一緒に踊る」場面や動きをとらえ、友と一緒に踊るダンス遊びの場で場面や動き、拍やリズムを感じ取って自分なりに表現していくことがねらいである。

支援・援助	N児の反応	H児の反応
・手作り鈴 ・花の冠 ・「歌う・楽器を鳴らす・踊っている表現絵 ・友と一緒に踊る広場 ・楽曲の工夫（リズムベース音）	N 7 友が花の冠をつけているのを見て自分も花の冠をつけていすに座る。 N 8 楽曲が流れ出すと立ち上がって、花の上を3回跳ぶ。友の表現を見て、途中で自分から手作り鈴を取りにいき手を交互に振って手作り鈴を鳴らす。  	H 7 場の表現絵を見て両手を左右に上げながら右足、左足と前に出して踊る。 H 8 途中から右手を上へ上げ、手を腰にあて拍に合わせて手や腰を振りながら踊る。 H 9 友が花の上を跳ぶのを見て「～よちよちよち」で歌いながら跳び、手ぶりに合わせて鈴を鳴らし踊る。  

考 察

楽曲が流れ出すと、子供たちは、「わあ」と歓声を上げ、皆一斉に踊り出した。これ

はひよこが様々な動きで歌ったり、楽器を鳴らしたり、踊ったりしているパネルシアターや表現絵を提示し、楽しい様子を思い描かせた後、ルンバのリズムベースで楽曲を工夫したためだと考える。N 8 H 7 H 8 H 9 のように身体全体を動かし拍やリズムを感じ取って表現することができたのは、友と一緒に踊る広場に多様な動きをした表現絵を設定したことや、床面に花の絵を設定しフレーズ感を感じ取らせたことが有効であったと考える。さらに、身体全体を動かして踊る、手作り楽器を鳴らして踊る、歌って踊る、などで様々な表現をする姿が見られたのは、手作り楽器や表現絵、花の冠などが広場にあり、しかも自由に選択しながら、友と一緒に活動できたためであると考えられる。

③ひよこやあひるのダンス遊びの活動をまとめる子供の姿（４／４時まとめる段階）

この活動は、ダンス遊びの活動を発表・表現し合い、達成感・成就感を味わうことがねらいである

支援・援助	子 ども の 反 応
・手作り鈴、カステネット ・ひよこやあひるの表現絵 ・友と一緒に踊る広場 ・ルンバのリズムベース音の楽曲の繰り返し	・楽曲が流れ出すと自分で好きなあひるやひよこの手具や手作り楽器を選んで様々な動きで歌う、楽器を鳴らす踊るといった総合的な身体表現をする。その姿は、表現絵をまねて手を大きく上に上げたり広げたりして踊ったり、友達と手をつないで踊ったりする。続けて流れている楽曲の中で１曲が終わるごとに手作り楽器を持ち替えたり、歌の表現絵に歌いかけたり、楽器の表現絵に手作り楽器を鳴らしてみたり、フレーズごとに草の上を回ってみたりする姿が見られた。一時間のなかで繰り返し、繰り返しダンス遊びをする中やリズムを感じ取って表現する姿が増える。 

考 察

子供自ら、楽器を選んだり、表現絵を選んで表現を変えようとする姿が見られ、多様な表現をしながらや拍やリズムを感じ取る姿も引き出すことができた。このことは、ひよこやあひると一緒に歌う、楽器を鳴らす、身体全体を動かして踊る、といった多様な表現の場を設定したことが有効であったと考える。さらに、繰り返し楽曲が流れる中で子供自ら何度も踊ったのは、あひるやひよこの表現絵や手作り楽器が自由に選択できる場が増えたことが有効であったと考える。

５．全体考察

（１）場の構成について

パネルシアターで楽曲の場面の動きを思い描かせ、それに応じて場に動きを引き出す手具や手作り楽器、特徴的な動きをしている表現絵、友と一緒に踊る広場を付加していったことが、ダンス遊びの楽しさを増し、自分なりの表現をする姿を引き出すことができた。

（２）ダンス遊びの活動構成について

あらわす活動を手具を持って踊る・手作り楽器を鳴らして踊る・友と一緒に踊るという自分なりの表現を引き出すものとして構成したことで、楽曲から導かれる最初の表現が、歌う、楽器を鳴らす、身体全体を動かして表現することへと広げることができるとともに拍やリズムをとらえての身体表現を高めることができた。

（３）楽曲について

子供の姿から、楽曲に身近な動物を取りあげ、簡単な歌詞で、擬態語や擬声語が多く含まれていることは、子供の興味関心を喚起し、楽曲の場面や動きが思い描きやすい。このことが動きと結びつきやすく歌う、楽器を鳴らす、身体全体を動かすといった多様な表現を生み出しやすい。

<主な参考文献> 飯田 秀一編『表現の指導 音楽リズム』同文書院（１９９１）

お わ り に

与えられた課題は器用にやり遂げていく子供たちですが、それだけでは、これからの21世紀を生きていくには十分とはいえません。大きな社会の変化が予想される21世紀を見据えたときに、自らが主体的に行動していく姿が大切になってきます。そのために、今盛んに新しい学力観といわれる子供の関心・意欲の上に立った思考力、判断力、表現力をつけていくことが重要になってくるわけです。確かに、今までの学習においてもそれらの力を育てていくことは考えられてきたことであります。しかし、子供自身のもつそれぞれの「よさ」を生かした学習活動になるように配慮されてきたとは必ずしもいいきれません。子供たちを見るとき「大人が育てる受け身的な存在」としてとらえるのではなく、「さまざまな可能性をもち、よりよく生きたいという願いのもとに、生涯にわたって自己成長しながらよりよい自己を実現していこうとする能動的な存在」とであるという基本的なとらえ方に立たなくてはならないと考えています。このような立場に立って、本校では、研究主題を「生きる喜びを生み出す学習の創造」と設定いたしまして、3年間研究を進めてまいりました。

「生きる喜び」とは、学習の中で子供自らが「もっと知りたい」「わかりたい」「先生や友達に認められたい」というさまざまな欲求を満たしていく過程で味わっていく「効力感・有用感」となって表れてくるものと考えています。これまで大切にされてきた子供にとっての「達成感・成就感」のみならず、学習によって自分が力をつけた存在であることを実感する「効力感」、また、身につけた力を周りの人や環境に働きかける存在であることを実感する「有用感」を味わわせていくことが、生涯にわたって自己成長を続けていく子供の生き方に大きく影響していくものと考えます。

そこで、本年度は副主題を「自分のよさを実感する表現活動の展開」といたしまして、子供一人一人が自分なりの表現活動の中で「効力感・有用感」を味わうことができるように学習指導法の研究を進めてまいりました。ここでの表現活動は、単に考えを顕在化するための方法としての表現ではなく、相手意識を持って行動や表現物あるいは製作物で「表現することそのものが目的となる活動」としてとらえています。そのために、子供にとって活動そのものが楽しい魅力的なものとして設定される必要があるわけです。また、当然、子供が自他ともにお互いのよさを認めあい、見方や考え方、追究の仕方などの違いをとらえることができるものでなければなりません。つまり、表現活動の中に自分なりの見方や考え方を評価していく機能も当然含まれることになると考えています。このことが、次の表現活動を生み出す原動力になるわけです。

このたびの研究発表会では、以上のような観点から紀要での実践報告、全体会での教科等発表、学習指導を通して本校がめざす子供の姿を提案いたします。それぞれの教科において、一定の成果は得たものの残された課題が多いことも感じているところです。今後とも各方面からのご指導をいただきながらさらに研究を進めていく覚悟であります。

なお、今回宇都宮大学の奥井智久先生をお招きしてのご講演「これからの小学校教育の方向」は、これからの小学校における教育活動に指標を与えていただけるものと確信しているところです。

また、研究をまとめるまでに、これまでご指導いただいた大学および先輩をはじめ各方面の先生方に深く感謝申し上げます。これからの私たちの研究に対し厳しいご指導をたまわりますようお願い申し上げます。

平成6年6月

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
副校長 楠 田 和 三

福岡教育大学教育部附属福岡小学校研究同人（平成5年度）

◎学 長 田 代 高 英

◎大 学 教 官

(国 語)	大 西 道 雄	(理 科)	中 村 重 太	(道 徳)	堺 正 之
	前 田 真 証		宮 脇 亮 介	(特別活動)	高 田 清
(社 会)	中 里 亜 夫	(音 楽)	岩 崎 洋 一	(特別教育)	山 下 勲
	小 泉 令 三		平 井 健 二		海 塚 敏 郎
(生 活)	寺 尾 慎 一	(図画工作)	吉 井 宏		木 船 憲 幸
(算 数)	畦 森 宣 信	(家 庭)	甲 斐 純 子		藤 金 倫 徳
	山 下 昭 司	(体 育)	相 部 保 美	(帰国子女)	飯 田 史 也
	飯 田 慎 司				

◎附 小 教 官

〔職 務〕

〔氏 名〕

〔教科等〕

校長（福岡教育大学教授）

田 崎 徳 友

教 育 学

副 校 長

薙 野 敏 光

国 語

教 頭

田 中 和 隆

図 画 工 作

研 究 主 任（3の1）

古 川 千 年

国 語

教 務 主 任（2の1）

水 上 栄 一

国 語

1 の 1

池 田 隆 徳

道 徳

1 の 2

山 下 浩 徳

生 活

2 の 2

佐々木 保 善

国 語

3 の 2

津 本 修 一

音 楽

4 の 1

中 原 浩 彦

特 別 活 動

4 の 2

猿 渡 邦 彦

理 科

4 の 3

秋 穂 章 明

算 数

5 の 1

重 松 宏 明

算 数

5 の 2

芋 生 修 一

社 会

5 の 3

山 本 麻 美

音 楽

6 の 1

古 賀 良 和

体 育

6 の 2

安 永 純 二

理 科

6 の 3

柿 添 展 宏

社 会

ふ じ ら

林 田 千 枝

特殊（音楽）

さ く ら

松 本 良 一

特殊（体育）

梅

落 合 純 哉

特殊（国語）

専 科

谷 口 慎 二

特殊（体育）

専 科

吉 永 悦 玄

理 科

専 科

小 嶋 悦 子

家 庭

（内地留学）

山 下 英 俊

算 数

研 修 教 官

武 下 英 俊

体 育

研 修 教 官

池 上 龍 矢

国 語

研 修 教 官

小 出 寛 昌

図 画 工 作

研 修 教 官

塩 田 利 彦

算 数

研 修 教 官

岡 部 由 夏

特殊（算数）

養 護 教 諭

大内田 知 英

保 健

研 究 同 人 (平成6年度)

〔職名〕	〔担任〕	〔教科等〕	〔氏 名〕	〔出身郡市〕
校 長	(福岡教育大学教授)	教 育 学	田 崎 徳 友	大 学
副 校 長		社 会	楠 田 和 三	春 日 市
教 頭 専 科		特殊(体育)	谷 口 慎 二	前 原 市
研究主任 専 科		理 科	安 永 純 二	大野城市
教務主任 5の2		国 語	水 上 栄 一	糟 屋 郡
教 論 1の1		道 徳	池 田 隆	八 女 市
教 論 1の2		図 画 工 作	樺 島 穰	福 岡 市
教 論 2の1		音 楽	津 本 修 一	福 岡 市
教 論 2の2		生 活	山 下 浩 徳	甘 木 市
教 論 3の1		特 別 活 動	中 原 浩	三井・小郡
教 論 3の2		体 育	佐々木 壮一朗	糟 屋 郡
教 論 4の1		国 語	佐々木 保 善	浮 羽 郡
教 論 4の2		体 育	古 賀 良 和	福 岡 市
教 論 4の3		理 科	今 林 康 治	福 岡 市
教 論 5の1		国 語	伊 藤 啓 二	春 日 市
教 論 5の3		算 数	秋 穂 章	福 岡 市
教 論 6の1		算 数	重 松 宏 明	糟 屋 郡
教 論 6の2		社 会	芋 生 修 一	大野城市
教 論 6の3		音 楽	山 本 麻 美	糟 屋 郡
教 論 専 科		社 会	柿 添 展 宏	大 川 市
教 論 専 科		家 庭	小 嶋 悦 子	福 岡 市
教 論 専 科		生 活	後 藤 正 弘	宗 像 市
教 論 ふ じ		特殊(音楽)	林 田 千 枝	福 岡 市
教 論 さくら		特殊(国語)	落 合 純 哉	大野城市
教 論 梅		特殊(体育)	松 本 良 一	久留米市
教 論 (内地留学)		算 数	山 下 英 俊	春 日 市
養護教諭		保 健	大内田 知 英	福 岡 市
研 修 専 科		特殊(算数)	佐 藤 賢 治	久留米市
研 修 専 科		社 会	岡 崎 茂	久留米市
研 修 専 科		体 育	福 永 美智也	柳 川 市
研 修 専 科		算 数	安 部 章	糟 屋 郡
研 修 専 科		国 語	木 下 伸 生	糸 島 郡

◎平成5年度転出教官

薮 野 敏 光 (三井・小郡)	猿 渡 邦 彦 (山門郡)	塩 田 利 彦 (前原市)
田 中 和 隆 (福岡市)	武 下 英 俊 (大川市)	岡 部 由 夏 (福岡市)
古 川 千 年 (春日市)	池 上 龍 矢 (柳川市)	
吉 永 玄 (福岡市)	小 出 寛 昌 (糟屋郡)	

平成6年6月 印刷・発行
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
研究紀要 No. 25

発行者 附属福岡小学校
〒810 福岡市中央区西公園12番1号
TEL 092(741)4731 (代)

印刷所 (株)ネオ・プリンティング
TEL 092(511)8941 (代)

※ 下靴のまま お上がり下さい。

